のうちに三世のすべての諸法を知る。たとえば、大海が一切の色像を印す故に印と名けられるように、佛の正覺の智慧の海のなかにも、一切の人人の心念や感覺がすべてみな現われ、而も亦現われる所がない。故に佛を一切覺と名けたてまつる。

佛子等よ、佛は正覺を得るとき、方便によつて一切の人人に等しい身を得、一切の法、一切の國國、一切の三世、一切の佛、一切の言語、一切の法界、並に涅槃界に等しい身を得給う。そして音聲も心も身と同じである。佛子等よ、一切の文字、一切の語は悉くみな法の輪を轉しているものと見よ。そは佛の音聲は至らぬ處がないからである。また法の輪は響のようであると知れ。そは來るところもなく、眞實の法性であるからである。また一切の音聲は一つ聲であると知れ。佛はそれによつて法の輪を轉し、そして佛の法の輪を轉されるには、主宰者がないからである。

佛子等よ、佛はただ、人人を歡ばせたいために世に現われ、憂え悲しみ慕わせたいために滅度を示される。その實、佛は世に出でられることもなければ、滅度に入られることもない。何故かと云えば、佛は法界のように常住であるからである。

佛子等よ、たとえ日は世を照して、あらゆる器の水に影を宿しても、「我はすべての淨い水に宿る」とゆう念はない。そのとき一つの器が破れると、日の影は現われないが。それは日の過でない、水の器が破れたからである。佛の圓かな智慧の日は一念に現われて、悉く一切の世界、一切の人人を照して垢を除き、常に淨い心の器のなかに現われる。ただ破れた器、濁つた心の人人は、常に佛の法の身を見ないから、特に佛のおかくれを見て、驚きを立てて初めて救われるのである。それがために佛は滅度を示される。しかしその實、佛は生れず滅びず永くおかくれになることはない。又譬えば世界に大火が起つて草や木を燒きつくすに當り、若し草や木や町や村のない處に至れば、その火は自ずと消えてゆく。しかも世の中の火が無くなつたのではない。佛も一切の世界に救いの火を燃し、救いの草がない處に滅度を示し給うが、世の中からかくれ給うたのではない。

一〇。佛子等よ、佛の心を心とする者は三世に亙つて人人の行に入り、その善不善の行に入り、一切の人人を救い、一切の人人に代つて苦を受けるために大悲の心を起す。またすべての有つものを捨てようために施を首とし、一切の佛法を求めるために一切智を念ずることを主とする。そして念うよう。「證は心を本とする、心が清かなれば、よくすべての善根を集め滿たさせる、もし心が自在になれば上ない智慧をととのえ、大いなる行をなし、諸の願を滿たし、一切の人人を導き得るであろう」と。これを普賢の行と稱する。

佛子等よ、佛の心を心とする者は、境界の自在を有つ、即ちさとりの境界にありながら迷いの境界に現れ、煩惱の寂つた境界にありながら煩惱に散り亂れた人の境界を捨てない。彼は大悲と智慧の願を起して、人人を愍むために濁の世に生れ、欲の約束に浸つて妻子や眷屬を養う。そは偏えに人人を敎えめぐみたい爲である。心に念うよう。「私はこの煩惱の中にあつても、智慧、解脫、禪定等に惑を起してはならぬ、何故かといえば、佛の心を心とする者は、一切の法に亙つて自在を得、智慧に安らい、行を修めて、悟りの岸にいたらねばならぬからである」と。

又彼の心は、一切の智慧を具え、堅く正直であつて大きな莊嚴をもつてかざつてあるから、いかなる難處や惡人の處にあつても、その一切智の寶を失うことはない。譬えば淨光と名くる水珠は、濁つた水の中にあつても、性を變えないだけでなく、その濁つた水を悉く淸くするようなものである。

一一。佛子等よ、彼には燃す力がある。即ち敎化を成し遂げるから人人の世界を燃すといわれ、不淨を燒いて悉く淨めるからものの世界を燃すといわれ、すべての行を果すから佛を燃すといわれ、あらゆる功德やあらゆるよいすがたを集めるから善根を燃すといわれ、一切の人人の苦を除いて無上の樂に安住わせるから大慈悲を燃すといわれ、乃至一切の法に就て明かに知るから一切の諸法を燃すといわれる。

佛子等よ、彼はまた多くの手を持つ。一向に佛の正法を信じ持つから信の手がある求めるものがあれば歡ばせるから財に執われない手がある。限りなく功德を育てて厭ぐことがないから一切の佛を供養する手がある。人人の諸の疑を除いてやるから善く解り多く聞く手を有つ。煩惱の流に漂う人人を救うから悟境に安ずる手がある。煩惱の暗を除いて稱り難い法の光明を示すから智慧の寶の手を有つている。

佛子等よ。彼は法を求むるに心直く、虛僞と諂とを離れ、精め勵んで懈らず、身も命も惜しむことはない。また衆生の具を求めず、自分の利のためにせず、ただ人人の煩惱を斷ち彼等を饒みたいために、また深く智慧に入りたいために、諸の疑を除きたいために、佛法を滿したいために、法を求める。

一二。佛子等よ、彼には十種の惡魔が襲う。一には身心魔、身と心に執われること。二に煩惱魔、煩惱に染まること。三に業魔、障を起すこと。四に心魔、高慢の心を起すこと。五に死魔、この世から離れること。六に天魔、心憍慢り放逸であること。七に善根を失う魔、心に悔ゆる事のないこと。八に三昧魔、禪定に執われること。九に善知識魔、導きの師に徒らに執われること。十に正法の智慧を知らざる魔、諸の願を生むことが出來ないこと。この十である。佛子等よ、是等の魔は方便をもつて速かに遠ざけなければならぬ。

佛子等よ、また彼に多くの魔業がある。智慧を失うて善根を修め、惡心をもつて施し、瞋の心で戒を持ち、惡性の者や懈る者をすて、心の亂れた無智の者を輕んじ厭うなどは皆魔の業である。又正法を慳しみ、法の器たる者を訶り、利養を貪り、求めて人の爲に法を說くのも亦魔の業である。善き友に遠ざかつて惡しき友に近ずき、正法を謗つて敎を聞かず、聞くとも讚歎えない

ことも、魔の業である。もし法の師あつて、法を説いても恭しく意を下すことができず、「わが説はよい、彼の説はよくない」とゆうのも魔の業である。世間の學を修め、またはその器でない人人に深い法を説くのも魔の業である。

佛子等よ、彼にまた十種の佛の境界が顯れる。一に無着佛、涅槃界にも生死界にも執われないで、よく迷の世に安らいで覺を開くこと。二に願佛、兜率天に生れて必ず佛となる境を得ること。三に業報佛、限りない功德を以て身を嚴られること。四に持佛、死して猶佛法を支える力を有つこと。五に涅槃佛、この世に滅度を示して人人に驚きを立てさせ急いで佛法に入らしむること。六に法界佛、肉身滅びても猶つくることのない、法界を以て身とする境。七に心佛、大慈悲を注いで、人人をして慈悲の中に佛ありと知らしめること。八に三昧佛、常に生死の煩惱の中にあつて煩わされることなく、三昧に心を止めて涅槃の寂けさを味わう境。九に性佛、人人に本來具つて居る佛性の理を悟つて無上の智慧を體に得て居ること。十に如意佛、心のままに人人の前に現れて法を説き教え導くことの出來ること。この十種である。

一三。 佛子等よ、佛の心を心とするものがもし懈る心を起し、佛の正法を捨て、貪つて厭くことがなければ魔に攝められたものである。また自らをのみ救うことを思い煩惱を離れた寂靜を樂うて實際の人生を離れることも魔に攝められたものである。すべての人人を導き教える心をすて、正法のなかに疑を起し、佛法を謗るのも魔に攝められたものである。これらは速かに遠ざけねばならぬ。

佛子等よ、彼若しすべてのものは無常であつて苦しみであり、一切の法は無我であり、涅槃は煩惱の寂滅びたところと知るならば法に攝められたものである。又、正しくない思がいろいろの迷を起す、この正しくない思が滅びれば迷も滅びると知るならば、法に攝められたものである。一切の國、一切の法、一切の人人、一切の世間は、佛の境界であると知り、一切の念を斷ち、一切の取着をすてて涅槃に隨うならば、法に攝められたものである。

(一) いと深き智慧の海に、正法の一味の水のあり、覺の寶充つれど、人測り知るものはなし。

直き心、淨くまた廣く、一切の智慧を潮とせる、菩薩の海は説くとも盡きじ。

菩薩は須彌の山、高く世を超え、神通と三昧の峰堅くして、動くことなし。

(二) 深き心は金剛の如く、三寶の信は壞るべからず。

すべての魔を降し、諸の煩惱を除き、大慈の雲、大悲の電を興して、法の雷震いつ、ひとびとを救う。

淨き法を城とし、智慧を牆に、慚愧を塹とし、空解脫の門より出でて、三界にこよなき幢を建て、すべての魔をば滅さん。

(三) 菩薩清凉の日、畢竟空の虛空に遊びて、光を垂れつ三つの世照して、あらゆる人の心法を現わす。

量りなき方便の地に、諸人を饒みつ、清き慈悲の水をもて、燃え熾る煩惱の火を消す。

猛き智慧の火、煩惱とその習氣を燒き、風の如くに馳せながら、十方に佛の事をなす。

如意の寶もて、ひとびとの乏しきを去り、智慧は金剛の如くにて、諸の邪見を摧く。

(四) 菩薩は功德の河ぞかし、正しき道の流れに隨い、または生死の橋となり、人を救うて休むなし。

菩薩は正法の船ぞかし、すべての願い海に泛び、智慧滿ち足りて、人を彼岸に度らしむ。

菩薩は清き園ぞかし、正法は解脫の華にして、その實は人を樂します、またその智慧はその宮殿なり。

第五節　身の業と心の業

一。 世尊はそれより王舍城を離れて那蘭陀に赴き**パーワーリカ**の檬樹林に入り給うた。そのとき尼乾陀の若提子も多くの弟子を引き連れてこの地に滯まり、その弟子の長苦行は邑に托鉢して後、檬樹林に世尊を訪うて傍らに坐つた。

世尊、宣うよう。「長苦行よ、汝の師は惡業についていかほどの業を立てて居られるか」。「喬答摩よ、私の師は業とは云わずに身罰、語罰、意罰とゆう風に、罰とゆうて居られます」。「長苦行よ、この三種の罰のうち、何れを重いとするか」。「身の罰が最も重いとしています、して、尊者喬答摩、卿は何程の罰を立てて居られますか」。「長苦行よ、私は罰とは云わない、業と云う、身業、口業、意業の別を立てて、意業を最も重いとしている」。

長苦行はこの問答を終り、世尊と別れて師の許に歸り、この話をした。若提子は「大いに宜しい、汝はよく喬答摩に説明した、力の弱い意の罰が、力の強い身の罰に比べて勝れていようとは云う迄もない、身の罰の重いこの場に居合せた在家の優波離は、「私も一つ喬答摩の處へ出かけて見ましよう、もし彼が議論をしかけるならば、力の強い男が長い羊の毛を捕えて、打ち振り、打ち振り、羊を投げつけるように投げつけてやりましよう」と勇み立ち、「喬答摩は異しい術を知つていて、人の弟子を取る事に巧みであるから止めたがいい」と諫められても聞かずに出かけ、世尊に議論を仕掛けた。

二。 世尊仰せらるるよう。「優波離よ、もし汝が道理に立つて感情に走らないと約束するならば議論をしてもよい、假に茲に一人の尼乾陀の人が病に掛つているとする、彼は病のために冷水を欲しがりながら、教によつて冷水を用いることを禁められ、熱い湯を受け、遂に冷水を得ないで死んだとすれば、何處へ生れるであろうか」。「それは意着天とゆうところへ生れます、冷水に心を殘して死んだからであります」。

「優波離よ、よく考えて答えるがよい、前後矛盾をしてはならぬ、もう一つ、かりに茲に一人の尼乾陀があつて四つの禁戒を守り、日夜自ら制え、總ての惡を離れようと

していて、その往返に小さな蟲を數多殺したとすれば、若提子はいかようなる結果があると申して居るか」。「心あつてした事でなければ、大した罪でないと申します、心あつてのことなれば重い罪になります」。

「優波離よ、よく考えて答えるがよい、前後矛盾をしてはならぬ、もう一つ、此の那蘭陀はまことに榮えて人口も多いが、ここに人あつて劍を拔き、一瞬間にこの那蘭陀中の人間を一肉團にしてやろうと云うとする、それは出來ることであろうか」。「それは勿論出來ません、十人二十人五十人の人が集つても出來ません」。

「然るに茲へ神通を具えて心を思いのままにすることの出來る出家がきて、この那蘭陀を心の恚によつて灰にしようとすればそれは出來るであろうか」。「勿論できます、十や二十や五十位の那蘭陀を思いのままに灰にすることが出來ます」。

「優波離よ、考えて答えるがよい、前後矛盾をしてはならぬ、汝は嘗て仙人が一度の瞋によつて、國國を廣い野原としたとゆう事を聞いたことがあるか」。「世尊、私はそれを聞きました、世尊、最初の御喩で、私は既に明晰りと了つたのでありますが、更に御問を得たいために今まで默つていたのであります、私は三寶に歸依いたします、どうぞ今日から私を世尊の信者として許して下さい」。

三。「それは汝が考えた上で、せねばならぬと思う事をするがよい、汝のような名のある人は自分の考で思う事をするが宜しい」。「世尊がそう仰せられるので、私は猶三寶に歸依いたします、他の敎の人達は私のような者を弟子とすれば、それを那蘭陀中に吹聽りますが、世尊は只考えてよいと思う事をせよと仰せられます、私はいよいよ三寶に歸依いたします」。

「優波離よ、汝の家は今迄尼乾陀の人達を供養していたのであるから、これからも彼等の來る時には供養するがよい」。「世尊、その御語を承りまして私は益歸依の思を增します、私は前に世尊は私と私の弟子に供養せよ、他の敎の者に供養するなと仰せられるように聞いていました、それにいま世尊が尼乾陀の人達にも以前通りに供養せよと仰せられるのを承つて、いよいよ三寶に歸依の思を增します」。

優波離は世尊の敎を承けてものみなは無常であるとゆう理を了り、歡を抱いて家に歸り、門番に以後尼乾陀の人達が來たならば、「優波離は喬答摩の信者になつたから、この門は尼乾陀の人達に閉じられ、喬答摩の弟子達に開かれていますと申せ」と命令けた。

四。世尊は路を東にとつて鴦伽の國を遊行し、鴦伽の下流の膽波に着いて、その伽伽羅湖畔に宿を定め給うた。その土地には蘇那檀陀とゆう婆羅門があつて、頻婆娑羅王の封をうけ、富は裕かに人人の尊敬を受けていた。

蘇那檀陀が高樓に上つて晝寢をしておると、澤山の人人が群をなして伽伽羅湖畔の方へ行く。そのもの音に眼を覺して、何事であるかと怪しみ、世尊を御訪ね申すのであると知つて、自分も遇いに行こうと心を

決めた。多くの婆羅門達はこれを聞いて驚いて諫めて云うよう。「それはよいことではない、此方から訪ねればあなたの名折になつて、喬答摩の評判が高まるであろう、あなたは七世の間汚のない婆羅門の家に生れた淨らかな方である、それに三吠陀に精しく道德の高い學者で、三百人からの弟子に聖典を敎え、婆羅門中の耆宿である、摩竭陀の王頻婆娑羅や沸伽羅娑提婆羅門などの尊敬を受け、王からこの地を封がれて居られる身分であるから、喬答摩の方で訪ねてくるのが至當であります」。

「いやそうではない、私の方で尋ねて行くのが至當である、喬答摩は立派な家柄に生れ、その家柄と財寶を捨てて出家し、容顏美わしく威嚴があり、戒に身を守り、業を信じ、勝れたる相を具えて證をひらき、世の導師となり人人に優しく、從つて彼の留まる處には爭がなく、出家在家の弟子を率いて大いなる敎の建設者となり、頻婆娑羅王や沸伽羅娑提婆羅門は何れもその一家を擧げて歸依し尊んでおられる、今その喬答摩が我我の膽波の伽伽羅湖畔に滯まつて居られるのであるから我我の賓客である賓客は敬わねばならぬから、私の方からゆくのが至當である、それに私は喬答摩の德をこれだけ數える事ができるが、彼の德は決してこれだけではない、信あるものは脊に糧を負うても、遠きを厭わず尋ねてゆかねばならぬ」。

五。蘇那檀陀のこの言葉に、多くの婆羅門達は納得して一緒に伽伽羅湖に向つて出かけた。その途中森の中を通るとき、蘇那檀陀は思うよう。「もし私が喬答摩に問をかけて『婆羅門よ、この問はそのように問うてはならない、このように問わねばならぬ』と云われれば、どの人人が私を輕蔑み初め、そのために私の名折となり、收入にも關わる事になるであろう、また喬答摩の方からの問をかけて私の答が氣に入らないで『そのように說明してはならぬ』と云われても、結果は同じくなる、さりとて又こうして出かけてきて遇わないで歸れば、猶、私の臆病を見破るものがあつて、私の名折になろう、まことに困つた事である、どうか私の得意としている三吠陀の學問の事で問答をして、彼から嘉して貰いたいものである」。

挨拶が終つて傍らに坐り、はらはらしている蘇那檀陀の素振をみて世尊は、その心中を察せられ、彼を喜ばす爲に宣うよう。「婆羅門よ、いかような資格を具えておれば、眞の婆羅門と云われるか」。

この問は大いに蘇那檀陀を喜ばし、また氣を安ませた。「ようこそ喬答摩は私に此問をかけて下された、これならば私の答は彼の嘉する所となるであろう」と、身體を眞直にのばし、ずつと一座を見まわして答えた。「世尊、五つの資格があれば眞の婆羅門と呼ばれます、第一に七世の間代代その家が父方にも母方にも血統淨らかであること、第二は聖敎を讀み三吠陀の學問に精しく、順世派の學問にも明るくて大人の相を辨える法を知つていること、第三に容姿も優しく美しくそれに威嚴のあること、第四に戒行の正しいこと、第五に智者であつて供犧の杓を捧げる第一人または第二人で

あること、この五つの資格があれば眞の婆羅門と呼ばれます」。

「婆羅門よ、汝の擧げた五つの資格のなかで一つを除いても婆羅門と呼ばれるか」。「それは出來ます、第三の容姿の美しさを除いても婆羅門と呼ばれます」。「殘りの四つからもう一つ除つても婆羅門と呼ばれるか」。「出來ます、第二を除ります」。「後の三つのなかからもう一つを除ることが出來るか」。「出來ます、第一を除ります」。

六。その時、他の婆羅門達はこの問答を聞いていて、はらはらして蘇那檀陀に私語くよう。「尊者よ、そのように仰しゃるな、喬答摩の語に從い過ぎてはならぬ」。世尊は仰せられるよう。「諸の婆羅門達よ、汝等がもし、蘇那檀陀が學が淺く語が拙くて私と論議するに堪えないと思うならば、汝等自らが出て語るがよい、又、もし蘇那檀陀が博く學んでいて確かに私と論議することが出來ると思うならば、汝等は控えているがよい」。

蘇那檀陀はゆうよう。「世尊、かまわないで下さい、私が直接にこの人達に申します。あなた方は私が容姿を輕しめ、呪文を輕しめ、生を卑しめると考えられるようであるが、私はそれらを輕しめ卑しめるのではない、この私の甥の**アンガカ**を見てください、これは容姿も美わしく喬答摩を除いては等しいものはありません、又、呪文を學び三吠陀に精しく、私自ら手を取つて教えたのであります、又、生も七代の代代父方母方共に淨らかであります、然し若しこの**アンガカ**が、生物の生命をとり物を盜み、他人の妻を犯し、妄語を吐き、酒を呑んだら、容姿も學問も生も畢竟何でありましょうか、それゆえ私は戒行美わしく、智慧あり供犠の杓を捧げる第一人又は第二人となる資格があれば、眞の婆羅門と呼ばれると云つたのであります」。

「婆羅門よ、それでは、その最後の二つのなかで一つを除くことができるか」。「世尊それは出來ません、智慧は戒行によつて淨められ、戒行は智慧によつて淸められ、戒行のあるところに智慧があり、智慧のあるところに戒行あり、戒行を持つ人は智慧があり、智慧のある人は戒行を持ち、戒行と智慧とはこの世の中に最も大切なものと云われるからであります、丁度人が手をもつて手を洗い足をもつて足を洗うように、戒行と智慧は互に相淸めるものであります」。

「婆羅門よ、實にその通りである、戒行と智慧とは互に相淸めて、この世の中に最も大切なものと云われている、然らばその戒行と智慧とは抑も何であるか」。「おお、世尊、私はこれだけを知つて居るのであります、どうぞその上をお話し下さい」。

七。「婆羅門よ、佛がこの世に出でて法を說き、在家の者がこれを聞いて信を起して出家し、戒律を守つて正しい行を樂とし、小さな罪にも恐れを見て生活を正しくし、五官の戶口を守り、殺生をやめて仁にみち、盜をやめて正直に心を淸め、婬らな行を止め妄語を離れ、他の仲を裂く語をいわず粗暴な語を愼しみ、無駄口をやめて正しい時に正しく語る、之が戒である。また煩惱を離れて諸の禪定に入り、靜かに

素直に堅固になつた心で、總ての法が無常無我であることを知り、自他の宿命を知り、人人の生死を知り、煩惱の滅を知る、これが智慧である」。蘇那檀陀は之をきいて大いに歡び、三寶歸依の信者となることを誓い、翌る日の食事に御招き申しあげた。

翌る日招待の食事が終つたとき、蘇那檀陀は低い椅子を運んで腰をかけ、世尊に申しあぐるよう。「世尊、私が私の仲間の中にある時、座から立ち上つて世尊を拜みますと、仲間の者は私を蔑すみ、そのために不和も生れます、それゆえ私が合掌の手を延したら、座から立ち上つたものと思うて頂きたい、又私が頭から帽子を取りましたなら、拜んでいるものと思うて頂きたい、又私が馬車を驅つていながら世尊に御遇い申したときに、刺棒を下におろして手を頭に上げましたら、車を下りて拜んだものと思うて頂きたい」。世尊はこれを諾われ、法語の後に伽伽羅湖畔に歸りたもうた。

八。次に世尊は耆伽の國を次第に遊行して、阿沙補羅の町に暫く滯らせられ、その地に於て弟子等に次の敎を垂れ給うた。

弟子等よ、汝等は出家として知られている。又人に問われて、私は出家であると答えている。それゆえ汝等は次のように學ばねばならぬ。「私は出家のなすべき法を守つてゆこう、それで、出家たる眞實がある、私に衣と食と住居と藥を與える人人に大きな幸福を得させ、この私の出家の生活をして無益なものでなく效果のあるものにしよう」と。

弟子等よ、出家のなすべき法とは何であるか、それは慚と愧とを具える事である。然し慚愧を具えてこれだけで申分がないと思うてはならぬ。身と語と意との上の行と生活とを淸め、明らさまで隱しだてすることなく、しかも自分の行を誇つて自分を讃え、他を毀らぬようにせねばならぬ。

弟子等よ、猶、これだけで充分に出家の目的を果したと思うてはならぬ。五官の戶口を守り、外境を見てそれに執われないようにせねばならぬ。又食に量を知り、食を取るに愉快のためにせず、この法の器たる身體を支え養い、淨い行をなす助とし、正しい反省を以て食事をせねばならぬ。また常も目ざめていねばならぬ。日中は靜坐したり經行したりして禁められた法を行わず、夜も初夜には靜坐し經行し、中夜には右脇に臥し、足に足を重ね、正心正念に起き出るべき時を心に浮べて、師子の如くに臥り、後夜には既に起き出で靜坐し經行し、禁められた法から心を淸めねばならぬ。又常に往くにも還るにも、近くを眺めるにも遠くを見るにも、衣を着けるにも鉢を取るにも、食事をするにも、水を飲むにも、行住坐臥、常も正しい心でなければならぬ。又常に靜かな住居を求め、森の中の樹の下とか、山の洞窟の中とか、墓場や藁鳥に座を占めて、身と心を眞直にし、貪欲、瞋恚、疎懶と睡眠、掉擧と悔、疑を離れて心を淸めねばならぬ。そして病の苦痛に堪えない者が病癒えて體力を回復して喜ぶように、奴隷が自由を與えられて自分の思う所へ行けるのを喜ぶように、また、澤山

の財寶を負うて荒野の旅を恙なく終えて喜ぶように、この五つの心の覆蓋を離れて心歡び、身體暢び暢びして精神の統一を得、諸の禪定に入らねばならぬ。

弟子等よ、この上に、更にこの禪定によつて練りあげられ、いつでも作用く用意のある心を以て、自他の宿命を知り人人の生死を知り煩惱の滅びを知らねばならぬ。弟子等よ、かくして初めて出家、婆羅門、智慧ある者、平安の人、聖者と云われるのである。弟子等よ、出家、婆羅門、乃至、聖者とは、惡不善、汚の法、苦の果を生み、次の世に生るる根本となるものを鎭めた人のことである。

九。弟子等よ、出家にして若し貪欲を捨てず、瞋恚を離れず、忿りと恨みと覆すことと自尊と嫉みと誑しと諂と惡欲と、邪見を遠ざけないならば、丁度雙叉の劒を衣に包んでいるようなものである。私は衣を着ているから出家とは呼ばない。裸體であるから出家とは云わない。塗灰者はただ額に灰を塗るだけ、水浴者は只日に三度沐浴するだけ、何れも出家ではない。樹下に住む人、荒野に住む人、立行をする人、食を斷つ人、誦經を誦む人、これらも只それだけの人であつて出家ではない。

弟子等よ、衣を着けるだけで、貪欲、瞋恚その他の煩惱を離れることの出來るものでない。もし出來るとゆうなら、親は赤子に衣を着けさせるであろう。裸體でいるとか、額に灰を塗るとか、日に三度沐浴するとか、樹下や荒野に住むとか、常に立つているとか、食を斷つとか、經を誦むとかゆうのは、只外の形だけのことであつて、出家本來の道ではない。

然らば出家本來の道とは何か。貪欲と瞋恚と忿りと、恨みと覆すことと、自尊と嫉と誑と諂と、惡欲と邪見とを離れることである。これらの惡から離れた時に、離れたことを知つて喜を生み、身體が暢やかになり、心がよく調のう。かくて一切の世界を大きな慈しみの心、悲みの心、喜びの心、捨(平等)の心を以て、憎みなく怨みなく滿たすのである。

弟子等よ、喩えば岸に清らかな白沙を布きつめ、澄み切つた冷たい水を湛えた蓮池があるとする。旅人が四方から炎熱に疲れ切つた足を引きずつてこの蓮池に來たときこの水によつて渴きを醫し、炎熱の苦しみを靜めるであろう。丁度その樣に、刹帝利種のもの、婆羅門種のもの、毘舍種のものが、佛の說く法によつて慈悲喜捨の四無量心を修め、煩惱の炎熱の苦しみを免れて心の涼しさを得るならば、私はこの者を出家の道に入つたものと呼ぶ。かくて煩惱を寂め滅ぼして眞の出家となるのである。

第二章　般若

第一節　空

一。世尊は成道第十四年の初め、耆伽の國から恒河を渡つて跋耆に入り、次第に遊行して毗舍離の大林に暫く滯りたもうた。或る日弟子等に敎え給うよう。「弟子等よ、生死の爲作の無い無爲の境とは何であるかそれに達する道とは何であるか、貪欲と瞋

恚と恐癡の滅び盡きたのが無爲である、空の定と無相の定と無願の定とがそれに達する道である、それゆえ汝等は森のなかや人の住まない空屋に入つて心を凝すがよい、放逸であるな、後悔があつてはならぬ、これが私の汝等に對する敎である」。

二。或る日の午後、阿難は世尊にお問い申した。「世尊、世間は空であると云われていますが、これはどうゆう意味でありましようか」。「阿難よ、我と我がものとは全く無いから世間は空であると云われる、我と我がものとが全く無いとは、眼は我でもないし我がものでもない、色卽ち形あるものは我でもないし我がものでもない、眼識は我でもないし我がものでもない、この根と境と識との和合によつて生ずる感觸も、我でもなく我がものでもない、その感觸から生ずる受卽ち感覺も、我でもなく我がものでもない、このように耳、鼻、舌、身、意とそれらの對境とそれらの識、及びその和合から生ずる感觸や感覺も、みなすべて我でもなく我がものでもないのである、この我と我がものとは全く無いとゆう理由によつて、世間は空であると云われるのである」。

三。或る日の夕暮れ、舍利弗は禪定から立ち上つて世尊の御許に近ずき、禮をなして傍に坐つた。世尊は宣うよう。「舍利弗よ、汝の容子は淸らかに靜かに、膚の色は輝いて見える、汝は今日いかような禪定に住つたのであるか」。「世尊、今日私は空の禪定に入りました」。「善い哉、舍利弗よ、汝は今日佛の禪定に住んだ、空は實に佛の禪定である、もし佛弟子にして空の禪定に住もうと望むならば、このように思い運らさねばならぬ。『私は今日村に入つて托鉢をしたが、その往返、眼の見る形、耳の聞く聲、鼻の嗅ぐ香、舌の味う味、身の觸れる感觸、意の知る法において、貪欲、瞋恚、愚癡の心のさわりがあつたであろうか』。このように考えて、もしあつたと知らば、その惡を捨てるために勤めねばならぬ、若しなかつたと知らば、喜と樂とをもつて日に夜に善を學ぶことを續けねばならぬ。又舍利弗よ、その弟子はこのように考えねばならぬ。『私は五欲を捨てたであろうか、煩惱を除いたであろうか、この身體を組み立てている身と心とを知つたであろうか、諸の菩提への道を修めたであろうか、智慧を得、さとりを得たであろうか』と。舍利弗よ、かように考えて、未だ煩惱を離れず、さとりを得て居らないならば、そのために勤めねばならぬ、又既に煩惱を離れさとりを得ているならば、喜と樂とを以て日に夜に善を學ぶことを續けねばならぬ。

舍利弗よ、遠い過去の如何なる出家も、また遠い未來の如何なる出家も、また現在の如何なる出家も、すべて布施によつて得た食を淨めるものは、皆このように考えるのである、それゆえ舍利弗よ、汝等も皆私の敎のように考えて、布施に依つて得た食を淨めようと學ばねばならぬ」。

四。また或夕暮、阿難は世尊に御尋ねした。「世尊、嘗て釋迦族のナンガラカとゆう小さな町において、世尊は私を呼びかけ『阿難よ、私は今多く空の禪定に住む』と仰

せられたように覺えて居りますが、この私の記憶は正しいでありましようか」。

世尊。「阿難よ、汝の記憶は正しい、私は前も今もおなじように多く空の禪定に住つている。喩えばこの大林の重閣講堂には象、牛、馬、羊がいないとゆう意味で空であり、金銀がないとゆう意味で空であり、男女の集りがないとゆう意味で空である。ただ空でないものは僧伽の一つである。丁度このように弟子が村の想を起さず、社會の想を起さず、只森のことのみを想えば、その森の想に心歡び、村に就ての苦勞も社會に就ての苦勞もなくなり、森に就ての苦勞があるばかりになる。それで村又は社會とゆう想も空になり、森の思いだけが空でないことになる。このように其處にないから空と見、そこに有るから有と知るのである。

進んで森の想を捨てて只地の想を起す。山も河も叢もあつて高低のある大地を、牛の皮を張ったように皺一つない平らな地と想う。この想に心歡び、森についての苦勞がなくなり、只地についての苦勞がある許りとなる。

斯のようにして順次に種種の禪定を過ぎて無想定に進み、ただ無想定のことだけを想うと無想定に心歡び、ただ存えてこの身體に就て起る苦勞があるだけになる。

このように無想定に入つて、この無想定も作られたもの、考えられたものである故に無常であり、滅びるものと知り、欲の煩惱、有の煩惱、無明の煩惱から解脱れ、我がなすべきことは成し終つた、この後迷いの生を受けることはないと知るのである。こうなるとすべての煩惱から起る苦勞はなく只生存えてこの身體に就て起る苦勞があるだけになる。こうしてすべては空となり空でないものは只一つこの生存えておる身體だけとなる。このように其處に無いから空と見、そこに残つて有るから有と知るのであつて、こうして空の禪定を修めるとまことに契い、顚倒の思に捉われない。

阿難よ、この清かに勝れた空の禪定に住むよう學ばねばならぬ」。

第二節　無住の證

一。世尊、或る日舍衛城の托鉢から祇園精舍に歸り給うて衣と鉢を收め、御足を洗うて坐り給うと、須菩提は大衆の中より起つて世尊を拜み、申し上ぐるよう。「世尊、佛が善く諸の道を求むる人人を護り、又彼等に勝れた付囑をなし給うことは希有かなことと思います、世尊、若し人人が此上ない道を求める心を起すときに、どのようにしてその心を抑えるでありましよう」。

世尊宣うよう。「善い哉、須菩提、菩薩はその心を降伏すのには、先ず、世界のあらゆる有情を完全な涅槃に入らしめるがよい。而もかようになしても、まことは一人も涅槃に入つたものはないのである。何故かと云えば、そは苟くも菩薩たるものが、『人』『我』『壽』等の常住の存在を認めるならば、彼は菩薩たることを得ないからである。

次に須菩提よ、菩薩は法に住つてはならぬ。布施を行うにしても、それ等の物に滯つてはならぬ。即ち物の相にこだわらぬことである。さすればその福德の限りないことは、例えば東、西、南、北、四維等の何れに向つても、虛空にはてしがなく議り知ることの出來ぬようなものである。

須菩提よ、身相をもつて、佛を求めてはならぬ。何故かと云えば佛の說き給うた身相は、まことの身相ではないからである。すべてあらゆる相はみな虛妄である故に若しあらゆる相は相ではないと見るならば、則ち佛を見奉つたものである」。

若し色もて我を見、音聲もて我を來むれば、是の人　邪の道行くものぞ、彼は佛を見奉らず。

二。須菩提問う。「世尊、人人はかような御語を信ずるでありましようか」。世尊答えて、「さように申してはならぬ、佛の滅れて五百年の後、戒を持ち福を修めるものは、この言葉を聞いて實と信ずるであろう、この人人は三四の佛の御許に善を植えた爲に、かような一念の淨らかな信を起すに至つたのである、かようにして彼等は量りない福を得る、即ち彼等は『我』の相、『人』の相を認めないからである、須菩提よ、佛は此上ない證を得たのであろうか、又佛の說くべき法があるのであろうか」。

須菩提答えるよう。「私の解る所によれば、別に此上ない證とゆう定つた法があるとは思いません、又佛には是と定つた說くべき法があるとは考えられません、何故かと申せば、佛の說き給う法は、捉えることも說くことも出來ず、又法でも、非法でもないからであります、それはあらゆる聖者は皆無爲の顯れたものであるからであります」。

三。世尊宣うよう。「須菩提よ、もろもろの聖者達は、各その得たところの證果を得たように思うているのであろうか」。須菩提申すよう。「彼の聖者達は決してさような思いをせられる事はないと思います、何故かと云えば、特にそうした證果といわれるものはないからであります、然るに若し彼等聖者達が、我は何何の證果を得ていると考えるならば、彼はまだ我執の離れないもので、聖者と名けることは出來ないからであります」。

世尊。「佛は昔、燃燈佛の御許において、何等かの法を得たであろうか」。須菩提。「何物も得給わぬと思います」。世尊。「もし菩薩あつて佛の國を飾るとゆうならば、彼は實をゆうているのではない、何故かと云えば、國土を飾るは飾るのでない、飾つて飾るの思のないのを飾ると名けるからである、されば、須菩提よ、菩薩は如何なる處にも、如何なる事物にも心を住わせることなくして、心にとめねばならぬ」。

四。須菩提はこの奧深い義趣を聞いて喜びの涙に咽び、世尊に申し上ぐるよう。「世尊、私は今までかような敎法を聞いたことはありません、若し人あつて此敎法を聞いて淨い信を起すならば、即ち實相を生むでありましよう、この人は世にも罕な第一の功德を得たものであります、世尊、この實相はそのもと定めなき相で、之れを實相と說かれたことと思います」。

世尊宣うよう。「世に量りない寶をもつて人に施すとしても、この敎法を持つて人

人の爲めに說き演べる功德には遙かに及ばない。それではいかようにして他の爲めに說くのであるか。

あらゆるものは、夢ぞ幻、泡また影
にさも似たり、露はた電のようと觀
よかし。

世尊が說き終らせたもうと、須菩提をはじめ、一會の大衆は法の喜びに浸つて心を躍らせた。

第三節　般若の要諦

更に世尊は舍利弗に對うて宣うよう。觀音菩薩は證の岸に到る深い智慧の行を行い給い、身も心も皆空であると知ることが一切の苦を度る道であろうと考えられた。

されば舍利弗よ、色(身)は即ちこれ空、空は卽ちこれ色である。空は色に異らず、色は空に異なることはない。受、想、行、識の心の四法に就ても、之れと同樣である。舍利弗よ、諸法は皆空であつて、生れず、滅びず、垢れず、淸かならず、減らず、增すことはない。されば空の中には色などの五蘊はなく、眼などの六根はなく、色などの六境もない。無明もなく、無明の盡きたところもなく、老死もなく、老死の盡きたところもない。苦、集、滅、道もなく、智もなく、得るとゆうこともない。得る所がないから菩薩は證の岸に到る智慧によつて心に障りがない。障りがないから恐怖がない。夢のような倒の想を離れ、究竟の涅槃を得る。三世の佛達は證の岸に到る智慧に依つて上なき平等の覺を證り給うのである。この故に證の岸に到る智慧、卽ち般若波羅蜜は、いとあらたかな並びない咒文である。それは眞實であるから一切の苦を除く。咒にゆう。

おお、覺りよ、行きたりな、行きたりな、彼岸に行きたりな。彼岸に上りたりな。

第四節　常啼菩薩の求道

一。世尊はこのように般若波羅蜜を說き續いて常啼菩薩の求道に就てお說きになつた。

須菩提よ、般若波羅蜜を求めるものは、常啼菩薩のように道を求め勵むが善い、この菩薩が最初般若波羅蜜を求めたことは、全く命を打ちすててであつた。人影の絕えた閑かな山のなかにかくれて、名利も浮世の善惡も打ち忘れ、專心に道を求めて居ると、或る時、思いがけなく空の方から、大きな叫びを聞いた。

「汝、善男子よ、これより東の方へ、命懸けにて行くがよい、それこそ眞劍に、疲れとゆうことも、睡りとゆうことも、食物のこと、夜晝のこと、寒さ暑さのことなどすべてうち忘れて行くがよい、また道すがら、右や左に氣を取られてはならぬ、身體のこと、心のことにも善いとか惡いとか、美しいとか醜いとか、道理非理などゆう、差別の念いを立ててはならぬ、すべての法の眞性は、空なもので、さような差別のあるものでない。欲の心が、いろいろに差別をつけて、惱み悶えの種を造るのである、かくして法の眞性を壞り、欲の心を燈燃えさせ、いつまでも苦界にさすらい、遂に般若波羅蜜も得られぬのである、それ故、決してあらゆる法の眞性を壞つけてはならぬ」。

二。常啼菩薩は、この力强い敎に躍り上つて、「私はきつと仰せのように從いましよう、私は惱みの大闇の中に悶える人人のために眩ゆい救濟の光明となりたい、總ての佛の法を知りたい、此上ない覺を得たいと、そればかりを念いつめて居るのでありますから」と答えた。その時また、空の中から叫があつた。

善い哉、善い哉、善男子よ、よく信じ難く解り難い法の中に信心を起し、少しの執着の心も差別の心も起さず、一心に般若波羅蜜を求むるがよい。惡い友を離れて善い友につき、この法を說く者に交るがよい。浮世の名聞や利養のために師を訪ねず、ただ法を愛し法を尊ぶ心からこの法を說く菩薩を尋ねるがよい。その間には、いろいろの魔事も起るであろうが、惡魔の仕向けることは、たとえ方便として之を受け入れても、決してそれに愛着を覺えてはならぬ。佛はよく方便を以て人人を濟われる。人人に善根を植えさせたいために、五欲の供養を受け、又すべて人人と同じ身體や生活などを取り給うのである。惡魔が、たとえ五欲の力で誘惑をしかけて來ても、この佛の方便を旨として、受けるがよい。惡魔の仕向が、殘忍しくても、やはりこの心持で堪え忍ぶことが大切である。こうして法を求め師をたずねるならば、必らず般若波羅蜜が得られ、また自らに汝の大願も果されるであろう。

三。敎を聞き終つた常啼菩薩は、直にその場を立つた。そして心を固めて、敎のまに東の方へ旅立つた。しかし中途、彼の胸には俄かに不安の渦が捲きたつた。彼はその旅立の際に、「何處へ行くのか、そして法を聞くのか」、この肝要なことを、空の聲に尋ねることを忘れていたのであつた。彼は途方に迷うた。しかし、無論倦み勞れの心や暑さ寒さのことなどに氣を怯めたのではない。眞に法を求むるものの上にありがちな、大きな求道上の障りに出遇つたまでである。彼はその場に坐つて、たとえ一日が七日七夜でも、この闇の消え去るまでは、決してここを立たぬであろうと心を固めた。丁度最愛の一子を喪うて、遽かにこの世を儚み出した人のように、今まで抱いて居た信心の玉を奪われたその懊惱は、極めて烈しいものであつた。その時、またも空から、確かに佛の御聲として聞えた。

善男子よ、少しも案じ煩うべきでない。その惱は、決して汝ばかりではなく、過去のすべての道を求むる人人が、みな味おうたものである。氣をおとさずに努めよ。ただ一心に法を樂うて、東へ東へと行け、ここから五百由旬を行けば、大きな城につく。それは衆香城とよび七重の塹に圍まれ、樓臺も欄楯も並樹もみな七寶からなつておる嚴めしい城で、大きさは十二由旬、住む民も多い。財豐かに樂しみが充ちている。而も誰の所有とゆうことはない。誰でも取るに任せて我ものとなり、從うて自分だけの

ものとゆう執着の念も持つておらぬ。まことに空の教そのままの表れに外ならぬ。これ皆、この城に住む人人の熱く般若の教を求め、また身に行うた報いである。城の眞中に、大きな高臺があり、そこに法涌菩薩が、朝な夕な日に三時、法を說いて居られる。城の男女は、大人も小人も、皆この高臺に詣でて、法涌菩薩にさまざまの供養をする。そして、般若の說法を聞くものもあれば、又聞いて憶えるもの、或は誦むもの書くもの、敎のように考えるもの、又その通りに身に行うものなど、皆種種ではあるが、般若を喜び敬う心だけは一つことである。汝は今、その處へ行け、往つて法を聞け。法涌菩薩は、必ず汝のために善い導師となつてくださるに相違ない。怯む勿れ、倦む勿れ、夜も忘れ晝も忘れて、障碍になる心をすて、一心に往くがよい。

四。これを聞いて常啼菩薩の喜は、潮のように涌きたつた。菩薩の心は、毒箭に射られて良醫を得ようとあせるに等しく、少しも早くその善知識に會うて、心の闇黑が剝がれるようにと、善知識の名をのみ念い、光に照され、何物にも枉げられぬ强い志を振い起し、いかなる惡魔にも碍げられぬ堅い智慧を開き、いわゆる諸法に向つて碍なき自在なる念が開けた。その時、再び聲が聞えた。「善男子よ、今こそ汝の願いのかのう道が出來たのである、我我も、もと道を修めていた時に、今の汝と同じように禪定の心が開け、よく般若波羅蜜の智慧ができ、人人を救う力が湧き、再び退くことのない位に昇つたのである、それゆえ今こそ、愈佛法を恭い愛さねばならぬ、善知識には、佛と同じ念をなさねばならぬ。

「善知識とゆうは誰であろうか」。「それは、法涌菩薩である、菩薩は過ぎにし遠い昔から、ただ一途に汝を導くことにかかりはてて居られる、これを念えばたとえ百千歲の長い時をかけて、この世のあらゆる寶を供養げても、須臾の恩に報ゆるにも足らぬであろう」。

五。常啼菩薩の心は直ちに師の法涌菩薩に走つた。「法涌菩薩は、幾久しい昔から般若波羅蜜を行うて既に證を開き、この私を生生世世に惠んで下されるとゆう、自分は少しでも早く、師を尋ねて行かねばならぬ」。師を思う心の增し行くに連れて、菩薩は師に奉るべきものを思うた。「師の下に往つたとき、何か供養をせねばならぬい、私は一枚の着物さえ自由にならぬもののことととて、金銀財寶のあろう筈はない、この儘行いて師はそれを御許しなさるとしても、私の誠を示すことができぬ」。菩薩は更に思うよう。「供養のものがなければ、この身を捨てて供養にかえる許りである、過去の永い世世生生、生死を重ねて來たのは皆欲のためであり、地獄の炎にかえる許りであつた、法のために、報恩のために、一度も生命を捨てたことがない、今こそ、尊い道のために、命をささぐべき時である」。かように心を定めて、東へ東へと進んだが、途に或る大きな町へ着いた。彼は、ここに身を賣ろうと意を定めて、その街街を「奴隷はいらぬか、奴隷はいらぬか」と、大聲に呼び歩いて、買主を尋ね廻つた。此

時惡魔が、「今この菩薩に供養の資を造らせては、必ず證を開くに相違ない、それでは我我の世界が壞れる、如何にも妨げをして、買手を拵えぬようにせねばならぬ」と思い、城の中の人人の耳を殘らず塞いだ。それとも知らぬ常啼菩薩は、どんなに叫んで歩いても、誰一人呼び止めるものも答えるものも居ないので、氣落ちして、「自分にどのような罪があつて、この大きな城に一人の買手もないのであろう」と、街の角に立つて泣き沈んだ。

六。この時、佛法の守護神である帝釋天がこの事を知り、彼の決心を試した上で、よい外護者を與えてやろうとおもい、婆羅門に姿をかえて現れ、「汝はどうして泣いているのか」と尋ねた。

「私は一心に法を求めてここまで來、師の法涌菩薩の御許へも近くなつたので、この身を奴隷に賣つて、師への供養の資を得ようと思うたのであるが、自分の福德の薄いためか、一人の買手もない、それゆえ私は自分で自分を怨んでいる次第である」。

「それは氣の毒である、私はちようど、人が欲しくて探している」と、婆羅門の帝釋天は菩薩の顏を覗きこんだ。「それは幸である、どのような御用にでも、御意のままになりましよう」。常啼菩薩は急かに面を光らせて、婆羅門の袖に犇と縋づたが、帝釋天はそれを振り切つて他のものにゆうように、「しかし宜しくない」といつた。菩薩は氣を急きながら、「どうして宜しくないと申されるか」と問いかえすと、「私の欲しいのは、その溫い血と肉とである、私は人間の溫い血と肉とを得て、神への獻供にしようと思う」。「溫い血と肉とが入用であるならば、一そう私の願に叶うたことである、どうして躊躇などしよう、どうかこの身を買つて下さい、そして、手なり足なり、胸なり、望みに任せて刺して下さい」と喜び叫んだ。「しかしその價は幾らか」。「價は御意に任せます」。約束が出來ると帝釋天の婆羅門は、水のしたたるような刄を拔き、菩薩の左の臂を血烟とともに切つて落した。次いで右の股が割かれ骨が折られて、中から髓が出るように思われる程、寸寸に切つた。しかし菩薩は、靜かに忍んで、一言の怨をすら漏さぬ。

七。この時、かねて前世からの宿緣で、ただ一人惡魔の妨げからもれていたある長者の娘が、二階の上からこの樣子を眺めていたが、あまりのことに、我が身を忘れて驅け降りてきた。そして千千に傷ついた菩薩を抱き起して、先ず何よりも先に事の次第を訊ねた。

「私は一心に法を求めてここまで來たのであるが、今、師の法涌菩薩の供養のために、この身を賣つたのである」。「供養のために命を捨てる、その命よりも大事な師といわれますのは、どのような御方でありましようか」。「それは善く般若波羅蜜の智慧を備えて居られ、私のために菩薩の行を示して與れる方である、私はその御導きによつて、此上ない覺を開いて人人の依所となり、思いのままに人人を救う身の上となれるのである」。

その答は、實に、この世に又とない尊い

教であつた。娘はこれを聞くや感謝の涙に咽んだ。「御尤もなお話と思います、それほどにこの尊い御法ならば、たとえ濱の眞砂ほどにこの身をすてても、ものの數ではありません、供養の物とならば、妾がお望み通りに差上げましよう、どうぞ快く受取つて下さい、そして願わくは、妾も一緒にお連れ下さい」と冀うた。

その時帝釋天は、婆羅門の姿を消して神の姿に還り、「善い哉、善い哉、善男子よ、汝の堅い道を求むる心には感じ入つた、實は私は帝釋天であり、ただ汝の決心を試したまでで決して本心から虐げたのでない」。かくいつてその姿をかき消したが、それと一緒に、菩薩の身體もすつかり元の通りになつて、少しの傷さえ殘つていなかつた。

娘は、彼を門前に待たせておいて、兩親の處へ驅け込み、事の始末を審さに語つて供養の具を差上げて頂きたいと請うた。兩親は、「いかにも汝の云う通り、尊い人に相違ない、望みの通り何物でも捧げよう、汝は誠に、よいところへ氣が付いた、今よりそのお方と一しよに供養の道に進むがよい」と勵した。

八。かくて準備はととのい、七寶で造られた五百の車に、珍らかな水華、陸花、價貴い衣類、或は芳香や瓔珞、又は種種の飲物食物などを積んで、常啼菩薩を眞中に、彼の女や侍女の多勢に圍まれ、東の方、衆香城へと出で立つた。次第に衆香城へ近ずけば七寶の莊嚴、七寶の圍繞、七重に繞る七寶の塹、七重に走る七寶の行樹など、實に畫けるにもまさる光景である。やがて城に入り、高い豪の上で百千萬億の人人に圍まれて居られる法涌菩薩を拜むことが出來た。常啼菩薩の歡びは、絶頂に達した。皆は徐かに車を降りて、法涌菩薩のところへ至つた。そこには七寶の豪があつて赤い牛頭栴檀木で莊られてあり、上からは眞珠の羅網が垂れ下つている。四角には摩尼寶珠が輝き、香爐には名香が燒かれて居る。またその豪の眞中に、七寶の大きな牀があつて、上には四角な小さな床が布かれてあり、そこに金色で書かれた般若波羅蜜經が安置えてある。またその上は、いろいろの莊嚴や幡蓋で覆うてある。この莊嚴の上に當つて、帝釋天が眷屬の神神を率い、神神しい曼陀羅華や名香を撒き、神神しい伎樂を奏でている。常啼菩薩は、嘗て見たことのない光景に驚き、帝釋天に尋ねた。

「神よ、どうしてこの臺を娛しませるのか」。「この豪こそ、實に諸の佛や菩薩の母にて在ます般若波羅蜜の安置處であるからである」。

常啼菩薩は、般若波羅蜜の安置處と聞いて喜び踊り「それこそ私が、命をすててまで訪ねたものである、定めし諸の佛も中に在すであろう、どうぞ拜ませて頂きたい」。「それは出來ぬ、これには法涌菩薩が七寶の封印を押されてあつて、我我には開くことを許されぬ」。

常啼菩薩は、そこで娘や五百の侍女と一緒に、持つて來た澤山の供養の品品を、二つに分けて、一つを般若波羅蜜へ、一つを法涌菩薩へ供えたが、不思議や、華や香や衣は、虛空にかかつて華の臺となり、碎末の栴檀香や金銀の華は、寶の帳と變つてその臺にかかり、或は寶蓋となり寶幡となつて臺を飾つた。これみな法涌菩薩の神通の力であつた。侍女達は歡び極まつて道の心を起し、我我もこの法涌菩薩のように、珍らかな力を備えて、般若波羅蜜を說く身になりたいとゆう願いを起した。

九。この時常啼菩薩は、侍女達を連れて御許に近ずき恭しく禮拜み、掌を合せて、今日までのその身の上を申上げ、言葉をつずけて、「私を尊者の御許へ導いて下された十方の諸佛は、何處からおいでになつて、又どこへ去られたのでありましよう、また私をして常に諸佛のお側から離れない身にして頂きたい、私は絶えず御佛の御前にあることは出來ぬのであります、これが私に取つて何より悲しいことであります」。

法涌菩薩は懇ろに、「善男子よ、諸の佛には、何處より來つて何處に去くとゆうことはない、あらゆる法の眞の相は空である。執着の眼で見るように、生れたり滅びたりするものでない。また執着の心に從うて、善になり惡になり又は醜く淸く、憎く愛らしくなるものでない。卽ち、執着の心には少しも染まず、荒れ狂う煩惱の底にと寂んでいても、少しも變ることはない。生滅、善惡等の變化は、見る者の執着のゆえに現れるのである。佛はその執着の心をなくして、寂けく動かぬ空の理を見よと說かれるのである。諸佛は、このあらゆる法の空の眞性を證らせられた方であるから諸佛には來るとか、去くとかゆうことはない。諸法の眞理と諸佛の眞身とは、ただひとつであつて、異ならぬからである。善男子よ、擅に分別れれば、この世は樣樣に分れるのであるが、眞理はそのような分別に捉えられるものでない。春の眞晝に立ち上る陽炎の後を追うて、水を探すものがあるならば、それは賢い仕業と云われるであろうか」。「大師よ、陽炎の中に水のあろう筈はありません」。

一〇。「そうであろう、熱さや渴きのために逼められ、陽炎を水と見て喜ぶは、まことに愚しいことである。諸佛を捉えて、何處より來り何處に去くなどと考えるのも、これに等しい。諸佛の御體は、方便として暫く人人に形を示されるだけであるから、この御體によつては眞の佛は見られない、眞の佛は眞の道理と一つである。體の佛はその容器で、中に證悟を盛ればこそ、體までが佛と云われるのである。そして、眞の證には、來るとか、去るとかゆうことがないから、諸佛にもまた來るとか、去るとかゆう事はない。善男子よ、夢にもろもろのものを見て、覺めての後もあるように思うのは愚かしいことであろう。あらゆる法は夢のようであるとは、常に佛の說き給うところである。その夢のように、しばし假の姿を人界に示したもう諸佛を捉え、その證り給う眞の道理を知らないで、その御名や御體に執われして佛を追うものも、全くこの愚さに同じい。善男子よ、このゆえに生滅去來のない寂けく動かないあらゆる法の眞性を知つて、何事についても執着を捨てねばならぬ。惠むところがないならば、人

からの布施を受けてはならぬ。また布施を受けて、その人に福を植えさせることが出來るならば、喜んでその布施を受けて福田となるがよい。執着を捨てて自分のためにせず、人のためならば布施も受け供養も受ける。そこに方便の道を作るのである。これこそ眞の佛弟子といわれるのである。

善男子よ、大海には種種な寶が滿ちている。併し天から降つたものでもなければ、地から湧いたものでもない、すべて因緣あつて生れたまでである。從つて因緣がつきればなくなるのである。又、かの朗かな音を出す箜篌でも、胴や頸や皮や弦や棍から出るのではなく、或はただ人の手だけで鳴るのでない。すべてこれらの因緣が和合つて、始めてあの朗かな音が出るのである。今諸佛の生滅し給い去來し給うのも、ある一つの因、一つの緣、一つの功德によつてあるのでなく、すべての因緣が熟つて、人人を濟うによい時の來た時に世に現われ、その因緣の盡きた時にこの世から隱れ給うのである。ただ因緣によつてのみ生滅去來があり、生滅去來があつてもその眞性は寂然であつて變らない。この理が解れば、佛の生滅去來し給うことに少しの驚きも悲みもいらず、やがて此上ない覺を開き、般若の智慧と方便の行も出來るのである。

一一。この懇ろな說法が終つたとき、帝釋天が神神しい曼陀羅華を常啼菩薩に授けて云う。「善男子よ、この華を法涌菩薩に供養するがよい、私は汝を守るであろう、汝は限りない永い間、人人を救うために苦しんで來た、汝のような善人は、また容易く得られるものでない、汝が熱心に求めて來たとゆう因緣だけにても、恐らく百千萬億の人人を惠み、いつかは此上ない覺を與えるであろう」。

常啼菩薩は、帝釋天の言葉に喜んでその華を受け、法涌菩薩の上に散して云つた。「大師よ、私は今日から身をもつてあなたにお仕え申しましよう」。すると長者の娘とその五百の侍女達も、これに倣うて常啼菩薩に云うた。「妾達も今日から、身を以て大師にお仕え申すでありましよう、そしてこの善い因緣によつて、師の得られたような法を得、また御一緒に世世諸佛に供養するでありましよう」。

かくて常啼菩薩は、その女達の持つて來た五百の車のいろいろな寶を、車と一緒に法涌菩薩に奉つて申しあげた。「大師よ、どうぞ、この五百人の女達をお側に置いて朝夕のお給仕をさせ、また、この五百車の寶を日常の御用にお使い下さい」。これを聞いて帝釋天は、「いかにも美わしいことである、あらゆる法の眞性が空であることを知つて、どのような善事にも、どのような功德にも執われないで、その善事や功德を皆菩提のために布施することは、まことに尊い、すべての菩薩は皆かくありたいものである、過去の諸佛もみなこのように修行して、般若波羅蜜を得られ、方便の力を備え給うたのである、この菩薩も必ず、そのようになるに違いない」と讃歎えた。

法涌菩薩は善根を植えさせるために快くその供養を受け給うたが、「もと善根は、たとえ菩提に廻向ければとて、やはり修めた人の善根であり、ただ菩提に廻向けることによつて、善根に執われない眞實の行となるのであるから、この供養は善根をおさめた人に歸るべきである」といつて、再び常啼菩薩に授け給うた。かくて、日沒に及んで立つて宮中に入り給うた。

その時常啼菩薩は、このように念うた。「私は法を求めに來たのである、決してこの世界へ夢の樂を貪りに來たのではない、されば臥したり坐つたりしていてはならぬ、法師の再び出でて說法して下さるまでは、いつまでも茲に待ち申すであろう」。

一二。法涌菩薩は、宮中にて禪定に入り、七年の間、般若波羅蜜の修行を始められた。しかし常啼菩薩は、少しも倦み疲れることなく、欲も瞋恚も愚癡も起さず、されば立つとて菩提そのものに耽溺もせず、ただ法の時期を待ちわびていた。軈て七年も終る頃、師の說法のためにとて、長者の女や侍女達と一緒に、七寶の法座を作り、その上には各の上衣を敷き、この上にて說法ましませと念じた。そして四邊を淨めようとて水を探したが、水が得られぬので大いに悲しみ、自らからだの血を絞つて漸く塵を沈めた。無始以來欲のために身を壞けたことこそ數數であれ、法のために壞けたことは今が始めであるとて、却つて歡びに充ち、五百の侍女達も心を翻すものは一人もなかつた。帝釋天はこれに感動き、「實に尊いことである、これ程までに精進んで菩提を求むればこそ、惡魔のしむけにも心動かず、またこのうえなき正覺も得られるのである、實に過去の諸佛も、みなこの通りであつた」と賞め讃えた。

一三。そのうち七年の月日が滿ちて、法涌菩薩は、無量百千萬の人に圍れながら、設けの法座へと進ませられた。待ちに待つた日となり、師の御姿を拜んだ時には、常啼菩薩の胸は喜びに躍つた。法涌菩薩は法を說き給う。

「善男子よ、耳をすまして聞け、心の底に深く止めよ、今汝のために般若波羅蜜が何んであるかを說くであろう。善男子よ、すべての法は平等であつて、凡情で考えるような差別はない。これを知るのが般若波羅蜜であるから、般若波羅蜜もまた平等である。あらゆる法は平等であるから欲の心を以て考えるように、愛憎善惡のあるものでない、從うてあらゆる法は、人人の執着を離れたものであり、この執着を離れさせるところの般若波羅蜜も、亦執着の境界から離れたものと云わねばならぬ。善男子よ、あらゆる法はかくて平等であり、執着を離れたものであるから、執着の眼で生滅去來があると思うは誤りである、即ちその本性は動きのないものである。また諸法自身に思慮があつて愛憎の相を示すのでないから即ち念のないものといわねばならぬ。從つて法には畏るる敵を持つことはないから無畏法であり、皆一樣な價値があるから一味の法である。これによつてこの法と一つものである般若波羅蜜も亦、不動、無念、無畏、一味なものである。善男子よ、もろもろの法に邊がないから般若波羅蜜も亦無邊であり、あらゆる法が生れず、滅びないか

ら、般若波羅蜜も亦無生無滅である。善男子よ、虚空や大海に邊がなく、須彌山の莊嚴を極むるように、般若波羅蜜も亦無邊際の大莊嚴を持つている。虚空は時に思わぬ天災を起すけれども、虚空に思慮あつて起すのでないように、般若波羅蜜も亦無分別のものである。あらゆる法の眞理が金剛のようであるから般若波羅蜜も亦金剛のようである。かくあらゆる法と般若波羅蜜とは全く一つであつて、共に分別せぬもの、眞性は捉え難いもの、また執着のないもの、作用をしようとしてするものでないもの、全く思慮の及ばぬ不思議なもので、いわゆる無分別、不可得、無所有、無作、不可思議の法といわれるのである」。

この說法を聞き終つて常啼菩薩は、その場で、法の中に安住うことができ、あらゆる禪定を得た。

一四。 世尊はこのように常啼菩薩の求法の話をお說きになつて、さて須菩提に語り給うよう。「須菩提よ、今私は、この世において、大勢の弟子達にとり圍まれて、般若波羅蜜を說き、また、常啼菩薩のことを說いているように、三世十方の恒河の沙ほどに多い佛たちもまた、このようにして般若波羅蜜を說いて居らるるのである、般若波羅蜜はまことに、諸佛同道の尊い敎なのである、須菩提よ、常啼菩薩はその後、彼の大海のあらゆる水を取り入れて失わぬように、よく聞いて忘れず、常に佛の御側を離れず、佛の在ます國から國へと現れ、願にまかせて何れの佛の下へでも生れ得る身となつて居る、これみな、般若波羅蜜を行うた德であつて、これを學んでこそ、すべての功德も一切種智も得られるのであると知らねばならぬ」。

一五。 說き終らせ給うて世尊は、最後に阿難に仰せられた。

「阿難よ、私は汝の大師であり、汝は私の弟子であると心から思うか」。「仰せまでもありません、世尊は私の大師、私は、世尊の弟子であることを喜んで居ります」。

「善い哉、阿難よ、私は汝にとつて大師であり、汝は亦二心ない私の弟子である、弟子として致さねばならぬことは、今日まで缺目なくなし遂げてくれた、阿難よ、汝が考えることも云うことも、また行うことも、そのすべてが、よく私の意にかのうて居つた、私の生きている間の汝の仕え方はまことに美わしい、しかし阿難よ、私の滅くなつた後は、私に仕えた心持で般若波羅蜜に仕えるがよい、之を忘れず、之を失わず、相續人としての責を全うしてくれ、阿難よ、いついかなる時でも、道を求むる者の前には、般若波羅蜜があるであろう、この般若波羅蜜のあるところこそ、現り佛が在して說法するものと思うがよい」。

世尊の說き給うこと了れば、人人は喜に心躍つた。

第三章　廻向

第一節　三種の師

一。 世尊は更に北に上つて舍衞城に入り再び憍薩羅國を順歷り、沙羅跋帝迦村に暫く滯まり給うた。この村は波斯匿王がロー

ヒッチヤ婆羅門に與えた村で、牧場も水田も多く、住民も富み昌えていた。當時のローヒッチヤ婆羅門はかような考を持つていた。「出家は或はその求むる善に達するかも知れぬが、その善を他人に向うて說いてはならぬ、何故ならば、他人が他人に何をなし得るであろうか、それは前の縛めを斷ち切つて、更に再び新しい縛めを作るようなもので、やはり一種の貪である」。

世尊がその村に着かせられたと聞いて、ローヒッチヤは理髮師のベーシカを呼び、世尊の御氣色を伺い、明日の食事に御招待申し上ぐるように命けた。ベーシカはその使を果し、世尊の御伴をしながら、途途主人の抱いて居る考を申しあげ、どうか世尊の御力によつて、主人の惡見を除いて下さるようにと願うた。

二。 食事の供養も濟み、ローヒッチヤが低い座を取つて傍に坐ると、世尊は、ローヒッチヤの前の考を述べて、「それはまことであるか」と仰せられると、「仰せの通りであります」と答えた。世尊は重ねて、「ローヒッチヤよ、汝はいま沙羅跋帝迦村を領つて居るが、或る人は次のように云うかも知れぬ、「この村の收入と產物とはローヒッチヤ婆羅門一人で取つて、他の人には與えぬがよい」と、ローヒッチヤよ、このように云う人はこの村に住む人人に危險くはないであろうか」。「それは危險い人であります」。

「危險があるとゆうことは、同情を持たぬ人であり、慈のない敵意のある人とゆう事ではないか。敵意を持つとゆうことは邪まな見ではないか。邪まな人は地獄に墮ちねばならぬ。之を大きくして波斯匿王についても同じである。王は迦尸と憍薩羅國とを領つておるが、この兩の國の收入と產物とは、獨り王だけに取らせて他の何人にも與えぬがよいと云うものがあるならば、その人は、この兩の國の住民にとつて危險い人であり、同情がなく敵意のある人であり邪まに住んで地獄に墮ちねばならぬ。ローヒッチヤよ、丁度そのように、「出家の到着いた善を他に說いてならぬ」などとゆう人は、佛の敎法に入つて覺の種子を育てつつある人人に對して、障碍を置く人、同情のない人であり、敵意を抱いて邪まに住い從つて地獄に墮つべき人である。

三。 ローヒッチヤよ、世には正しく詰られねばならぬ三種の師がある。第一に出家しながらその目的を果さないでいて、「これは汝等のためになるもの、汝等の幸福になるもの」と弟子達に敎える。弟子達はその敎に耳を傾けず、師匠の敎から離れてゆく、この師匠は詰られねばならぬ。「あなたは出家しながら、自らその目的に達していないで、弟子達に法を說くものであるから、弟子達はあなたの敎に耳を傾けず、他の師匠に逃げようとする、あなたの敎は厭がる女に溺れて抱きつこうとするようなものでそれは一種の惡い貪である」と。この非難は當つている。第二の師は、出家しながら自ら出家の目的を果さないでいて、「これは汝等のためになり、汝等の幸福になるもの」と弟子達に敎える。弟子達はよくその敎に耳を傾け熱心に行を修めようとする。

この師匠も譏られねばならない。『あなたは丁度自分の畑を忘れていて、他人の畑の草取りをしているようなもので、それは一種の悪い貪である』と。この非難も當つている。第三の師は、自ら出家の目的をはたして、弟子達に教えて居るが、弟子達はその教に耳を傾けず、師の教から離れてゆく。この師も、『あなたは丁度古い縛を切りながら、わざわざ新しい縛につくようなもので、それは一種の悪い貪である、他人が他人に何をなし得よう』と譏られねばならぬ。そうしてこの非難も當つている」。

四。「世尊、それでは世間に、譏つてはならない師がありますか」。「**ローヒツチヤ**よ、佛のこの世に出でて法を說き、在家のものがこれを聞いて信を起して出家し、戒律に從つて生活し、正しい業を樂とし、小さな罪にも恐を見、五官の戸口を守り、煩惱を離れて禪定に入り、禪定に依つて練られた心で宿命と他心と煩惱の盡きたことを知り、解脫して自ら解脫したことを知る。**ローヒツチヤ**よ、いかなる師でも、その弟子達がその教の下にこのような勝れた地位に到着いたとすれば、非難をうける筈がない、非難は當らないで却つて罪である」。

ローヒツチヤは、この世尊の教をうけ、「恰も斷崖から墮ちようとしているところを、襟頭を掴んで救うて下さるように、地獄へ墮ちようとしている私を助けて下された」と大いに喜び、世尊に歸依して信者となつた。

五。世尊は更に遊行して**マナサーカタ**とゆう婆羅門村に至り、村の北を流れる**アチラワチー**川の岸にある樹林に停り給うた。

その時、**タールツカ**、**ポツカラサーチ**など、名高い多くの婆羅門達が、或る用事でこの村に集つていた。**ポツカラサーチ**婆羅門の弟子の婆悉吒と、**タールツカ**婆羅門の弟子の**バーラドワージヤ**は、夕暮沐浴の後にて、靜かに沙地の上を歩きながら、道の正否について議論をした。婆悉吒の云うところは、師匠の**ポツカラサーチ**婆羅門の說く法は眞直な道で、その通りに行きさえすれば神の世界に生れるとゆうのであつた。

バーラドワージヤの云うところは、**タールツカ**婆羅門の說く法こそその眞直な道であるとゆうので、お互に說伏せることができず、二人は相談の結果、その判決を當時名高い喬答摩に願おうとゆうので、世尊の御傍へ行き、この旨を申しあげた。

六。世尊仰せられるよう。「婆悉吒はその師の法を神の世界に生れる眞直の道とし、**バーラドワージヤ**は又その師の法を眞直な道であるといいながら、何處に意見の相違が起つて爭となるのであるか」。

「世尊、道の正否についてであります、この頃あまたの婆羅門が道を說いておるが、これらの教は、總てどれに從うて道を修めても、神の世界に生れしめるものでありましようか、喩えば、村や町の近くに幾筋かの道があつて、それがその村や町の中で一つになつているようなものでありましようか」。

「婆悉吒よ、汝はそれらの婆羅門の教が正しく導くと云うのであるか」。「左樣であります」。「婆悉吒よ、三吠陀を知る婆羅門のなかに、一人でも眞に神を見たものがあるのか」。「それはありません」。「婆悉吒よ、それらの婆羅門の師、又はその師の師の誰かが、一人でも神を見たものがあつたか」。「それもありません」。「婆悉吒よ、それではそれらの婆羅門の親先祖七代の間に、一人でも神を見たものがあつたか」。「ありません」。

「婆悉吒よ、婆羅門達の聖呪の作者である古の聖者達は一人でも、『何處に神がいるか、何によつて神となつたか、神は誰かを善く知り善く見ている』と云つて居るか」。「世尊、そうは云つて居りません」。

七。「婆悉吒よ、それではこうゆうことになる譯である。三吠陀に明かな婆羅門や聖者の中で、古來一人として神を見たものはない。彼等は云う。『我我は我我の知りもせず、見もしないものの所へ行くことが出來る』と。婆悉吒よ、盲目の群がつながつて、前の者も後の者も中の者も、見ることができぬように、それらの婆羅門達も見ることが出來ないで、そのように云うのであるから、その語は滑稽となり效ないものとなるであろう。

婆悉吒よ、喩えば戀を語る人が、國の中で第一の美人を戀しているとゆう。或る人に『それはよろしいが、汝の戀人は王の姫君か、神主の娘か、それとも町人や下僕の女であるか』と問われ『それは知らぬ』と答える。『それなら、名と氏とが何か、丈は高いか低いか、色は白いか黑いか、何とゆう處に住んでいるのか』と尋ねられ、『それも知らぬ』と答える。『それでは汝は戀しているとゆうけれども、その女を知りもせず見もせぬのではないか』と云われて、『實はその通りである』と答える。婆悉吒よ、神の世界へ生れるとゆう教を說く婆羅門の教は、丁度そのようなものである。

婆悉吒よ、大雨が降つて、**アチラワチー**河が汎濫れて、岸まで充ちて來たとする。そこへ向う岸へ用事のある人が來て、ごちらの岸に立つて、『向う岸よ來れ、向う岸よ來れ』と叫ぶ。この時、向う岸は、その祈りに依つてこちらの岸へ向つて來るものであろうか。婆羅門が、婆羅門たるべき者のなすべき法を捨てて、婆羅門に相應しからぬことにかかり果てながら、しかも神神を招いて居る。

又、婆悉吒よ、**アチラワチー**河の洪水に、向う岸へ渡りたいとゆう男がこちらの岸にて、強い鎖で後手に縛られたら、向う岸へ渡られるものであろうか。婆羅門達は自分のなすべき法を捨てて、聖者の道の中にあつて五欲の鎖に縛られて居る。

又、婆悉吒よ、洪水の**アチラワチー**河のこちらの岸にて、頭まですつかり布團を被つて寢て仕舞つた男が、向うの岸へ渡られるものであろうか。婆羅門も自分のなすべき法を捨てて、聖者の道に於て煩惱の障に覆われている。さればこのような婆羅門は彼岸につくことが出來るであろうか。婆悉吒よ、汝等の耆宿の婆羅門達の語る所によれば、神神には家族もなく財產もなく、其心には瞋もなく、害意もなく、垢もなく淸

らかであるとのことである。今の婆羅門は汝の眼に如何ように見えるのであるか」。

「世尊、婆羅門はこれに反いて家族あり、財産あり、心は瞋と害意と垢に滿ちております」。「婆悉吒よ、それでは、神と婆羅門との間には何の相通うものもないではないか、相通う所がなくして、死んだらその仲間になろうとゆうことは有り得ぬことではないか、婆羅門は坐りながら地獄に沈んでゆくもの、天界に昇ると思いながら地獄に沈んで行くものである。さればこの婆羅門の三吠陀の學問は水のない沙漠であり道のない藪であり破滅と呼ばれるものである」。

一八。「世尊、それでは、世尊は神の世界に生れる法を知り給うか」。「婆悉吒よ、**マナサーカタ**村は、この森から近いであろうか遠いであろうか」。「世尊、遠くはありません」。「婆悉吒よ、**マナサーカタ**村に生れてその村に育つた人が、村へ行く道を問われて、知らずに困るようなことがあるであろうか。婆悉吒よ、たとえそのようなことがあつても、私は神の世界のことや、そこへ至る道を尋ねられて解らないで困ることはない、神の世の人の如くに、明かに知つているのである」。

「世尊、私は世尊がそれを知り給うように聞いておりました、どうぞこの婆羅門の私を救うためにその道を說いて下さい」。

「婆悉吒よ、それでは善く注意して聞くが善い、佛はこの世に出でて法を說き、在家のものが之を聞いて信を起して出家し、戒律に從うて日を送り、正しい業を樂しみ、小さな罪にも恐を見、五官の戶口を守り、煩惱を離れて身體は暢かに、心澄みわたつて靜かに一點に集る、彼は慈しみの心、悲みの心、喜びの心、平等の心を以て此世の中を滿し、ちようど勝れた喇叭手が喇叭の音を容易く四方に聞えしむるように、量りないそれらの心をもつて怨みなく瞋りなく滿すのである、婆悉吒よ、これが神の世界に生れる道である、かくのごとく四つの量り無い心を修める佛弟子には、家族もなく財產もなく、その心には、瞋も害意も垢もない、それは神神と相通うものであり、それに依つて神の仲間になると云われ得るのである」。

婆悉吒と**バーラドワージャ**は、この世尊の說法を聞いて心から喜び、信者となることを誓うた。

九。世尊はそれより憍薩羅の國の村村を遊行して、舍衞城に歸り、祇園精舍に入りたもうた。或る日、弟子等を集めて語りたもうた。

弟子等よ、私は今、總ての煩惱を淨める法を說くであろう、善く注意して聞くがよい。弟子等よ、私は知らるべきことを知り見らるべきことを見る人に說くのである。知らるべきこと、見らるべきこととは、正しい思惟と、正しくない思惟とである。正しい思惟には未だ起らない煩惱が起らず、已に起つた煩惱が滅びる、正しくない思惟には未だ起らない煩惱が起り、已に起つた煩惱が增長すのである。弟子等よ、煩惱は見と制御と受用と忍受と逃避と驅逐と修習とに依つて鎭められるのである。

見に依つて鎭められるとゆうは如何なる事か。弟子等よ、茲に聖者を見ず、聖者の法を知らず、聖者の法を習わず、善人を見ず、善人の法を知らず、善人の法を習わない人があるとする。彼は考えるべき法と、考えてはならない法とを知らず、從つて考えてはならぬ法を考え、考えるべき法を考えない。

「私は過去にあつたであろうか、無かつたであろうか、あつたとしたら何であつたであろうか、どうして居たであろうか、どうして、そうゆうものになつたであろうか、未來にもあるであろうか、無くなるであろうか、あるとしたら、何になるであろうか、どうして居るであろうか、何故にそうゆうものになるであろうか、現在にあるのであろうか、無いのであろうか、あるとしたら何であろう、何をして居るのであろう、何處から來て何處へ行つてどうなるのであろうか」。

こうゆう考からして、「自我は私のもの」、「自我は私のものでない」、「私は自我によつて自我を見る」、「私は自我によつて非我を見る」、「非我によつて自我を見る」とゆうような考や、又は「この私の知つたり味わつたりする自我は、其處や此處で善業や惡業の結果を味おう、この自我は常住のもの、堅く永劫に變らぬものである」とゆう考を起すようになる。弟子等よ、この考は妄見であり、妄見は執着であり、繫縛である。この繫縛によつて人人は生と、老死と、憂、悲、苦、惱、悶から脫出ることが出來ぬのである。

一〇。弟子等よ、これと違つて、聖者を見、聖者の法を知り、聖者の法を習い、善人を見、善人の法を知り、善人の法を習う教養のある人は、考うべき法と考えてならぬ法とを知つて、考うべき事を考え、考えてならぬ事を考えない。從つて「これは苦である、これは苦の集である、これは苦の滅である、これは苦の滅に至る道である」と正しく考え、この正しい思惟から身と思想と行とに關わる誤つた見解を離れる。これが見によつて煩惱を淨めることである。

制御によつて鎭められるとゆうは、正しく考えるものは、眼、耳、鼻、舌、身、意の六つを制え、この制えることによつて、迷と苦のもとである煩惱は起ることが出來ない。

受用によつて鎭められるとゆうは、正しく考えるものは、衣服や食物を用いるにも享樂の爲にしないで、熱さ寒さを防ぎ恥を包むため、又この淸らかな行を修める身體を養うためと考える。この考によつて總てのものを用いる際に、迷と苦のもとである煩惱は起ることがない。

忍受によつて鎭められるとゆうは、正しく考えるものは、寒さ熱さ、飢渴を堪え忍び、惡罵、嘲笑を耐え忍び、生命に關わる苦をも耐え忍ぶ。この忍受によつて、迷と苦のもとである煩惱は起ることがない。

逃避によつて鎭められるとゆうは、正しく考えるものは、暴暴しい象や馬や牛や犬や、坐るに適當しくない所、行つてはならぬ所、交つて惡い友達を避ける。この逃避に依つて迷と苦のもとである煩惱は起ることがない。

驅逐によつて鎭められるとゆうは、正しく考えるものは、起つて來る欲念、瞋恚、害心、其他いかような惡心をも驅逐い碎いて滅して仕舞う。この驅逐によつて迷と苦のもとである煩惱は起らぬのである。

修習によつて鎭められるとゆうは、正しく考えるものは、閑居して欲を離れ、垢の心を滅す念を練り、さとりの道を修める。この修習によつて迷と苦の本である煩惱は起ることがない。

弟子等よ、汝等がこの見と制御と、受用と忍受と逃避と、驅逐と修習とによつて、煩惱を鎭めるならば、このあらゆる煩惱を鎭め、愛の渦を滅し、縛を斷ち切つて、苦の終をとげることが出來るのである。

第二節　四種の怖畏

一。世尊は舍衞城を離れて、釋迦族の國に至り、そのチヤートマ村のアーマラキーの林に滯まつて居たもうた。そのとき舍利弗と目連とは五百ばかりの弟子達を率えて世尊にお遇いしようとこの村に着いたが、外から來た弟子と在住の弟子とが挨拶を交したり座具を整えたり、或は衣や鉢を片付けるので騷がしい音を立てていた。世尊は阿難を呼んで、何故に漁夫達が魚を奪合うう時のような大聲を出しているのかと尋ね、阿難からわけを聞いて弟子等を呼ばしめ、「弟子等よ、去れ、私は汝等を退ける、私の近くに住むことはならぬ」と命け給うた。「世尊、かしこまりました」と、弟子等は座を立ち、世尊を拜んで右に繞り、衣と鉢をとつてその場を立ち去つた。

その時、チヤートマ村の釋迦族の人達は會議のために公會堂に集つていたが、御弟子達の遠くから來るのを見てその譯を尋ね暫く彼等を待たせ、世尊の御許に行つて御詫びを申上げた。「世尊、御弟子方を御許し下さい、前に世尊が僧伽を御護りなされたように、今も僧伽を御護り下さい、この僧伽の中には、新しくこの教に歸依して間のないものもあります、彼等にして若し世尊を見奉ることが出來ぬならば、或は心も變り退轉をするかも知れません、喩えば若い種子が水を得ぬために枯れてゆくように、又若い犢が母を見ることができぬ爲に衰えて行くように、彼等も世尊を見奉る事ができぬために退轉ぐかも知れません、それゆえ、世尊、あの御弟子方を御許し下さい、前のように僧伽をお護り下さい」。

二。この願によつて世尊の御許を得、目連は再び大衆を促して世尊の御許に近ずき世尊を拜んで傍らに坐つた。世尊は舍利弗に宣うよう。「舍利弗よ、汝は私が弟子等を退けた時に、どのように考えたか」。「世尊、其の時はかように考えました、世尊は弟子等を退け給うた、世尊は今事なきを好み、禪定の樂に專らい入り給うのであろう、我我も今事なきを好み、禪定の樂に專ら入るであろう」と。「待て、舍利弗よ、汝は再びさような心を起してはならぬ」。世尊は次で目連に尋ね給うた。「目連よ、汝はどのように考えたか」。「世尊、私はかように考えました、世尊は弟子等を退け給うた、世尊は今事なきを好み、禪定の樂に專ら入り給うであろう、私は今世尊に代つて舍利弗と共に弟子等を率いてゆこう」と。「善い哉、目連よ、弟子等を率いるものは、私か舍利弗か汝かである」。

三。世尊は弟子等を呼び掛け宣うた。

弟子等よ、海に出るものは四つの恐怖を待ち設けねばならぬ。それは波と鰐魚と渦とスカ魚の恐である。弟子等のこの教に出家したものも、又これと等しく、四つの恐を待ち設けねばならぬ。

弟子等よ、波の恐とは何であるか。茲に良家の子が信を發して出家し、このように思う。「私は生、老、病、死、憂、悲、苦、惱、悶に沈み、苦に敗れている、この苦から脫れる法を聞かねばならぬ」と。然るにその同學者は、「行くにはこのようにせねばならぬ、歸るにはこのようにせねばならぬ、このように見渡せねばならぬ、このように眺めねばならぬ、腕を伸したり屈めたりするにはこのようにせねばならぬ、このように衣を纏わねばならぬ」と教える。彼はこのように思う。「私も前に家庭にあつた時には、他の人に教え示した、然るに今、子か孫のような人達から、教を受けねばならない、恥かしいことである」と。腹を立てて教を捨てて還俗する。弟子等よ、波の恐とゆうは怒と自棄の名である。

弟子等よ、鰐魚の恐とゆうは、これも亦このようにして出家した彼に、同學者が教える。「これは食べねばならぬ、これは食べてはならぬ、これは飲まねばならぬ、これは飲んではならぬ」と。之を聞いて、彼はこのように思う。「私は家にあつた時には、食べたいものを食べ、飲みたいものを飲んでいた、私の飲食に適わしいものとか適わぬものとか、正時非時とかゆうことはなかつた、今信心ある在家の人達が甘美い食物を送つて呉れても、それが非時であれば、私の口は閉じられて居る、窮屈なことである」と。教を捨てて還俗する。弟子等よ、これが鰐魚の恐で、つまり食物に煩わさる事である。

弟子等よ、渦の恐とは何であるか。彼はこのようにして出家し、曉に衣をつけ鉢を取り、身と口と意とを護らず、念を正しくせず、五官を制えないで樹又は邑に食を乞う。彼はそこで在家の人達が五欲に取り卷れて樂しむのを見て、「私も家にあつた時はあのようにして樂に耽つた、家には富があるから樂しみながら功德を積むことができる」と思い、遂に教を厭うて還俗する。弟子等よ、これが渦の恐であつて即ち五欲のことである。

弟子等よ、スカ魚の恐とは何であるか。彼は出家して食を乞う途中、亂れた着物の着方をした婦人を見て欲に心を捕われ、教を厭うて還俗する。これがスカ魚の恐であつて、それは婦人のことである。弟子等よ、この教の中に出家したものには、この四つの恐が待ち設けて居るのである。

四。世尊は更に道を東に進め、旅を重ねて更に南に下り、再び毗舍離に着き、大林に入り給うた。その時尼乾子のサツチヤカも毗舍離に居たが、辯論に巧みなために人人の賞讃を得、自分もそれを慢にして毗舍離の人人にこのような高言を吐いていた。「如何なる出家でも、私と議論して冷汗を

流さぬものはない、心ない柱でも議論することが出來たなら、私に向うて恐れ戰くことであろう」と。

或る日、佛弟子の馬勝が托鉢に毗舍離に向うと、**サッチヤカ**は森の中をそぞろ歩きしていたが、彼を見つけて進み出でて問うよう。「尊者よ、喬答摩は弟子を如何ように教えられるか、弟子達の間には如何ような教が多く行われるか」。

「**サッチヤカ**よ、世尊はこのように教えられる、『弟子等よ、身は常ない、心もまた常ない、すべて作られたものはみな、常なく我がない』と、この教が弟子達の間に多く行われている」。「尊者よ、そのような教を聞くことは、我我には耳の汚である、何時でも、何處でもよいから、喬答摩に會いたいものである、この惡見から離れさせてやるであろう」。

サッチヤカは直ちに市の公會堂へ出掛けた。其處には五百人程の離車族の公子達が何かの相談のために、集まっていた。「公子達よ、私は今日喬答摩と論議したいと思う、もし喬答摩が、その弟子の一人の馬勝の云うような說を持っているならば、力ある人が羊の長い毛をとらえて幾度も引廻すように、喬答摩の語をとらえて引廻して見せよう」。之を聞いて公子達の中には、**サッチヤカ**が勝つであろうと思うものもあり、世尊が勝ち給うであろうと思うものもあった。

五。サッチヤカは人人に取りまかれて、大林の重閣講堂に進むと、多くの弟子達はそぞろ歩きしていた。弟子達に聞くと、世尊は今、大林の奥に日中の禪定に入っていられるとゆうので、その場所に至って各座をとり、**サッチヤカ**の云うよう。「尊者喬答摩が御許しなされるならば、私は尋ねたいと思うことがある」。「**サッチヤカ**よ、何事でも思うところを尋ねるが善い」。「喬答摩よ、あなたは如何ように弟子達に法を說かれるか、弟子達の間には又如何なる教が多く行われますか」。「**サッチヤカ**よ、私はこのように弟子達に教える、『弟子等よ、身も心も常なく我がない、すべて作られたものは皆常なく我がない』と、この教が弟子達の間に多く行われている」。

「尊者よ、私の心に一つの譬喩が浮びました、如何なる草木でも、又その種子でも、大地に凭り大地を莖として生長っている、力仕事をする人も大地に凭り大地に立ってする、尊者よ、丁度このように、人間は身を我とし、身に立って善惡の行をなし、心を我とし、心に立って善惡の行をすると思う」。

「**サッチヤカ**よ、それでは汝はこのように云うつもりではないか、『身は私の自我である、心は私の自我である』と」。「尊者よ、私もその通りに云い、茲に居る多くの人人も亦そのように申します」。「**サッチヤカ**よ、茲にいる多くの人人が、汝に何の關係があるか、汝は汝自身だけの說を述べるが善いではないか」。「尊者よ、私は、『身は自我である、心は自我である』と申します」。

六。「**サッチヤカ**よ、私は汝に尋ねたいと思うが、意見の通りに答えて貰いたい、

憍薩羅國の波斯匿王とか摩竭陀國の頻婆娑羅王とか、その他の王者は、自分の夷げた領土に於て、殺すべきものを殺し、奪うべきものを奪い、追放つべきものを追放つとゆう、自分の思い通りをすることが出來るであろうか」。「尊者よ、それは出來ます、王者はその權利と力とを持つて居るからであります」。

「**サッチヤカ**よ、汝は『身は私の自我である』と云つた、その身に於て『私の身は斯くあれかし、斯くなかれかし』と、自分の思う通りにすることが出來るか」。

世尊のこの問に對して**サッチヤカ**は默つて居た。再び仰せられても猶答えようとしない、世尊が「**サッチヤカ**よ、早く思う通りに答えるがよい」と促し給うと、漸くにして「それは自由になりません」と答えた。

七。「**サッチヤカ**よ、善く考えて答えよ、前後の矛盾を來たしてはならぬ、身に對しても同じように、汝が私の自我であるとゆう心に就ても、『斯くあれかし、斯くなかれかし』と思うて、思い通りにすることが出來るであろうか」。「尊者よ、それは出來ません」。「**サッチヤカ**よ、善く考えて、前後矛盾のないように答えよ、それならば、身は常住にあるものか常ないものであるか」。「常ないものは苦であるか樂であるか」。「苦であります」。「常なくて苦であり、移り變るものを、『これは私のものである、私である、私の自我である』とゆうは正しいことであろうか」。「正しくありません」。

「**サッチヤカ**よ、それは心に就ても同じである、それで苦を受け、苦に執われて、苦を私のものである、私である、私の自我であると見るものは、苦を知り苦を脫れているものであろうか」。「勿論そうではありません」。

「**サッチヤカ**よ、喩えば樹の芯を探して斧をもつて森に入つた人が、芭蕉の樹を見つけて切り倒し、芯を求めて何處までも卷葉を見るのみで、木の肉さえも得ないように、汝は私に問い尋ねられて、只汝の意見が空しい謬つた汚れたものであることを示したることが出來るであろうか」。「**サッチヤカ**よ、それは心に就ても同じである、ある池に大きな蟹がいまして、小供達の手足を剪み切ろうとしましたが、小供達に捕えられて、陸へ投げ上げられ、小石で打たれ傷つけられ、池にも入ることが出來なくなりました、**サッチヤカ**は丁度この蟹であります」。

サッチヤカはこの時、頭を上げて云うよう。「**ドンムカ**よ、私はお前と話しているのではないから、默るが善い、尊者喬答摩よ、私は議論の無駄な事を了りました、けれども一體、尊者の弟子達は如何樣に教訓を守り　を越え、他へ心を寄せず、師の教に信頼っているのでありますか」。

「**サッチヤカ**よ、私の弟子は、身をも心だけである、然るに汝は何故に、毗舍離のこの人人に對して、『いかなるものでも私と議論して冷汗を流さぬものはない』と高言を吐いたのであるか、今汝の顏からは汗が流れて、衣物を濕しているではないか」。

八。サッチヤカはこれを聞いて益頭を下げ、肩を落し悄然としていると、離車族の**ドンムカ**が云うよう。「世尊、私の心に一つの譬喩が浮びました、ある池に大きな蟹がいまして、小供達の手足を剪み切ろうとしましたが、小供達に捕えられて、陸へ投げ上げられ、小石で打たれ傷つけられ、池にも入ることが出來なくなりました、**サッチヤカ**は丁度この蟹であります」。

「**サッチヤカ**よ、私の弟子は、身をも心

をも、これは私のものではない、私ではない、私の自我ではないと如實に正しく見るのである、それで、教訓を守り疑を離れ、他へ心を寄せず、師の教に信頼つて居るのである」。

九。或る日、また世尊が托鉢のために重閣講堂を御出掛けなされようとしていると**サッチヤカ**はぶらぶらと歩いて大林に向つてやつて來た。阿難はこれを見て世尊に申しあぐるよう。「世尊、あの**サッチヤカ**が參ります、彼は猶佛法僧を非難ろうものでありますが、どうぞ彼を憐み、暫く茲に座を御取り下さい」。

世尊の坐り給うた所へ來て、**サッチヤカ**は申すよう。「尊者よ、或る出家は身體を修めて心を修めないで居ります、身體の苦を受けて腿が麻痺れ、心臓が破れて熱い血を口から吐き、精神が錯亂れて狂者になる、この場合、心は全く身體の支配の下になつて居る、何故なれば心が修められていぬからであります。又或る出家は、心を修めて身體を修めない、彼等は心の劇しい苦を受けると、腿が麻痺れ、心臓が破れて熱い血を口から吐き、精神が錯亂れて狂者になる、この場合は身體が全く心の支配の下にある、何故なれば、身體が修められていないからであります。私は尊者の弟子達の事を考えますと、心を修めて身體を修めぬ者のように思われます」。

「**サッチヤカ**よ、汝の身體を修めるとゆうは如何ような事なのか」。「喩えば此に**ナンダウッチヤ**、**キサ**、**サンキッチヤ**、末伽梨拘賒梨のような人人が居る、彼の人達は、食事衣服座具の事について種種の苦行を積み、身體を修めて居るのであります」。「**サッチヤカ**よ、それらの人達は本當にそうゆう食事の上の苦行をして身體を支えているのであろうか」。「そうではありません、彼等も時には滋養のある美味い食事を取つて身體を養つて居ります」。

「**サッチヤカ**よ、それでは、前に捨てたものをまた拾うて居るようなもので、只肥えたり痩せたりしているだけである、それから、汝の心を修めるとゆうは如何なる事であるか」。

一〇。**サッチヤカ**が答が出來なくて默つていると、世尊は續いて仰せられるよう。

「**サッチヤカ**よ、汝が前に云うた身體の修め方は、正しい修め方ではない、汝は身體の修め方さえ知らぬのであるから、心の修め方を知ろう筈がない。**サッチヤカ**よ、此に人あつて樂しい感覺を受けるとすると彼はこの感覺に執われる、從つてその感覺がなくなつて苦しい感覺が起ると、悲しみ歎き、泣き叫ぶようになるものである、これは身體が修めてなく心が修めてないからである。若し身體も心も修めてあれば、樂しい感覺が起つても、執着が起らず、從つて樂しい感覺がなくなつて苦しい感覺が起つても、悲しみ歎くことがないのである」。

「尊者よ、もし世尊の仰せのようであると私は尊者は身體も心も修められた方と信じます」。「**サッチヤカ**よ、汝はそれを嘲弄のために云うているのであるか、まず私の説明を聞くがよい、私は出家してから今日まで、樂しい感覺が起つても苦しい感覺が起つても、未だ嘗て心を捕われたことはない」。

「尊者よ、それはあなたの經驗のなかに、幸にしてそれ程の感覺が起らなかつた爲ではなかろうか」。「**サッチヤカ**よ、私はあらゆる苦行を修めた、恐らく、過去にも未來にも私ほどの苦行を修めた者はないであろう、私は只それらの苦行が正しい覺の道でないことを知つて捨てた迄である、私はその苦行の與える如何ような苦しい感覺にも心を捕われた事はない、又その正しいさとりへの道へ入つて、身體を養い心を靜めとりへの道へ入つて、身體を養い心を靜め禪定を修め、禪定の樂しい感覺が起つても、それに心を捕われることなく、惱を脱れた樂を得ても、それに心を捕われることはなかつた」。

一一。「然し尊者は、晝に眠つたことがあると承認われますか」。「**サッチヤカ**よ、私は夏期の終に、食事の後に衣を四つに疊んで右脇に臥し、眠に落ちた事を認める」。「尊者よ、或る出家は、これを惑溺住と呼んでおります」。

「**サッチヤカ**よ、晝に眠るとゆうだけでは惑溺とも惑溺でないとも云うことはできぬ、いかなる人でも、未來に生れる因である愛の渴とその他の煩惱を離れぬものは、みな惑溺者である、愛の渴とその他の煩惱が、芯を斷たれた多羅樹のように、除き切られたものは、惑溺に陷るものでない」。

「尊者よ、誠に勝れたことであります、尊者はこうして手近の問題を順序よく解きつくし給いながら、庸の御色は永えに清らかに、御姿がまことに靜かであらせられます、この事は外の師にあつては見受けられぬところであります。彼等は議論を外したり、忿の色や狼狽の色を示します、尊者よ、これで御暇を致します」。

サッチヤカは世尊の御語を喜んで大林を去つた。

第三節　王道

一。かくて**サッチヤカ**は、尼乾子の徒でありながら、いよいよ深く世尊の教を喜び、心から世尊に歸依し奉るものとはなつた。

或る時、多くの弟子等を率い、鬱闍延の城に赴くと、**パツジヨータ**王は名高い師が來たと大いに喜んで迎え、王たるの道に就てその教を請うた。**サッチヤカ**は徐ろに説くよう。

「大王よ、王たるものの任は民を護るにある。その王と呼ばれる所以は、民の父母であるからである。法に依つて民を護り、安らかにならしめるから、王と呼ばれるのである。大王よ、王の民を養うことは、父母の赤子を養うようでなければならぬ。父母は、赤子の語を待たないで濕つたものを取り變えて新しい布を當てごう。このようにして民に福を與え惱を去り、慈しみ養うのであるが、かくあることは、王は民を以て國の寶となし、民が安らかでなければ王道が立たないからである。

大王よ、それ故に王たるものは、民を憂えてしばらくも心を離さぬ。民の苦樂を察り、民の繁榮を計り、そのためには常に水を知り、旱を知り、風を知り、雨を知り、

熟の善惡を知り、民の憂を知り喜を知り、罪の有無と輕さ重さ、功の有無などを知つて、よく賞罰を明かにする。このように民の情を知つて、王の威と力をもつてこれを護り、與うべきものは時を計つて與え、取るべきものはよく量つて取り、民の利を奪わないよう、苛い歛を去つて民を安らかにする。この民に心を離さず、民を善く護るものが王と呼ばれるのである。

大王よ、王の中の王を轉輪王と云う。轉輪王はその家系正しく、その身尊くして四邊を統御え、又德教を護る法王となるのである。この王の行くところに、刀仗もなく怨もない。法に依つて德を布き、民を安らかならしめて、邪と惡とを降伏える。

大王よ、轉輪王は不殺生、不偷盜、不邪婬、不妄語、不惡口、不兩舌、不綺語、不貪、不瞋、不癡、この十の善を行うて民の十の惡を去らせ、教を以て政を匡すから、天が下に於て思いのままがなされ、行くところ刀仗なく怨なく互に相犯すことなく、民和らぎ國安らいで、各その生を樂しませることが出來るのである。それ故に法王とも呼ばれるのである。

大王よ、轉輪王は王の中の王である。諸王は轉輪王の德を喜び轉輪王に從つて各その國を治め、その教にそむかない。轉輪王は諸王をして各その國に安んぜしめ、正法の下に王たるの勤をなさしめる」。

この時**パツジヨータ**王は問うよう。「教に依つて、法に依る王者が慈悲の心を本として、民を護るべきことは解りましたが、惡事を犯すものをば如何處斷すべきでありましようか」。

「大王よ、それにも又慈しみの心を本とせねばならぬ。明かな智慧にてよく觀察し五法を以てよく處置せねばならぬ。五法と云うは、一には實に依つて不實に依らず、これは事實を究べて、その事實に依つて處斷することである。二には時に依つて非時に依らず、これは、王に力ある時が時であり、力のない時が非時である。力ある時は罰して效果があり、力のない時は罰して亂があるだけであるから、時を俟たねばならぬ。三には義に依つて無義に依らず、これは罪を犯す者の心に立ち入り、それが故意あつてか故意なくてかを見極め、故意あつてのことでなければ、免すべきことを云うのである。四には輭語に依つて麁語に依らず、これは罪が法の何れに當るかを明かにして、罪以外に流れぬよう、又輭かい優しい語で諭し、その罪を覺らせる事である。五には慈しみの心に依つて瞋りの心に依らず、これは罪を惡んでその人を惡まず、慈の心を本として、罪を犯す者の、その罪を悔い改むるよう仕向けることである」。

「師よ、王の臣僚にして國家の大計を思わず、ただ己を利することのみを求め、賄賂を取つて政道を枉げ、民風を頽し廢らせ、これがため、民が互に相欺くようになり、強い者は弱い者をしいたげ、貴い者は賤しい者を輕しめ、富んだ者は貧しい者を欺き、曲を以て直を枉げ、禍亂を增長させる事になる、從つて忠賢の士は隱れ退き、諂佞の者が政權を取り、心ある者も危害を怖れて默つて言わず、公權を濫に用いて私

の腹を肥し、民の貧しさを救わぬようになる、このように政令行われず、政道に弛廢の出來る理由は、國の政を任する臣僚の忠節を缺くためであるが、この類の者をいかように見るべきでありましようか」。

「大王よ、このような惡人こそ、民の幸福を奪う盜賊であつて、國家の最も大きな惡賊であるといわねばならぬ。なぜなれば、上を欺き下を亂して、一國の禍亂の源をなす者であるからである。王はこのような者を、最も嚴しく處罰せねばならない。」

大王よ、又法に依つて政を布く王の國に於て、父母の生育の恩を思わず、妻子にのみ心を傾けて父母を給養わず、或は又父母の所有を奪い、父母の教に從わない者は之も最も大きな惡の中に數えねばならぬ。何故なれば、父母の恩は重く、一生心を盡して孝養しても盡きないものであるからである。君に對して忠ならず、親に對して孝ならぬ者は、最も重い罪人として處罰すべき者である。又大王よ、法に依つて政を布く王の國の中に於て佛法僧の三寶に對して信ずるところがなく、寺を毀ち經を燒き、僧を捕えて驅使し、佛法を破る行をなす者も、最も重い罪の者である。何となれば、これは一切の善行のもとである民の信念を覆すものであるからである。これらの者は、みなすべての善根を燒き盡して自らの穴を掘るものである。大王よ、この三種の罪が最も重く、從つて最も嚴しく罰せらるべきものであつて、他はみな重い罪であつても、これらに比べて猶輕いとせねばならぬものである」。

「師よ、正法を守る王に對うて逆う賊が起り、又外國から攻め侵す者がある時、兵を興して、これに陣を張ります、この時王はいかに考えてよいでありましようか」。

「大王よ、正法の王はこの時三種の思を持たねばならぬ。それは第一には、逆賊又は外冦は、只人民を殺し、人民を虐げることのみを考えている。我は武力を以て民の苦を救おう。第二には、若し方法があれば、双を動かすことなくして、逆賊と外冦を夷げよう。第三には、敵を出來る丈け生擒にして、殺すことなく、その武力を削ごう。大王よ、王はこの三つの心を起し、然る後に部署を定め、訓令けて戰につかしめる。然る時は、兵はおのずから王の稜威に對うて、卑怯の思を去り、王の威德を畏れ敬い、王の恩を知つて戰の性質を悟り、王の心を扶け、王の慈が後顧の憂をなからしめたことを喜び、王の恩に報いるの心を起して戰うであろう。このように戰うて戰は勝ち、戰も却つて功德のあることになるのである」。

第四節　廻向

一。世尊は摩竭陀國の此處彼處を遊行し給うたが、再び王舍城に歸り、靈鷲山に上つて滯り給うた。一夜、世尊を取り圍んで多くの神神や菩薩方が集まつた。世尊は衆星のなかの月のように、巍巍として輝き聳えて見え給うた。

その時金剛幢菩薩は座を立ち、佛の御力を承けて、衆の菩薩に告ぐるよう。「佛子等よ、菩薩は疎い者にも親しい者にも差

別なく、諸の善根を與える。何故かといえば、菩薩は常に何物をも平等に觀て、親疎の別なく、いつも慈の眼で人人を視るからである。たとえ人人が惡い心を懷いて菩薩に怨を起しても、菩薩は一切の人人の善知識となって、廣く諸の奥深い法を說き明す。譬えばどのような毒でも、大海の水を汚し損うことが出來ないように、一切の人人は愚かにして恩に報いることも知らず、瞋り憍ぶって善い教を知らないでいても、菩薩の道の心を亂すことはできない。

菩薩はまた、心に念うよう。「菩提心を起すことは、全く佛の御力である、この心は大きく平かで、怠ることはない、すべての時を續けて修めても得ることはできぬ、是は諸の佛と等しいものである」。

二。菩薩はかように諸の善根をおもいうかべ、清らかな信念をもって慈悲の心をそだて、諸の善根を人人に與える。それは口ばかりでなく、歡喜の心、明かな心、柔かい心、慈の心、愛の心、攝めとる心、饒む心、安樂の心、勝れた心で、それらの善根を與えるのである。そして、心に念うよう。「すべての人人は諸の善からぬ業を作し、その業のために限りない苦を受け佛を見たてまつらず、正法を聞かず、善き人を識らない。この人人は限りのない罪業があり、限りのない苦を受けねばならぬ。それであるから私は、地獄のなかで、彼等に代って悉くその苦を受け、我身をもって一切の惡道の人人を救い、苦から脫れさせるであろう。

この與える善根の力で、かの人人をして佛を見たてまつらしめ、佛に對して壞れない信を起し、正法を聽いて疑を離れ、教の如く道を修めて柔輭な心を得、身と口との業を清らかならしめるであろう。更に彼等のために大きな燈となり、安らかな國を示し、諸の障を離れて、すべての法を解らしめるであろう。又、一切智の船となって生死の海を度らしめ、彼等に覺の岸を示すであろう。

この世の人人や生物のために、それぞれ一つ一つの日の出ることはない。唯一つの日が世に出でて普く照す。又、人人は自身の光明で晝夜のあることを知って、仕事をするのでない。皆日の照によって働くのである。それと同じく人人には自らを照す智慧の光はない。どうして他を照すことができよう。されば私は獨で一切の人人を知り彼等を攝め取って深い法に入らしめ、諸の疑を除いて悅びを得しめるであろう」。

三。佛子等よ、菩薩は一切の人人をして佛を見、法を聞き、敬の心にてよき人に近かしめるようにする。又專ら佛を念い、法を念い、僧伽を念うて尊び敬わしめるようにする。

又、菩薩は家に在って妻子と一所にいても、暫くも道の心を離れない。正しく智慧の境を念い、自らを救い、人を救い、直な心で、妻子眷屬に種種の方便を示す。慈悲の心から家にあって妻子に順うけれども、菩薩の道には少しの障もない。即ち衣裳を着け、飲食をなし、坐臥をするにも、常に身と口と意のはたらきを清くし、五官を調え、威儀を失わない。

佛子等よ、自我を忘れるものは、やがて一切のものを我が物とする。報酬を求めないから一切の善根は我を離れず、身を捨てて供養するから一切の佛の證を攝め取り、障を離れるから一切の法を攝め取り、平等の善根を究めるから一切の菩薩を攝め取り諸の願を滿たすから菩薩の一切の行を攝め取り、諸の煩惱を淸めるから一切の人人を攝め取り、一切の佛法を護り持つから一切の佛の性を攝め取る。

佛子等よ、菩薩はこの善根を廻向けて、一切の佛の國を淸め、一切の人人を淨め、一切の佛を法界に充たさしめる。

四。佛子等よ、此菩薩が若し國王となるならば勝れた國を得て敵を降し、正しい道をもって治め、國豐かに安らけく、德天下を蓋い、萬國從い親しんで背くものはない、兵仗を用いないで自ずと泰平になる。姿美しくして力勝れ、諸の障を離れ、喜んで布施を行い、もし獄に苦しむものを見ては、自ら獄に入ってその苦を救い、死地に送られるものの爲には、己が身を捨てて彼の命に代える。もし又有情を傷うを見れば、大悲をもって之を救い、一切の人人に佛の名を聞かしめる。或は又、佛殿を起し、僧房を作り、常に身をもって佛に仕え、人人の心を淨める。また恰く施して貪り執わるる心なく、果報を求めるような事もない。

五。佛子等よ、菩薩はまた燈明を施す。この時念うよう。「この善根によって、一切の人人を饒み、彼等に愚癡を離れる光を得させて、善く此世の空なる事を了らしめ、量りない佛の國を照さしめるであろう」。

菩薩は又藥を施す時、心に念うよう。「此善根によって、すべての人人をして病の身を捨てて淨らかな佛の法身を得させ、不善の病を除き、煩惱の刺を拔き、聖の人人に近ずき、智慧の光を得、世間の療治の法を知り、人人の種種の病を治さしめるであろう」。

菩薩はまた、菩薩と善知識とに敎を施す時に、かように廻向ける。「この善根によって、一切の人人をして善知識の恩を知り、恩に報いしめ、彼等をして諸の善知識に親しみ近ずき、敬い供養し、正直な心で、善知識のために身命を惜まずその敎に順わせ、佛の正法を聞いて恐く行わしめるであろう」。

菩薩はまた一切の人人をして佛法を聞かしめ、そして聞くとともにその德を空しうせしめず、覺に到らせ、又、聞くところの法を人人のために說かしめ、常に佛の正しい敎を樂い、外道の邪見を除かしめるであろう。

佛子等よ、菩薩はまた、種種の幢幡を施し、心に念うよう。「此善根によって、一切の人人をして善根功德の幢幡、一切の法に自在を得るところの幢幡を建てて正法を護り、智慧の燈を燃して普く人人を照し、壞れない悟の幢幡を作って一切の魔を降さしめるであろう」。

六。佛子等よ、菩薩は法を求める時、人あって若し「汝の身を七尋の火の坑に投げ入れるならば、法を與えるであろう」と云うならば、彼は心に念うであろう。「私は

法の爲ならば、地獄の苦をも受けよう、況して、人界の小さな火の坑に入るだけで法を聞くことができるのは、甚だ容易いことである、どうか法を說いてくれ、私は火の坑へ入るであろう」と。

また、菩薩は佛の出世に逢えば、「佛が世に出でられた、佛が世に出でられた」と人人に告げ知らせる。人人は佛の聲を聞いて自分の憍慢と放逸を捨てて堅い念佛三昧に安らい、佛の境界を修めて廢めることはない。量りない人人は佛の力に因つて淨められ調えられる。

また、菩薩は身を施して給仕するとき、慢る心を捨てて、謙下る心、かしずく心、大地のように凡てを戴く心、一切の苦を忍ぶ心、一切に事えて厭かぬ心、怠のない心、一切の貧しい人人に善根を與える心、尊い人、富める人、その外小供や愚かな者をも敬う心、勝れた敎に安らうて善根を修める心、そうした心を以てするのである。

また、菩薩は、自ら諸の佛に仕え、一切の佛に報恩の心を起し、一切の人人に父母の思を起し、淨らかな深心を起し、明かな心で道を持ち、諸の佛の法を得て世間の法を捨て、佛の家に生れ、諸の佛に順うて正法を護り、一切の魔の境界を遠ざけて佛の境界を修め、その身に諸の佛の法の器を成就げる。

七。菩薩はまた、人人をして法王の位を得しめ、煩惱の怨敵を降し、思のままに此上ない法輪を轉し、巧みな方便を生んで、永く佛法を護つて絕えしめない。

菩薩また思うよう。「私はすべての人人に量りない喜を與え、淨い法の門を開いて迷の世を超えしめ、菩提を與えて總ての願を滿足らしめるであろう、すべての人人の慈父となり、智慧をもつて一切の世を觀め、また、すべての人人の慈母となり、善根を生んで願をみたすであろう」。菩薩はまた人人を一子のように想い、來り求むれば、「此人は私の善知識である」と喜ぶ。かくて、彼は大悲の心、歡喜の心、壞れぬ心、布施の心を養いそだてる。

菩薩は善根を廻向ける時、身にも執われず、物にも執われず、一切の法に縛られることがない。それゆえ一切の法に定つた見方をしない。何故かと云えば、一切の法は生れず滅びぬもので、定つた自性がないからである。

佛子等よ、菩薩はかように一切の善根を一切智に廻向け、普く十方に遊んで人人を敎化するのである。

九。佛子等よ、菩薩はかように廻向ける時に一切の世界を淨めるから、一切の佛の國を等しうし、壞れぬ法を說くから、一切の世間を等しうし、一切の智慧から起る願を生むから、一切の菩薩を等しうする。又ものの自性を壞らないから、あらゆる法を等しく觀め、世間に執われずに世の欲を離れた善業をするから、一切の業報は平等である。世間に隨うて佛事を現わすから、はたらきの自在なることは、諸佛に等しい。

(一) 菩薩は心やすらかに、念い正しく愚を離る。よく忍べば惱なく、量りなき功德を集む。その心恨なく、直くしていと淸し。その行は世を莊り、智慧はすべての業をば照す。思惟の業は量りなく、人人を育つる業もまた、常に修め身に行う。善く世に順い、人人を喜ばせ、人みなの業に隨いて、よくぞ分別え、よくぞ行う。永く恚と癡を離れ、法とその義知り、調伏の地に安らいて、なべての人を饒むなり。

(二) ものの相の如なるごと、生るも滅ぶも亦如なり、如の性の實なるごとくあらゆる業も亦實ぞ。如に量りなければ、一切の業にも量りなし、縛られざれば解くるなし、諸の業は汚るなし。眞の佛の御子達は、かく安らいて動くなし、智慧の力をととのえて、佛の方便の藏に入る。法王の法覺るに、縛られず亦着かず、障なければ心亂れず、亦亂るべき所なし。

(三) かかる不思議は、思い計れど盡くるなし、深く不思議に入りぬれば、思うも思わぬもみな滅ぶ。かかる法を思いつつ、すべての業をわきまえて、なべての煩惱を除くもの、是を功德の王とゆう。心は身の內外に得べからず、されば、心はなきものぞ。妄うて取れば法はあり、取らねばみなつく寂かなり。法は空に自性はなし、法に自性なしと知る。佛の子等は佛と等しく、無我の理り覺るなり。

一〇。菩薩は一切の善根を輕しめず、浮世を捨てることを輕しめず、善根を攝めることを輕しめず、過を悔い善根に憧憬ることを輕しめず、掌を合せて佛を拜み、塔廟を拜むことを輕しめず、常にあらゆる善根を攝め、養い、それに安らい、それを思い、佛の境界の善根に隨うて、その思のままなる力を見る。

菩薩は自ら行を修めないで、他に行を修めさせようとすることはない。自ら行を樂しまず、行に安らわないで、他に行を樂しましめ、行に安らわせようとするようなことはない。何故かと云えば、菩薩は言葉のままを行い、實を語り、實を行うからである。自らの心を正しうして、他の心を正しうせしめ、善く忍んで心を調え、他にもその心を調えさせ善く忍ばせる。自ら疑を離れて歡の心を得、他にも亦疑を離れて、壞れぬ信を得させる。

菩薩はかように廻向ける。願わくば此善根によって、一切の人人をして常に佛を見たてまつり、よく佛のことをなさしめ、そして心淨らかに喜を得させたいことである。又、常に佛を見たてまつり、量りない菩薩の力を生ましめ、その法を忘れさせたくないことである。又、菩薩はその善根を廻向けて、人人をして法界に主なきこと、自性なきこと、如如なること、依なきこと、妄なきこと、相を離れて居ること、寂靜であること、そして法界の去らず集らないことを解らしめたいことである。

また菩薩は其善根をかように廻向ける。人人をして大法師とならしめ、常に諸の

佛の護念の中にあらしめたい。又、正しく佛法をたもつ法師とならしめて、圓かに法を說いて一つの味をも失わせまい。又、一切の人人をして日のように缺目ない光のある法師と作らせ、佛の智慧の光を放つて一切の法を照さしめたい。又、彼等をして魔の事を覺る法師とならしめ、能く諸の魔を壞らしめたいものである。

第五節　世尊の五德

一。世尊は又、靈鷲山を降つて竹林精舍において、第十六年の安居に入り給うた。或る日森に住んで修行をしていたグリサーニとゆう佛弟子が少しの用事があつて僧衆のところに來ていたが、常に欲ふかく威儀調わず、心を制えることが出來ないので、醜い有樣をしていた。舍利弗はこのグリサーニの事について弟子等に敎えた。

「友よ、森に住むものは、僧衆のところに來ても、同學者を尊敬い、師長として仰ぐべき人を持たねばならぬ、そうでなければ、『森に獨り住むことが、この人にとつて何の役に立とうぞ』とゆう人があるであろう。又森に住む者は僧衆のところに來て座を占むるに、上座の弟子の邪魔にならぬよう、新參の弟子の妨げとならぬよう心懸けねばならぬ。時はずれて村に入り、時に遲れて歸るようなことをしてはならぬ。食前食後に在家の人人と遇うてはならぬ。心落つかず、輕躁であつてはならぬ。口騷しくしてはならぬ。善い語を語り、善い友と交わり、慾を抑え、食には量を知らねばならぬ。夜も修行に努め、常に心を靜め、智慧を具え、法と律とに明かであらねばならぬ。苦を脫れる道にいそしみ、人間にこえた法を修めねばならぬ。若しそうでなければ、出家した目的を知らぬ人であると云う人があるであろう」。

その時目連が云うよう。「友よ、この事は森に住む者のみ守らねばならぬ事か、或は又、村の近くに住む者も守らねばならぬことであろうか」。「友よ、森に住む者が守らねばならぬのであるから、況して、村の近くに住む者は猶更である」。

二。その頃、アヌガーラ、ワラチヤラ、サクル・ウダーイなど名高い遊行者達が孔雀苑に滯まつていたが、或る日世尊は、托鉢には時が早いからとて、竹林精舍を出でて孔雀苑に赴かれた。

その時、サクル・ウダーイは多くの遊行者達と高らかに雜談していたが、世尊の近ずきたもうのを見ると、急いで皆に口を閉じさせ、靜かに世尊をお迎えした。世尊は設けの座について宣うよう。「ウダーイよ、何の話でこうして集まつて居られたのか」。「世尊、その事は、何れ後で御耳にも入れましようが、先日いろいろの敎派の出家達が論議堂に集まりました時、斯うゆう話が持ち上りました。

『鴦伽や摩竭陀の民は實に仕合せである、そわ富蘭那迦葉、阿耆多翅舍欽婆羅、尼乾陀若提子、喬答摩とゆうような、多くの弟子を率いる名高い師が、王舍城に安居せられるからである、然しこれらの出家の中、誰が最も人人に敬まわれ、又弟子にも尊ばれて居るであろうか』と。然るに或る人は

富蘭那迦葉は弟子に敬われて居らぬといい或る人は阿耆多翅舍欽婆羅もそうであるといい、尼乾陀若提子も同樣であると云つて一一例が擧げられた。すると一人が、『喬答摩は人人から敬われるとともに、弟子達からも尊ばれて居る、或る時喬答摩が數百の弟子に向うて說法して居られると、靜かなる聽衆の中に、弟子の一人が咳をした、すると傍の弟子が膝をつついて、音をなさるな師が法を說いていらせられるでないかと合圖をした、說法中一人の音を立てるものもなければ、咳をする者もない、丁度辻で見事な蜂蜜を搾つて居るのを息もしないで大勢の人が見ているように、師の說法を一語も聞き洩すまいと待ち設けておる、又、喬答摩の弟子は、中には還俗する者があつても、師と法と僧伽の德を讃えて、自分を責め、自分の至らないために、その敎の淸い行を修めることが出來なかつたと嘆き、或る者は在家の信者となり、或る者は寺男となつて五戒を守つて居る、かように喬答摩は弟子達に敬われて居る』と申しました」。

三。「ウダーイよ、汝は私の弟子が幾何の事で、私を敬うていると思うか」。「世尊五つの事によつて敬うていると思います、一には世尊が小食であつて小食を讃められること、二には世尊はいかような衣でも得るに隨うて喜ばれ、その事を讃えられること、三にはいかような食物でも得るに從うて甘んじ、それを喜ばれること、四にはいかような坐臥でも得るに從うて甘んじ、それを讃えられること、五には浮世を避けて隱遁を讃えられる事であります」。

「ウダーイよ、もし、小食と小食を讃めることが私の德とゆうならば、私の弟子の中には、家毎に托鉢し、田の落穗を拾うて食い、家の中へ招かれては食事をせぬ者もある。然るに私は時として招待を受け、選米の見事な白飯を食べることもある。又、いかような坐臥でも得るに從うて甘んじ、又、その事を讃えることが私の德とゆうならば、私の弟子の內には樹下や露地に臥し、八箇月の間は屋根の下に入らないものもある。然るに私は重閣や、風を善く防ぎ、窓や戶を善く閉めた家に臥せることもある。又、世を避けてその隱遁を讃えることが私の德とゆうならば、私の弟子のなかには森に入り人里離れた場所に住み、二週日毎にただ一度、戒條の誦出の集に來るものもある。然るに私は弟子、信者、王者、王者の臣、異敎者の師弟と交つて住むことが多い。

それゆえ汝の擧げた五つの法で、弟子達が私を尊ぶのではない。他に五つの法があるのである。私は時として美しい見事な在家のものの衣を着ることもある。又、いかような食物でも得るに從うて甘んじ、又、それを讃えることが私の德とゆうならば、私の弟子の中には、家毎に托鉢し、田の落穗を拾うて食い、家の中へ招かれては食事をせぬ者もある。然るに私は時として招待を受け、選米の見事な白飯を食べることもある。又、いかような坐臥でも得るに從うて甘んじ、又、その事を讃えることが私の德とゆうならば、私の弟子の內には樹下や露地に臥し、八箇月の間は屋根の下に入らないものもある。然るに私は重閣や、風を善く防ぎ、窓や戶を善く閉めた家に臥せることもある。又、世を避けてその隱遁を讃えることが私の德とゆうならば、私の弟子のなかには森に入り人里離れた場所に住み、二週日毎にただ一度、戒條の誦出の集に來るものもある。然るに私は弟子、信者、王者、王者の臣、異敎者の師弟と交つて住むことが多い。

それゆえ汝の擧げた五つの法で、弟子達が私を尊ぶのではない。他に五つの法があるのである。私は勝れた戒を具えると

勝れた知見を具えると、此上ない智慧あると、四聖諦について明かに說いて人の心を勵ますと、覺に至るための種種の道を說き弟子等をして如實に修めさせて覺を開かせることである。この五つの法を以て、私の弟子達は私を尊び敬うて居るのである」。

四。これより前、王舍城に毗舍佉とゆう居士があつた。家も富み榮え、おなじ階級の娘の**ダンマジンナー**を迎えて、睦じい家庭を作つていたが、早くから世尊の敎をうけて、在俗の儘に覺を得て居た。**ダンマジンナー**は夫の導によつて佛の敎を受くる身となり、出家の志やみ難く、遂に夫の許を得て、髮を下して尼となり、專ら道に勤しむ身となつた。

今比丘尼の敎團も世尊に從うて、王舍城の竹林に滯まつていたので、久久に毗舍佉は、**ダンマジンナー**を訪うて問答をした。

「尼よ、人人は自我とゆう事をゆうが、世尊はこの自我について何と仰せられるであろうか」。「毗舍佉よ、世尊は身と心の集をかりに自我と仰せられた」。「尼よ、その自我の因となるものは何であるか」。「自我の因は愛の渴であると、世尊は仰せられます」。「尼よ、その自我の滅となるものは何であろうか」。「愛の渴が殘りなく亡びたのが、自我の滅であると仰せられる」。「尼よ、その自我の滅に至る道は何であろうか」。「正見、正思、正語、正業、正命、正精進、正念、正定の八正道が自我の滅に至る道であると仰せられます」。

五。「尼よ、自我とゆう間違つた考はどうして起り、又どうしたらその間違を離れることができるか」。「聖者を見ず、聖者の法を知らず、聖者の法を行わぬものは、身と心を自我と思い、身と心を持つものを自我と思い、自我のなかに身と心があるものと思い、又は身と心のなかに自我があるものと思い、こうして間違つた自我と云う考を起します、聖者を見、聖者の法を知り、聖者の法を行えば、この間違を離れることが出來ます」。

六。毗舍佉は、この問答に心歡んで座を立ち、世尊を御訪ねして、この問答の殘らずを申しあげた。世尊仰せられるよう。

「毗舍佉よ、**ダンマジンナー**は智者である、汝が私にこの義を尋ねても、私は**ダンマジンナー**の語つた外に語ることはできぬ何故ならば、これがその正しい理由であるからである」。

世尊は後に**ダンマジンナー**を比丘尼の中で法話に巧みな者の第一であると賞讃えたもうた。

第四章　覺の段階

第一節　羅睺羅

一。世尊は王舍城の竹林に居らせられ、羅睺羅は程遠からぬ**アンバラツチカ**に滯まつていた。或る日世尊は夕暮れ、禪定を出でて羅睺羅のところへ往かせられた。羅睺羅は座を設け、洗足の水を用意して御迎え申しあげた。

世尊は足を洗い終り、水桶に水を少しく殘して仰せられるよう。「羅睺羅よ、この僅かに殘つた少しの水を見るかどうか」。「世尊、仰せの通りであります」。「羅睺羅よ、水桶を起して仰せられるよう。「羅睺羅よ、汝はこの水桶の水がなくなつているのを見るかどうか」。「世尊、仰せの通りであります」。「羅睺羅よ、知りながら僞を云い、恥ずることを知らぬ者

尊、仰せの通りであります」。「羅睺羅よ、知りながら僞を云い、恥ずることを知らぬものの出家たる資格は、これと同じく少いものである」。更に世尊は、その僅かな水を捨てて仰せられるよう。「羅睺羅よ、この殘つた水が捨てられたのを見たかどうか」。「世尊、仰せのとうりであります」。「羅睺羅よ、知りながら僞を云い、恥ずることを知らぬものの出家たる資格は、これと同じく捨てられたものである」。

世尊は次に、その水桶を覆して仰せられるよう。「羅睺羅よ、この水桶の覆されたのを見るかどうか」。「世尊、仰せの通りであります」。「羅睺羅よ、知りながら僞を云い、恥ずることを知らぬものの出家たる資格は、これと同じく覆されたものである」。

次に又世尊は、水桶を起して仰せられるよう。「羅睺羅よ、汝はこの水桶の水がなくなつているのを見るかどうか」。「世尊、仰せの通りであります」。「羅睺羅よ、知りながら僞を云い、恥ずることを知らぬ者の出家たる資格は、空しくして何もないのである。羅睺羅よ、丁度彼の棒のような長い牙を持ち、氣の猛しい勝れた王の象が、戰場に出て前足を使い、後足を使い、耳を使い、牙を使い、尾を使い、總ての部分を用いても、鼻を守つて居る內は、象使は象の疑なく助かることを信じて居るが、鼻をも用いるようになると、象も愈討死するであろうと思うように。羅睺羅よ、知りながら僞を云い、恥ずることを知らぬものは、惡としてなさないものはないと、私は言い切る。羅睺羅よ、それ故、たとえ戲むれにても僞を云つてはならぬ」。

二。「羅睺羅よ、鏡は何にするものであるか」。「姿をうつし見るものであります」。「羅睺羅よ、鏡に姿をうつし見るように、考えに考えて行わねばならぬ。心に思うことも、身に行うことも、口に云うことも、考えに考えを重ねてしなければならぬ。羅睺羅よ、身と口と意の三つの行の孰れをなそうとするときも、その行が、自らを害い、他を害い、自他の害いになりはせぬか、善からぬ行ではないか、苦を生み出すものとではないかと考え、若しそうであるならば、そのような行は決してなしてはならぬ。考えて見ても、そのような行でないならばその行をなすが善い。又、行をなして居る最中も上の如く考え、なし終つても上の如く考えて、若しそれが自他の害になるものであつたらば、その行より身を退き、師や同學の人の前に悔改めねばならぬ。若し上の如く考えて見ても、自他の害にならず、善い行で樂を生み出すものであるならば、その行はなさねばならぬ。又續いて行い、このような善い行をなし得るようになつたことを喜ばねばならぬ。

羅睺羅よ、古の出家達もこのようにして、その行を淸めた。未來の出家達も、このようにしてその行を淸めるであろう。又、今の出家達も、このようにして、その行を淸めて居る。それゆえ羅睺羅よ、汝も亦、このように深く考えて、身と口と意の三の業を淨めようと學ばねばならぬ」。

第二節　十地

一。或る日世尊は多くの大菩薩と共にあらせられた。この時、金剛藏菩薩は佛の御力を承けて大智慧光明の禪定に入り、礙ない辯才と、淨らかな智慧とを得て大衆に告げて云うよう。「佛子等よ、道を求むる人の願は動くことなく破られることなく、大いなること法界に等しく、すべての御佛の護る所となる。そは彼等が佛の智慧の地に入るからである。この智慧の地に十階あり、歡喜地、離垢地、明地、焰地、難勝地、現前地、遠行地、不動地、善慧地、法雲地といわれる。

佛子等よ、第一の歡喜地にあれば喜と信心とを得て、清く柔かに堪え忍び、諍を好まず、人人を惱ますことはない。又、佛を念い、法を念い、僧伽を念うから、歡の心を生む。即ち生活の畏、惡名の畏、死の畏、地獄に墮つる畏、群集に向うた時の畏、これらあらゆる畏は皆除かれる。何故かと云えば、此地にあるものは「我」を離れているから、我が物を貪らず、我が物を貪らないから生活の畏はない。人に敬われないとゆう望がないから惡名を畏れることはなく、「我」の見を離れているから死の畏がなく、命終つて再び生れる所に佛を見奉ろうと念うから地獄に墮つることをも畏れない。そして我樂う所に等しいものはないまして勝れたものがあるであろうかと念うから、群集の前に出でても畏れはばかるところがないのである。

又、この菩薩は大悲を首とし、すべての人人を嫌う念なく、心直くして自ら淨らかに、進んであらゆる善を修める。即ち信を增し、身と心に慚愧をいだき、和かにして能く忍び、敎を敬い、善き友を重んじ、法を聞いて飽かず、聞いた法を正しく心に止め、譽を求めず、利養を貪らず、諸の諂を離れ、云うが如く行い、一切に智を生むからして、心は山のように動かず、道を助くる法を集めてあかず、常に勝れたものの中の勝れたる道を求める。又あらゆる佛をまつり、盡くその法を持とうと願うが、その願の大きなことは法界のよう、至らぬ所のないことは虛空のよう、かくて未來の際を盡して、法を護つて倦むことがない。

又、次のような願を起す。『すべて道に進む人人は、心を同じうし、學を同じうして、共共に善を集めて怨み嫉む思を離れ、平等の心を以て同じ境界に睦み合い、各の緣に觸れて佛の身を現わし、心に佛の境界と神通とを解つて、あらゆる國國に遊び、あらゆる集會に身を現わして菩薩の行を具えるであろう』。又、このように念う。『佛の御敎はかように奧深く、廣く大いなるものであるが、凡夫は邪見に墮込んで、愚擬のために智慧の眼を蔽われ、憍り慢り愛の渴にひたり、諂、慳、嫉、貪、瞋、の念をいだき、恨の焰を吹き煽り、たまたま施す所があれば却つて倒の思をなし、かようにして迷に迷を重ねている、私はいまこれらの苦にある人人を救うて、佛の道の樂にいたらしめるであろう』。

（一）人もし法の實を聞かば、御佛の護を受け、おいつぎて覺を重ね、遂に佛の道を得ん。

人もし聞くに堪えせなば、海底または火の中にても、此御敎を聞くを得ん、されど擬かに疑う人は、終に聞くこと得ざらまじ。

もし人善根を修めつつ、御佛に親み、淸き信もて、慈悲の心に從わば、量りなき佛の智慧を得ん。

慈悲の心は智慧を主とし、方便ともない、直き心の淳くして、その力ぞ量りなき。

（二）佛子もし、此尊き心を起さば、凡夫の地位離れて、御佛の生活に入り、御佛の家に生れん。

その心歡喜地に入り、動かざること山のごと、大いなる喜生れ、心淸くて大事を受くるに堪ゆるらん。

諍樂わず、瞋の心なく、慚じ入りて恭敬を知り、直き心を習わめや。

あらゆる御佛の國に、佛の御子等充ちて、心は一つに、その作すところ空しくあらず。

二。第二に離垢地に住まえば、自ら殺生を離れて劍や笞を棄て、邪の婬を離れて自己の妻に足ることを知り、一念ずら他の婦人を求めることがない。思うよう。「人人は邪見に墮ち、他と我とを分ちて爭い、財物を貪つて厭くことがなく、常に無明に覆われて量りない苦を受けている、まことに惑むべきことである、私は先ず彼等を正しい道に導き、正しい生活をさせ、煩惱の火を滅して智慧の眼を得させよう」と。

なべての劇しき苦、地獄に入りて燃ゆる身體は、惡しき心の生むところ。

我已にこの惡離れ、まことの道を行くこの世、後の世、樂とゆう樂は、十の善より生るなり。

離垢地に住める佛子達は、多く轉輪王となり、すべての人を導きて、この十善に入らしむる。

三。第三に明地に住まえば、法の相をありのままに觀る。即ち法みなは常なく、苦にみち、無我にして不淨であることを見、法の眞實の相は、自ら因緣を作つて起るものでないと知る。

この世のものはみな、病の如く癰瘡の如し。貪愛の心に纏われ、さまざまに憂え苦しむ。

三毒の炎猛りて、始なき昔より、常に息むなし。御佛の智慧のみぞ、淸かにして苦はなく、深くして邊なし。

「人人は貧しくて、福はなく、煩惱の海に沈みつ、盲いて法の寶を失い、怖のなきに畏を抱けり、勤めて彼等を救わん」と、菩薩は思う。

苦を救うは智慧ぞ、聞いて學ぶに若かじ、法を聞くは佛法の本ぞ。

四。第四に焰地に住まえば、あらゆる御佛に親しんで恭い供養し、心淸けく、そして三寶に對する信は愈明かに、善の根は益培われる。

五。第五に難勝地に住まえば、大きな願の力を得、大きな慈悲をもつて誓うよう。「私のなす所の善は、ただ人人の苦を拔いて證りに到らしめ、その願を滿さしむる

であろう」。

六。第六に現前地に住まえば、審かに十二因縁の理を觀る。

(一)もし人、法の性を知らば、「有」「無」の二つに心搖がず、大悲の心もて人人を度う、これを佛の子と名く。心すでに清けれど戒を持ち、傷う思なけれど忍辱を行い、法性の理を證れどはげみ、先に煩惱を滅せど禪定を修め、法空を解れど諸法を分別え、寂滅の智慧あれど世間をめぐみ、惡を滅す。この人を大士と名く。

(二)貪の心より、三界うまれ、十二の因緣も、一心の中にあり、されば生も死も、ただ心より起るなり、心滅べば、生死は盡きん。

『無明』によりて「業」をなし、業もて「苦」をば作るなり、されば無明に隨えば世間あり、隨わざれば世間消ゆ。この因緣を見て智者は「空」をさとり、勤滅びて續くなければ、「無相」の行に入り、二つの虛假を知りて、心「願うなき」に至るなり。かくて、大悲の心もて、人人を救うのみ。

(三)量なき御佛を供養して、御佛に稱えられ、佛の法藏に入り、善根うたた增し行きぬ。

譬えば瑠璃の寶もて、眞金磨けば、光いよいよいや增して、いみじく清くなる如し。

或は月の虛空を行くに、清涼すべてに被らせつ、四方の嵐に吹かるとも、とどまることの無きに似て、菩薩の智慧の光は、よく煩惱の火をよく消して、四の魔も壞るなし。

七。第七に遠行地に住まえば、限りない方便をもつて人人を導き、よく六度の行を修めさせる。又この菩薩は深く涅槃を愛するけれどもこの世を捨てず、迷の巷に生れるけれども、世のために汚されることがない。又、心はいつも寂かであるが、方便の力によつて猛く燃えている。佛の智慧にありながら魔の業を現わし、外道の行を示して、然も佛法を離れることはない。

智慧をもて空を觀れども、福を修めて厭かず、能く三界を飾れども、心は之と離るを樂う。

心寂かなれど、惡を滅す行をば起し、「空」を修むれど、慈悲の心を捨てず。

佛の身に、相好はなしと知れども、三十二種の相をば植え、聲は說き得ぬものと知れども、佛の聲を敷えて、一切を歡ばす。佛は一念に證ると知れど、時と處を示して、人人を敎え導く。

八。第八の不動地に入る時、「深く行ずる菩薩」と名けられる。その時、一切の想、一切の貪を離れ、更にすべての勤め勵む方便と身、口、意の行を滅ぼす。譬えば夢の中に、深い河を渡ろうとして、種種の方便をめぐらし、未だ渡らぬうちに忽ち夢が覺めれば、それらの方便は自ら捨てられるようなものである。此時、佛はこの人に宣う。「善男子よ、汝は今深い寂けさを得て、佛法に順うているが、まだ佛のあらゆる德を得ておらぬ、それに、世間の凡夫は汝の得ている寂けさの法から離れて、煩惱のために害われている、汝はこの一切の人人を愍まねばならぬ。されば、善男子よ、汝は本の願を念い、人人を惠み、不思議の智慧を得ようと欲い立つがよい、一切の法の性と相は、佛が在しても在さずとも常に異ることはない、一切の佛はこれを覺られたから、佛と名けられるのである。善男子よ、汝は佛のもつている量りない淸い身、量りない智慧、量りない國、量りない方便と光と聲とを考えるがよい、汝はいま一法の寂けさ』とゆう一つの智慧を得たのであるが、佛は量りない智慧を得ている、汝は勤めてこれらの法を得ねばならない」。

佛子等よ、若し佛が、この勸告を與えぬならば、この人は涅槃に入つて人人を惠むことを棄てるであろう。然るにこの勸告を與えられることによつて、是までの智慧と比べては、譬えも及ばぬほどの智慧を生むようになる。譬えば海を渡ろうとする者が海邊に至るまでは、多くの努力を用いねばならぬが、もう船に乘つて海を行けば、一日の行路は、先に陸にあつた時と比べて幾倍するようなものである。

佛子等よ、かように、第八地に到ると、大きな方便の智慧から、おのずからに用く心を生み、菩薩の道にありながら、佛の智慧の力を思い、世界の生滅の因緣を審かに知るようになる。また日や月があらゆる水にその像を現わすように、人人の身に隨うて限りない身を示すようになる。そしてあらゆることに自在の力が得られる。

九。第九に善慧地に住むと、佛の秘密の法の藏に入り、あらゆる法の差別、心の差別を知り、また諸の命ある者の相を知る。業は田地、愛は水、無明は覆、識は種子、身は芽の如くで、ここに身と心が共にでき、て離れず、癡と愛とが相續いて起り、生るを欲い作くを欲い、愛を欲うて涅槃を樂うことはない。かようにして三界が差別し相續いて起る相を實の如くに知るのである。

一〇。最後に第十に法雲地に入つて量りない智慧をもつて佛の位に近ずくと、諸の勝れた三昧を得る。そして是等の三昧がともに、大きな寶の蓮華が現われる。周はこの世の百千倍、あらゆる寶をもつて莊嚴られてある。そして菩薩が勝れた身をもつて、この寶の蓮華の上に昇ると、すべての世界は震い動き、光は遍く照し、すべての惡道は一時に悉く休むのである。又、この菩薩は證に順い、一念の間にあらゆる御佛の許に到り、限りない法を盡く受け持つ。譬えば大海がいかなる大雨でも盡く受け入れるようなものである。

佛子等よ、海には、一には漸漸に深くなり、二には屍を汀に打ちあげて受けず、三に他の水は本の名を失い、四に一味、五に寶が多い、六に深くて入り難く、七に涯がなく、八に大きな生物を住まし、九に潮の時を違えず、十にいかなる大雨を受けても溢れぬと云う十種の相があつて、何物もこれを壞すことができぬように、道を求むる人にも十地の因緣があつて、何物も壞ることは出來ぬ。歡喜地には堅い願を起し離垢地には破戒の者と共に宿らず、明地には諸の假の名を捨て、焰地には佛に向うて壞ることの出來ない淨らかな一心を得、

難勝地には種種の方便や神通を生んで世間のことをなし、現前地には深い因縁の法を觀きわめ、遠行地には大きな心で諸法を觀、不動地には大莊嚴を現わし、善慧地には深い解脫を得、而も世間のことをよく知つて謬ることがなく、法雲地には一切諸佛の大きな教法の雨を受け入れるのである。

第三節　維摩居士

一、世尊は、王舍城を出でてまたも恒河を渡り、毗舍離城に入り給い、城外の菴羅樹園に多くの弟子達や菩薩達と共に滯り給うた。

時にこの都に住んでいた寶積長者は、五百人ばかりの富豪の子弟を伴うて、この園に詣で、各珠でかざつた天蓋を世尊に捧げ、更に寶積長者は世尊の御前に進んで、御德をたたえまつつた。

(一) 清きおん眼は蓮の如く、御心寂けく禪定に入り、久しく淨き業をつみて、人人を寂けさに導き給う。

法の財を施し、法の相をあかし、「法みな因縁より生れ、「我」なく、「神」なく、「神に作らるる者」もなし、さわれ善と惡との業は亡びず」と教え給う。

(二) おお、世の老と病と死を度う醫王よ、御德は廣く海のごと、毀譽に、動かざること山のごと、善きにも惡しきにも、御心はげに虛空の如くで、等しなみに働き給う。

吾等いま、世尊の御力により、あらゆる世界の相を見、法王の大自在なる力を知りて、淸き信を起しぬ。

(三) 佛、一つの御聲もて、法說きたまえば、人人は器に應いて解り、各その語を、一つと思いぬ。

または一つの御聲にて、或るは歡び、或るは畏れ、或るは浮世を厭い、或るは疑斷ちぬ。

おお、ならびなき力の主よ、世の大いなる導師よ、なやみを斷ちて覺にいたり、遍く世をば救い給う、われら、御佛にぬかずき奉る。

二。寶積長者は更に世尊に申すよう。

「世尊、是等の若人達は、みな佛になりたいとゆう願を起しております、どうぞ、淸らかな佛の御國と、その國を建てる行とを御說き下さい」。

世尊、告げ給うよう。「善い哉、寶積よ、今より汝の問について說くであろう。諦かに聞き、善く考えるがよい。寶積よ、道を求むる人にとつては、いずこにても、人人の居る處そのままが佛の國である。何故かといえば、もと佛の國は人人を惠もう爲に建てるのであるが、それには、譬えば家の大地に於て建てられるように、佛の國は人人の心を大地として建てられるからである。

寶積よ、その佛の國を建てるものは「直き心」である。その心は、「深い心」、「道を求むる心」、「施の心」、「戒を守る心」、「忍ぶ心」、「つとめ勵む心」、「心を攝めて亂れしめない心」、「智慧と慈悲とを生む心」であつて、これ皆方便をめぐらして人人に道を得しめる心である。されば寶積よ、淨い佛の國が得たいと思うならば、その心を淨うするがよい。心が淨いならば、その居る國

も淨い」。

この時舍利弗は心に思う。「もし心が淨ければ、その國も淨いとゆうのならば、世尊が嘗て道を求められた時に、よもや汚れた心を起されたのではあるまいに、この世はどうしてこのように汚れているのであろう」。世尊はこの思を知りたまい、「舍利弗よ、盲人は日や月を見ることができぬ、併し彼は、日や月に光がないとは云えまい、それは見えない盲人の咎で、日や月の咎ではない、それと同じく、人人はその罪によつて佛の國の淨さを見ることができぬのである、この世は淨い、しかし汝にはそれが見えないまでである」と宣うた。

この時、座にあつた一人の婆羅門が云う。「尊者舍利弗よ、この世界は決して汚れてはいない、神神の宮殿のように澄み渡つている」。舍利弗。「私はそうは見ぬ、この世界は丘や山や、砂礫や、坑や、荊棘等の醜い穢れたものに滿ちている」。婆羅門。「それは汝が佛の智慧によらず、心に高低の見をもつているからである、菩薩はすべての人人に對うて、平等の淨い心を抱いておるから、この國も亦淨らかに映るのである」。

この時、世尊、御足をあげて大地を指し給うと、忽ち世界は一變して廣廣と光り輝き、人人はいつの間にか、皆寶で鏤めた蓮華の座にその身を見出して、驚きの眼をみはつた。

世尊。「舍利弗よ、汝はこの世界をいかに見る」。舍利弗。「世尊、私はこのような淨く美わしい世界をこれまで見たことはありません」。世尊。「私の國はいつもこのように淨い、しかし心の劣つている人人には、惡と汚とに滿ちた世界としか見えない、故に舍利弗よ、人人が皆、今私の說法によつて心を淨めて見直したように、もし心を淨めて見直したならば、いつもこのように光り輝く世界を見ることが出來るのである」。

世尊やがて神通を攝め給うと、世界は元の相にかえり、寶積長者をはじめ多くの青年達は、みな法の眞の相を見る眼を得て限りない歡喜に浸つた。

三。その頃、この毗舍離の城に、維摩と

ゆう長者が住んでいた。宿世に深く善根を培い、ものに生滅のないことを了り、あらゆる敎を總べ持つて邪の見解を破つていた。又、人人を救う願をたたえ、明かに人人の心を知つて、眞の大きな敎に導いた。まことに佛の御旨に叶い、すべての人の等しく敬う所であつた。

彼は又、多くの財物を施して貧しい人人を救い、よく戒を守り、ものごとに堪え忍んで瞋をおさえ、いつもつとめ勵んで亂る心を攝め、そしてあざやかな智慧の光は、愚かの人人の暗い心を輝かした。即ち家に居ても世間の事に執われず、妻子をもちながらその愛に溺れず、大勢の人人に侍かれながら獨居の心持を失わず、身分に應じた好い衣をつけても、自然の人柄を失わず、いかなる食物をとつても、心は深く法の味を味おうていた。

彼は又世間の交りに於ても戲の場に出入はするが、却つて人を導き、樣樣の異敎の敎は聞くが、ために正しい信をやぶることなく、世の典籍を學びながら佛法を樂し

み、或る時は政治に關係つて人人を安んぜしめ、學舍に入つては、若い人達に正しい法を敎え、媚賣る女の舍や、酒肆に入る時も、欲の過や、志を立てることを、事にかこつけて誨した。又、長者達や商に關わる人人に交つては、財産よりも法と善い行の尊いことを敎え、權を憑む王者には忍ぶ心を、心憍り易い僧侶や修道者には我慢を除ることを、一般の人達には眼の前の金錢よりも、眞の福德を生むことの大切なことを敎えた。

かように一世の師とも仰がれる維摩は、今や病の床にあつた。國の中のあらゆる階級の人人は日日その病の床を訪れたが、彼は之をよき機會として、人人に法を說いた。

「卿等よ、この身は無常である。いかほど健かな身でも遂には衰える。まことに身はさまざまの病の集るところで、賢い人は之を恃みとしない。それは聚沫のように撮ることも出來ず、水泡のようにすぐ消え、水焰のように愛欲の渴から生れ、芭蕉のようにもろく、夢幻のように、影のように、また響のように、さまざまの因緣から生れたものである。浮雲のように變り易く、電のように刻刻に消え失せるものである。又この身は無我である。大地に持主のない如く、火に主體のない如く、風の忽ちに行去る如く、確固した壽とゆうものがなく、水の器に從うて形をかえる如く定つた人格とゆうものがない。假に種種のものが集つて身を作るけれども、そこに中心となるものがあるのではない。またこの身は不淨である。浴みをすれど、食をとれど、遂には老に逼られて死に導かれるものである。

されば、是等のことを知るものは、この肉身に執われてはならぬ。まさに佛の身を得ようと願わねばならぬ。佛の身とは、法の身である。それはあらゆる善と智慧と眞實から生れるものである。されば卿等よ、佛の身を得たいと思うならば、眞の覺に至る道を得ようと願うがよい」。

維摩はかようにしてその病の床において多くの人人を道に引き入れた。

四。時に維摩は心に思うよう。「私はいま病に臥している、世尊がもし憐を垂れ給うならば、人を遣わして慰めて下さるであろう」。

世尊は居士の思を知りたまい、舍利弗に宣うよう。「汝、いまより行つて維摩の病を訪ねよ」。舍利弗申すよう。「世尊、私は居士の病を訪ねる資格はありません。いつぞや私が林の中で坐禪をしていると、居士がそこへ來て、『舍利弗よ、坐るとゆう事が必ずしも坐禪ではない、身とか意とかゆう形の約束に縛られぬのが眞の坐禪である、寂然不動の境に心を止めながら而も樣樣の活動をなし、聖の道をたもちながら凡夫の事を行う、これが眞の坐禪である、樣樣な異敎の敎を聞きながら、それに心を動かされないで、證に至る道を修めるのが眞の坐禪である、煩惱を斷たずに涅槃に入るのが眞の坐禪である、かような坐禪こそ世尊の認め給う所である』と申しました。世尊、私は之に對うて答えることが出來ず、默つて仕舞いました。かような理由により、私は居士の疾を見舞う事は出來ません」。

世尊は次に目連に仰せ給うと、彼の申すよう。「世尊、私も居士の疾を訪ねる資格がありません。いつぞや私が毗舍離の巷で多くの信者達に法を說いて居りますと、維摩居士が來てゆうよう。『目連よ、法を說くならば法のままに說かねばならぬ、眞如の法は平等である、されば說者に於て說いたとゆう分別がなく、聞者に於て聞いたとゆう分別もない、譬えば手品師がその人形に語るようなものである、この意を得て法を說くが善い、人人の機根に利いものあり鈍いものあり、よくそれを知つて礙えられる所なく大悲の心をもつて法をとき、佛の恩に報い、三寶を斷えしめぬようと念うて、然る後に法を說くがよい』。世尊、居士がかように說いた時、そこに集つていた八百人の信者達は、道を求むる心を起しました。

私にはこのような才がありませんから、その病を訪ねることは出來ません」。

五。世尊は次に大迦葉に仰せられると彼も申すよう。「世尊、私も彼居士を見舞う資格はありません。いつぞや私が貧しい里に食を乞うていると維摩居士が來てゆうよう。『大迦葉よ、卿は慈悲の心をもちながら一切に行き亙ることが出來ず、富める人人を捨てて貧しい里に食を乞うている。迦葉よ、家並に從うて平等に食を乞うがよい、そして、村に入らば村を空と見、物を見ても心捉れず、聞く聲は響、嗅ぐ香は風と思い、食えども味を思わず、觸れるものは皆證の智慧を得るようにと念ずるがよい。かようにして、一つの食を得ることによつてすべての人に道の心を施し、またその食をあらゆる御佛や聖に捧げて、それから後に食うがよい、そこには世に住む執着もなく、さりとて涅槃に住んで迷の世を避けるとゆうこともあつてはならない。迦葉よ、凡そ施す人があつても福に大小の差別を見ず、又、損益を見ることはない、これぞ眞に佛の道に入つたものである、もし、かように食を乞うならば、人の施を空しくせないものである』。世尊、私はこの語を聞いて驚き喜び、そして凡ての正しい修道者に向うて深い敬いを起すようになりました。このような偉い居士を、どうして私が見舞うことが出來ましょう」。

世尊は須菩提に仰せられると、彼も辭退して申すよう。「世尊、いつぞや私が維摩の舍にいつて食を乞いますと、居士が私の鉢を取つて飯を盛りながらゆうよう。『須菩提よ、もし、もの皆が平等であることを知るならばこの食を取つてよい、又煩惱を斷たず、而もその煩惱を伴わず、愛着にまつわられながらそこを脫れる智慧を得、すべての差別ある法を身に具えながら而も差別ある法の相に捉われないならば、この食を取るがよい。須菩提よ、今の差別のある見を持つ卿に施せば、福を得ることなく却つて三惡道に墮ちるであろう』。世尊、私はこの言葉を聞いて茫然として答える術も知らず、そのままその舍を出ようとすると、居士の云うよう。『須菩提よ、この鉢を取るがよい、そのように懼れることはいらぬ、もし佛が假にあらわしたもうた化生の人が、この樣に卿を詰るならば、卿は懼れるであろうか』。私が『否』と答えると、

居士のゆうよう。『もの皆は幻である、何も懼れることはない、智慧ある人は言葉に泥まぬ故に少しも懼れる事はない。何故かと云えば、言葉はものの性とは別であり、言葉のない所が解脱であるからである』。世尊、私は、とうてい彼の病を見舞うことは出來ません」。

六。世尊は更に富樓那に仰せられると、彼の申上ぐるよう。「世尊、私も亦居士の疾を訪うことは出來ません。いつぞや私が林の中で、新たに出家した弟子達に法を說いていますと、維摩居士が來て、『富樓那よ、まず、禪定に入つて人の心を觀、その後に法を說くがよい、穢れた食物を寶の器に盛つてはならぬ、卿は人間の心機を見ないで淺い敎を說くのは、瘡のない者を傷つけ、大海を牛の足跡にいれようとし、螢を日光と等しく見ようとするものである、富樓那よ、この弟子達は嘗て大乘の心を起したが、中頃その意を忘れたものである、かかる人達をどうして盲にも等しい小さな淺い智慧で導くことが出來ようぞ』と申します。そして彼は自ら禪定に入つて、この弟子達をして大乘を求めた本の心に立ち返らしめると、彼等は居士の足を禮し、その敎を聞き、大いなる眞の證から退かぬ位に入りました。この時私は人の根機を見ないでは法を說くことは出來ぬと深く念いました。私が居士を見舞うことの出來ぬのは、かような理由であります」。

世尊は、次に摩訶迦旃延に仰せられると彼の申上ぐるよう。「世尊、私も亦居士を見舞うことは出來ません。いつぞや世尊が法の要を御說きになりました後で、私がその義を演べた事がありました。それはあの無常、苦、空、無我、寂滅の義でありました。その時、維摩居士が來て申すには、『迦旃延よ、移りゆく心で、實相の法を說いてはならぬ、つずまる所、諸法は皆生れず滅びぬものである、是が無常の意である、いろいろの感覺が起るけれども、畢竟は實のないもので苦樂の起ることがない、かように知るこそ、苦の意を得たもの、諸法は遂に我がものとすることが出來ぬとゆうのが空の意、我と無我とは二つでないとゆうのが無我の意、法は本から生れず滅びぬものであるから、從つて滅びることはないとゆうのが寂滅の意である』。かように說かれた時、弟子達は心の囚から脫れました。このような理由で、私は彼處を訪れることは出來ません」。

世尊は更に阿那律に仰せられると、彼は申上ぐるよう。「世尊、私もその責に堪えません。いつぞや私が或る處にそぞろ歩きをしていると、一人の神が來て、私を禮して天眼のことを尋ねましたから、私は掌の中にある菴摩羅の果を指しながら、『三千大千世界をこの實のように見ることが出來る』と申しました。そこへ維摩居士が來て、『阿那律よ、天眼とゆうものは、はたらく相があるのか、はたらく相がないのか、もしあるとすれば外道の神通と等しく、ないとすれば見るとゆうことはあり得ない』と申しました。世尊、この時私は答える術なく默つておりました。神は驚いて居士を禮し、『世に眞の天眼をもつている者は

誰でありましよう。居士答えて、『それは世尊御二人である、いつも禪定にあつてあらゆる佛の國國を觀わし給うに、我他、有無等の差別ある考を持ち給うことはない』。之を聞いて彼等は佛の道を求むる心を起し居士の足を禮して去りました。かような理由で私は居士の疾を見舞うことは出來ません」。

七。世尊は次に優波離に命じ給うと、申上ぐるよう。「世尊、私もその責に堪えません。いつぞや二人の弟子が律にそむいて恥かしく思い、世尊の御許へまいることができぬので、私の所へ來てどうすればこの疑と悔の心を解いて、咎を免れることが出來るであろうかとゆうので、私は『定の通り二十人の弟子達の中で懺悔するように』と說きますと、維摩居士が來て、『優波離よ、そのようなことを敎えてこの弟子達の罪を增し重ねてはならぬ、直ちにその罪を除いて彼等の心を擾さぬようにするがよい、優波離よ、もし心が解脫れる時に垢があると思うか』。私が『ない』と答えると居士のゆうよう。『すべての人の心に垢のないのも亦そのようである、優波離よ、妄想、倒まの見、「我」の執着、これみな垢である、これを離れれば淨かである。優波離よ、諸法はみな生れ滅びて住まらず、互に相待たぬこと、幻の如く電の如くで、一念も住まる事はない、これを實に在ると思うは妄見で、夢の如く炎の如く水の中の月や鏡の中の影の如くに、もの皆は妄想に映る影である、かように知つてこそ、眞に律を守るものである』。二人の弟子は疑と悔ゆる心が除こり、すべての人人をして、この居士のような辯才を得させたいとゆう願すら起しました。かような理由で私は彼の居士を見舞うことは出來ません」。

世尊は更に羅睺羅に命じ給うと、申しあぐるよう。「私も居士を訪れることは出來ません。いつぞや毗舍離の長者の子等が、私の許へ來て、『何故に王となるべき位を捨てて道のために出家したのであるか、出家にはどのような利益があるか』とたずねるから、私が御敎のとうりに出家の功德と利益とを說くと、維摩居士が來て、『羅睺羅よ、出家の功德や利益は說くべきものではない、何故かと云えば、功德や利益は相對の事について云うことで、比べもののない事に就てゆうことは出來ぬ、出家なるものは比べもののない價値をもつているから、利益や功德のある筈はないからである』。

かくて、長者の子達に語るよう。『汝等も正しい法の中に出家するが善い、佛の世に値い奉ることは容易いことではない』。彼等ゆうよう。『私達は兩親の許しを得なければ、世尊は出家を許したまわぬと聞いております』。居士答えて、『汝等は只眞の道を求むる心を起せば、それで足りるのである、それが卽ち出家である』。

その時、彼等はみな眞の道を求める心を起しました。かような理由で私は居士を訪れることは出來ぬとゆうのであるから、私が御敎のとうりに出家の功德と利益とを說くと、維摩居士が來て、『羅睺羅よ、出家の功德や利益は說くべきものではない、何故かと云えば、功德や利益は相對の事について云うことで、比べもののない事に就てゆうことは出來ぬ、出家なるものは比べもののない價値をもつているから、利益や功德のある筈はないからである』。

かくて、長者の子達に語るよう。『汝等も正しい法の中に出家するが善い、佛の世に値い奉ることは容易いことではない』。彼等ゆうよう。『私達は兩親の許しを得なければ、世尊は出家を許したまわぬと聞いております』。居士答えて、『汝等は只眞の道を求むる心を起せば、それで足りるのである、それが卽ち出家である』。

その時、彼等はみな眞の道を求める心を起しました。かような理由で私は居士を訪れることは出來ません」。

世尊は最後に阿難に命じ給うと、申上ぐるよう。「世尊、私も亦その責に堪えません。いつぞや私が、世尊の御身に少しばかりの疾があらせられたとき、牛の乳を差

上げたいと思つて、鉢を持つて大きな婆羅門の門に佇んでいると、維摩居士が來て、事の本末を聞いて申すよう。

『止めよ阿難、世尊の御身は金剛である。あらゆる惡を斷ち、あらゆる善をあつめ給うた御身に、何の疾い、何の惱があろうぞ。もし外道の人達が之を聞くならば、自分の疾さえも救い得ぬものが、どうして人人のあらゆる疾を救うことが出來よう、それは師とするに足らないとゆうであろう。汝は速かにここを去つて、人人に聞かせぬようにするがよい』。

世尊、私は之を聞いて慚愧の念をいだき、『私はいつも世尊にお近ずき申していながら、その御教を謬つて聽いているのであるまいか』と思いました。その時空の中に聲あつて、『阿難よ、居士のゆう通りである、但し世尊はこのような五濁の世に出て給い、その疾を現わして人人を救い給うのである、乳を得ることを恥とするにはあたらぬ』と告げました。

世尊、居士の智慧と辯才はこのようであります。私に彼の疾を訪う資格はありません」。

その他五百の大弟子達も各その理由を述べて、居士の疾を訪れることを辭した。

八。よつて世尊は、彌勒菩薩に居士の疾を問うようにと仰せ給うと、辭して申すよう。「世尊、私も亦彼處にゆくことは出來ません。なぜかと申せば、いつぞや私が兜率天の神神に惡道に退かぬ位に到る行を說いておりますと、居士が來て申すよう。彌勒よ、世尊は汝に、『一生にして正覺を得るであろう』とゆう記を授けられたとゆうことであるが、その生とは何時の生であろうか、過去ならばもう過ぎてしまい、未來ならばまだ來ず、現在ならば暫くも住まることはない。又生滅のない覺の境の生ならば、既にそれ自らが證の位であるから記の要はない筈である。またすべての人人は眞如を離れていないから、もし彌勒が記を受けるとゆうならば、すべての人人も記を受けるであろう。またもし彌勒が煩惱を滅すとゆうならば、すべての人人も亦煩惱を滅すことが出來るのである。故に彌勒よ、汝の教をもつて諸の神神を誘うてはならぬ。

世尊、維摩がかように說きましたので、多くの神神は法の眼を得ました。それゆえ私は彼處に詣ることは出來ません」。

世尊は更に光嚴童子に命け給うと、申すよう。「世尊、私も亦彼處にいたることは出來ません。いつぞや私が毗舍離の市を出ようとすると、ちょうど維摩が入つて來たので、『居士は何處から』と問うと、『道場から』と答え、『道場とは何處か』と云えば、即ち居士の答えますよう。『直き心が道場である、虛がないから。行を起すことが道場である、能く事を仕遂げるから。深い心が道場である、功德を增すから。道を求める心が道場である、錯がないから。また、施をして報を望まず、戒を持つて願を具え、忍んでいかなる人についても心に礙りなく、精進して怠らず、禪定に入つて心を調え、智慧によつて諸法を見るから、是等の六度はみな道場である。更に人人を敬い惠むことである、そして欲の樂を離れて肉身を怨賊のように思い、道の意を護つて煩惱を斷ち、深い法を聞いて怖れず、惡しき友をば護り、善き友に親しんで、心を淸らかにして限りない法を修めるのが、即ち菩薩の法の樂である』。

天女達は、居士の教を喜び、欲の樂を願わぬようになつて魔の宮に歸ることを許されたが、居士に問うよう。『妾達はどのようにして魔の宮にあつたらよいでありましょう』。居士云う。『諸姉よ、「盡きぬ燈」とゆう法を學ぶがよい、譬えば一つの燈を百千の燈にともすようなものである、暗いものが明くなり、その明は盡きることはない、かように一人の菩薩が百千の人人を教え導き、佛の道を求める心を起さしめる、そして一度起した道の意は、盡きることがない、汝等、魔の宮にあるとも、この「盡きせぬ燈」の教をもつて數知れぬ神神に道を求む心を起させ、佛の御恩に報いるがよい』。

その時天女達は恭しく居士を禮して、

人を平等に憫む慈、苦を忍ぶ悲、法を悅ぶ喜、憎と愛とを斷つ捨、これらの四度もまた道場である。又人人を教え導く方便を多く聞くことが道場である。實の如くに知るからあらゆる煩惱も道場である。無我を知るから人人が道場である。空を知るからあらゆる法が道場である。赴くところがないから三界が道場である。說いて怖れのない師子吼、一切智をととのえて一念に一切の法を知ることも亦道場である。かように菩薩が道を修めて人人を導くならば、一つの足を擧げ下しすることまでもみな、道場より來つて佛法に住するものである』。

この時五百の神神はみな道を求むる心を起しました。それ故に私は彼處にゆくことは出來ません」。

九。世尊は更に持世菩薩に仰せられると辭して申すよう。「世尊、私も彼處へゆくことは出來ません。いつぞや私が靜かな室に居りますと、惡魔が帝釋天の相をして一萬二千の天女を從え、鼓をうち絃に合せて歌わせ、彼等とともに恭しく私の足を禮して一方に立ちました。私は帝釋天であると思い、『帝釋よ、よく來られた、いかに多くの福があつても自ら恣にしてはならぬ、欲の常ないことを思うて善の本を求め、身と命と財とをあげて盡きせぬ法に代えるがよい』と申せば、彼の申すよう。『菩薩よ、どうぞ是等の天女達を受け容れて掃き淸めの用にお使い下さい』。私は『帝釋よ、かような者は出家に用はない』と申した時、その言葉の訖らぬうちに維摩居士が來て、『これは帝釋ではない、惡魔が汝の女達を私にあたえるがよい』と告げました。惡魔が驚いて立ち去りますと、居士は天女達に語るよう。『惡魔は汝達を私に與えた、皆共に道を求む心を起すがよいとて、それぞれの根機に從つて法をとき、道の意を起させて、『汝等は已に道の意を起した、法の樂を娛しむがよい、欲の樂に耽つてはならぬ』と告げました。天女問う。『法の樂とは何でありますか』。居士『法の樂とは、佛を信じ、法を聽こうと願い、人人を敬い惠むことである、そして欲の樂を離れて肉身を怨賊のように思い、道の意を護つて煩惱を斷ち、深い法を聞いて怖れず、惡しき友をば護り、善き友に親しんで、心を淸らかにして限りない法を修めるのが、即ち菩薩の法の樂である』。

天女達は、居士の教を喜び、欲の樂を願わぬようになつて魔の宮に歸ることを許されたが、居士に問うよう。『妾達はどのようにして魔の宮にあつたらよいでありましょう』。居士云う。『諸姉よ、「盡きぬ燈」とゆう法を學ぶがよい、譬えば一つの燈を百千の燈にともすようなものである、暗いものが明くなり、その明は盡きることはない、かように一人の菩薩が百千の人人を教え導き、佛の道を求める心を起さしめる、そして一度起した道の意は、盡きることがない、汝等、魔の宮にあるとも、この「盡きせぬ燈」の教をもつて數知れぬ神神に道を求む心を起させ、佛の御恩に報いるがよい』。

その時天女達は恭しく居士を禮して、

惡魔に從うて魔の宮居に歸つた。世尊、居士はかような神力と智慧と辯才とをもつて居ります。私は彼處にゆくことは出來ません」。

世尊は更に長者の子であつた善德菩薩に命け給うと、申すよう。「世尊、私もこの御使には堪えません。いつぞや、私が父の家で大きな布施の法會を設けて、七日の間あらゆる出家をはじめ、貧しい人人に施を行うた時、維摩居士が來て申すには、『長者の子よ、かような財物を施す會を致してはならぬ、法を施す會をするがよい』。私が『法の施とは何か』と問うと、居士答えて『それは前後なく一時にすべての人に供えることである、謂ゆる佛の道を求めて大慈の心を起し、人人を救うために大悲の心を起し、正しい法を持つために喜の心、智慧を攝めるために私のない心を起し、貪る者を攝めるために施をなし、戒を破るものを教えるために戒を守り、よく忍び、よく勤め、禪定に入り、智慧を起し、人人を教え導きながら空の理を究め、法みなは假に集つたものでそれ自らの相のないことを知り、聖賢に近ずき、惡人を增さないでこれを調える心を起し、深い心にて世に執われる情を斥け、よく聞いてゆうが如くに行い、靜かな處にあつて靜のない法を味い、佛の智慧に赴いて行を修め、人人の縛を解き、德に身をかざり、その國を清め、あらゆる煩惱を斷つてあらゆる智慧を得る、これを法の施の會と名ける、もし菩薩が、この法の會にあるならば、大いなる施しの主といわれ、又世の福を生む田と名けられる』。

世尊よ、居士がこの法を說いた時、二百人の婆羅門は佛の道を求める心を起しました。私も心が清められ、居士の足を禮して價高い瓔珞を解いて上ると、居士はこれを受けて二つに分ち、半分をこの會の中で尤も賤しい乞食に施し、他の半分を難勝佛に上つた。そしてゆうよう。『若し施す人が、平等の心で賤しい乞食に施すことと、佛に供養することとに差別をつけず、その施による果報を求めぬならば、之を圓かな法の施と名ける』。その時かの賤しい乞食は佛の道を求める心を起しました。この故に私は彼處に行くことは出來ません」。

かように諸の菩薩達も亦、理由をのべて、居士の病を問うことをお斷り申した。

一〇。その時、世尊は文殊師利菩薩に仰せ給うと、申上ぐるよう。「世尊、かの維摩は深く法の實を究め、智慧に礙りがなく、いかに說くべきか、いかに行うべきかを知つており、あらゆる魔を降して意のままに神通を現わしております、私のかのうことではありませんが、世尊の御旨かしこければ、參ることに致します」。

多くの菩薩達、弟子達をはじめ、諸の人人は文殊に從うて毗舍離の市に入つた。維摩は之を知つて、神通をもつてその室を空しうし、あらゆる所有と侍者とを去り、ただ一つの牀を殘してその上に臥して文殊を迎えた。「善くこそ來られた、文殊よ、來ぬ相で來られ、見えぬ相で參られた」。

文殊。「居士よ、卿のいわれる通りである、來て仕舞えば重ねて來ないし、去つて仕舞えば重ねては去らぬ、何故かと云えば來る者に來る所がなく、去る者に去る所がないから。それはさておき、居士の病はいかがであるか、世尊は懇ろに尋ねしめられた。居士よ、居士の病はどうゆう因から起つたのか、又長く續いておるのか」。

維摩。「癡から愛着が起る、私の病はそこから生れた、すべての人人が病むので私も病む、若しすべての人人が病まぬならば私の病もなくなるであろう、何ぜなれば、菩薩は人人のために迷の世に入るからである、ちようど子が病めば父母も病み、子が癒えれば父母も癒えるようなものである」。

文殊。「此病は何を因として起つたか」。

維摩。「菩薩の病は大慈悲から起る」。文殊。「此室は何故に一人の侍者もなく、かように空なのであるか」。維摩。「あらゆる世界もみな空であるから空である、また、卿は侍者がいないといわれるが、すべての魔ともろもろの外道とはみな私の侍者である、何故かと云えば、魔は迷のみを樂うけれども、菩薩は迷を濟うし、又、外道は邪の見を樂うけれども、菩薩はそれらの見に動かされることがないからである」。

文殊。「卿の病は心が病むのか、身が病むのか」。

維摩。「私は身を離れているから身を病まず、心は幻のようなものと知るから心も病まぬ、ただ、人人が病むために私も病むのである」。

文殊。「菩薩は病める人をどのように慰めるか」。

維摩。「身は無常であると說け、身は苦然し身を厭えと說いてはならぬ、身は涅槃に止まるように說であると說け、然し涅槃に止まるようにいてはならぬ。身には我がないと說け、然し人人を捨てるのではない、よくこれを教え導くことを忘れてはならぬ。先に造つた罪を悔いさせることは大切であるが、過去つたことによつて苦しめてはならぬ。己が病をもつて他人の病を惑み、過ぎし世の限りない長い間の苦を知つて勤め勵み、醫王である佛となつてすべての病を治すがよいと說いて、病める人を慰め歡ばすのである」。

文殊。「居士よ、病める人はどのようにして心を調えるか」。維摩。「病める人はかように思うがよい。『この病は煩惱の毒から起つたもので、實の體のある法でない、しかも、この身は假の集りで、主もなく我もない、どこに病を受けるものがあろう』。

又、病める人は、自らの病が眞にあるものでないと思うように、他人の病もそれと等しいと思うがよい。そして愛着から起る慈悲を捨てねばならぬ。何故かと云えば、菩薩は塵のように多い煩惱を除いて慈悲を起すので、愛着から起る慈悲は事につけて疲を覺えるものである。故にもし之を除けば、事に臨んで縛られることはない。自ら縛られては他人の縛を解くことは出來ぬ。

それでは縛られると解かれるとは何を指すかと云えば、禪定の味を貪るのが縛られることで、方便をもつて迷の生を受けるのが解かれることである。又、方便のない智慧は縛で方便のある智慧が解かれた事、智慧のない方便が縛で智慧のある方便が解かれた事である。

又、身は無常であつて苦に滿ち無我であると觀るならば、之を智慧と名け、身は迷の中にあつて病んでも、すべての人人を饒んで疲れることがないならば之を方便と名ける。又、身は病を離れず、病は身を離れず、この病もこの身も、新しいものでも故いものでもないと觀るならば、之を智慧と名け、たとえ身は病んでもこの世を捨てて永く覺の境に入ろうとせぬならば、之を方便と名ける。

又、病める人は、心を調えることのみに滯うつてはならぬ。さればとて心を調えるなとゆうのではない。何故かと云えば、前の人は德にこだわる人で、後の人は愚かな仕草をする人である。この二つを離れた中道が、菩薩の行である。卽ち凡夫の行でもなく、所謂聖賢の行でもない所が、菩薩の行である。垢れた行でもなく、淨らかな行でもなく、そして魔の行に同じうしながら、しかも魔を降すのが菩薩の行である。或は迷の世を遠ざかることを樂うても、身も心も滅し盡くそうとせぬのが菩薩の行である。法の生れず滅びぬ理を知つても相好をかざり、佛の國の永えに寂かにして空であることを知つても、樣樣な淸らかな佛の國を觀、又、佛の道を得て法を說き、又は涅槃に入つても、他を饒む菩薩の道を捨てないのが菩薩の行である」。

一一。その時、舍利弗はこの室のなかに牀座のないのを見て「是等の菩薩達や弟子達は、どこに坐るのであろう」と思つた。維摩はその意を知つて舍利弗に語るよう。「汝は法のために來られたのか、又は座を求めるためか」。舍利弗。「ただ法を求めるためである」。維摩。「舍利弗よ、眞に法を求める者には、身も命も貪ることがない、どうして牀座など求めよう。眞に法を求める者は、あらゆる世界に求めるものがない。佛、法、僧の三寶にすら心を執われないのである。ゆえに、苦を見てもその本である煩惱を斷とうとは思わず、證に至りたいために道を修めようとも考えない。是等は徒らに煩惱と菩提とを異つたものとして見るところの戯論である。舍利弗よ、法皆は寂滅のものである、もし生れ滅びるものに係れば法を求めるのではない。又、法皆は執着の心から離れ取捨の心から離れている、もし是等に係れば法を求めるのではない。又、法は普く行き亙るもので、定つた所と相を離れている、故にもし法を一所に見、又は相によつて知るならば、それは法を求めるものでない。また法はそこに住まるべきものでなく、見、聞き、知ることの出來ぬものである。故に見聞覺知の方法によつては法は求めることは出來ないのである。また法は作られないもので、無爲と名けられる。もし作られたもの卽ち有爲に係れば、法を求めることは出來ない。されば舍利弗よ、法を求めるものは、一切の法に向つて求める思を懷いてはならぬ」。

更に維摩は向をかえて文殊に問う。「卿は限りない國國に遊ばれたことであるが、何れの國に最も妙な師子の座があるであろうか」。文殊答う。「東の方、限りない國國を過ぎると須彌相と名ける世界があつて、

そこに須彌燈王と申す佛がましまし、今現に高く廣やかな師子座の上にいられる、その座こそ並びのない妙なものである」。居士は之を聞くと、直ちに神通を現わしてその御佛に請い、三萬二千の師子座をその室に運んだが、室は廣やかに夫等の座を容れて少しも礙えられず、又、毗舍離の市をもこの世界をも狹めることがない。かくて居士は列み居る人人をその莊嚴比いない座に請ずると、神通をもつ菩薩達は直ちに相好を變えてその座に上つたが、初心の菩薩や小さな敎に甘んずる弟子達は上ることが出來ない。居士は彼等のために、「須彌燈王佛を禮し奉るならば其座に上ることが出來る」と敎えて、彼等を其座に上らせた。

維摩は驚き怪しむ舍利弗に語るよう。「舍利弗よ、あらゆる佛や菩薩達は、不可思議な解脫を得ておられる、すべてこの境地にある者は、大きな須彌山を芥子のなかに入れ、または四大海水を一つの毛孔に入れても、山の相は故の如く、海に住んでいる魚族や龍、阿修羅等は少しも夫を覺らずにいる、又人人のねがいによつて、七日の命を一劫のように長く思わしめ、或は一劫を促めて七日のように思わしめる、又は十方のあらゆる世界の風とゆう風を吸盡してもその身を損わず、樹樹も折れることはない。また、舍利弗よ、或る時は佛の身と現れ、聖者の身や、神神の身と現れ、そして世界のあらゆる聲とゆう聲を變えて佛の聲となし、世の無常、苦、空、無我であることを始め、さまざまの法を演べて普く人人に聞かしめる。舍利弗よ、私はいま略めて此不可思議の解脫の境地を說いたのであるが、若し廣く說くならば、劫を窮めても盡すことは出來ない」。

一二。文殊、居士に問う。「菩薩はどのように人人を觀るのであろうか」。維摩。「それは手品師が現わす幻のように人を觀る、又は水の中の月、鏡の中の像、陽炎、山彥、空に浮ぶ雲、水の上の泡、閃く電、空ゆく鳥の跡、石女の兒、寤めた後の夢のように見る」。文殊。「そのように觀るならば、どうして慈を行うことが出來よう」。維摩。「菩薩はかように觀えて後、眞の慈悲を起す、卽ち寂かにして煩惱を離れ、虛空のように邊りなく、淸く安らかに差別のない慈悲をもつて、人人を安わせるのである」。

文殊。「慈と喜とは何か」。維摩。「その造る所の功德をすべての人人と共にすることが『慈』で、人人を饒む所があれば喜んで悔ゆることのないのが『喜』である」。文殊。「生死に畏を抱く菩薩は何に依るべきであろうか」。維摩。「佛の功德の力によるがよい」。文殊。「その佛の力によるにはどうして居ればよいか」。維摩。「一切の人人を解脫させるようにするがよい」。文殊。「人人を救うには、何を除いたらよいか」。維摩。「その煩惱を除くがよい」。文殊。「その煩惱を除くには何を行わしめるであろうか」。維摩。「正しい念にあらしめるがよい」。文殊。「いかにして正しい念にあらしめるか」。維摩。「もの一切が生れず滅びぬものであるとゆう理を會得せしめるがよい」。文殊。「生れず又滅びぬものは何か」。維摩。「善からぬものは抑え、善いものは

育てさせるがよい」。文殊。「善いものと善くないものの本は何か」。維摩。「身である」。文殊。「身の本は何」。維摩。「貪欲」。文殊。「貪欲の本は何」。維摩。「迷の分別」。文殊。「分別の本は何」。維摩。「倒の想」。文殊。「倒の想は何」。維摩。「縁によって起り、定った自性のないものが本である」。文殊。「その本は何であるか」。維摩。「そうして定った自性のないものは一つ所に滯ることがないから無住とゆう、その無住には本がない、この無住を本として萬のものが起っている」。

一三。時に、その室にいた一人の天女が身を現わして神の世の華を人人の上に雨らしたが、その華の菩薩達に觸れたものは身に散り落ち、弟子達にかかったものは身に着いて離れない。彼等は努めて拂い落そうとするが、どうしても落すことが出來ない。

天女、舍利弗に問う。「何故華を拂われますか」。舍利弗。「華は出家に適わしからぬものであるから」。天女。「華がどうして適わしからぬものでありましょう、華には何の分別もない、分別は大德にあります、出家して佛の道を修めながら、分別を持たれることは適わしくない、分別がないならば法のまま自然のままであります、菩薩方に華が着かぬのは、すべての分別を斷っておるからであります、譬えば畏を懷いている時に魔がさすように、大德達は何處にか生死を畏れる所があるから、物がその隙につけ入るのであります、煩惱の習氣がまだ盡きぬ故、華に捉われることと思います」。

舍利弗。「御身は久しい前から此室におられたか」。天女。「妾が此室に居ることは大德の解脱のようであります」。舍利弗。「此に久しくおられるか」。天女。「大德が解脱を得られて、どれほどたちますか」。舍利弗は默ってこの問に答えない。天女。「大きな智慧の持主である大德が、何ゆえ口を緘まれますか」。舍利弗。「解脱は說くことができぬからである」。

天女。「言葉も文字もみな解脱の相と思います、されば、文字を離れたところが解脱であるとは申せません、それはあらゆる法は解脱の相でありますから」。舍利弗。「けれども貪、瞋、愚を離れるのが解脱ではないか」。天女。「それは世尊が、慢心を起す人に說かれたもので、慢心のない人には、貪、瞋、愚の性そのままが解脱であると說いて居られます」。

舍利弗。「天女よ、御身のゆう所はよろしい、御身は抑も何を得、何を證つて、このように說くのであるか」。天女。「妾には得る所も證る所もないから、かように說くことが出來ます、もし得る所、證る所があれば、佛法の上に慢心を起すことになります」。

舍利弗。「御身は一たいどのような道を求められたか」。

天女。「妾はこれぞとゆう定った道を求めません、ちようど瞻蔔の林に入れば、ただその花の香だけで餘の香を嗅がないように、此室に入るものは佛の勝れた香より外に、餘の聖者の香をねごう思はない、まことにこの室には晝も夜も金色の光が輝き、日や月の光もいりません、そこには帶に纓

まされるものもなく、神神や菩薩達が集われ、そして、いつも己を利し他を利する法を說かれ、妙な天樂が永えに法の音を奏で、又法の寶は滿ち滿ちて貧しい者を濟い、そして釋迦牟尼佛や阿彌陀佛などの佛達は念に應えて此室に現れ給うて、法の要を說かれます、またこの室にはあらゆる神神の美わしい宮殿、佛の淨らかな國國が圓かに現れて居ります。大德よ、此室はかように勝れた德をもっておりますから、誰も小さな分別を起すものはありません」。

舍利弗。「御身は何故女の身を變えないのか」。天女。「妾は長い間、いかに考えても妾を女と思う事は出來ません、さすれば、どうして變えることがいりましょう、譬えば手品師が幻の女を作り出した時に、もし或る人が來て何故その女の身を變えないのかと申したら、正しい問でありましようか。」

舍利弗。「いや、手品には定った相はないから變えることはいらぬ」。天女。「法はみな夫と同じく、定った相はありません、さすれば、女の身を變えることを問うことは要らぬと思います」。

その時、天女は神通を現わして、舍利弗を天女の相となし、自分は舍利弗となってゆう。「何故あなたは女の身を變えられませぬか」。舍利弗は天女となりながら、獨り言のように、「はて、知らぬ間に私は天女となって仕舞った」。天女。「もしあなたがその女の身を變えることが出來るならば、すべての女達も變るでありましよう、大德が女でなくて女の身をあらわすように、すべての女も所謂女ではありません、故に世尊は、世にもとより男、女とゆうものはないとお說きになりました」。

かくて天女が神通を攝めると、舍利弗も天女も元の身に還った。天女。「女の妾は何處へ行きました」。舍利弗。「それはあるようでもあり、ないようでもある」。天女。「法みなは夫と同じく、あるようであり、ないようであるとは、世尊の說き給う所であります」。舍利弗。「おんみは死んで何處へ生れるか」。天女。「妾が生を受けるのは、丁度佛が、假に生類を作り給うようなものであります」。舍利弗。「佛の造り給うものは假の生で、實の生死のあるものでない」。天女。「人人もまたそうで、實の生死はありません」。舍利弗。「おんみはいつ佛の道を得るか」。天女。「大德が再び凡夫に立ち還られるならば、妾も佛の道を得るでありましよう」。舍利弗。「私は凡夫になるわけはない」。天女。「妾も亦妾の道を得るわけはありません、なぜかと申せば覺には住處がないから、それを得る者もありません」。

舍利弗。「されど今現り諸の佛達は佛の道を得ておられる、已に得られた方、後に得べき方は恒河の砂の數ほどもあると云われてあるではないか」。天女。「それは世間の習慣によって三世を說かれたもので覺には過去、未來、現在とゆうものはありません、大德は聖者の道を得られましたか」。舍利弗。「得る所がないとゆうことを得ている」。天女。「諸の佛達も菩薩達も、そのように得る所がないとゆうことを得て居られます」。

その時維摩居士は舍利弗に、この天女が久しく道を修めて法に生れ滅びのない理を信ずる位に入り、思うがままに人人を教え導いていることを語つた。

一四。 文殊問う。「菩薩はいかようにして佛の道に至るであろうか」。維摩。「それは道ならぬことを行えばよろしい、逆罪を行うて地獄に落ちても惱がなく、畜生道に至つても愚癡がなく、餓鬼道に入つても功德を具え、貪るように見えて執着を離れ、瞋を表して心を調え、慳を示してあらゆるものを捨て、命さえも惜まず、戒を破るように見えても小さな罪にさえ懼れを抱き、諂うように見えても善い方便を以て法に叶い、憍るように見えても謙り、魔の道に入るように見えても佛の智慧に順い、豐かな生活をしながら常に常無きを思うて貪らず、妻をもつても泥の欲から遠ざかり、邪しまの道に入りながら正しい道を傳え、涅槃に入る事を現わして而も生死を斷つことはない、文殊師利よ、かような道ならぬことを行えば、佛の道に達るであろう」。

維摩。「佛になる種は何であるか」。文殊。「諸の外道の邪しまな見とすべての煩惱が佛の種である、なぜなれば、煩惱を離れて涅槃があると思うものは、佛の道を得ることが出來ないからである、譬えば蓮華は高原に生えないで泥の中に咲くようなもので、人は煩惱の泥の中に佛法を起すのである、また、種は空に植えても生えることは出來ないが、糞のある壤にはよく芽を吹くようなものである。かように無爲の涅槃に入りきるものは佛法を生むことは出來ず、山のように大きな我見を起すものであつて初めて道を求むる心を起して佛法を生むことが出來るので、つまりすべての煩惱は佛になる種である、譬えば海の底に下らなければ價も知れぬ寶を得ることが出來ないように、煩惱の海に入らなければ、一切智の寶を得ることは出來ぬのである」。

この時、その會のなかにあつた普現色身菩薩が維摩に問うよう。「居士よ、居士の父母、妻子、親戚、師や友は誰であるか、又、召使い、家畜、乘物はどこに居るか。維摩は偈を以て答えた。

(一) 智慧は母、方便ぞ父、諸人を導く菩薩は、この父母より生る。
法の喜は妻、慈心ぞ娘、誠どころは子息にて、寂けき空を舍とする。
煩惱は弟子にて、意のままに隨い、德のかずかずは、善き知識、覺を得るはこれによる。

(二) 喜惠は妓にて、法の歌うとう。
敎の園に、覺の華さき、智慧の果をむすぶ。神通の象と馬とは、勝れし敎の車を馳せて、一つ心に御しながら、八正道の路には遊ぶ。
慚愧は上服、深き心は華鬘、信と戒との寶をあたえて、大いなる惠する。

(三) 多くを聞いて智慧を增し、甘露の法を味いて、勇ましく煩惱の賊を破り、道場に勝利の幡をたつ。
あらゆる國に赴きて災と戰を緣となし、方便をつくして法をとき、その苦を濟うなり。
火より蓮華を生ずる如く、欲にありても禪定を行い、或は遊女となりては、欲の鈎もて、色好むものを率き、さては、佛の智慧に入らしむ。
かかる極みなの智慧により、限りなの道を行い、限りなの人をば度う、その功德は歎え難し。

一五。 その時、維摩は諸の菩薩達にゆうよう。「どのようにして不二の法門に入るであろうか、卿達の思のままをお說き下さい」。

法自在菩薩。「生れることと滅びることとの二つ、法は本來生れることがないから滅びることもない、私はこの法の眞の相を見る眼を得て、法に生死の二つがないことを知つて、不二の法門に入ることを得た」。

德守菩薩。「我と我所との二つ、我があるから我所がある、故にもし我とゆうものがないと知れば、我所とゆうものもない、私はこの我と我所の別のないことを知つて、不二の法門に入つた」。

德頂菩薩。「淨と穢との二つ、本來法には淨も穢もない、淨と穢は心の分別の上に作るに過ぎない、かように知つて、私は不二の法門に入つた」。

善眼菩薩。「私は一相と無相との二つによつた、萬の物は、本來そのままに等しい一つの相であつて、そこに差別のある相がない、從つて定つた相がないといわねばならぬ、而もその定りの無い相もまた執着るべきものでない、かように萬の物の平等をさとつて、不二の法門に入つた」。

弗沙菩薩。「私は善と不善との二つによつた、もし善、不善の差別を起さないで、相に捕われぬ境地に至るならば、不二の法門に入ることが出來るのである」。

師子菩薩。「私は罪と福との二つによつた、まことの智慧をもつてこの二つの相を見ると、罪の性がそのままに福であることが知られ、繫縛も解脫もなくなる、これが不二の法門に入つた所である」。

淨解菩薩。「私は有爲と無爲との二つによつた、もし一切の分別を離れるならば、心は虛空のようで淸い智慧に妨げがない、即ち有爲そのままにして無爲が得られる、これが不二の法門に入つた所である」。

善意菩薩。「私は生死と涅槃との二つによつた、もし生死の性を見れば生もなく死もなく、繫縛もなく解脫もなく、燃えることも滅びることもない、これが不二の法門に入つた所である」。

電天菩薩。「私は明と無明との二つによつた、無明の實の性は明であるが、明も亦執わるべきでない、即ちすべての分別を離れて、平等で二とゆうことがないと知つたのが、不二の法門に入つた所である」。

寂根菩薩。「私は佛法僧の三つによつた佛は卽ち法、法は卽ち僧、三寶共に無爲の相で虛空に等しい、ここに至ることが不二の法門に入つた所である」。

珠頂菩薩。「私は正道と邪道との二つによつた、正道にあるものは、邪と正との分別はない、この二つを離れたのが不二の法門に入つた所である」。

樂實菩薩。「私は實と不實との二つによつた、眞に實を見るものは實を見るとゆう念すら起さぬ、これ實不實の分別を起さぬ

ことが、眞に實を見る境に入つたものであるからである、肉眼の見る所ではなく智慧の眼の見る所であつて、而もこの智慧の眼には見る見ないの分別がない、かく證つたのが不二の法門に入つた所である」。

諸の菩薩達はそれぞれかように說き了つて、文殊に尋ねた。

文殊曰く。「私の意としては、すべての法に於て言うことも、示すことも、識ることもない、卽ちあらゆる言葉や分別を離れた所が、不二の法門である」。

最後に、文殊は維摩に不二の法門を尋ねた。然るに維摩は默つて言う所がない。文殊はこれを讃えてゆう。「善い哉、文字や言がない、是こそ眞に不二の法門に入つた所である」。

かくて多くの菩薩達は不二の法門に入り法に生滅のないことを深く信じた。

一六。かくて維摩は文殊に語るよう。「これからともどもに世尊の御許に詣でて、妙なる法を承ろう」。文殊之を喜び共に一會の大衆を率いて菴羅樹園に在す世尊の御許に詣で、うやうやしく世尊の御足を禮し、一心に掌を合せて一方に立つた。

世尊、維摩に問い給うよう。「汝は佛を觀たいと欲うたことであるが、佛を觀るとはいかようなことであるか」。

維摩答えて申すよう。「佛を觀るとゆうは、我身の實の相を觀ることであります、佛の身は、過去からも來ず未來にも去らず現在にも住み給うことはない、肉體でもなく、肉體の性質を持つたものでもない、從つて眼に見え、身に觸れ、心に思い浮べられるものでないから、迷の世を超えております。貪、瞋、癡を離れ、一でもなく、多くでもなく、自、他、有、無等の差別ある相でもない、此岸にも彼岸にも、又、その中流の何處にもましまさず、而も人人を導きになる。寂滅を觀わし給うけれども、ただ永えの滅ではない、また諸の分別を離れ、定つた方處を持たれぬが、然し方處を離れず、また、有爲でも無爲でもなく、示すことも說くこともなく、施さず、慳らず、戒を守らず、戒を犯さず、忍ばず、恚らず、進まず、怠らず、定まらず、亂れず、智からず、愚ならず、誠ならず、欺かず、來らず、去らず、出でず、入らず、まことに言葉も思も絕えはてたものが佛であります、世尊、佛の身はかように何物によつても顯わす事は出來ません、そして、かように觀るのが正しいので、そうでないものは邪しまであると思います」。

この時帝釋天は世尊に申すよう。「世尊、私はこれ迄多くの法を聞きましたが、かほど迄に奇しく實の相を明した法を承つたことはありません、もし人あつてこの教を信じ持つならば、必ずこの法を得るに相違ありません、又その人は惡道の門を閉じてあらゆる善の門を開き、諸佛方の護をうけて外道を降し、正覺を修めて佛の行かれた跡を踏みゆくでありましよう、世尊、私はこの教のように行う人を、多くの眷屬と共に供養し事えるでありましよう」。

世尊。「善い哉、帝釋よ、汝のゆう通りである、私は汝の喜を助けるであろう」。

第五編

第一章　教化

第一節　正しき師と邪の師

一。世尊は竹林精舎を出でて西に向い、久久にて**ベナレス**の鹿野苑に入り給うた。それより憍賞彌に向う途中、迦尸の國を遊行し、その道にて弟子等に語り給うよう。

「弟子等よ、私は午後の食を止め、日に一度の食を取るようになつてから、病もなく健かさ安らかさを覺えるようになつた汝等も午後の食を止めて、日に一食にしたならば善いであろう」。

世尊はそれより、**キーターギリ**とゆう迦尸の村に入り、暫く其處に滯まり給うた。

二。その時、阿説示と**プナツバスカー**の二人の佛弟子が、**キーターギリ**に住んでいたが、この話を聞き、「朝と晝と夕と三度に充分に食事を取つても、病も起らず、健かであるから、何も現在效果のあるものを捨てて、結果の解らぬものに隨う要はない」と、弟子等の諫も聞かないで、不承をつのつていた。

弟子等がこの事を世尊に申しあげると、世尊は彼等二人を呼ばしめ、その事を確めて後宣うよう。「弟子等よ、汝等は若、樂、不苦不樂の、いかなる感覺を受けても惡法が減り善法が增すと、私が説いたように思うているか」。「世尊、そうではありません」

「弟子等よ、それでは或る樂の感覺は惡法を增し善法を減らし、或る樂の感覺は善法を增し惡法を減らす、また、苦と不苦不樂の感覺についても同じであると教えたと思うているか」。「世尊、仰せの通りに思うて居ります」。

「弟子等よ、この事を私が知り悟り試さないで説いたならば、それは適當つたことではあるまい。しかし、私は自ら知り悟り試したことであるから、こうゆう樂の感覺は捨てよ、又は受けよ、こうゆう苦、不覺は捨てよ、又は受けよと命けるのである。弟子等よ、私は總ての弟子に對うて、放逸ならぬように行えよとは云わぬ、何故ならば、既に解脫れたものは放逸に陷る事はないからである。然るに上なき安穩を望んで進んで行くものは、法に適うて心を攝めれば、この現在に出家の目的を果すことが出來るであろうから、私はこれらのものに對うては、放逸ならぬようにとゆうのである。

弟子等よ、證は一時には獲られない。信を起して師に仕え、法を聽いて心に留め、その義を考えてさとり、よく勤め修めて心を一すじにし、それに依つてこの身に上なき眞實を證り得るのである。汝等は信もなく仕えることもなく、法を聽いて心に留めることもなく、その義を考えてさとることもなく、心を一すじにすることもなく、道を誤り邪路に入つてこの教から遠く離れているのである。

三。弟子等よ、世間的な異教の師弟の間にでも、汝等のようにこのようにすればそれをなそう、このようにしなければそれをしないとゆうような、賣買めいたことはせないのである。況してこの教においては、世尊は師、我は弟子、信ある弟子は師の教を奉け、固い精進に依つて達すべきものを達せないでは、座を立たぬであろうと誓うのが當然である。このような信のある弟子であつて、初めてこの世において覺を得ることができるのである」。

四。世尊は多くの弟子達を從えて、迦尸の國を過ぎて憍賞彌に入り、瞿師多園に停まり給うた。その時遊行者の**サンダカ**は五百の弟子を連れて、**ピラツカ**窟に住していた。

或る日の夕暮、阿難は禪定から立出で、大雨の後に出來た洞窟を見るために、數人の弟子を促して出掛けたが、遊行者の**サンダカ**は、阿難の遠くから來たのを見かけて、弟子達の雜談を止めさせ、靜かに阿難の來るのを待つた。挨拶が終つて、阿難が、何故に多數の人が集つて居るのか、何の話をしていたのかと問うと、**サンダカ**は之を遮つて、尊者自身、師の法の話をして下さるようにと願つた。阿難は次の樣に語つた。

サンダカよ、知者、見者に在す我が世尊は、四種の淺間しい邪行と、四種の效のない修行とを説き、その效かなく害のある行に人人の走らぬようにと教えられる。

サンダカよ、世にはこのように云い張る人がある。「布施もない、供養もない、善惡の業の果報もない、この世後の世とゆうものもない、人間は死ぬ時に原素に歸り、五官は空に歸る、四人の人が棺をかついで歌を歌うて葬場に入り、骨は晒され、供養の品は灰に終る、布施をせよとは愚かな者の教で、利益があるようにゆうのは空虛なたわごとである、愚かな者も賢しい者も死ねばなくなるまでである」と。

又、かように云いふらす人もある。「人を殺すも、人を苦しめるも、盜み、掠め、姦婬をし、妄語を吐くことも、剃刀の齒をつけた車の輪で地の上の生物を一纏にして殺すことも罪はない、恒河の南岸に殺生をして恒河の北岸に布施を行うても、罪もなければ功德もない、布施をなし、己を制え、眞理を語るとしても、何等の功德もないことである」と。

又、或る人は云う。「人の墮落するのも向上するのも因緣あつてではない、理由がなくて墮落もし向上もする、力もない努力もない、精進もない、總て運命によつてそれぞれ定められた苦樂を受けるのである」と。

又、次の主張をする人もある、「地、水、火、風、苦、樂、生命の七つの原素は作られたものでも作られるものでもなく、又何物をも生むものでもなく、峰のように柱のように堅固で、動かず變らず、互に害わず互に苦樂に影響し合うものではない、それ故に、殺すものも殺さしめるものもなく、聞くものも聞かしめるものもなく、知るものも知らしめるものもない、鋭い劍を以て頭を刎ねても、誰も誰の生命を奪つたのではない、只劍がこの七つのものの眞中に入つた迄である」と。

五。**サンダカ**よ、こうした四種の主張に對して、心ある者は考える。「若しこれらの人人の云う所を眞とすれば、私は爲さないで爲し、行わないで行うた事になり、こうゆう教を考え出し、いろいろの苦行をした

りするこれらの師と、妻子に纏わられて、いろいろに欲の生活をしている私と、同じく果に達し、未來も同じ處にゆけるわけである、されば何の利益があつて、この師の下に淨らかな行を修める必要があろう」と。彼は、この教を淸らかな行でないと知つて離れ捨てるであろう。**サンダカ**よ、これが四種の淺間しい邪行であつて、心あるものがそれに走らぬようにと、我が師の教え給うたものである。

又、**サンダカ**よ、茲に或る師は一切知、一切見があり、行住坐臥に一切の知見が現われていると云うが、空屋に入つて食を得ず、犬に嚙まれたり、馬や牛に逐われたり、或は女や男や村の名や道を聞くなど、日常ゆう一切知見に裏切られていながら、それを問い匡されると、そうせねばならぬ筈であつたからそうしたのであると逃口を云うている。又、或る師は昔からある教を聞き傳えてその儘に教えているが、その中には善く傳えたものもあり、傳え誤つたものもあり、正しい事もあり間違つた事もある。又、或る師は自分で考え出した教を說いて居るが、その考え方に善いものもあり、惡いものもある。又、或る師は愚かで氣が狂うている爲、何かを問われても返答が亂れておる。心あるものは之を知り、この修行は無益であると思つて、厭い離れるであろう。**サンダカ**よ、これが世尊の、それに依らないよう、依つても何の利益もないであろうと云われる四種の修行である」。

「尊者阿難よ、仰の通りであります、尊者よ、次に心ある者の依るべき、そして正しい利益を得べき教とは如何なるものでありますか」。

六。「**サンダカ**よ、佛がこの世に現われて法を說き給うと聞き、信を起して出家し、行を修め、小さな罪をも恐れ、煩惱を離れ禪定に入り、心を練つて智慧を得、我が生は盡きた、淨らかな行はなしとげた、なすべきことは成し終つた、これが最後の生でこの後再び迷の生を受けることはないと知る。弟子がその師の下にて、このような卓れた地位に到りうる教こそ、心ある人がひたすらそれに依つて、正しい利益を得べきものである」。

「尊者阿難よ、その煩惱を滅ぼし、正しい智慧によつて解脫れた聖者の弟子は、欲を樂しみ味おうでありましようか」。「**サンダカ**よ、その聖者となつた弟子は、知つて生物の命を取り、知つて與えられぬものを取り、女と交わり、故意に妄語を語り、在家の人人のするように、蓄えて置いて諸の欲に耽るとゆうことはない」。

「尊者よ、その聖者には、行住坐臥、常に煩惱がなくなつたとゆう知見が現われているであろうか」。「**サンダカ**よ、私は茲に譬を擧げよう、茲に手足を切られた人があるとする、その人はいつでも手足がないのであるが、想い起す時に無いとゆうことを知るのである、今聖者も、いつも煩惱はないが、想い起した時に煩惱がないことを知るのである」。

サンダカは、弟子達に向つて云うよう。「汝等は世尊喬答摩の許に修行をするがよい、私くしのようになると、利養の執滯から

離れることは容易くないから、汝等は行いて世尊の許に道を求むるがよい」。

第二節　曠野鬼

一。世尊は道を少しく後へ戻つて、**アーラビ**に入り給うた。當時、この地には**アーラワカ**と呼ばれる兇猛の夜叉がいて、人人を苦しめ惱めていた。**アーラビ**の王が狩に出て、獲物を逐うて只獨り、道のない處に踏みこみ、その歸路に疲を休めるために、城を去ること遠からぬ大きな尼拘盧陀樹の蔭に憩うていると、この夜叉に捕えられ、日に一人ずつ人身供養を送るからとゆう約束で、漸く生命を助かることが出來た。

初めは盜みをして死刑にせられるものが人身供養に送られていたが、罪人が絕えると、赤子が送られ、それも殆んど盡きたので、最後に王の可愛い王子がその悲しい重荷を擔わねばならぬこととなつた。城の人人は惝惝として總ておそれ戰いていた。

世尊はこの樣子を見てあわれに思召し、城の人人を救うために、只獨り、夜叉の住居に赴き給うた。丁度その時、**アーラワカ**夜叉は、**ヒマラヤ**の山へ夜叉の會議に行つて留守であつたが、世尊は門番の**ガルバ**と云う夜叉に一夜の宿を請わせられた。**ガルバ**は主人の夜叉の兇惡を說いて拒んだが、世尊の再三の賴に、それでは一應主人に告げて參りましようと、**ヒマラヤ**にむかつて走り去つた。世尊は宮殿の中に入つて座を占め、夜叉の女達に法話をして歡ばしめ、時の到るのを待ち給うた。**サーターギラ**と云う夜叉は、平素世尊を信じていたが、この日**ヒマラヤ**の會議に列なるために、丁度このアーラワカ夜叉の宮殿の上を飛んでいると、世尊の御力で飛ことができず、何事であろうかと怪しんだが、世尊を見奉つて法話を聽き、再び空を飛んで會議に列なり、**アーラワカ**夜叉の隣に座を占めて、「今日はお前の仕合せの日である、世尊がお前の家に宿り給うた」と祝うた。

二。**アーラワカ**夜叉は、兇猛な性質の上に、敬うことを知らぬものであるから、自分の許のないのに家に入り、主顏に女達に話をしていると知つて大いに怒り、それに**サーターギラ**夜叉が世尊の德を讃えて止まぬので、益腹を立て、「俺は**アーラワカ**である、今日こそは、眼に物見せて呉れよう」と急いで歸り、風を起し雨を降らし、劍を投げ、矢を注ぎ、槍を突き、火を降らして攻めかけたが、それらの武器は悉く世尊の御身體近くに至ると神神しい華となつて、靜かに御座の周圍に降り布かれた。**アーラワカ**は之を見て驚きながらも、さらば何物にも敗れたことのない己が最後の武器である「布」を布こうと、世尊の傍らに打廣げた。この「布」を擴げる時には、天は雨降らず、地は乾き、海の水も減り、山も碎けると云うほどであるが、世尊に向つては何の威力もなく、足拭き位の布となつて落ちたのみであつた。

この有樣に驚いた夜叉は考えるよう。この恐しい武器さえ役に立たぬと云うのは、恐らく彼の慈心に打勝てない爲であろう、彼を焦立たせて、後に戰うならば勝つかも知れぬと思い、今度は方向を變えて、「立

ち去れよ」と呼びかけた。世尊も夜叉の心を和げて教え誨そうと、その云うなりに座を立つて去ろうとし給うた。夜叉は世尊が餘りに素直に座を立ち給うたので、少しく心を和げ、猶、世尊を試すつもりで、「入るがよい」と云い、座に卽き給うと、また「立ち去れよ」と呼びかけた。かくすること四度に及び、世尊は、時を見計うて、「夜叉よ、私は三度も汝の云う通りになつたが、今度は云うままにはならぬ、汝の思う通りにするが善い」と仰せになつた。夜叉は云うよう。「宜し、それでは問を起そう、もし汝が答えることができぬ場合、私は汝の心の臟を破り汝の足を取つて恒河の向う岸に投げつけよう」。世尊は宣うよう。「夜叉よ、私はすべての世界に於て、私の心の臟を破り私の足を取つて投げ得るものを見出し得ぬが、汝の思う通りに尋ねるが宜しい」。

三。アーラワカ夜叉には、嘗てその父母から傳えられた疑問があつた。夜叉はいつかはこの疑問を解いて呉れる人があろうと思い、その疑問を忘れぬようにと、朱字で金盤に記して藏つて置いたが、彼はこのことを思い出して、今その疑問を世尊の前に捧げた。

この世に於て、すぐれし富とは何ぞ、安らぎを齎すは誰、味の中の味とは何ぞ、いかに生くれば、勝れたる生活と呼ばるる。

「信はいと、勝れし富にて、正しき行は安らぎの運び、まことは味の中の味
智慧の生活ぞ、勝ると云わる」。
いかに流を渡り、いかに惡魔を超え、いかに惱離れて、いかに清けさを得ん。
「信によりて流を渡り、放逸を離れて惡魔を超え、精進によりて惱を離れ、智慧もて清けさを得ん」。
智慧を得る道いかに、富を累ぬる道いかに、いかにせば譽を得、いかにせば友と離れざらん。この世より後の世に行きていかにせば、悲なきを得べきや。
「聖を信じ、覺の法聞き、放逸なくて分別あらば、智慧ぞ得られむ。行正しく、重荷にたえつ、つとめて急ぐなければ、富を得ん。まこと語らば譽を得、施して吝むなければ、友は離れず。まこととと正しさと、着實と施の心と、この四つを持ちて、信あらば、在家なれども、この世を去りて悲はなし」。

四。世尊のこの明かな答を聞いて、**アーラワカ**夜叉は心から喜び、今迄の疎暴しい怒を愧じて、世尊の教に歸つて信者となることを誓つた。丁度その時は夜の明けそむる頃であつた。王宮の人達は、泣く泣く幼い王子を運んで夜叉の犧牲に捧げて來た。見れば恐ろしい夜叉は世尊の膝下に伏し、手を合せ頭を垂れて拜んでいる。人人は意外の有樣に且つは驚き且つは喜び、約束によつて幼い王子を連れて來たから受け取つて呉れと云えば、夜叉は兩手にて王子を受け取つて世尊に捧げ、世尊は再び人人の手に歸して、「この王子を健かに育てて生長の後に再び私の處へ連れて來て貰いたい」と宣うた。手から手へと渡されたので、王子はこれより**ハッタカ**卽ち手公子と呼ばれるに至つた。**ハッタカ**は生長の後、世尊に

よつて生命を救われた事を知り、世尊に歸依して法を喜ぶ人となつた。

第三節　家系

一。世尊は**サーケータ**に入り、更に北に進んで憍薩羅の國を遊行し、伊車能伽羅とゆう婆羅門村に着かせられ、その林に入り給うた。その時沸伽羅婆提とゆう名高い婆羅門が、波斯匿王の封を受けて豐かな郁伽羅とゆう村に住んでいた。

沸伽羅婆提は、前から釋迦族の太子が出家して佛になり給うたとゆう噂を聞いていたので、世尊がわが村近くの伊車能伽羅においで遊ばされたと聞いて、自分の弟子の阿摩晝を呼んで云うよう。「阿摩晝よ、喬答摩が伊車能伽羅の林に滯まつていられるとのことであるが、喬答摩の名聲は、汝も聞いて居る通り神神の名よりも高く知られて居る、よつて汝は今から喬答摩の處に行つて、彼が果してそのような方であるかどうかを見て來てもらたい」。

「師よ、然しそれは、どのようにすれば、知ることが出來ましようか」。「阿摩晝よ、我我の書に三十二の大人相が說いてある、この大人相を具えている人は、若し家にあれば四海を治める王者となり、出家をすれば佛となつて世の暗を除き給うとゆうことは、嘗て汝は私から聞いた筈である」。

ここに於て阿摩晝は、「承知いたしました」と答えて、馬車を駈つて伊車能伽羅の林に入り、多くの弟子達が林の中をそぞろ歩きしているのを見て云つた。「喬答摩は何處に居られますか、御尋ねしたいと思います」。

弟子等は、心ひそかに、「この青年は名のある家の生で、又名高い沸伽羅婆提婆羅門の弟子であるから、世尊がお遇いになるも宜かろう」と思い、阿摩晝に云うよう。「あの閉めた戸の奥が世尊の御室である、靜かに近ずき、咳拂いをして門をうちなさい」。

阿摩晝は敎えられるままに門を叩くと、世尊は戸を開いて室に入れ給うた。阿摩晝は室に入つて、立ちながら、又歩きながら坐つて御いでなされる世尊に、くどくどと御挨拶を申した。

二。世尊の仰せられるよう。「阿摩晝よ、今坐つている私に對うて、汝が立ちながら又歩きながら挨拶をするのは、年老いた婆羅門に、その弟子のする婆羅門の挨拶の法であると思うか」。

「喬答摩よ、そうではない、歩いている婆羅門には歩きながら、立つている婆羅門には立ちながら、坐つている婆羅門には坐つて挨拶をするのが當然である、しかし頭を剃つた卑しい出家には、今私のした挨拶で足りるのである」。

「然し阿摩晝よ、汝が茲へ來たのは何かの用事があるのであろう、その用事を考えて見るが善い、汝は自分の教養を誇つているようであるが、惡い教養を受けないでどうしてかような事が出來るであろうか」。

阿摩晝は世尊のこの御語に腹を立て、世尊を罵しるよう。「喬答摩よ、釋迦種族は、誠に酷くて腹立ち易く疎暴であり、婆羅門を尊び供養することを知らない、それは正しい事ではない、彼等はいかにも卑しいも

のである、私は嘗て師の用事で迦維羅城へ出掛けたことがあるが、釋迦種族は公會堂に集つて、指で互につつき合い、戯れ合う。て、一人も私に座を與える者がなかつた、思うに慥かに私のことを嘲つていたので、婆羅門を尊び供養することを知らず、いかにも卑しい者である」。

「阿摩晝よ、小さな鶉は、自分の巣の中だけでは、自分の好きなように囀ずることが出來るが、釋迦種族も自分の城の中で自由に樂しんでいた迄である、こんな小さな事で腹立てるものでない」。「喬答摩よ、婆羅門と刹帝利と毘舍と首陀羅との四の階級は嚴とした存在である、この四の階級の中、後の三の階級は婆羅門に事うべきものである、釋迦種族が、卑しい階級でありながら、婆羅門を尊び敬い供養しないのは善いことではない」。

三。その時、世尊は考え給うよう。この青年は徒らに釋迦種族を卑しみおとしめておるが、若しその系圖を問かせたら、何と思うであろうか。「阿摩晝よ、汝は如何ような家系であるか」。「私はカンハーヤナの家系である」。

「阿摩晝よ、もし汝の系圖を昔に溯つて調べて見ると、釋迦種族は主人に當り、汝はその下婢の子孫であることが知られるであろう。傳えに依ると、釋迦種族の先祖は甘蔗王であつて、王はその愛妃の生んだ王子に位を讓ろうために、兄の四人の王子を國の外に放逐つたのである、この放逐たれた王子等は比摩羅耶山の麓の蓮池の畔に國を營み、その子孫が釋迦種族となつたのである、又その甘蔗王の下婢にデサーと呼ばれるものがあつて、誰の子とも知れぬ黒い子を生み、カンハと呼んだ、カンハは生れると直ぐ、『母さん私を洗うて下さい、母さん、この汚を清めて下さい、そうすればあなたのお爲になります』と云つたことは名高い話である、その時人人は黒奴（カンハ）が生れた、惡魔が生れたと云つたものであるが、それがカンハーヤナの家系の先祖である」。

するとその座に居合せた青年達が云うよう。「世尊、阿摩晝を餘りに嚴しく仰せられるな、阿摩晝は家系もよく、立派な先祖を持ち、學問もあり、辯論に長けた人であります、下婢の子孫とゆう非難をなし給うな」。

「青年達よ、若し汝等が、阿摩晝は無學であつて私と論議をするのに堪えぬと思うならば、阿摩晝を差しおいて、汝等自ら問いかけるが宜い、若しそうでないならば、阿摩晝に自由に論議をさせるが宜い」。

世尊は更に宣うよう。「阿摩晝よ、私は茲に道理のある問を掛けたいと思うが、その問には自分の好惡に拘らず返事をせねばならぬ。若し言を飜して逃げるような事があれば、汝の頭は七つに割れるであろう、阿摩晝よ、汝は婆羅門の耆宿達がカンハーヤナの家系の起原を如何ように説明していたか聞いたことがあるか」。

四。阿摩晝はこの問に對して默して答える所がなかつた。世尊は宣う。「阿摩晝よ、今は默つているべき時ではない、佛に三度この問を問われて默つて居れば、頭は七つに破れるであろう」。

その時、阿摩晝の眼には、空に手に眞赤に燒けた大きな鉢を取り、今にも飛びかかるように身構えした金剛手夜叉の姿が映つて來た。阿摩晝はこの恐しい姿に身ぶるいして、世尊に庇護を求め、世尊のお傍にすり寄つて、「世尊は何を仰せられたか、今一度お聞かせ下さい」と申し上げ、世尊の御語を聞いて、「仰せの通りであります」と自白した。青年達は阿摩晝のこの自白を聞いて、急かに阿摩晝をさげすむ思を起し、下婢の子孫よと詈つた。世尊はこれを救うてカンハの偉人であつたことを語り給うた。

「青年達よ、カンハは苦行を積んで、偉大な聖者となり、デツカン地方で勝れた咒文を學び、或る日、甘蔗王の處へ來て、王女のクツダルービーを妻に貰い受けたいと乞うた。家系の傳統を誇りとする甘蔗王は大いに腹立て、矢を番えてカンハを射ようとしたが、不思議にも矢は弦を離れず、手は弓を離れず、何にもすることが出來なくなつた。宮臣達は驚いて、カンハに謝罪つて王の赦しを請うと、カンハの云うよう。『王若し矢を下に向けて放てば王の領土は悉く龜裂を見るであろう、若し上に向けて矢を放てば、七年の間、王の領土に雨が降らぬであろう、太子を迎えて太子に矢を放つが善い、太子の一筋の毛も傷つかずに濟むであろう』。かくてカンハの語の通りにして事なきを得、甘蔗王もカンハの偉力に恐をなして、請われるままに王女を與えたのであつた」。

世尊はついで阿摩晝を呼び掛け、婆羅門と刹帝利の優劣を説き、系圖や種姓を誇る愚かさを教え、智慧と戒行とを具えるものが、人間や神神の中に於て最も勝れたものであると宣うた。

「喬答摩よ、その智慧と戒行とは如何なるものでありますか」。「阿摩晝よ、上ない智慧と戒行とを具えるには、種姓のことは何の關係もなく系圖も必要はない、『私と汝は相當うて居るとか、相當うて居ない』とか云うことは、緣組の場合にのみ必要なことであつて、種姓に縛られ、系圖に縛られ、地位の高下に縛られて居る人は、この上ない智慧と戒行とを遂に備えることの出來ぬものである」。

五。世尊はかくて、智慧と戒行のいかなるものであるかを説き、諸の禪定による心の修養を教え、次に仰せられるよう。「阿摩晝よ、この戒行と智慧の具足とを身に備えようとしても永久に實現すことの出來ない四つのものがある。第一には或る出家が私は地の上に落ちた果實だけで生命をつなごうと、いろいろの形の袋をもつて森に入つて住居する。第二には地の上に落ちた果實だけでは、甘んずることが出來ないで、果實や木の根で命をつなごうと、鋤と籠とを持つて森に入る。第三には、果實や木の根だけでは甘んずることが出來ないで、村や町の近くに火堂を作つて火に事え、人人の施に依つて生命をつなぎ、火に事える功德で效果を得ようとする。第四には、町の大きな辻の眞中に、四方に戸口のある小屋を立ててこれに住み、四方から來る出家に力の及ぶ限りの施をして效果を得よう

とする。阿摩晝よ、これらは皆形式にこだわるものであつて、永久に智慧と戒行とを具足えることが出來ず、只漸くその智慧と戒行とを具足えた人の侍者となることが出來る位のものである。然しながら、阿摩晝よ、汝は嘗て、師匠から智慧と戒行とを具足えるべき法を教えられ、それだけの行をしたことがあるか」。

「喬答摩よ、ありません、私はその仰せの智慧と戒行とを具えるには餘り遙かに離れて居ります」。

「阿摩晝よ、汝は弟子の一人として、この智慧と戒行とを具えることが出來ず、又これらの行をもなし得ないで居る、しかも汝の師の沸伽羅娑提婆羅門は、禿頭の出家は卑しい黒奴である、神の踵から生れたものである、尊い婆羅門と語を交えようと思うているのは、何とゆうことであろうか、惡口を云うている、これは汝の師の罪の一つである。阿摩晝よ、それに、汝の師の沸伽羅娑提は、波斯匿王の封を受けては居るが、王の前に出でて、相談にあずかることの出來ぬものである、話のある時には幕を隔ててする者ではないか。阿摩晝よ、汝は如何に考えるか、波斯匿王が大臣達と相談をしているのを聞いて奴隷の一人が、王はこのように云つた、大臣はこのように云つたとゆうだけで、その奴隷は王であり大臣であり得るであろうか、丁度このように、今人人の歌うている聖呪の作者である古の聖者達に眞似て、聖呪を覺え歌うと云うだけで、汝は聖者であり、聖者の地位に達していると云い得るであろうか。阿摩晝よ、汝は如何に考えるか、婆羅門の者宿達によつて語られる古の聖者達は、今汝が弟子の一人として行うように、髪や鬚の手入をし、身に香水を塗り、花環や腕環をつけ、白い衣を着て五欲を享けて樂しんでいたと思うか」。

「喬答摩よ、そうではありません」。

「然らばその聖者達は、今汝のしているように、眞白にかしぎ、黒い粒を取り除き數多の汁と菜とで味をつけた白飯をたべ、飾りをつけた女達を侍べらせ、尾を編んだ牝馬の馬車に乗つて長鞭をむちあて、堀をめぐらし、堡を構え、長い劍を持つた衛士に護られる城に住んでいたのであろうか」。

「喬答摩よ、そうではありません」。

「阿摩晝よ、そうすると、汝は聖者でもなく、聖者の地位に達したものでもない、阿摩晝よ、然し、何か私について、疑惑でもあれば尋ねるがよろしい」。

六。世尊はつずいて座を立ち、室を出でて經行を始め給うた。阿摩晝も又、世尊に從うて經行し、世尊の御身體を眺めて三十二大人相を調べた。世尊の御力によつて三十二大人相を殘らず見ることが出來て御暇して歸つた。

その時、沸伽羅娑提婆羅門は、郁伽羅村を出でて、多勢の婆羅門達を引き連れ、林に入つて阿摩晝を待つていた。阿摩晝は歸つて師を拜み、世尊の御身體に三十二大人相のあることを告げ、世尊との間に交された會話を細かに語り出すと、沸伽羅娑提は大いに腹を立てて云うよう。

「汝はなんとゆう賢者であろう、何とゆう智者であろう、汝は墮獄の罪を犯して來た、汝は尊い喬答摩のことをかれこれ云うものであるから、私迄がこきおろされて仕舞つた譯だ」。沸伽羅娑提は阿摩晝を足蹴にして、自ら世尊に遇いに行こうとしたが時が餘りに遲いからとゆうので、周圍のものに留められて家に歸り、供養の食事を用意させ、翌る日暗い内に炬火を持たせて、世尊の許に赴き、阿摩晝の罪を謝り、世尊の御身體に三十二大人相の具わるのを見て食事に御招待申し上げ、世尊の御教を喜び受けた。

世尊は布施の話、持戒の話、生天の話、欲の危險と汚とを說き、欲を出離ることの利益を教え、順次の法話に依つてその心を和らげ、次に諸佛獨耐の四諦の教を說き給うた。沸伽羅娑提は恰も淸らかな白布が色に染まるように、教の色に染められて、終世の信者として世尊に御歸依申し上げた。

第四節　自我の問題

一。世尊は又、舍衞城の祇園精舍へ入り給うた。その時遊行者の布吒婆樓は、多くの遊行者達と共に、末利迦王妃の立てた遊行者園の講堂に住んでいた。

世尊は早朝、托鉢の途中、布吒婆樓を訪わせ給い、布吒婆樓は仲間のものの無駄話を止めさせ、世尊をお迎え申しあげた。

挨拶終つて、布吒婆樓は世尊にお問い申すよう。「大德よ、私共は前に度度この講堂に集つていろいろの學派の人人と『想念の消滅』とゆうことについて語り合うたのであります。或る人は、想念の消滅には因も緣もない、生れる時に生れ、消える時に消えるだけであるといい、或る人は、想念は人の『我』であつて、我が來る時には想念が生れ、我が去る時には想念がなくなるといい、又或る人は、神通力のある人が想念を人に注ぎ入れたり、引出したりするのであると主張ります。私はその時、茲に世尊が在したならばと思いました、それは、世尊がかような事を詳しく知つていらせられるからであります。世尊、想念はどうして滅びるものでありましようか」。

二。「布吒婆樓よ、想念のなくなるについて、因も緣もないとゆうのは間違である。想念は修養によつて生れもし、又滅びもするものである。布吒婆樓よ、その修養とは何であるか。茲に人あつて、佛を信じ、出家してその教を守り、五官を攝め、小さな罪にも恐を見、煩惱の覆蓋を滅して第一の禪定に入るとする。彼は茲に以前の欲の想念を滅し、欲の遠離から生れる喜と樂とを得る。かくの如く欲の想念が滅びて、欲の遠離から生れる微じい眞實の想念、喜と樂とが生れるのである。これが修養によつて、或る想念が生れ、或る想念が滅びるとゆうのである。このようにして第一第三第四と次第に禪定をすすめ、第四の禪定に於て荒い想念が滅びて、苦樂を離れた微じい眞實の想念が生れるのである。これが修養によつて或る想念は生れ、或る想念は滅びるとゆうのである。

布吒婆樓よ、更に進んで空無邊處とゆう禪定においては、すべての物質と質礙と差別と想念とを滅し、「空のみ邊無くあり」と

ゆう想念が生れ、識無邊處とゆう禪定においては、空のみ邊無しとゆう想念も滅びて「識のみ邊無くあり」とゆう想念が生れ、無所有處とゆう禪定においては、識のみ邊無しとゆう想念も滅びて、「何物もあることなし」とゆう想念が生れる。これが修養によつて、或る想念は生れ、或る想念は滅びるとゆうのである。

布吒婆樓よ、このように次から次へと進んで、我弟子は想念の頂點に到りつく。ここまで到りついたものは更は考える。『この考えているとゆう事は、劣つたことである、考えるとゆうことのないのが、善いのである、考えたり思つたりして進めば、この想念は滅びるであろうが、又他の荒い想念が生れるであろう、それ故に、私は考えず思わぬようにしよう』。かくして彼は考え思うことを止めて、想念はほろび、他の想念は生れず、想念は全くなくなるのである」。

三。「世尊、想念と知識はいずれが早く生れますか」。「布吒婆樓よ、想念が初めに生れて、知識は後に生れるものである」。

「世尊、想念は自我でありますか、又、全く違つたものでありますか」。「布吒婆樓よ、汝は自我を信ずるのであるか」。

「世尊、私は物質によつて出來上り、食物によつて養われるこの肉體の自我を信じます」。「布吒婆樓よ、たとえ、自我が汝のゆうようなものであつても、想念が生れたり、滅びたりすることに依つて、想念と自我とは異つた物であることが知られるのである」。「世尊、私は四肢を缺目なく具えて居るところの心より成る自我を信じます」。「布吒婆樓よ、自我が汝のゆうようなものであつても、上と同じい理由によつて、異つた物であることが知られる」。

「世尊、私は物質ではなくて想念から成る自我を信じます」。「布吒婆樓よ、それにしても同じい理由によつて、想念と自我とは全く異つた物であることが知られるのである。布吒婆樓よ、汝のような異つた意見を持ち、異つた教に仕え、異なつた目的に進むものには、この事は甚だ知り難いのである」。

「世尊、それでは世界は常住でありますか」。「布吒婆樓よ、それは私の說かない所である」。「それでは世界は無常でありますか」。「それも私の說かない所である」。「それでは世界は有邊でありますか、無邊でありますか」、「布吒婆樓よ、それも私の說かない所である」。

「命は身體と一つのものでありますか、異なつたものでありますか」。「それも私の說かない所である」。

「人は死後存在するものでありますか、存在しないものでありますか。死後存在して存在しないとゆうようなものでありますか、また、存在するでもなく、存在しないでもないとゆうようなものでありますか」。「布吒婆樓よ、これも私の說かない所である」。

「世尊、何故にこれ等のことを御說きなさらないのでありますか」。「布吒婆樓よ、これは義を伴わず、法に契わず、修行と關係なく、執着を離れ、欲を離れ、正智を開き、涅槃に導くものでないからである」。

「それでは世尊は何をお說きなされますか」。「布吒婆樓よ、私は苦を說き、苦の因を說き、苦の滅を說き、苦の滅に至る道を說くのである」。

「世尊は何故にそれを御說きなされるのでありますか」。「布吒婆樓よ、これは義を伴い、法に合い、修行と關係り、執着を離れ、欲を離れ、正智を開き、涅槃に導くものであるからである」。

四。世尊はかくて座を立つて去り給うた後に殘つた遊行者達は、世尊のお姿が見えなくなると、四方から布吒婆樓に嘲りの雨を浴せた。「布吒婆樓よ、汝は喬答摩のゆう所は、何でも尤も尤もと肯うているが、喬答摩は、世間は常住であるか、無常であるか、有邊であるか無邊であるか、そうゆう問題に就ては、少しも確かな事を云わぬではないか」。布吒婆樓は云うよう。「いかにも喬答摩は、世間の常住等の問題については、何も說く所はなかつた、併し彼は法に依り法に立つ眞實の道を示してくれた、私はどうしてこのいみじい說を肯わないで居られようか」。

それから二三日を過ぎた後、布吒婆樓は象師の子質多と共に世尊を訪いたてまつり遊行者達から嘲笑を受けた話を申上げた。世尊は多くの盲人が一人の眼明を嘲笑うものであると仰せられ、續いて、「自我は死んで後この身體を離れ、病のない全く幸福なものとなる」とゆう說を破り、丁度それは戀を語つて戀人を知らず、梯子を作つて昇るべき高樓の在處を知らぬと同じであると仰せられた。

「布吒婆樓よ、自我の存在をゆう人人に三種ある、一には物質から作られた自我、二には四肢を缺目なく備えた心から成る自我、三には物質のない純粹の想念から成る自我である、私はこの三種の自我を離れる法を說く、汝が若しその法に從つて道を修むれば、汚を離れ、淸められ、この現在に智慧の充實と發展とを得るであろう。布吒婆樓よ、汝はその境地に猶苦惱があると考えるかも知れぬが、そこには苦惱はなく喜び、幸福と平和とがあり、心一すじに平安に住い得るのである。布吒婆樓よ、若し人あつて、私にそのあなたの捨てるとゆう自我とは何であるかと問うならば、私は、今汝が汝の前に見ているものがそれであると答える。布吒婆樓よ、このような私の說き方は根柢のないものであろうか」。「世尊、それは根柢のある說き方であります、梯子を作つて昇るための高樓を指し示し得るのと同じく、根柢のある說き方であります」。

この世尊の懇ろな教に動かされて、布吒婆樓は生涯三寶に歸依する信者となり、象師の子質多は世尊の許に出家して道を修むる人となつた。

五。或る日又、世尊が托鉢の途中孔雀苑に赴き給うと、遊行者達はいろいろな無駄話に耽つていた。世尊を見ると話を止めてお迎えをし、世尊の御尋ねに對して**サクル・ウダーイ**が申し上ぐるよう。「私が茲へ參る前にこの人達は無駄話をしていたのであるが、私が來たので、私から何かを聞こうとしていたのであります、今世尊がお出

でなされたから、世尊からお聞きしたいと待つて居ります」。

「ウダーイよ、何なりとも心に浮んだことを尋ねるが善い」。「世尊、ずつと前のことでありますが、或る全知全見を主張る人が、行住坐臥、いつでも全知全見があると申すので、私が昔のことを尋ねて見ますと、他の話に移し、果ては謂れもなく腹を立てたことがあります。私は其時、世尊は斯うゆうことに詳しくいらせられると思い起し、なつかしく思うたことがあります」。

「ウダーイよ、それは誰であるか」。「尼乾陀であります」。

「ウダーイよ、私は宿命を知つているから過去の事にも委しい、又天眼を有つているから未來の事も委しく知つて居る、しかし過去や未來の事は措くが善い、私は法を說こう、これあるが故に彼あり、これ生れるが故に彼生れ、これなきが故に彼なく、これ滅びるが故に、彼滅びるとゆう因緣の法を說くであろう」。

「世尊、私は現在この世で經驗をした事すら憶えて居ることが出來ません、どうして前世のことを知ることが出來ましよう、又、私はこの世で靈鬼をも見ることが出來ない、どうして人人の死先を見ることが出來ましよう、世尊は私にこれあるが故に彼あり、これなきが故に彼なしとゆう法を說いてやろうと仰せられますが、それは一層私には解り兼ねることと思います、寧ろ私の師から聞いた敎を、あなたの御尋ねによつて說明したいと思います」。

六。「ウダーイよ、汝の師の敎とは何であるか」。

「私の師の敎によると、これは最上の色彩のある光であるとゆうことがあります」。「その最上の色彩ある光とは何であるか」。「これよりも勝れた色彩のある光がないとゆうことであります」。「これよりも勝れたものがないとゆう色彩のある光は何であるか」。「それはこれよりも妙な色彩のある光がないとゆうことであります」。

「ウダーイよ、汝はいつまでも同じいことを云つて居るが、それは丁度、私は今世界一の美人に戀して居ると云つていながらその美人は何の生れか何處に住んでいるのか、色は白いか黑いか、丈は高いか低いかと問われて、それも知らぬ、これも知らぬとゆうようなものではないか、最上の色彩のある光と云いながら、汝はその色彩のある光が何であるかを示さない」。「世尊、質のよい淸らかな善く磨つた八角の瑠璃を、薄黃の毛布の上に置くと光り輝くように、自我は死んで後このような色彩のある光があり、病や禍のないものであります」。

「ウダーイよ、その毛布の上に輝く瑠璃と、暗夜の螢の光と何れが勝つていると思うか」。「暗夜の螢の光が勝つて居ります」。「暗夜の螢光と燈の光とを比べ、燈の光と大きな火の塊の光と比べ、大きな火の塊の光と雲のない空に顯れた宵の明星の光と比べ、其明星の光と半夜の月光とを比べ、半夜の月光と夏の空の陽光を比べて何れの光が勝れて居ると思うか」。「それは勿論螢の光よりも燈の光、月の光よりも日の光が勝れて居ります」。

「ウダーイよ、この月や日よりも光の勝れた神神は數限りなくある、それを私は知るから、これよりも妙な色彩のある光はないとは云わない、然るに汝は、螢の光よりも劣つたものを最上の色彩のある光あるものと云うて居る」。「世尊、この話はもう止めました、世尊と御話していると、これは最上の色彩ある光あるものだとゆうことが全く意味のないものとなりました」。

七。「ウダーイよ、ただ樂ばかりある世界があるか、又、ただ樂ばかりある世界を現わす方法があるか」。「殺生、偷盜、邪婬、妄語を止め、戒の苦行を修めるのが、ただ樂ばかりある世界を現わす方法であります」。「ウダーイよ、その殺生、偷盜、邪婬、妄語を止め、或る苦行を修める時に、自分はただ樂のみであるか、又は苦樂相雜つて居るか」。「苦樂が雜つて居ります」。

「ウダーイよ、ただ樂のみの世界を現わすための方法が、苦樂相雜つているのであるか」。「世尊、この話も止めます、世尊と御話している中に、私の云うことが意味のないものとなりました、世尊、それでは、ただ樂しい世界、その樂しい世界を現わす道がありますか」。

「ウダーイよ、欲を離れ、不善を離れて初禪に入り、次で二禪三禪と進むのがその道である」。「世尊、それは最早やその道ではありません、何故なら、ただ樂のみある世界が現れたからであります」。「ウダーイよ、そうではない、これだけでは、ただ樂のみの世界は現れて居らぬ、只その道のみである」。

この時、その會話を聞いていた遊行者達が大聲あげて叫んだ。「おお、こうなると、最早や吾吾の師の敎にないものとなる、吾吾はこれより上の事を知らないから」。彼等は第三の禪定をただ樂のみある世界と敎えられて、不殺生、不偷盜等の五法を修め、この境地に達しようとして來た。それゆえ、茲に恐慌を來たしたのであつた。サクル・ウダーイは之を靜めて、更に世尊に御問い申しあげた。

八。「世尊、それでは、どれだけすればただ樂のみある世界を現わすことが出來ますか」。「ウダーイよ、茲に苦、樂、喜憂のすべてを離れて偏りのない正しい心に住い、淨らかな第四の禪定に入つて、神神と交り語る時に、ただ樂のみある世界が現われるのである」。

「世尊、御弟子等はこのただ樂のみの世界を現わすために、世尊のもとに淨らかな行を行うのでありますか」。「ウダーイよ、そうではない、それよりも猶勝れた法があつて、それを現わすために、弟子等は私の許に淨らかな行を行うのである、茲に佛が此世に出で、在家のものが信を起して出家し、煩惱の覆蓋を離れて初の禪定に入り、次第に進んで第四の禪定に入り、禪定によつて靜まり練られた心で宿命と他心と漏盡との智慧を得、我が生は盡きた、淨らかな行はなし終つた、これが最後の生でこれより後に再び迷の生はないと解脫れるのがその勝れた法であつて、これを現わすために、私の許に淨らかな行を行うのである」。

「世尊、世尊の宣うところは誠に勝れて居

ります、暗に光をもたらし、迷えるものに道を示し給うように御說き下さいました、私は世尊の三寶に歸依し、世尊の御許に出家したいと思います」。

サクル・ウダーイが出家したいと申し出た時に、多くの遊行者達は驚き之を諫めて云うよう。「尊者**ウダーイ**よ、喬答摩の許に出家なさるな、卿は水壺であると一しよに匙であるように、師として立つとともに弟子として御學びなされて宜いではないか」。

サクル・ウダーイは、かくしてその出家の志を他に妨げられて思い留つたが、心は深く世尊に歸依するものとなつた。

九。或る日、婆羅門の闍奴蘇仁は、世尊を祇園精舍に尋ね、申しあぐるよう。

「世尊、在家のもので、世尊に對する信仰から、出家して、世尊を先達とし師とするものは、善く世尊の先例に從つて參りますか」。「婆羅門よ、その通りである」。

「世尊、人里離れた遠い森の中に住むとゆうことは困難でありましよう、隱遁するとゆうことは誠になし難いもの、いまだ禪定を得ないものにとつては、林は誠に淋しいものであると思います」。

「婆羅門よ、その通りである。私が未ださとりを得ない時に、禪定を得ないものに取つては、林は淋しいものであると考えたことがある。婆羅門よ、それで私はまた考えた。いかなる出家でも、身と口と意の三業が清らかでなく、生活のしかたが清らかでなければ、そのために森は恐しいものである、然し私は三業共に清らかであり、生活のしかたも清らかであるから、森が恐しい筈がない。こう考えて、森の住居は、私に寂靜の樂を與えたのである。

婆羅門よ、又、私は思うよう。若し出家にして、卑しい肉欲と劇しい貪欲とを有ち、瞋恚の心と惡い考とを持ち、疎懶と睡眠に犯され、浮薄にして猜忌の心あり、自らを讚めて他を毀り、利養や名稱に囚われ、怠りがちで勇氣乏しく、正しい心と念がなく、心が搖ぎ亂れ、智慧がなくて人里離れた遠い森に住むならば、それに依つて森は恐しい處となるであろう。然し私はそうゆうものではない。婆羅門よ、これに依つて私は森の生活に愈寂靜の樂しみを見出したのである。

婆羅門よ、それについて私は思うよう。『私は新月の夜とか、滿月の夜とか、または月の前の六日、後の八日とゆう樣な殊更の夜に、恐しい身の毛のよだつ森や林の墓場に入つて見よう、そうしたならば、恐らくあの恐怖に遇うであろう』と。婆羅門よ、それで私は、その殊更の夜に森や林の墓場に入つて見たが、夜が更け渡ると獸がやつて來る、鳥が樹の枝を落す、風が木の葉を吹きならす、恐しさがだんだん身に迫るのを覺えた。然し私は思うよう。『恐しさの來るのを待つような心持は愚かな事である、恐怖が來れば、來るに從つて征服げれば善いではないか』と。

それで婆羅門よ、歩いている時に恐怖が襲えば歩きながら恐怖を征服げた。坐っている時に來れば坐っている儘に征服げた。立ち留つている時に來れば立ち留つて居る儘に征服げた。そのために樣子を變えると

ゆう事はしなかつた。

婆羅門よ、或る出家は、强いて夜は晝と同じく、晝は夜と同じと見ていようとするが、これはその人の迷妄である。私には夜はやはり夜であり、晝は同じく晝である。

婆羅門よ、多くの有情の利益のため幸福のため、人天の愛憐のために出現れたのであるとゆう語が、他に對うて眞實であるならば、私についても云われ得る事である。私は勤め勵み氣太く正念に何物にも惑わされず、身體は暢やかに靜かに、心は一つの境に集り、愛欲を離れ、不善の法を離れて禪定に入り、その柔かに調えられ靜かにして動搖のない心で、煩惱の盡きたことを知り、無明が破れて明が生れ、闇が去つて光が顯われたのである。

婆羅門よ、汝はこのように思うかも知れない。『喬答摩は、今日でさえ、貪欲、瞋恚、愚癡を離れていないから、その煩惱を離れるために、人里離れた森に住むのである』と。然しさように思うてはならぬ、私は二つの理由によつて森に住むのである。一つは自分の現在の生活の平安のためであり、一つは未來の人人を憐み、範を示そうためである」。

闍奴蘇仁婆羅門は、世尊の教を喜び、未來の人人に愛憐を示し給うことを感謝んで座を去つた。

一〇。さきに世尊が、一日一食を取るように教え給うた時、跋陀利はこの教に乖いて申しあげた。「世尊、私は一日一度の食を取るに堪えません、さような輕い食事をしていて、生涯修行が出來まいかとあやぶまれます」。

「それでは跋陀利よ、招待を受けた處で、一部を食べ、一部を持ち歸つて食べるがよい、それで身體を養うことが出來よう」。

「世尊、それも私には出來ません」。

跋陀利は世尊の定め給うた規則を、他の弟子等が守るにも拘わらず、出來ませんと言い切つて守ろうとせなかつたが、そのために恥じて、安居の三月の間は世尊の御前に出ることが出來なかつた。

やがて雨期の三月が過ぎて、衣の修理も終り、世尊が遊行に出掛けようとせられる頃、跋陀利は他の弟子の諫めによつて世尊の御前にすすみ、「世尊、私は愚かにも正氣を失い、世尊の定め給うた戒を守らず罪を犯しましたが、御許しを願います」と申し出でた。世尊、宣うよう。「跋陀利よ、誠に汝の云う通りである、この三月の間、弟子達も信者達も異教の人達までも、跋陀利は師の教を守らぬものであると蔑んでいたことが、汝には解らなかつたのである、跋陀利よ、茲に私の弟子に、泥に入れよと私が云うならば、彼等は否とゆうであろうか」。「世尊、そうは申しません」。

「跋陀利よ、泥に入れよとは命けるべきことでない、而も、この命令を受けて、否とゆう荒い語を放つものはない、然るに汝はその德を缺き、正しい命令を受けながら否とゆう荒い語を放つている。跋陀利よ、師の戒を守らぬものが、覺を得ようとして森に入り、空屋に入り、その場所にても師を畧り同學者を畧り、自分を畧つていて覺を得られるであろうか、勿論出來ること

てはない、何故なれば、それは戒を守らぬものの當然のことであるからである。跋陀利よ、師の教を守るものであつて、森に入り、空屋に入り、師を詈らず同學者を詈らず、自分を詈らないで、初めて覺を得ることが出來るのである」。

一一。「世尊、何故に僧伽の人達は、或る弟子の罪をば責めて改めさせ、或る弟子の罪をばその儘に見逃して改めさせずに置くのでありましようか」。

「跋陀利よ、責められて矛盾つた言い譯を云い、謂れない忿と惡意を表し、僧伽の喜ぶことをしようとしない者には、僧伽の者は近ずこうとしないのである。また信が薄く、愛の少ない弟子を餘りに責めて、その信と愛とを失わしめてはならぬと思うてその儘にして置くのである、丁度一眼しかない者の眼を、周圍のものがいたわり大切にするようなものである、責められて素直に直ぐに、怒と惡意を表さないものをば、僧伽は早く罪を改めさせようと責めるのである」。

「世尊、戒則の少ない時に、覺を開いた御弟子が多く、戒則が多くなつて、却つて覺を得る者が少いのは、どうゆう譯でありましようか」。

「跋陀利よ、人人の行が衰え、正法の隱沒によつて、戒則が益多いようになり、覺を得るものが益少いようになるのである、僧伽に煩惱の起るべきものが顯れぬ內は戒則を設けないが、僧伽が大きくなり、所得が多くなり、讃仰の度が高まり、敎が多くなり、年數が經つと、其處に煩惱の起るべき法があるから、それを防ぐために戒則を增すのである。跋陀利よ、弟子等の數のまだ少かつたころに、私は良馬の喩を以て法を說いた事がある、汝は今それを憶えて居るか」。

「世尊、憶えて居りません、私は長い間戒則を守らないで居ました」。「跋陀利よ、それだけの理由ではない、私は長い間、汝の心を知り拔き、汝が私の說法に對して熱心でなく、耳を傾けて聞かなかつたことを知つている、今その良馬の喩を說き聞かせよう。跋陀利よ、喩えば巧みな調馬師が良い馬を得て轡をはめる、その時には前にせられない事をせられるので、跳ねたり騷いだりするが、それも慣れると溫順になる、今度は甲や脛當をつける、更にそれに慣れると、今度は一鞭あてると四足を一度に上げて飛ぶこと、馬上にありながら地上の武器を取れるように馬に圓を畫かせること、蹄の先で輕く步くこと、速かに走ること、いかなる響にも驚かせぬこと、王の德を知り、王者の乘物に相應しくなること、鞭の當てようを了つて、主人の思う所へ走ることゆうようなことを敎える、かくして、これ等の性質を具えて馬は王の乘馬となるのである。跋陀利よ、弟子も十法を具えれば世間の尊敬と供養に値し、此上ない福田となることが出來る、十法とは聖者の正見、正思、正語、正業、正命、正精進、正念、正定、正慧、正解脫である」。

第五節　五武器王子

一。世尊は多くの弟子を連れて、アーラビよりサーケータを過ぎ、舍衞城に入つて祇園精舍に止まり給うた。その時或る弟子が今まで努め勵んで道を修めたけれども何の光も見えないので、遂に懈怠の心を起して退轉いだ。世尊は之を誡めて次のように語り給うた。

遠い昔、ベナレスに梵達王とゆう王があつた。その王子は五武器と名けられ、遠くタツカシラに學び、業を終えて歸ろうとする時、師は五つの武器を與え、途中は殊に心をつけるようにと溫かい注意を與えた。

王子は道を急いで、ベナレスへの道中、或る日、森へかかろうとすると、人人が止めて云うには、「この森には油毛とゆう夜叉が住んでいて、誰ひとり恙なく越したものはいないから、通らぬ方がよいでありましよう」。けれども自ら恃む所のある王子はこの人人の諫めを聞きながして森に入り、ちようど森の中程までも來たと思われる頃果して夜叉が顯われた。椰子の樹ほどに丈が高く、盆の樣に圓らな兩眼は火と輝き、鋭い牙と荒鷲のような嘴とを尖らし、腹は紫色にふくれ上り、手の掌、足の踵は青黑く光り、全身毛を以て覆われた怪物であつた。「何處へ行く、止まれ、俺の餌食じや」。雷のような聲で頭から奴鳴り立てた。王子は靜かに答うるよう。「私はこの森に入る時から、汝に遇うことは思定めて來た、私の傍へ來たのは汝の運のつきである、私の手には毒矢がある」。斯ういつて毒矢を番え、ひようと放てば、毒矢は夜叉の身體に當つたが、ただ柔かに夜叉の毛に付くだけで身を痛めない。幾筋射ても射る矢射る矢は、皆夜叉の毛に附くばかりであつた。夜叉はその矢をもぎとつて足下に踏み躙り、王子に近ずいた。劒を取つて斬れば、劒は毛に附き、鉾を以て突けば鉾は毛に吸い取られ、棒も益に立たず、いずれも只夜叉の油毛に吸い付くだけであつた。「夜叉よ、汝は骨て五武器とゆう私の名を聞いたことはないのか、私はこの森に掛る時に私の矢や劒や鉾や棒を賴にしていたばかりでなく、私自らを賴としていたのである、私の鐵のような拳の味をなめるが善い」と右手を以て打てば右手は毛に、左手を以て打てば左手も毛に、左右の足もぴたりと毛に吸いつけられて、何の役にも立たぬ。よしそれならこの頭で碎いてやろうと頭を以て胸を打てば、頭も毛に吸い付いて、王子の身體は宙に垂れさがつた。しかも王子は少しの恐怖も見せず、敗けたとゆう氣勢も見せない。夜叉もその勇氣に驚いて、この森の中でこんなに氣太な人間に遇うたのは初めてであるが、どうして此小さな人間が死を恐れないのであろうかと怪しみ、尋ねるよう。「汝は今全り私の手の中にあるのであるが汝はどうして少しも恐れないのであるか」。「恐れとや、夜叉よ、誰しも一度は死なねばならぬではないか、まして私は猶一つの武器を持つている、それは私の腹の中の金剛の武器である、汝は私を食べてもその武器を消化すことは出來ない、金剛の武器は汝の腹の中に入つて、內から汝を細く切りきざみ汝を死の運命に運ぶであろう、それ故私は少しも恐れぬのである」。

これを聞いて夜叉は驚いて思うよう。こ

の若者は本當のことを云ている、成程、私はこんな勇しい若者の肉の一片でも消化すことは出來ない、放してやろうと、「若者よ、羅睺(月蝕の神)の手から月が放れるように、私の身體から離れ、急ぎ歸つて兩親の心を喜ばせるが善い」。「夜叉よ、私は歸ろう、然し、汝がこうして肉を喰う夜叉になつたのも皆前生の業である、若しこの罪を何時までも續けるならば、汝は益冥に沈むであろう、私に過うたとゆう事から今後この罪を犯さぬがよい」。王子は、これを機會に五惡を誡しめ、五善を說き、夜叉も說法を喜んで五戒を受くるに至つた。王子はその五つの武器を携えて芽出度ベナレスへ歸り、父の王に續いで正しい政治を布いたのであつた。

弟子等よ、この物語をよく味うがよい。何物にも撓まず、困難に敗れずに努め勵めば、遂には目的を果し得るものである。

二。今や世尊の德化は王宮の奧にも及び末利夫人を初めとして、妃達は悉く佛の敎を喜び、人身は得難く、佛陀の出世は値い難い、それに我我は屢ば精舍に世尊を訪い奉ることも難く、世尊の御口ずから法を聞くことも甚だ稀であると思い、ある日王の許へ何とぞ大王の許を得て、敎團の御弟子を招待して御話を承りたいものであると申し出てたので、王も喜んで之を許した。

或る日、王は花園に遊びに行こうと思い用意をしていると、其處へ園守が來て、世尊が入らせられて樹の下に御いでなされるむねを申し出た。「よろしい」と答えて王は立ち上り、馬車を命けて花園へ赴き、世尊を御訪ね申しあげた。

世尊は樹の下に座を占め給い、その御足の許に一人の男が蹲つて何事か敎を受けている樣子である。王はこれを見て暫く躊躇うたが、ああして世尊の敎を聞いている上は有德の人でなければならぬと心を安ため、世尊に近ずき拜禮をして座を取つた。一人の男とゆうはチヤツタバーニとゆう信者であるが、世尊を信ずることが厚く、今も世尊に侍つて敎を受けているので、世俗の王を迎えて座を立ち禮拜するのは世尊に禮を缺くことであると思い、其儘にしていた。王はこの有樣を見て心中面白う思わず、腹を立てていると、世尊は王の氣持を知られ、王の心をなだめるつもりで、彼の智慧を具え、覺を得た有德の者であることを語り給うた。王は世尊がこれ程まで仰せられる人であるから、ただ人ではないと思い、「何なりと必要なものがあれば聞かせて欲しい」と申し出でた。チヤツタバーニは只、「有難う」と云うのみであつた。その日も王は世尊の敎に喜ばされて、後宮の妃達の申し出を忘れて座を立つて歸つた。幾日か經て或る日、また祇園精舍に行く途にてチヤツタバーニに出遇い、呼寄せて云うには、「世尊から承れば、汝は博學の人とゆうことであるが、私の後宮の者ども皆法を聞き度く思つて居ること故、どうぞ法の話を聞かして欲しい」。チヤツタバーニは、「法を說くこと、わけて御殿の奧へ上つて說法することは在家の者にとつて相應しいことではありません、それは僧伽の力のお仕事でありますから」と斷つた。波

斯匿王の願により、阿難は世尊の仰せを受けて、それより毎日のように後宮に行つて法を說くこととなつた。

或る日、阿難が後宮に行くと、後宮を擧げて憂の雲に閉され、說法に依つても喜の色を見出す事が出來ぬ。それは王の冠につけてあつた貴い寶玉が何者にか盜まれて、後宮を擧げて嚴しい詮議の下に置かれたために、誰も彼も命に關る王の怒を恐れていたのであつた。阿難は之を聞いて氣遣わないようにと慰め、王の處へ行つて云うよう。「數多の人人を苦しめないで見出す法があるからそれに御依りなさるが善い土塊の玉をこしらえて、嫌疑のある人人に與え、明日の夜明けまでに斯く斯くの所へ置けよと命令られ、明朝それを御檢べなさい、若し一日で出なければ、二日三日となさるが善い、そうすれば誰も苦しめずに寶玉は事なく戻るでありましよう」。王はこの敎を容れて行うて見たが、まだ出ない。三日目に阿難は王宮へ來て、まだ效のないよしを聞いて、今度は大きな水瓶に水を一杯盛つて、それを密室に置き、帳を下して寶玉を盜んだ者は思うよう。「阿難尊者が頻りに骨を折られるが、玉が出なければ出るまでしつこく遣られるであろう、ここらで玉を出して置く方がよいであろう」と密かに玉を持つて其室に入り、水瓶の底へ沈めて出て來た。總ての人が順番にその役を終つて後、水瓶を空けると寶玉は見出され、誰一人苦しめることなしに、王の手許へ戻つて、この事件はおさまつた。

三。この評判が次第に傳つて祇園精舍の人人の耳へも入つた。或る夕暮弟子達が集つて、阿難の智慧を讚えて居ると、世尊が不圖其處へお出でなされたので、弟子達はその話を詳しく申しあげた。世尊はこれを聞いて次の話をなされた。

弟子等よ、遠い昔にもそうゆうことがあつた。ベナレスの王が數多の妃達をつれて花園に遊び、樂しい時を過した後で、妃達は瓔珞をとり衣を脫いで、清水を滿えた池に入つて水を浴びたが、その時、王妃は眞珠の頸飾を取つて上衣で裹み、箱に入れて腰元の一人に見張をさせて水に入つた。先程から木蔭に隱れて之を見て居た一匹の女猿は、腰元の樣子を傍目もふらずに見ていたが、腰元の注意がゆるんでうとうと眠り始めると、脫ぐる兎のように飛び出してその頸飾を盜み、木の上に上つて他の猿に見付けられてはならないと、木の穴に隱し何氣ない態をして見守つていた。腰元が氣が付いて見ると箱の中が取り散らされ、大切に預つた眞珠の頸飾がない。驚いて叫びを立てると、近侍の武士は馳けつける、腰元は眠つていた中に取られたとも云われぬので、今一人の男が顯われて、頸飾を强奪して逃げたと知らせる。すわとゆうので、武士は八方へ走り、盜賊を追いかける。一人の田舍の男がその附近に居たが、この音を聞くと驚いて逃げ出そうとするのを捕えて問詰めた。その男は拷問を恐れ、無實の罪を引受けて白狀し、王の前に引き出され

て、何處へ隱したかと問われ、「大王よ、私の樣な貧しい者に、何一つ金目のものを持つ筈は御座いません、そんな寶を盜んで見ても使う道も知りません、長者の命を受けて盜み、長者に手渡し致しました」と逃げた。長者を呼んで聞くと、長者は、「輔師にやりました」と答える。輔師に聞くと「樂人に與えました」と云う。樂人に聞くと「娼婦にやりました」と答える。娼婦を呼んで尋ねると「妾は少しも知りません」とゆう。その中、日も暮れたので、みなは獄屋に下げられた。その夜一大臣は家に歸つて思うよう。「これは不思議な事件である、頸飾の無くなつたのは花園の中で、門は堅く守られて居るのであるから、外の者が取る筈がない、又內の者が取つて逃げ出すことも出來ぬ筈である、この貧しい男が長者にやつたとゆうのは只免れる口實であろうし、長者が輔師にやつたとゆうのは、輔師を引っ張り込んで助かろうとゆう算段であろう、輔師が樂人を引き合に出したのはどうせ牢屋で幾日か過さねばならぬのなら樂人をつれて樂しい音樂でも聞こうとゆうのであろうし、樂人が娼婦に與えたと云うのは、せめて一人は美しい顏でもそろえたいとゆうのであろう、これはどうしても他に盜んだ者がなければならぬが、あの花園は猿が群れているから女猿の孰れかが取つて隱したのであろう」と、密かに家來をやつて牢屋の中を伺わせると、果して五人は互に責め合つて意中を語つている。五人の罪のないことを知ると大臣は多數の猿を捕えさせ、それに一一僞玉でこしらえた首飾を附けさせて花園へ放つた。猿は大いに喜んで頸飾をちやらちやらさせて花園の中を歩いていると、件の女猿はそんな僞玉の頸飾が何になるか、本物の眞珠の頸飾はこれであると許り、誇に驅られて、隱した場所から取り出し、頸にかけて出て來た。これを見守つて居た役人達は眼ざとく見付けて奪い取り、大臣の所へ持つて來た。大臣は王にその頸飾を返して五人の無實を證明した。王は喜んで次の歌をもつて大臣を賞讃した。

戰には勇者、會議には眞面目なる人、
甘きものは愛する者へ、事あるときには、智慧ある人ぞ望まる。

弟子等よ、遠い昔のことではあるが、こうゆうことがあつた。阿難は正しく事ある時に望まるる智慧者である。

四。 舍衞城に一人の信厚い青年があつた父親が死んで後は母親を大切に養い、老いさき短い母親の安樂をその願として、何一つ不自由のない樣にと仕えていた。母親はわが子供が一人前となつて、妻もめとらずに、自分に仕えて呉れるのが嬉しく、妻を持つようにと勸めても肯わないので、自ら一人の娘を見付け出し、家に引き取つて我が子の妻にした。青年は母親の親情を嬉しく喜び、家內和ぎ樂うて時おり、精舍に參詣しては世尊の御敎を聞いていたが、嫁は不圖心が變つて、姑を惡み出し、夫に勸めて姑を別に住ませる樣にと仕向けた。之が爲に家內の中に和樂の聲が絕え、爭の叫が起り、煩惱に汚れた風が吹き起つた。然し青年は絕えず、佛の力を得て堪え忍び、

遂には妻も心折れて、再びまめまめしく姑に仕えるようになり、平和の歡喜が再び家內に音ずれる樣になつた。青年は或日世尊に詣でて法を聽き、世尊の、母を大切にしているかとゆうお尋ねに、今迄の在りし次第を申しあげた。世尊は次の話をして孝行の息子を勵ましゝ給うた。

五。 若者よ、昔汝と同じように父の死して後母を大切にする孝行息子があつた。母が同じい家柄の娘をつれて來て、娶合わすと、最初の中は家內も圓滿であつたが、女同志の我儘が出だすと嫁は姑を邪魔にして、いろいろの方法で姑を拋り出す計畫をした。孝行な息子も女の心に引かれて、暫く母を外に出して置く決心をしたので、母は泣く泣く親類の家をたよつて、賃仕事にか細い活計を立て、その日その日を送つていた。姑が家を出ると間もなく、妻は子を姙み、月滿ちて子を產み落し、夫や近所の人人に、「これでも、あの人の惡いことが知れるとゆうものでありましよう、あの人の家にいる中は、得たいと思つた子供もなくて淋しかつたが、あの人がいなくなるとこんな善い子が生れました」と言い觸らした。淋しくあじきない日を送つている母親はこの事を人傳に聞くと、口惜しくてならず、「これでは世の中に正しい事は死んだとゆうもの、母を逐い出して、睦じく立派に世渡が出來、子供も出來て賑やかになれば、世に正義は死んだも同じこと、正しい事の葬式を致しましよう」と、氣も逆立ち、鍋と杓子と米とを持つて墓場に行き、水に入つて白い衣物をつけ髮を亂して米を磨ぎ始めた。丁度その時帝釋天は人間の世界を眺め廻していたが、これを見付けて氣の毒に思い、婆羅門の妻をして、母親の前に顯われ、「汝は、そのようなことをする前によく考えて見るが善い、誰がお前に正義が死んだと語つたか、力の强いこの千の目のある正しい法の我は死なないではないか」。「いいえ、確かに正義は死にました、妻はよくそれを見ました、惡い事をする人が榮えて居るのがその證據、子供のなかつた家の嫁に、妻を逐い出して子供が出來、家の主人を切り廻して樂しく暮しているのが何よりの證據であります」。「女よ、法の我はこのように確かに生きている、私は汝の爲にこの世に來たのである、それでは汝の惡い嫁も孫も、私の火で一緒に燒いて仕舞おう」。これを聞くと母親は驚き、孫を燒かれては大變と、「どう致しまして、神樣、どうぞ妾の嫁も孫も妾も仲善く暮して行けますように御力添えを願います」。「女よ、汝がいじめられても、汝自ら正しい法を捨てないならば、汝は可愛い孫や嫁と睦じく暮せるであろう、恐れる事はいらぬ、汝の子も嫁も、私の力で氣がついて、今頃汝を迎えに此處へ來るであろう、勤め勵んで善を修めよ」と申渡し、妾を消して天界へ歸つた。

果して子供と嫁とは母を尋ねて墓場に來り、今までの重なる罪を詫び、母を迎えて家に歸り、平和の月日を送つた。若者よ、自ら法を捨てない者には、法は永久に死ぬことはない。母を大切に家內睦まじく暮すが善い。

第六節　賴吒愁羅

一。世尊は斯くて俱流の國に道を傳え、鑑蘆吒村の北、尸攝愁園に在した。その國の人人は世尊の御名を慕うて四方よりここに集り、法を聞いて歡の思を深くした。是等の人人の中に村の長者の子賴吒愁羅があつたが、多くの人人の立ち去つた後で、恭しく世尊を拜み奉り、「世尊、若し私が家にあるならば、家の事に煩わされて御教のように行うことは出來ないと思います、どうぞ私の出家を許して下さい」。

世尊は、「もし兩親の許を得るならば」と仰せられたので彼は止むなく家に歸り、兩親の許を乞うた。兩親は驚いて語るよう。「我子よ、汝は私達の間の一人子で、あけくれ厭わぬ愛情をそそいで來た、よしや汝の命が終つても、私達は汝を捨てることは出來ぬ、どうして生き別れに堪えることが出來よう」。

されど賴吒愁羅は只管出家を求めて止まず、兩親が前の言葉を繰返して之をとどめると、彼は地に臥して食を絶ち七日に及んだ。兩親もその傍らに赴いて掻口說き、「我子よ、汝の身體は輭く坐るにも寢るにもいつも好い床を用いた、出家して道を學ぶことは容易いことではないゆえ、家に居て施をなし、福を修めるがよい」。

賴吒愁羅は口を緘んで答えない。多くの親族や知合いの人達は兩親の賴みによつて彼の許に赴き、交交出家の生活の難いことを述べて思を翻すようにと諭したが、彼の心は雨降る毎に固まる大地のように、說諭の加わる毎に出家の念を堅くした。親族の人達も施す術がない。兩親に語るよう。

「賴吒愁羅の願を許されよ、彼が若しその願のように出家の道を樂しむとしても、此世に於て再び相逢うことは出來る、もし又、その道を樂しむことが出來ないならば兩親の家に還るに相違ない、このまま彼の願を阻むならば必ず死に至るであろう」。

兩親も理に從い、「道を學んだならば、必ず還つて私達を見るように」といつて子の出家を許した。賴吒愁羅は親族の人達から此許を聞き、躍り上るほどに喜び勇み、直ちに尸攝愁園に在す世尊の御許に詣でて出家の許を受けて御弟子となつた。

その後、彼は祇園精舍に赴き、靜かな處において、心を勵まし道を修め、遂に覺をひらいた。やがて十年の歲月は流れた。彼は茲に故郷に歸り、父母に見えようと思い立ち、世尊の御許を請い奉ると宣うよう。

「汝はいま故郷に還るとしても、戒を捨てて欲の道を行くような憂えはない、往いてまだ救われぬ者を救い、證らぬ者を證に入らしめるがよい」。

二。彼は恭しく仰せを受け、自らの房に入り臥具を收め、衣を着け、鉢を持つて遊行の途に上り、ゆきゆきて鑑蘆吒村の北なる尸攝愁園に着き、そこに一夜を過して翌日村に入り、家並に食を乞い父の家に立つた。この時父は庭にあつて髮を梳つて居たが、賴吒愁羅の姿を見るや詈るよう。

「これら禿頭の惡出家のために、私は限なく愛をかけた一人子を奪われた、世繼がないので私の家は破られて、仕舞うた、かような者に食物などを與えるに及ばぬ」。賴吒愁羅は之を聞いて速かに門を出たが、その時下婢が臭くなつた食物を塵芥に棄てようとして出て來たのを見て、下婢を呼止め、その食物を鉢に戴いた。下婢は賴吒愁羅であると知つて急ぎこの由を父に告げると、父は驚き喜び、左手に衣を取りつくろい右手に髮をなでつけ、我子の行先を尋ね、とある壁に向うて臭い食物を喰べておる我が子を見つけ、呆れて、「おお賴吒愁羅よ、汝はどうしてそのような臭い物を喰べるようになつたか、又、どうゆうわけで此村に來ながら兩親の家に還らないのか」と尋ねた。彼は靜かに、「居士よ、私は父の家に入つたけれども施を受けることが出來ず、只詈られた、よつて速かに其處を出たのである」。

父は理に從うて我子に謝り、敬の思を以て扶けいたわり、懇ろに家に招いて妻にその由を語つた。母は躍り上らんばかりに喜び、直ちに食物の準備をととのえ、召使にいいつけて金銀や財寶を山のように積み上げ、賴吒愁羅の許に行つて云うよう。

「おお我子よ、此寶は母のものである、父のものはどれほどあるか知れない、今この寶を悉く汝に與えるであろうから、どうぞ出家を止めて家に還り、施の德を積んで下さい」。

彼は靜かに母に諭すよう。「母よ、私のためとならば、これ等の寶を大きな袋に入れて車に運び出し、恒河の深い淵に殘らず沈めて下さい、何故かと云えば、人はこの財寶のために、憂き悲しみにまつわられて眞の樂を得ることが出來ないのであります」。

母は財寶では我子の心を動かすことは出來ないと知り、若い女達を美わしく裝わせて、彼に侍らしめた。彼等はしとやかに彼に近ずいて云うよう。「君は何故に年若な妾達をすてて冷い道を修め給うか」。「妹よ、私は色香を獵るために出家したのではない、今や道を得て爲すべきことを爲し了り、心に求むる處はない、美しい妹達も私には少しの要もない」。彼等は「妹」と呼ばれて、遠ざけられている有樣を知り、爲す由もなく泣きくずれた。

この時賴吒愁羅は父母に對い、「あなた方は何故に私をこのように煩わされるのであるか、若し食を施される志があるならば速かに施して頂きたい」と云えば、父母は自ら立つて水を灌ぎ、樣樣の美わしい食物を捧げ、心ゆくばかりに飽かしめ、小さな座を彼の近くに設けて彼に侍つた。彼は父母のために法を說き、歡に溢れしめ、座より起つて次の歌を唱えた。

美わしの髮飾り、寶の瓔珞、紺青の黛、畫ける眉月も、覺に入りし人には甲斐なし。

繒衣に臭き身をかざり、樣樣の香を薰ゆれど、みな僞りの幻ぞかし。

捕われし鹿の網を斷ち、その門を破るごと、我いま、餌をすてて立ち去らん、誰か縛を樂しまめ。

三。唱え了ると、彼は直ちに去つて鑑蘆吒園に至り、とある樹下に坐つた。その時國主の拘牢婆王は城を出でて林に遊び、侍

臣のつげによつて頼吒恕羅に近ずき、車より下り、傍らに座をとつて問答をした。王問う。「若し卿の家が衰えた爲に出家したとゆうならば、私は多くの財寶を卿に施すであろう、出家を止めて家に歸り布施を修めたらばよいではありませんか」。彼は答えて云う。「王よ、夫は私に對うての正しい待遇ではない、もし王が私に向うて、この國はよく治つて民安らかに、五穀また實つて恐れも諍もなく、食も乞い易い、もし卿が此國に住むならば、私は法に隨つて護るであろうといわれるならば、正しい待遇とゆうものである」。

王は彼のゆうごとくに述べ、更に言葉を改めて、「尊者よ、出家する原因に四種ある、と聞いております、第一は長く病んで欲を滿すことが出來ぬため、第二は年老いて身の自由を失い樂しむ所がないため、第三は財物を失うて衣食の道に窮るため、第四は家族に死別れて世を儚むためである、然るに卿は年も若く健かに、家も富み家族にも變かない、何故にすべての樂を捨てて出家をしたのであるか」。

頼吒恕羅答えて云う。「王よ、私は佛の教え給う所の四の事柄によつて出家した。是は人として避け難い惱である。王は、今の時と若い時と比べて、氣力や武術に衰えはないか、又、王は病の床にあつて烈しい苦を受ける時、臣下にその苦を代らせることが出來るであろうか。又、王はいかに富と榮華があつても、死を避けることが出來るであろうか。死の來る時はあらゆる物を捨てて行かねばならぬ。さればこの世には眞に倚るべきものとて一つもない。王よ、その上、人には限りない欲がある。この國は今富み榮えていても、もし人あつて東の方に豐かな國があると王に告げるならば、王は兵をもつてその國を取ろうとするであろう。南、西、北の各にもかような國があるならば、王は飽くことなく其等の國國を攻取ろうとするに相違ない。まことに此世には滿つることなく、飽くことがない。それは物のためではなく、人間の愛着の念が人間を使うためである。王よ、私は是等の避け難い四の事柄を見て、出家して道を得たのである。

財ある人も、愚かのために施さず、得ればいよいよ求め、惜みてあつむ。天が下しろしめすとも、貪は猶、國とゆう國を求む、貪のあかぬ間に、命つきて妻子は哭き、積む薪に灰とならん。死するとき、妻も子も隨わず、財あらねば、富めるも乞食に異らず。愚かの人惡をつくりて、自らを縛り、熟れては墮つる果物のごと、屢ば迷の暗に入る。

こころ、美わしき毒を好み、欲のために害わる。王よ、これを覺りて我は、佛の道に入りしなり。

王はこの教を受けて信じ喜び、「尊者は能く迷から出でられた、私はいまより、尊者に歸依いたします」。「王よ、私に歸依してはならぬ、佛と法と僧伽とに歸依せられるがよい」。王は教の通りに從うて、好き信者となるに至つた。

第二章　教團の統制

第一節　十重、四十八輕戒

一。世尊は或る時、はかりない神神や菩薩達の集會の中に在して、盧遮那佛の說き給うた菩薩心地の歌を說かれた。

いまや我盧遮那、蓮華の臺に坐しつ、
めぐる千葉の華の上に、千の釋尊をば
現わしぬ。
そが一つ一つの華の中に、百千萬の國
あり、國に各釋尊いまして、菩提樹
の下に坐し、一時に正覺を得給えり。
是等の千と百千萬の釋尊は、數知れぬ
人人を伴い、我所に來りて、我が誦す
る佛の戒をきけり。
まことや不死の門は開けたり。彼等亦
各その國に還りて、我より得たる戒
を誦む。十重と四十八輕の戒なり。
戒は日や月のごと明かに、瓔珞の珠
にも似たり、數知れぬ菩薩達、是によ
りてぞ、正覺を得たり。

汝等新たの菩薩等よ、この戒をうけて、更に人人に授けよ。

諦かに聞き心と信ぜよ、汝等はこれ、當に成るべき佛。我は已に成りたる佛常にかように信じなば、戒すでに具わるものぞ、人、戒をうけぬれば、既に佛の位に入る、位を大覺と同じうすれば、眞にその人佛の子なり。

二。世尊はかように說き已つて、次で大衆に告げ給うよう。「菩薩もしこの十重、四十八輕戒を受けないならば、菩薩と呼ばれず、佛の種となる事を得ないであろう。私はいま略めて汝等のために、菩薩の戒則を說くであろう。

一、殺生戒。　佛子もし自ら手を下して殺し、又は人をして殺さしめ、方便し或は讚め歎えて殺し、または殺すことに心喜び、或は咀うて殺すに於ては、殺の因、緣、殺の法、業となる。ゆえに如何なる場合にも、あらゆる有情の命を奪うてはならぬ。菩薩は常に慈悲の心をもち、あらゆる有情を救い護らねばならぬ。然るに自ら心を恣にして殺生をするならば是れ菩薩の斷頭罪である。

二、盜戒。　佛子もし自ら盜み、人をして盜ましめ、又は方便し、讚めたたえる等によつて盜むならば、そは盜の因、盜の業等となる。菩薩は他人の所有物ならば一本の針一本の草にても、故らに奪うてはならぬ。常に佛性に順う心、慈悲心を起してあらゆる人人を助け、福を生み樂を生ましむるがよい。然るに却つて人の財物を盜むならば、是れ菩薩の斷頭罪である。

三、婬戒。　佛子もし自ら婬し、人をして婬せしめるならば、婬の因、業等となる。乃至あらゆる婦人を犯してはならぬ道ならぬ婬においては尙更である。菩薩は常に孝順の心を起して人人を救い、淨い法を與えねばならぬ。然るに却つて道ならぬ婬を行うならば、是れ菩薩の斷頭罪である。

四、妄語戒。　佛子もし、自ら妄をいい、人をして妄を云わしめ、又は方便

して妄をゆうならば、妄語の因、業等となる。菩薩は常に正しい語、正しい見を起して、あらゆる人人をして正しい語と正しい見を生ましめねばならぬ。然るに却つて人人をして邪の語、邪の見を起さしむるならば、是れ菩薩の斷頭罪である。

五、酒を酤る戒。　佛子もし自ら酒を賣り、人をして酒を賣らしむるならば、酒を賣るの因、業等となる。酒は罪を起さしむる因緣でなる。菩薩は人人をして明かな智慧を生ましめねばならぬ。然るに却つて人人の心を倒さにすることは、是れ菩薩の斷頭罪である。

六、四衆の過を說く戒。　佛子もし出家又は在家の佛道を修める男女の罪過をいい、又、人をして云わしむるならば、罪過の因、業等となる。菩薩は、外道の惡人達が、佛法の法でないことを述べても、常に慈しみの心をもつて是等の惡人を敎え導き、大乘の信を起さしめねばならぬ。然るに自ら佛法の罪過をゆうのは是れ菩薩の斷頭罪である。

七、自讃毀他の戒。　佛子もし自らを讃め他を毀り、又は人をしてかくせしむるならば、他を毀るの因、業等となる。菩薩はあらゆる人人に代つて毀や辱を受け、惡事は自らに向わしめて好事は他人に與えねばならぬ。然るに自ら己の德を揭げ、他人の好い事を隱し、他人をして毀りを受けしむるならば、是れ菩薩の斷頭罪である。

八、慳の戒。　佛子もし自ら慳み、人をして慳ましむるならば、慳の因、業等となる。菩薩はもと貧しい者が求むるならば、何物でも與えねばならぬ。然るに惡心をもつて物を施さず、法を說かず、却つて求むる者を罵るならば、是れ菩薩の斷頭罪である。

九、瞋の戒。　佛子もし自ら瞋り、他をして瞋らしむるならば、瞋の因、業等となる。菩薩はもと人人の間に善の根を生ましめ、常に慈しみの心を起さねばならぬ。然るにあらゆる有情を罵り又は彼等に刀や笞を加え、彼等がその過を悔い罪を謝まるに及んでも、尙瞋を解かないならば、是れ菩薩の斷頭罪である。

一〇、三寶を謗る戒。　佛子もし三寶を謗り、人をして謗らしむるならば、謗の因、業等となる。菩薩はもと外道又は惡人等が一言にても佛を謗るを聞いては、三百の鉾の一時に我胸を刺すようであらねばならぬ。然るに自ら謗つて信を失い又他をして謗らしむるならば、是れ菩薩の斷頭罪である。

二。佛子よ、これが菩薩の十重戒である。塵ばかりもこれ等の戒を犯してはならぬ。若し之を犯すならば、道を求むる心を失い、あらゆる功德を滅すに至るであろう。更に四十八輕戒を說くであろう。

一、師友を輕んずる戒。　佛子もし國王又は百官の位を受くる時に、菩薩戒を受けねばならぬ。さすれば一切の神神は彼等を護り、佛達は歡び給うであろう。既に戒を受くるならば、上座、和尙、同學、同行の人人を敬わねばならぬ。もしそう

でないならば、輕罪を犯すものである。

二、酒を飲む戒。　佛子もし故らに酒を飲み、又手ずから酒器を渡して人に酒を飲ましむるならば、五百世に亘つて手を失うであろう。それ酒は過失を起すことに限りがない。されば故らにかようにすることは、輕罪を犯すものである。

三、肉を食う戒。　佛子もし故らに肉を食うならば、大慈悲の佛性の種を斷つであろう。故に菩薩はあらゆる有情の肉を食うてはならぬ。もし故らに食うならば輕罪を犯すものである。

四、五辛を食う戒。　佛子は五辛を食うてはならぬ。もし大蒜、茖葱、慈葱、蘭葱、興渠(樹の汁を凝らせたもの)の五辛を故らに食うならば、輕罪を犯すものである。

五、敎え誨さぬ戒。　佛子もし、人人が擅にあらゆる戒を破るのを見るならば、敎え誨して懺悔せしめねばならぬ。然るに却つて利養を同じうして共に住もうならば、輕罪を犯すものである。

六、法を請わざる戒。　佛子もし大乘の法師又は同學等が遠くから來り訪れた場合には、懇ろに供養し、說法を請うて心の惱を除き、少時も懈つてはならぬ。若しかようにせなければ、輕罪を犯すものである。

七、懈つて法を聽かぬ戒。　もしいかなる所にても經、律の講ぜらるることがあるならば、新たに學ぶ菩薩は之を聽き又は問わねばならぬ。若しかようにせなければ、輕罪を犯すものである。

八、大乘戒に背く戒。　佛子もし大乘の經と律とに背いて之を佛の說かれたものでないといい、他の劣つた戒を持つならば、輕罪を犯したものである。

九、病を看らぬ戒。　佛子もし病める人を見るならば、佛に供養するようにせねばならぬ。諸の福田の中、看病の福田は第一である。若しかようにせなければ、輕罪を犯すものである。

一〇、兵器を蓄える戒。　佛子は刀、弓等のあらゆる兵器を蓄えてはならぬ。菩薩は父母を殺すものにすら仇を報いることはない。ゆえにもし、故らに兵器を蓄えるものは、輕罪を犯すものである。

四。一一、國使となるの戒。　佛子は利養の惡心から國の使者となり、軍陣に使し、師を興して人人を殺さしめてはならぬ。況んや國の賊となることは尙更である。若しかようになすものは、輕罪を犯すものである。

一二、販賣の戒。　佛子は故らに奴婢、家畜又は棺の材を自ら販賣ぎ又人をして販賣をさせてはならぬ。若しかようになすものは、輕罪を犯すものである。

一三、謗の戒。　佛子もし惡心をもつて故らに、善人、法の師、國王、貴人又は父母兄弟等の六親の人人を謗つて、心にまかせぬ境遇に墮すならば、輕罪を犯すものである。

一四。放火の戒。　佛子もし惡心をもつて故らに火を放ち、山林、家屋、僧房等を燒くならば、輕罪を犯すものである。

一五、邪敎の戒。　佛子はあらゆる外道

惡人に至るまでも、一一大乘の經律を持たしめ、その義理を解らしめねばならぬ。然るに若し善からぬ心をもつて、外道の邪まな教等を敎えるならば、輕罪を犯すものである。

一六、倒まに經律を說く戒。　佛子は先ず大乘の經律を學んで廣くその義味を解り、新たに學ぶ菩薩が遠くから來た時には、法の如く身を捨てても、彼等を供養せねばならぬ。然る後に次第に正法を說いて心を開き解らしめねばならぬ。然るに佛子もし利養のために、經律を倒さに說いて三寶を謗るならば、輕罪を犯すものである。

一七、勢を恃んで財物を求むる戒。　佛子もし名聞や利養のために國王大臣等に親しみ、その勢を恃んで財物を求むるならば、輕罪を犯すものである。

一八、解ることなくして師となる戒。　佛子は、晝夜六時に亘つて菩薩の戒を持ち、その義理と佛性の性とを解らねばならぬ。然るにその戒を持つことの因緣を解らないで、自ら解るように詐るものは輕罪を犯すものである。

一九、兩舌の戒。　佛子もし故らに菩薩の行を行う人人の間に立つて、双方の過を語つて諍わしめ、正しい者を謗るならば、輕罪を犯すものである。

二〇、放生を行わざる戒。　佛子は慈しみの心をもつて生物を放つことを行わねばならぬ。あらゆる有情はみな、いつかの世には吾等の父母であつたのである、されば親族の命日には、法の師を招いて敎を聞き、畜類の命を救い、その苦を解いて佛の緣を結ばしめねばならぬ。若しかようにせないならば、輕罪を犯すものである。

五。二一、仇を報ゆる戒。　佛子は瞋もつて瞋に報いてはならぬ。よしや、父母等の六親または國王を殺すものがあつても、報を加えてはならぬ。生を殺して生に報ゆることは孝道に順うものではない。されば故らに報を作すものは、輕罪を犯すものである。

二二、憍慢の戒。　佛子もし初めて出家し、まだ確かに解る所なくして、自らの聰明を恃み、又は身分、年長、富力等を恃んで、德のある法師が年少又は卑い身分の出であるとゆう理由で、經律を請わないならば、輕罪を犯すものである。

二三、戒を受くる戒。　佛子は佛の入滅の後菩薩戒を受けようと思う時、若し千里の中に授戒の師がないならば、佛菩薩の形像の前に、自ら誓うて戒を受けるがよい。そして七日に亘つて懺悔せよ。但し此際もし、瑞相を見ることがないならば、戒を受けたものとはいわれぬ。又もし先に菩薩戒を受けた法師の前に戒を受けるならば、瑞相を見るの要はない。尙また、大乘の經律を解る法師が、自ら國王百官と交りを結ぶとゆう理由で、心憍り、新たに學ぶ菩薩に經律の義を說き聞かせないならば、輕罪を犯すものである。

二四、佛の經律を學ばぬ戒。　佛子もし佛の正しい經律を學ばず、却つて外道俗典等を學ぶならば、佛性を斷ち道を障えるの因緣を造るものである。是は輕罪を犯すものである。

二五、衆と和せざる戒。　佛子もし佛の入滅の後、說法の主、坐禪の主又は巡化の主となるならば、慈しみの心をもつて諍を和げ、よく三寶の所有物を守らねばならぬ。然るに反つて衆を亂し、恣に三寶の所有物を用いるならば、これ輕罪を犯すものである。

二六、獨り利養を受ける戒。　佛子、先に僧房にあり、もし後より客僧が夏安居のため其處に來るならば、先のものは之を懇ろに迎えて房舍、飲、食等を供養せねばならぬ。若し施主があつて衆僧を招くならば、客の僧に利養の分を與えよ。若し身獨りで招待を受けるならば、その罪は限りなく、畜生と變ることはない。彼は輕罪を犯すものである。

二七、別の招待を受ける戒。　佛子は別の招待を受けてはならぬ。此利養は十方の僧に屬するものであるから、別の招待を受けるは十方の僧のものを私するものである。諸の福田の中の諸の佛、聖者、一一の師の僧、父母病人の物を自己に用うる故に、輕罪を犯すものである。

二八、僧を別に請う戒。　佛子もし僧を招こうと願うならば、知事の僧に請り、定めに從つて招かねばならぬ。さすれば十方の賢聖の僧を得るであろう。もし、別に五百の聖者を招いても、其功德は法の如くに招いた一凡僧にも及ばぬであろう。若し別に招くならば是外道の法である。

二九、邪まなる生活の戒。　佛子もし利養のために男女の色を賣り、占、呪術、毒藥の調合等をするならば、これは慈しみの心又は孝順の心からではない。即ち輕罪を犯すものである。

三〇、齋日を敬わぬ戒。　佛子もし惡心をもつて詐つて三寶に親しみ、口には空を說きながら行は有にあり、在家の人人のために男女の色を媒し、爲にさまざまの執着を惹起し、そして六齋日等において殺生をし、盜みをし、戒を破るならば、輕罪を犯すものである。

六。三一、贖うべきものを贖わぬ戒。　佛子もし佛の入滅の後において、外道又は樣樣の惡人達が、佛菩薩等の形像、又は經律を賣り、僧尼又は發心した菩薩等を奴婢とするのを見るならば、まさに慈しみの心をもつて方便して救い、是等の凡てを贖わねばならぬ。若しかようにせないならば、輕罪を犯すものである。

三二、有情を損う戒。　佛子もし刀、弓等の兵器、又秤、升等を賣捌き、官の形勢によつて人の財物を取り、他人の功を破り、他の生物を殺し猟狗等を養うならば、輕罪を犯すものである。

三三、邪まの業を觀る戒。　佛子もし惡心をもつて軍陣、賊等の戰いを觀、琴瑟、箏笛、箜篌等の歌舞、伎樂を聽き、歌留多、圍碁、將碁、拍毬等を弄び、又は爪鏡、芝草、楊枝、鉢、觸髏等をもつて卜ない、又は賊の使となるならば、これ輕罪を犯すものである。

三四、小戒を念う戒。　佛子は金剛の如く大乘の戒を持つて日に夜に忘れず、さながら浮囊をもつて大海を渡るような念であらねばならぬ。常に大乘の信を起して、自分は未だ成らざる佛、諸の佛は已になられた佛であると知り、もし一念だも外道の心を起すならば、これ輕罪を犯すものである。

三五、願を起さぬ戒。　佛子はまさに、あらゆる願を起して、父母と師の僧に仕え、また、同學の友よりは大乘の經律を學び、寧ろ身命を捨てても佛の戒を持とうと願わねばならぬ。もし此願を起さないならば、輕罪を犯すものである。

三六、誓を起さぬ戒。　佛子は次の誓を起さねばならぬ。よしや身を猛き火の坑に投げ入れられようとも、女人と不淨の行をなさぬであろう。又は熱鐵の羅網を身に纏うとも、破戒の身をもつて信ある施主の捧げる衣服を受けず、又、熱鐵の流を呑むとも破戒の口をもつて信ある施主の捧げる百味の飲食の物を食わず、又は熱鐵の地に臥すとも百種の牀座を受けず、三百の鉾をもつて身を刺さるとも藥を受けず、乃至破戒の身をもつて、好き房舍に眠り、施主の恭敬を受け、好き色、好き聲、好き香を取らぬであろう。若し是等の誓を起さぬならば、輕罪を犯すものである。

三七、頭陀、安居の戒。　佛子は二時（一月十五日より三月十五日、八月十五日より十月十五日）に頭陀し、夏冬に安居せよ。楊子、澡豆、三衣、鉢、鉢、座具、錫杖、香爐、漉水囊、手巾、刀子、火燧、鑷子、繩床、經、律、佛像、菩薩像の十八種の物を身に隨えて百千里の間を遊行せよ。新たに學ぶ菩薩は半月毎に布薩して十重、四十八輕戒を佛菩薩像の前に誦えよ。一人は高座にて誦え、他は下座して之を聽き、各九條、七條、五條の袈裟を着けよ。若し又、頭陀する時は、難ある國、惡王の國、猛獸、毒蛇のおる山林の中に入つてはならぬ。若し故らになすならば、輕罪を犯すものである。

三八、次第に坐せざる戒。　佛子は、先に戒を取けたる者は前に、後に戒を受けたる者は次第に後に坐れよ。老幼、男女、貴人、王族、奴婢その何れの出たるを問わず、只戒の前後に從うて坐らねばならぬ。もしかようにせないならば、輕罪を犯すものである。

三九、福惠を修めぬ戒。　佛子は人人を教え導いて、僧房、山林、田園又は佛塔を建てよ。そして菩薩は、疾、國難、親族又は師の命日、或は水や火の難、あらゆる罪の報い、殊に貪、瞋、癡の多い人人のためにも、大乘の經律を說くがよい。もし新たに學ぶ菩薩にしてかようにせないならば、輕罪を犯すものである。

七。四〇、受戒の人を擇ぶ戒。　佛子は人に戒を受けしむる時、國王、百官、僧尼、信男、信女、さては婬男、婬女、五根具わぬ人であつても、少しも擇んではならぬ。唯、七つの逆罪の人（佛身より血を出し、父、母を殺し、和尚、阿闍梨を殺し、羯磨轉法輪僧の和合を破り、聖者

を殺す）を除く。

出家の人は國王、父母を禮拜まず、六親を敬わず、鬼神を禮することはない。ただ、百千里の遠きより法を求むる人に對して、善からぬ心をもつて戒を授けないならば、輕罪を犯すものである。

四一、利のために師となる戒。　佛子もし戒を受ける人を見るならば、和尚と阿闍梨の二師に就かしめよ。二師は其人に向い七つの逆罪の有無を問うであろう。その罪のない者は戒を受けることが出來る。若し十重戒を犯す者があれば、佛菩薩の像の前において一七日乃至は一年に亘つても懺悔せしめて後、その罪を除くことが出來る。又、四十八輕戒を犯すものは犯すに隨うて懺悔すれば罪はのぞこる。而も敎誨の師はよく是等の諸相を解り、又道を修める人人の樣樣な性分を知らねばならぬ。然るに、もしも佛子が名聞や利養のために弟子を貪り、許つて一切の經律を解る等とゆうならば、これ輕罪を犯すものである。

四二、惡人のために戒を說く戒。　佛子もし菩薩戒を受けない人、又は外道、惡人の前に此勝れた戒を說いてはならぬ。國王を除いては餘のすべての邪見の人人の前に說いてはならぬ。是等の惡人は佛の戒に從う事はないから畜生に等しく又、木や石のように心ないものである。されば故らに彼等の前にこの勝れた戒を說くならば、輕罪を犯すものである。

四三、無慚にして施を受くる戒。　佛子が信心をもつて出家し佛の正しい戒を受けながら故らに戒を毀るならば、すべての施主の供養を受けることは出來ない。國王の地を行き、その水を飲むことも出來ぬ。世の人は皆佛法の中の賊と罵るであろう。故にもし故らに正しい戒を破るならば、輕罪を犯すものである。

四四、經典を供養せざる戒。　佛子は一心に大乘の經律を持たねばならぬ。皮を剝いで紙となし、血を墨に、髓を水に、骨を筆として佛の戒を書寫さねばならぬ。木皮、穀紙、竹帛においては尙更である。常に七寶の香華、寶を鏤めたる箱や囊に經律を盛るがよい。もし、法の如くに供養せぬならば、輕罪を犯すものである。

四五、有情を敎化せざる戒。　佛子は常に大いなる慈しみの心をもつて、あらゆる處にあらゆる有情を見るならば、「汝等、皆は三寶歸依と十戒を受けねばならぬ」と唱え、牛、馬、羊等の畜生を見るならば、「汝等みな菩提心を起せ」と心に念い、口に云え。菩薩もし、かような心を起さぬならば、輕罪を犯すものである。

四六、法の如く法を說かぬ戒。　佛子は常に大いなる慈しみの心にて敎化せよ。如何なる貴人の家にあつても法を說く時は高座の上に坐らねばならぬ。すべて法を說くには、法の師は高座にあり、聽く人人は敬しく下座にあらねばならぬ。もし、かようにして說かないならば、輕罪を犯すものである。

四七、非法をもつて制限する戒。　もし國王百官等が、自ら高貴を恃んで佛法の

戒律を破り、明かに法を設けて我が在家出家の弟子達を制え、出家して道を修めることを許さず、又、佛像、佛塔、經律を造ることを許さず、統官を立てて出家を制え、或は出家は地に立ち在家が高座にあるとゆう非法を敢てする事があるであろう。しかし菩薩はすべての人人の供養に値する人である、どうして官のために使われることが出來よう。國王百官にして、佛の戒を受けるものはこの三寶を破る。の罪を作つてはならぬ。もし故らに法を破れば、輕罪を犯すものである。四八、法を破る戒。佛子もし好き心にて出家しながら、而も名聞や利養の爲に國王百官の前に佛の戒を說くならば、實に自ら佛法を壞うものである。故にもし佛の戒を受けるものは、一人子を念うように、父母に事うるように、其戒を護らねばならぬ。もし故らにこの過に陷るならば、輕罪を犯すものである。

第二節　教團の不和

一。世尊は次で南に下り恒河を渡つてワンサの國を遊行し、憍賞彌に入り、暫く瞿師多園に滯り給うた。

その時、或る弟子が些やかな罪を犯し、初めの中は、自らは罪を犯したと思い、他の弟子は罪ではないと思うていた。程經て反對に、自らは罪を犯しておらぬと思い、他の弟子達は罪を犯して居ると思うように變つた。弟子達は彼に云うよう。「友よ、汝は罪を犯している、その罪を認めるがよい」。「私は罪を犯していない」。肯おうとしないので弟子達は僧伽の作法に依つて、彼を肯おうとしないものに加えるべき擯斥の罰に處分した。

然るに彼は、學も深く、法にも明るく、律にも委しく、賢くして道を修むる志のあるものであつたから、その僧伽の作法に從わないで仲間に云うよう。「友よ、これは罪ではない、私に加えられた擯斥は、正しいものではない、願わくは、法と律とに依つて、私の味方となつて頂きたい」。そして他の地方に散ばつて居る友達の所へも使をやつて、同じように味方となるようにと願い、同意を得た。

斯くして彼を擯斥した弟子達と、味方をした弟子達とは、この事からして爭をはじめ、次第に溝を深くして相對い合うようになつた。或る弟子がこの事を世尊に申しあげると、世尊は、「弟子の和合が破れた」と嘆かせられ、一方の擯斥した弟子達の處へ行つて仰せらるるよう。「弟子等よ、汝等が私達のすべきことであると云つて、如何なる場合に於ても、弟子を擯斥せねばならぬように思うは間違である。弟子等よ、茲にある弟子が罪を犯し、その弟子は罪でないと思い、他の弟子等は罪であると見ている、この場合、その弟子が學も深く、法にも明るく、律にも委しく、賢くして道を修むる志のある者であつて、若しその弟子を擯斥して總ての行事を共にしないと云うことのために、僧伽に不和が起り、爭が起ると見らるる時には、僧伽の和合を重じて、その比丘を擯斥してはならぬ」。

世尊は次にその弟子に味方した弟子等の

處へ行つて仰せられるよう。「弟子等よ、汝等は罪を犯していて、私には罪がない、過を改むることはいらぬと思つてはならぬ、茲に或る弟子が罪を犯したとして、彼は罪ではないと思い、他の弟子等は罪であると思うている、この場合、若しその弟子が對手の弟子等を、學も深く法にも明るく律にも委しく、賢くして道を修むる志のあるものであり、自分の事で欲や瞋や愚癡や怖を起すことはないと思うて居り、自分が罪を認めないために、對手の弟子等は自分を擯斥に處分せねばならぬ破目になり、そのために僧伽に不和が起り、爭が起ると見らるる時には、僧伽の和合を重じて他の者の信仰のために、その罪を認めねばならぬ」。世尊はこのように兩方の弟子等を敎え誨して、わが室に歸り給うた。

二。しかし世尊の敎化にも拘らず、二派に分れた弟子等は別別に布薩をなし、僧伽の作法を行い、爭論に烈しさを加え、追追、彼等の身口意の三業に、佛弟子として似合しからぬものがあるようになつた。世尊は再び弟子等を集めて仰せられた。「弟子等よ、僧伽が和合わない場合には、猶更銘銘の行爲を愼まねばならぬ、如法でなく親切でないことが行われて居る時には、似合しからぬ事はしまいと、自分の座について居られねばならぬ、如法にして親切な事の行われて居る時には、一つの座に一緒に坐つて居らねばならぬ。弟子等よ、爭うことを止めよ、不和をつずけてはならぬ」。

或る弟子が申し上ぐるよう。「世尊、暫くお待ち下さい、世尊は世尊の禪定を味おうていて下さい、この爭や不和は私共が責任を負うて片付けるでありましよう」。

世尊は更に仰せられた。「弟子等よ、爭うことを止めよ、不和をつずけてはならぬ」。その弟子は再び世尊に向い、同じことを申しあげて、世尊の御敎を拒んだ。

その時、世尊は弟子等を呼びかけて仰せられるよう。「弟子等よ、昔、ベナレスに、梵達多とゆう迦尸の國の王があつた。富み盛え、强い兵卒と多くの車を具えて數多の國國を從えていた。その時憍薩羅國に長災とゆう王があつたが、貧しくて兵卒も少なく國も小さく、詰りは梵達多王の敵ではなかつた。梵達多が四軍を整え、我を伐とうとて戰の旅に上つたと聞いて、思うよう。「私の國は小さく防備もなく、梵達多に對うて、一戰を交えることさえ難しいから、寧ろ城を出て逃げた方が善いであろう」。よつて戰わないで、國を梵達多に與え、王妃を連れて密かにベナレスの近くに逃れ、遊行者に化けてある陶器師の家に隱れていた。暫くすると王妃が懷姙んだが、姙娠の時に起し易い異常の望を遂げたいと思つた。それは、日の昇る時に、步、騎、車、象の四種の軍を、平らに地慣しの出來た練兵場に立ち並ばせ、彼等の劍を洗つた水を飲みたいと云うのであつた。「妃よ、今、我我は哀れな落武者ではないか、どうしてその樣なことが出來よう」。「大王よ、この願が契わぬようならば、いつそ妾に死を賜りたいと思います」。

長災王の友達で、梵達多王家の輔師となつて居る婆羅門があつた。長災王は王妃の

願に止むことを得ず、その婆羅門の家に至つてこのことを話して相談つた。婆羅門が一度王妃にお遇いしたいと云つたので、長災王は王妃を伴うて、再び婆羅門の家に至つた。婆羅門は王妃を見ると座を立ち上り一つの肩に衣を掛けて王妃に向い、掌を合せて三度歡の歌を歌うた。「おお、誠に憍薩羅の王は母胎に宿り給えり」と。そして云うよう。「王妃よ、失望なさるな、あなたの願は契うでありまじよう」と。

王の師である婆羅門は、直ちに梵達多王に見えて、「大王、瑞たい兆相が顯われました、明日日の昇ると共に四の軍を練兵場に立ち並ばせて、その劍を洗わねばなりません」と告げた。王は直ちに申しつけて、婆羅門の云う通りにさせた。

斯くて王妃は、その願を成し遂げ、月滿ちて王子を生み、長壽とゆう名を與えた。王子が物心のつく頃、長災王は思うよう。「梵達多は我我の不利を望んでいる、若し我我三人が一時に見つけ出されるようなことがあつては、三人とも殺されて仕舞うであろう、長壽を外で育てる方が善い」と。よつて自分等夫婦は町の中に住み、長壽を町の外に出して、教養を受けさせた。

三、その時、嘗て、憍薩羅の宮庭に事えていた理髮師が梵達多の家に住んでいたが一日、舊の主の長災王夫婦が遊行者の姿でベナレスの近くの町に住んでいるのを見附けて、之を王に訴えて出た。長災王夫婦は直ちに囚えられて、腕を後に縛られて辻から辻へ引き廻され、刑場へと引かれた。

丁度その時長壽王子は町へ入つて、はからずも久久に、哀れな父母の姿を見附け、驚いて傍へかけつけようとすると、「長壽よ、長く見てはならぬ、短く見てはならぬ、何故ならば、怨は怨に依つて靜まらず、怨は怨なきに依つて靜まるものであるから」とゆう聲が、その足をとどめた。人人は長壽と云われた人を知らぬためにこの語の意味を解くことが出來ないで、哀れな長災王は氣が狂うて、意味の解らぬたわ言を口走るものと思うていた。長災王は更に云う。「私は氣が狂うたのではない、私の言う事はたわ言ではない、心あるものはこの意味を了るであろう。長壽よ、長く見てはならぬ、短く見てはならぬ、何故ならば、怨は怨に依つて靜まらず、怨なきに依つて靜まるものであるから」と三度もこの語を繰り返した。長壽が手の下ろしようのない中に、父母は刑場に引かれて、四つに切られて捨てられた。一隊の兵士が、その後の見張に殘された。長壽は町に行つて酒を求め見張に與えて醉いつぶし、その間に柴堆を作つて父母の屍を火葬い、掌を合せて拜み、せめてもの心遣りとした。迦戸の王梵達多は、この時王宮の高樓に上つてこの火を見、密かにこれは憍薩羅の王家の緣の者のなすしわざであろうに、誰も私に告ぐるものがいないと思い、心に不快と恐とを懷いていた。

長壽王子は、森に入つて食を斷ち幾日も幾日も泣き暮して、心の晴間を待つた。遂に或る日漸く心をきめて森を出で、宮庭に仕える象師の處へ行つて弟子入りを賴んだが、象師は快く肯うた。

象小屋にその夜を明した長壽は、曉に起き出でて笛を吹き歌を歌うた。偶まその美しい歌聲と笛の音色とが、同じく夜明のすがすがしい風を樂しむ王の心を動かし、王はその歌聲の主が象師の見習であると聞いて、召して近侍のものとした。長壽は、王の命をかしこみ仕え、とりわけて氣に入るようにつとめたので、王は喜んで信じ用い、重い位につかしめた。

四。或る日、王は長壽を連れて狩に出たが、長壽は王の車を操つて、故意と軍隊を遠ざかるようになし、王の伴をして獨り野原へ出た。王は云うよう。「若者よ、車を止めよ、私は疲れたから暫く横になろうと思う」。長壽が車を留めて地に坐ると、王はその膝を枕にして暫し假睡の夢に入つた。

その時、長壽はおもうよう。「この迦戸の王が我が父母の敵である、この人のために國を奪われ生命を奪られ給うた、今こそ、其の仇を報いる時である」と、喜び勇んで鞘を拂つて劍を向けた。その時はからずも胸に浮んで來たのは、父の臨終の語である。彼はこの語を思出すと、劍を鞘に收めた。かくして長壽は二度、三度、「今こそ好き時である、仇を報いねばならぬ」と劍を擬えたが、その都度、父の語に押えられて、劍を鞘に戻した。

暫くすると、梵達多王は、はつと目を開き、怖じ恐れるものの如くにはね起きて、あたりを見廻した。「大王よ、何を恐れて、そのようにはね起き給うのでありますか」。「若者よ、今、私が眠つている時に、憍薩羅國王の王子の長壽が劍を持つて私に迫つたので、驚いて起き上つたのである」。すると、長壽は、左の手にて王の頭を抑え、右手にて劍を抜き放つて云うよう。「大王よ、私がその憍薩羅の長災の子、長壽である、汝は私の國に禍し、私の父母を殺した、今こそよない時である、私の怨みを晴すであろう」。王は長壽の足に頭をつけて云うよう。「愛する長壽よ、どうぞ生命だけは赦して下さい」。すると、長壽は父の遺言を語つて、却つて王の赦を請うた。王は驚きかつ喜びながら、「それでは、汝は私の生命を赦せ、私は汝の生命を赦すであろう」といい、ここに二人は互にその生命を赦し合い、手を取つて將來互に助け合い、害い合わぬようにと誓いあつた。

五。二人は狩を止めて車を王宮に返し、大臣等を集めて王の云うよう。「汝等、若し茲に憍薩羅の王子長壽を見付けたならば、いかようにするつもりであるか」。「私は彼の手を切りましよう」。「私は彼の足を切りましよう」。「私は手足を切りましよう」。「私は耳をそぎましよう」。いろいろの答であつた。王の云うよう。「汝等、今はその樣なことは皆無駄である、私は長壽王子に生命を助けられ、私は又、彼の生命を助けたのである」。

王は、次で長壽に向うて云うよう。「愛する長壽よ、汝の父の遺言はどのような意味であるか」。「大王よ、私の父の臨終の語の中に、長く見てはならぬとゆうこと、短く見てはならぬとゆうは、友達と友情を破ることに急ぐなとゆうことであります、怨は怨に依つて靜

まらず、怨なきに依つて靜まるとゆうは、私の父母が大王に殺されたとゆうので、私が大王の生命を奪えば、大王の爲を思うものが又、私の生命を奪うでありましよう、そうすれば私の味方をする者が、又彼等を殺すでありましよう、こうして永久に怨は怨に依つて靜まりません。今大王が私に生命を下されば、私も大王の御生命を御赦し申します、このように怨は愛に依つて靜まるのであります。それゆえに、父はその臨終に、この事を私に教えたのであります」。

弟子等よ、時に迦尸の王梵達多は、長壽王子の賢しいことを賞讃え、その國を返し與えた上にその姫までを與えて、永久の平和を誓うたのであつた。

弟子等よ、これは刀仗を手にし、劍を取る王者の忍耐と柔い愛である。汝等はこの善く說かれた敎法と戒律の中に出家したものではないか、汝等も亦この忍耐と柔い愛とに依つて輝かねばならぬ。弟子等よ、爭をしてはならぬ。不和を續けてはならぬ。

六。 世尊がこのように懇ろに誡め給うに拘らず、猶かの正しからぬ弟子は、「世尊、暫くお待ち下さい、世尊は世尊の禪定に入つていて下さい、私達が責任を負うて、この爭を片付けるでありましよう」と云い仰せを受けなかつた。

その時、世尊は、「これらの愚かの者は形に心を奪われて居るから、理を了らせることは容易い事ではない」と思召し、座を立つて去り給うた。かくて世尊は、**パーラカ**村に行き、**パーチーナ**の竹林苑に去り、更に**パーリレイヤカ**の林に入り、**ラッキタ**苑に住居を占めてその爭の輩から離れ、煩しさから遠ざかつて獨棲の靜けさを樂しみ給うた。丁度、多くの牝象、牡象、象の子を率ゆる象の王が象の群を離れて、煩いなしに靜かに樂しむように、平安に住い給うた。間もなく世尊は舍衞城に入つて祇園精舍にとどまり給うた。

世尊が去り給うと、憍賞彌の人人は、不和をなした弟子達に對うて腹を立てた。「世尊の去り給うたのは、この弟子達のためである、この弟子達は我我の不利となる人達である、我我は從前のように、この弟子達を尊敬い供養することを止めよう、そうすれば、弟子達は還俗して僧伽を離れ、世尊の御心を安め奉るであろう」と。彼等は其考の通り、供養を絕つに至つた。供養を絕たれて弱つた弟子達は、世尊の御許で爭を靜めようと、座具を片付け衣と鉢をとり憍賞彌を去つて舍衞城へと向つた。

舍衞城にては、舍利弗を初め多くの弟子達は、いかようにこの憍賞彌の弟子達を取扱うてよいかを世尊に御尋ね申し上げた。世尊は正しいものと正しくないものとの別を敎えて、正いものにつくすようにと示し給うた。給孤獨長者を初め多くの信者達も又、いかようにしてよいかを御尋ね申しあげ、平等に供養するようにと敎えられた。

憍賞彌の弟子達は祇園精舍に入つて、先ず罪を犯した弟子が、その罪を覺り初めた。かくて次第に弟子達の心も和いで、互に一致になつて和ぎおう精神を見せ、世尊の前に、平和な和合の僧伽を復活らせることが出來た。

七。 世尊は弟子等を呼び掛け、敎え給うよう。「弟子等よ、茲に心に止むべく愛すべく尊むべき六つの法がある、これに依つて和合と一致と爭なきを得るであろう。

弟子等よ、茲に弟子あつて、同門者に對うて表にも裏にも慈しみの行を守る、これが第一の法である。次に同門者に對うて表にも裏にも慈しみの語を守る、これが第二の法である。次に同門者に對うて表にも裏にも慈しみの思を守る、これが第三の法である。次に弟子が法の如く托鉢して食を得た場合、其食を持戒の同門者と公平に分けて食べる、これが第四の法である。次に弟子が汚や缺點のない、有識る人に賞讃えられる戒を具えて、同門の人人と一緒にその戒に住すること、これが第五の法である。次に弟子がいと聖くして苦のなくなる見解を有ち、同門の人人とこの同じ見解に住する、これが第六の法である。

弟子等よ、この六の法の中、いと聖くして苦のなくなる見解が主である。この見解が他の五つの法を包むものである。弟子等よ、それは何であるか、茲に弟子が森や樹の下や空屋に行いて、このように思う。「私の心の中には、猶私の心を捕えたものを、正しく如實に見せしめない迷があるであろうか」と。

弟子等よ、もしその弟子が、愛欲や、瞋恚や、疎懶や、睡眠や、心の悼擧や、惡作や、疑やの支配を受けて居れば、その心は捕われているのである。この世の事ばかりを思いつめ、彼の世の事許りを思いつめて居れば、その心は捕われておる。又、若し不和を起し爭を生み、互に攻合しあつて居れば、その心は捕われているのである。然し、若し弟子が自分の心を調べてこの樣に知る。「私の心の中にはその迷は殘されていない、私の心は眞の理を見るため善く調えられている」と。これがいとも聖く世に超勝れた第一の智に達したのである。

弟子等よ、又弟子が、「私はこの正見を修め行い守つて、自ら寂靜に達しているか」。と內に省みて、寂靜に達して居ると知れば、これがいとも聖く世に超勝れた第二の智に達したのである。

弟子等よ、又弟子が、この敎より他の出家にして、この正見に達して居るものがあるであろうかと考え、無いと知るならば、それは第三の智に達したのである。

八。 弟子等よ、又弟子が、正見を具えて居る人が達して居るような行に、私も達して居るかと考えて、達して居ると知れば、それは第四の智に達して居るのである。その行とは如何なることか。この正見を具えて居る人は、喩えば小供が手足を炭火に觸れた場合、速かに手足を引きこめるように、自白をせねばならぬ罪を犯した場合、速かにその罪を自白けて、再びせぬよう身を護ることである。

弟子等よ、又弟子が、正見を具えて居る人が達して居るような他の行に達して居るかと考えて、自分も達して居ると知れば、そは第五の智に達したのである。その行とは如何なることか。この正見を具えて居

る人は、喩えば犢を連れている牝牛が、柱を折つても犢を放さぬように、同門者の事に熱心につとめるとともに、戒定慧の三學にも熱心に勵むことである。

弟子等よ、又弟子が、正見を具えて居る人が持つて居るような力を持つて居ると知れば、それは第六の智に達したのである。その力とは、佛が教法と戒律とを說かれる時に、心の全體を傾けて聞く力のことである。

弟子等よ、又弟子が、正見を具えて居る人が持つて居るような他の力を持つて居ると知れば、それは第七の智に達したのである。その力とは佛が教法と戒律とを說かるる時に、法をよく了り、喜びを得る力である。

弟子等よ、この七つの智を具えて居る弟子は聖の道の流に預つたものである。

諸の弟子は世尊の敎を喜び、再び和合を取り戻した。

九。世尊は又、次第に遊行して迦維羅城に到り、その城外の尼拘盧陀の林に滯り、或る朝早く城に入つて托鉢し、食後午後の暑さを過ごすためにカーラケーマカの家に行き給うた。其處には澤山の座が設けられてあつた。その時、阿難は多くの弟子と共に釋迦族のガタの家に衣を縫うていたが、世尊は夕暮その家に行き、設けの座に就て阿難に宣うよう。「阿難よ、カーラケーマカの家には、澤山の座が設けてあつたが、さように多くの弟子が住つているのである か」。「世尊、仰せの通り、多くの弟子が住つて居ます、今は私共の衣をこしらえる時であるからであります」。

「阿難よ、集まることを喜び多衆共になることを樂とする弟子は輝くことはない。彼が容易く出離と隱退と寂靜と正覺の樂とを得る道理はない。解脫を得る道理もない。阿難よ、心に愛し樂とするものの衰え亡び、愁と、悲しみと、惱とを生まないものはないのである。

阿難よ、すべての相を想わないで、內身の空であることを念うて住むのは佛の住み家である。佛はこの內空に入つて住い、人近ずけど、出離と遠離とを樂しみ、總ての煩惱から離れた心にて勵ますために、法を說くのである。阿難よ、若し弟子にして內空に入つて住いたいと欲うならば、內に心を向け、一點に集めて靜めねばならぬ。

阿難よ、弟子が內に心を向け、一點に集めて靜めるとゆうはいかなる事かとゆうに、欲を離れ不善を離れて禪定に入つて住することである。

若し弟子が、內空を觀めて心がおさまらぬならば、おさまらぬと意ずいて身外の萬ずの物の空であることを觀め、或は身の內外の空であることを觀めねばならぬ。內外の空を觀めて心がおさまらぬならば、動かない心を觀めなければならぬ。動かない心を觀めて心がおさまらぬならば、前に修めた禪定の相に心を集め靜めねばならぬ。かくして、內空を觀めて、內空に心すすみ喜び、解脫れてそれを意ずき、外空を觀め、內外空を觀め、動かない心を觀め、心すすみ喜び解脫れて、それを意ずく。

一〇。阿難よ、弟子はこのように、この

空の禪定に住して、若し經行に心傾けば經行し、立ち留まることに心傾けば立ち留まり、坐りまた臥することに心傾けば坐り臥し、行住坐臥共に貪欲や憂愁の惡法が隨い起らぬと意ずく。話をするにも、つまらぬ卑しい話をせないで、煩惱を滅し、心を解脫れしめるのに利益になり、涅槃に入らしめるような話をする。又、物を考えるにも、欲と瞋と害との三つの惡い意から起る卑しいつまらぬ考をせないで、出離と同情と愛の考をする。そしてこれを、明かに意ずくのである。

阿難よ、五欲に對うては幾度も省ねばならぬ。若しその五欲の何れかに心の動くのを見るならば、五欲に對うて私の貪欲の心は未だ廢たらないと知り、何れにも心が動かぬならば、貪欲の心は既に離れたと知つて明かに意ずくであろう。

阿難よ、弟子は如何なる事を見て、師に從い事えるに相應しいと云われるか。それは經の文句を覺えることではない。解脫と涅槃とに導く欲少うして足ることを知る話を聞き、解脫れたことを意ずく知見に就て聞き、それを實現すことに依つて師に事えるに相應しいのである。

阿難よ、茲に師の禍と弟子の禍とがある。それは師にせよ、弟子にせよ、世を遠ざけ離れるを事とし、森の樹の下や山の洞や墓場を求めて住居となし、人人がついて來ない境遇にありながら心をゆるめ欲を起して、家に心の引かれることである。佛の後を逐うて、人里離れて修行の住居を定めながら、心をゆるめ欲を起し、家に心の引かれるのは修行者の禍である。これから未來の生を招き苦しい結果を引く惡法が增長すのである。阿難よ、故に汝等の永えの利益と幸福のために、私に對うて、友としての行をもつて從い、敵としての行をもつてしてはならない。敵としての行とは、師が愛憐を以て法を說くにも拘らず、耳を傾けず諦かに聞かず、他の師に心を傾けて師の敎から離れ去ることである。能く耳を傾けて諦かに聞き、他の師に心を向けず、師の敎から離れないのが、友としての行を以て從うとゆうことである。阿難よ、私は陶師が柔かな土を柔かに取り扱うようにはしない。攻め打つて敎えるのである。魂の芯のあるものだけが殘るであろう」。

第三節　旅路の敎誨

一。世尊は更に遊行を重ねて東南の方に向い、道すがら、弟子等を誨し給うた。

弟子等よ、一つの法を捨てよ、その法を捨てるならば、再び迷に還らないであろうこと(不還果)をうけごう。一つの法とは貪欲のことである、又瞋恚である、愚癡である、覆いかくす心のことである。

弟子等よ、自慢を解らず、心がそれを厭わず捨てないで苦惱の盡きることはない。貪欲、瞋恚、愚癡の場合も皆同じい。欲目なく知り欲目なく解つて、心がそれを厭い捨ててこそ、苦惱が盡きるのである。

弟子等よ、私は人人が無明におうわれるほど、長い間、輪廻する場合を見ない。又愛の結に縛られるほど、長い間、輪廻する

場合を見ない。この二つに縛られて、人人は長い輪廻を續けるのである。

弟子等よ、上なき安穩を望み、それに至ろうとして勤めているものにとり、之を内にして云えば、正しい思惟ほど多くの助になるものを見ない。正しい思惟は自然に不善をすてて善を修めるのである。之を外にして云えば、善友ほど、多くの助になるものを見ない。善友に親しめば、自然に不善を捨てて善を修めるのである。

二。弟子等よ、一つの問題が起つて、多くの人人の不利不幸、苦惱となるものである。一つの問題とは僧伽の和合を破ることである。僧伽の和合が破れて、互に相爭い譏り合い、牆を築いて相離れ去り、その爲に信なき者は信なきに留まり、信ある者の或る者もそれを失うに至るのである。

弟子等よ、一つの問題が起きて、多くの人人の利益幸福となるのである。一つの問題とは、僧伽の和合である。僧伽が和合をすれば、互に相爭わず、牆を築かず、離れ去らず、その爲に信なき者は信を得、信ある者は益それを增すのである。

弟子等よ、私は或る人の汚れた心を、心を以て知り通し、この人この時、生命終つて、宛も荷を下に置くように、確かに地獄に落つることを知る。何故なれば、その人の心が汚れて居るからである。かような人人は、その汚れた心のゆえに、生命終つて苦の地獄に入るのである。

弟子等よ、私は或る人の信樂の心を、心を以て知り通し、この人この時、生命終つて、宛も荷を下に置くように、確かに天界に生れることを知る。何故なれば、その人の心に信心があり歡喜に充ちているからである。かような人人は、その信樂の心のゆえに、生命終つて天界に生れるのである。

三。弟子等よ、一つの法を修め、屢ば之を繰り返せば、現在と未來の兩つの益を得るであろう。一つの法とは、善法において放逸にならぬことである。

弟子等よ、限りない間輪廻した各自の骨を積み重ねるならば、この毗富羅の山ほどの大きさとなり、容易く無くなることはないであろう。弟子等よ、私は一つの法を乘り越えた人は、如何なる惡事をもなさずとゆうことはないと言斷る。一つの法とは知りながら妄語をゆうことである。

弟子等よ、人若し、私の知れる如くに布施の結果を知っているならば、慳貪の汚に心を奪われることはないであろう。最後に殘つた僅かな食でも、他に分けないで食べるとゆう事はないであろう。弟子等よ、世間のいかなる功德の業も、慈しみの心に比べては、その十六分の一にも値しない。慈しみの心はそれらを超えて光り輝くことは、譬えば星の光の總てを合せても月の光の十六分の一にも及ばず、月の光はそれらを越えて光り輝くようなものである。

思い正しく、量りなの慈を修むる人は、煩惱の縛を解き、迷の世を超え出でん。

一つのいのちに瞋なく、慈しみ向うは善きことぞ、總ての生きとし生けるものに、憐みの心を垂るるこそ、限りなの功德なれ。

人人の群住む地上を打ち取りて、五つの供養を捧げつ、巡る聖王の功德も、善く慈しみの心を修むる善の、十六分の一だに如かじ。

殺さず、殺さしめず、害わず、害わしめず、生きとし生けるものに慈のあらば、その人、いかなる憤もなし。

四。弟子等よ、二つの法を具える時は、この世に於て困却と惱と煩とを持って苦しみ、未來において惡道を待ち設けねばならぬ。それは五官の戸口を守らぬことと、食うにその量を知らぬことである。又、二つの法を具える時は、この世において困却と惱と煩となくて樂しく日を送り、未來において善道を待ち設けることが出來るのである。それは、五官の戸口を守る事と、食うにその量を知ることである。

眼、耳、鼻、舌、身と意、これらの戸口を守るなく、食うに量をば知らずして、抑ゆることのあらざれば、身の苦と心の苦、二つを得て、身も心も燒かれつつ、夜も日もともに苦しまん。

これらの戸口を善く守り、食うに量知り抑ゆれば、身も心も安らけく、夜も日も共に樂しからん。

弟子等よ、私に二つの苦がある。そは、人人が善き事をなさず、恐ある者の守りとならないことと、惡しき事をなし殘忍しい罪を犯すこととである。また、私に二つの喜がある。そは、人人が善き事をなし、怖ある者の守となることと、殘忍しい罪を犯さないことである。

弟子等よ、二つの法を具えて、人人は宛も荷を下に置くように確かに地獄に入る。そは惡しき戒と惡しき見である。又、二つの法を具えて、人人は宛も荷を下に置くように確かに天界に生れる。そは善き戒と善き見である。

五。弟子等よ、熱心がなく、愧がなければ、正覺を得、涅槃に入り、上なき安穩に至ることはあり得ない。

弟子等よ、淨らかな行に住するは、人人を欺くためでもなく、無駄ごとゆうためでもなく、尊敬と名譽と利得を得るためでもない。自分を制え、諸の惡を棄て、そして完全に知るためである。

弟子等よ、二つの法を具えて、この世において、多くの幸福と樂とを得、正しく煩惱を滅し初めるのである。それは驚をたつべき處に驚をたて、驚をたてることについて、正しく勤めることである。

かしこくて、つとめはげみつ、深き慮のある人は、智慧に依り見くらべて、驚をたつ。

靜かにて心擧らず、つとめはげみて止觀をおさめ、苦のおわりにいたる。

六。弟子等よ、佛に屢ば二の思が起る。安穩の思と遠離の思とである。佛は害無きを樂しみ喜ぶものであるが、この佛にこうゆう思が屢ば起る。「私は行住坐臥に動物をも草木をも害うことをしまい」。又、佛は遠離を樂しみ喜ぶものであるが、この佛にこうゆう思が屢ば起る。「善からぬものはすべて捨てた」と。されば汝等も亦、害なきを樂しみ喜んで住えよ。また、遠離を樂しみ喜んで住するがよい。

弟子等よ、聖い智慧の缺けた者は禍であつて、この世においては困却と惱と煩とを以て苦しみ、未來は惡道を待ち設けねばならぬ。聖い智慧の具わるものは福であつて、この世において安らぎ、未來は善道を待ち設けることが出來るのである。

七。弟子等よ、二種の涅槃界がある。有餘依涅槃界と無餘依涅槃界とである。有餘依涅槃界とは煩惱を滅して淨らかな行を成し就げ、なすべき事をなし終つて重荷をおろし、自分の目的を果して後の生を招く煩惱を滅し盡し、正しい智慧によつて解脫れた聖者のことで、五官猶殘つて壞れず、愛すべきものと愛してならぬものとを共に享けて苦樂を味おう。これが有餘依涅槃である。無餘依涅槃とはその聖者となつたものが總ての感覺を享け味わず、すべて煩惱の熱を受けない淸涼になることである。

弟子等よ、閑居を樂しみ、閑居を喜び、內なる心を靜めるにつとめ、靜慮をはばまず、觀察を明かにし、空屋に住むように勤めよ。弟子等よ、戒と定と慧との三學の利を持ち、勝れた智慧を具え、解脫の要によつて善き心の純淸の下に住するがよい。

弟子等よ、油斷なく、一つ心に、靜かな心、快き心、樂しき心にて、絕えず善法を觀めて住するがよい。これらの行を修めれば、現在において聖者の覺を得るか、さなくとも再び迷に還らない證(不還果)に至るか、二つの中一つの結果を待ちうるのである。弟子等よ、その惡を捨てないで地獄に墮つる二人のものがある。淨らかな行の誓を立てながら汚れた行をなす人と、圓かに淨らかな行をなす人を妨げる人とである。

弟子等よ、偏つた見に囚われた人人は或は存在に執われ、或は存在を嫌う。しかし眼ある者はただ在るものをあるが儘に見るのである。弟子等よ、いかに存在に執われるか。或る人人は存在を樂しみ存在を喜び、存在を好んで、存在は滅びる法であると聞いても、心がそれに向わず傾かず喜ばない。又、いかに存在を嫌うか。或る人人は存在を嫌い存在を忌み、存在を厭うて、非存在を喜び、死して後滅び絕え消えることを喜ぶのである。また、いかに眼ある人は見るか。存在を存在として見、その存在を厭離れ、その貪より離れ、その絕滅に取りかかるのである。

八。弟子等よ、世には三の感覺がある。苦の感覺と、樂の感覺と、不苦不樂の感覺とである。樂の感覺は、苦と見ねばならぬ。苦の感覺は毒矢と見ねばならぬ。不苦不樂の感覺は無常と見ねばならぬ。このように見て、正しく見、愛の渴を斷ち、縛を解き、正しい意の理解に依つて、苦の終をなす聖者となるのである。

弟子等よ、愛の渴には三種あり、欲愛と有愛と非有愛とである。

愛の軛に縛られて、有と非有とを喜ぶ人は、魔に囚われて安らかならじ、老と死と輪廻の道こそ、哀われなれ。愛欲を離れ、心の汚を盡してぞ、この世に彼岸に至るなる。

弟子等よ、三つの法を具える時に、惡魔の國を出でて太陽の如く輝くのである。三つの法とは聖者の戒と定と慧とである。

弟子等よ、三つの聖者の法がある。身と意と語との寂默なる事である。弟子等よ、誰にても、貪欲と瞋恚と愚癡とを捨てなければ、惡魔の係蹄にかかり、惡魔の命令のままに動かねばならぬ。ただ、この貪瞋癡を棄てる時に惡魔の國を離れる。

弟子等よ、この三つを離れなければ、その人は猶海の中にあるのである。其處には大浪小波が逆卷き立ち、渦が引き込み、鱗や夜叉の恐がある。三つを捨てれば、この海を出でて理想の彼岸に度り、淸らかな陸に立つと云われる。

弟子等よ、修行の間のものを退轉せしむる三つの法がある。事を好むと、雜談に耽ると、睡眠を貪る事とである。弟子等よ、名譽の來らんことを望み、富の增さんことを望み、未來に善き處に生れようと願うのは人の情である。この三つの樂を望むならば、善き戒を守らねばならぬ。

九。弟子等よ、人はこの名譽に破れ不名譽に敗れて、死して後惡道に墮つるものである。人は毀と譽の外に立たねばならぬ。

弟子等よ、此身においては不淨を觀よ。出入の息には正しい念を失うな。一切の物事については、無常と觀よ。この身において不淨を觀れば、この身を淨しと誤り想うて起す貪欲は消える。出入の息に正しい念を守れば、外の物に囚われる障碍はなくなる。一切の物事について無常を觀れば、無明は滅びて明となる。

弟子等よ、三つの火がある。貪欲の火と瞋恚の火と愚癡の火とである。貪欲の火は欲に耽り、心の痺えた人人を燒き、瞋恚の火は心いかり生物を害い人を燒き、愚癡の火は、心迷うて聖法を知らぬ者を燒く。總て智慧の輝きがなく、己のみ愛することを知る人人は、この三つの火に燒かれる。弟子等よ、不淨觀を修めて欲の火を消し、慈悲の心に依つて瞋の火を消し、涅槃に導く智慧に依つて愚の火を消すがよい。念ふかく、日に夜に勤め勵むものは、これらの三つの火を消して、苦の終に至るのである。

弟子等よ、內の垢であり、內の敵であり、內の仇である三つのものがある。それは、貪欲と、瞋恚と、愚癡とである。

一〇。弟子等よ、鉢を手にして戶毎に食物を乞う乞食は、最も卑しい生活の仕方である。この卑しい生活の仕方に在家の子が自分の意志にて來たとする。王に連れられて來たのではなく、盜賊に脅されて來たのではなく、負債のため又は恐怖のために來たのではなく、生活のために仕方なくして來たのではない。只、この世に生れ來て生と、老と、死と、憂、悲、苦、惱、悶とに覆われて、「この處にこそ、苦、惱の終りをなすことが敎えられよう」と思つて來たものとする。弟子等よ、在家の子が、かようにして出家し、しかも貪欲を離れず、心常に怒り、念けがれ、官能を支配することなく、心散り亂れているならば、このものは、在家の人の享樂から離れていながらも、ついに出家の目的を果すことの出來ないものである。

弟子等よ、茲につまらぬもので得易く、得ても罪にならぬ四つのものがある。四つ

のものとは、衣としての糞掃衣、食としての乞食、住處としての樹の下、藥としての腐尿藥である。佛弟子が、此つまらない、得易いものに甘んずれば、私は彼を、佛弟子の一員と云うのである。

弟子等よ、私は知り且つ見ることによつて、煩惱は滅ると云うが、何を知り、何を見て煩惱は滅るのであるか。弟子等よ、これは苦であると、苦を知り苦を見て、煩惱は滅びる。これは苦の因であると、その因を知りその因を見て、煩惱は滅びる。これは苦の滅であると、その滅を知りその滅を見て、煩惱は滅びる。これは苦の滅に至る道であると、その道を知りその道を見て煩惱は滅びるのである。

弟子等よ、いかなる出家でも、これは苦である、これは苦の因である、これは苦の滅である、これは苦の滅に至る道であると如實に知らなければ、眞の出家とはいえない。この四聖諦を如實に知つて初めて眞の出家と云いうるのである。

一一。弟子等よ、汝等に衣と食と、住居と藥とを供養する在家の人人は、汝等に取つて大いなる助をなす人である。汝等も亦、始も終も美わしい、淨らかな教法を說いて彼等の助となる。出家と在家とは、この樣に相頼り相助けて、煩惱の暴き流を超え度つて、苦の終をなすのである。

弟子等よ、戒を具え戒則によつて、その身を制えて住せよ。正しい行をなし、小さな罪にも恐を見、學んで怠らずに勤めよ。立つている時も貪欲を去り、瞋恚を去り、懶惰と睡眠とを去り、心の掉擧と悔とを去り、疑を離れて精進し、屈せず撓まず、おもい正しく、靜かに心を一點に集めよ。坐つている時も、臥している時も、停つている時も、臥して坐臥にこのようであるならば、心一つにして慚愧を知り、斷えず努めて熱誠あるものであると云われる。

第四節　白髪

一。世尊はやがて、彌稀羅國に入り、摩伽提婆と呼ばれる檬樹林に住い給うた。

或る日、その林の或る所に於て、世尊の微笑を洩したもうを認めて、阿難は思うよう。「世尊は故なくして笑い給うことはない、何かの理由があるのであろう」と、世尊にその故をお尋ね申した。世尊の語りたもうよう。

「阿難よ、遠い古、この彌稀羅に摩伽提婆とゆう正しい王があつた。法によつて國を治め、月に六度齋戒をおさめていた。阿難よ、王は數千年の間、王位を樂しんだ後で、或る日、理髮人を呼んで云うよう。「何時でも、私の髮に白髮を見付けたならば、私に告げるが宜い」と。それより幾千年を過ぎて後、かの理髮人は王の頭に一本の白髮を見付けて、これを王に告げた。「大王よ、神の使が顯われました、白髮が生えました」と、毛拔で拔いて、王の手の上に置いた。之を見て王は理髮人に褒美を遣し、太子を呼ばしめ、最後の訓誨を與えて云うよう。

「王子よ、私に神の使が顯われた、人界の樂は既に受けたから、今は天界の樂を求める時である、私はこれから出家する。

王子よ、汝も頭に白髮を見るようになつたらば長子に王位を渡して出家するが善い、今、私はこの善き傳統を定めるであろうから、これを絕やさぬように承け繼ぎ、その傳統の最後の人となつてはならない」。

阿難よ、摩伽王はかくして出家し、この摩伽提婆と呼ばれる檬樹林に住み、慈悲喜捨の四無量心を修め、この世の生命終つて梵天の世界に生れたのである。その後、子孫と相傳えて出家をし、四無量心を修めて天界に生れて來たが、その最後の王は、尼彌と呼ばれたが法によつて國を修め、月に六度齋戒を修める正しい王であつた。

二。阿難よ、或る日忉利天の善法堂に神神の集會があつて、そこに斯うゆう話が起つていた。「摩伽提婆の民は誠に仕合である尼彌王は正しい王であるから」。すると帝釋天がゆうには、「神神よ、汝等は尼彌王を見たいと思うか」。その時、尼彌王は十五日の齋戒の日で、頭を洗うて齋戒を守り、高樓の上に坐つていた。帝釋天は直ぐさま、尼彌王の前に顯われて云うよう。「大王よ、あなたは誠に仕合である、忉利天の神神はあなたを見たいと思うている。大王よ、私は千頭の馬を繫いだ馬車を送りますから、この乘物に乘り、神の世に昇らるるが善い」。尼彌王は帝釋天の招待を諾い、帝釋天は直ぐに天界に歸つた。

天界において、帝釋天は御者の摩多利を呼んで、直ぐに尼彌王を迎えるように命けた。摩多利は仰をかしこみ、尼彌王を尋ね、其求によつて、惡業をなした者の惡果を受けて居る道と、善業をなした者が善果を受けて居る道との兩方を通つて、忉利天の善法堂にと導いた。神神は尼彌王の來たのを見て迎え、王の德を讃歎えて天界の樂を味うようにと勸めた。然し王は神神の好意を謝つて、彌稀羅に歸り、齋戒の行を守り、法によつて國を修め、白髮を見て長子に國を讓り、最後の訓誨を垂れて出家をし、四無量心を修めて梵天界に生れるものとなつた。王の長子は **カラーラ・ジヤナカ** と呼び、この祖先の定めた傳統を破つて出家せず、最後の人となつた。

阿難よ、摩伽王を他人と思うてはならぬ今日の私がその王であつた。然し、その時私の定めた善き傳統は、煩惱を無くし寂靜に導き、涅槃に入らしめるものではない、只、梵天の世界に生れしむるだけである。阿難よ、今私の定める善き傳統は、煩惱を無くし、寂靜に導き、涅槃に入らしめるものである。その善き傳統とは何であるか、卽ち正見、正思、正語、正業、正命、正精進、正念、正定の八正道がそれである。阿難よ、汝等、この定められたる善き傳統を繼續いで絕えしめてはならぬ。その最後の人となつてはならぬ。

三。世尊は多くの弟子達を連れて、再び橋薩羅の國を遊行し、沙羅とゆう婆羅門の村に着かせられた。村の人人は世尊の御着と聞き、共共に誘い合して御訪ねし、次の問を申しあげた。「世尊よ、いかなる譯で、或る者は死んで地獄に墮ち、或る者は天界に生れるのでありましようか」。

「人人よ、それは法にかなわぬ行、正し

うない行の因によつて、或る者は地獄に墮ちる、又、法による行、正しい行の因によつて、或る者は天界に生れるのである」。

「世尊、私共はこの簡單な御語を解ることが出來ません、どうぞ委しく御說きください」。

「人人よ、それでは善く聽くがよい。この身に三つの非法行があり、この語に四つの非法行がある。身の三つと云うは、茲に人あつて殺生をする。心荒く、血を好み、生きものに慈がない。また偷盜をして、與えられぬものに手をつけ、邪婬をする。これが三つの身の非法行である。

語の四つとは、知りながら恐のためや利得のために妄を云い。人の間を裂く語を談り、無暗に烈しく他人の非難をなし、要らざる多辯を弄ぶ。これが語の四つの非法行である。

意の三つとは、欲張で他人の利得をまで犯そうとゆう意を起す。いかり腹立ち、邪の思をいだき、他人の苦を心好く思う。邪見を抱いて、布施も要らぬ、供養も要らぬ、業の報もない、孝行貞節などの道德もない、覺もないと主張る。これが意の三つの非法行である。人人よ、この身と口との非法行の因によつて、或る者は死して後地獄に入るのである。

これと反つて、この身の三つの非法なる行、口の四つの非法な行、意の三つの非法な行を行わぬのを因として、或る人は天界に生れるのである。この身口意の十の非法を避けて法の如く行うものが、思の儘にいかなる神神の世界にでも、生れることが出來る。又、あらゆる煩惱を滅ぼして、現在に覺を開こうと思えば、その望の通りに覺を開くことも出來るのである」。

沙羅の村人は、世尊の御語を歡び、各生涯御敎の弟子の數に加え給うように御願いした。

第三章　賢愚

第一節　難陀と羅睺羅

一。難陀が世尊の御敎を受けて、欲に親しむ生活から離れ得たのは已に久しい以前のことであつた。或る日難陀は獨り林にあつて思うよう。「御佛に遇い參らせることは容易くはない、優曇華の華咲くことの稀な・ように、御佛のこの世に出で給うことも稀である、いま御佛に遇いまいらせた喜には、修行を勵み、涅槃の樂を得ねばならぬ」。しかし、こうした聖者の心の中までも、惡魔は猶見逃さずに附入ろうとする、難陀の心を知つた惡魔は、迦維羅城の後宮に顯われて、孫陀利難陀姫に、

よろこべよ、姫。身をかざり、伎樂なして樂しめよ、いとしの人は家に歸りて、御身の腕によるならん。

と唆した。難陀姫はこの語を聞いて喜び身をかざり、室を飾り、伎樂を奏でて夫の歸城を待つた。波斯匿王もこの噂を聞いて大いに驚き、急いで難陀の住む林に馳けつけて來た。

「大王よ、何の用でそのように急がしそうに來られましたか、御顏の色もすぐれないように見受けられる」。「噂に聞けば尊者は出家をやめて家に歸られたとか、歸られるとか云う、それが氣遣しくて來ました」。

これを聞いた難陀は、笑を含んで、「大王は世尊の御許において、私の事を聞かれたことがないか、私は迷が切れて再び迷の生を受けることはありません」。「まだそのことは聞きません、今日噂に依れば、尊者が元の姫の處へ、還俗して歸城になるとゆう知らせがあり、姫はもとの美しさを飾り、ありし日の室に花飾りして、尊者の歸城を待つているとゆうことであります」。

「大王よ、出家には寂けさの樂、涅槃の樂がある、欲は恐しい火の坑、蜜を塗つた刄であります、この寂かな林に憩い、涼やかな甘露の法の水を飲むものが、どうしてまた劍の藪に入り、害いの藥を用いましよう、私は欲の火の起を知り、欲の流と生存の流と無明の流とを超えました、なすべきことをなし終り、行うべきことを行い果したのであります」。「そのように承わると私には少しの疑もありません、心安く歸るでありましよう」。

惡魔は、猶も執ねく難陀を誘うた。

姿は花とかぐわしく、面は月ときよらけし。絃歌流るる春の夜に、など妻のへに歸らざる。

難陀は、この聲を叱つて歌うた。

昔はわれにこの心あり、欲に飽くなくまつわられ、老と死にこそ赴きし。されどわれいま、愛の淵をば度りたり。けがれなく、染むことなければ、王者の位もくるおしく、まことの法ぞたのもしし。魔よ、去れよ、消えかし。

弟子等はこのことを傳え聞いて世尊に申しあげた。世尊は、「難陀は大きな力をもつている、美しい容貌を具え、欲が強いが、よくそれを制えて五官を守り、食に量を知り、夜も横に臥さないで勤め勵み、智慧と行とを完うしたものである」と讃歎えたもうた。

二。或る日の朝、世尊が衣を着け鉢を取つて舍衞城に托鉢せられると、羅睺羅も亦衣を着け鉢を取つて隨うた。世尊は振返つて仰せられるよう。「羅睺羅よ、あらゆる三世の物事は皆私のものでもなく、私でもなく、私の自我でもないと、正しい智慧によつて實の如くに知らねばならぬ」。

「世尊は物についてのみ、さように仰せられますか」。「羅睺羅よ、物の如く心に就てもみな同じである」。その時、羅睺羅は思うよう。「今日、世尊は親しく私に敎を垂れて下された、托鉢に行くべきではない」。踵を返して或る樹の下に至り、身體を眞直にし、心を正しくして坐つていた。それを見た舍利弗は、近ずいて云うよう。「羅睺羅よ、念息を修めよ、屢ば念息を行えば大きな利益がある」。

夕ぐれに禪定を立つた羅睺羅は、世尊の御許に行き、「世尊、念息はいかように修むべきでありますか、又、いかなる大きな利益がありますか」とお尋ね申しあげた。世尊は仰せられるよう。

三。羅睺羅よ、森や樹の下や人の住まぬ家に行つて、身體を眞直に心を正しくして坐り、息を出すにも吸うにも心を一つにし

長く息を吸う時は長く息を吸うことを自覺き、短く息を吸うときは短く息を吸うことを自覺き、長く息を出すときは長く息を出すと自覺き、短く息を出すときは短く息を出すことを自覺き、「全身に知覺して息を吸い又は出すであろう」と訓練し、「身分を靜めて息を吸い息を出すであろう」、「喜びを覺えて息を吸い息を出すであろう」、「心分を靜めて息を吸い息を出すであろう」と訓練し、又、「心の囚われなく、息を吸い息を出すであろう」、「無常を觀い、解脫を觀うて息を吸い息を出すであろう」と訓練す。このように出入の息を念い、繰り返して行えば、大きな利益があり、最後の呼吸は無意識の中ではなく、意識の中に消え失せるのである。羅睺羅よ、これが即ち念息の修め方である。

四。 羅睺羅よ、また地平等の行を修めよ。この行を修めれば、起つて來る好惡の感情に心を捕えられることはない。喩えば、大地は淨らかなものを置かれても、不淨のものを置かれても、厭わず嫌わないようなものである。又、水平等の行を修めよ。この行を修めれば、起つて來る好惡の感情に心を捕われることはない。喩えば、水に淨らかな物を流しても、不淨の物を流しても、これ等を厭わず嫌わぬようなものである。

羅睺羅よ、また、慈悲喜捨の行を修めよ。慈しみの行を修めれば怒を退け、悲みの行を修めれば惱を退け、喜びの行を修めれば滿らぬ思を退け、捨(不偏)の行を修めれば害意を退けることが出來るのである。

羅睺羅よ、また不淨の想を修めよ。無常の想を修めよ。不淨の想を修めれば貪欲が無くなり、無常の想を修めれば我慢が無くなる。羅睺羅よ、これらが、念息を修むることによつて得る大きな利益である。

羅睺羅は世尊の御教を喜んだ。

第二節　愚者と賢者

一。 世尊は一夜、祇園精舍の前庭にて、弟子等に語り給うよう。「弟子等よ、兩親を尊び敬う子女のある家庭は神や佛の住む家である。弟子等よ、神と佛とは兩親の名である。兩親は子女を生み育つる神、又この世の善惡をその子女に敎え示す佛である。

二。 弟子等よ、半月毎の第八日目に、神神の使がこの世界を遊歷つて、人間の世界においてどれだけの人達が、父母や出家に仕え、長者に順い、布薩(齋戒精進)の日に人の道たる八戒を守り、その前後の兩日を謹しみ、德を積んでいるかを見渡すのである。弟子等よ、又、半月毎の十四日には、神神の王子がこの世界を、やはりそのようにして遊歷るし、又、半月毎の十五日には神神自身が、同じくそのようにしてこの世界を遊歷るのである。

弟子等よ、かようにして人間の世界を見渡して、若し德を積む人の少ない時には、神神は善法講堂に集つて、「人界では、父母や出家に事え、長者を敬い、布薩の日に八戒を守り、その前後の兩日を謹しみ德を積むものは少ない、ああ、神の群は減つて惡魔の群は增える」といつて悲しみ、若し人間の中で德を積む人の多い時には、「ああ、神の群は增し惡魔の群は減る」といつて喜ぶのである。

三。 弟子等よ、ずつと昔の事であるが、神神の王たる帝釋天は忉利天の神神を集めて、次のように歌うたことがある。

我と等しくならんと望まば、半月毎の八日、十四、十五の日、及び前と後の日に、八戒を守れかし。

弟子等よ、帝釋天がこの歌を歌うのは、猶適わしいといえない。何故なれば、彼は自ら貪欲、瞋恚、愚癡を離れず、生と老と死と憂、悲、苦、惱、悶から解脫れて居らないで、我と等しくならんと願わばと云うて居るからである。

弟子等よ、煩惱を盡し、淨らかな行を修め終り、なすべきことをなし終り、罪の重擔をおろして正しく解脫れた聖者となつてこそ、はじめてこの歌を歌う資格があるのである。何故なれば、その聖者こそ、貪欲と瞋恚と愚癡とを離れ、生と老と死と憂、悲、苦、惱、悶とから解脫れて居るからである。

四。 弟子等よ、信仰あるものに取つて三つの事があれば多くの德を生ずる。それは第一に信仰のあること、第二に施すべきもののあること、第三には施すに値いする人のあることである。

弟子等よ、在家の人が信仰があると云われることは、次の三つの事で知られる。第一には持戒の正しい人を見たいと思う情のあること、第二には正法を聞きたいと思う情のあること、第三には貪吝の垢を離れて淸らかな手を以て寬く施し、乞うものに常につきまつわられて施すことを樂しむことである。この三つの事があつて、信仰のある人と知られる。

五。 又、ある夜、語り給うよう。「弟子等よ、世間に云う、親知らず、子知らずとゆう場合が三つある。一には、大火災が起る。火勢の烈しさに母は子を見ることが出來ず、子は母を助けることが出來ない。二には、大暴風雨が起つて、大洪水となる。水勢に流し漂わされる所では、母は子を助けることが出來ず、子は母を助けることが出來ない。三には森林に住む强盜の群が掠奪を初める、村人は逃げ去つて、母は子を見ることが出來ず、子は母を助けることが出來ない。母子等よ、然しこれらの三つの場合においては、時として母子相助け合う機會のあることもあるが、この外に、眞に母子離れ離れになるところの、親知らず子知らずの三つの場合がある。それは、老の恐と、病の恐と、死の恐とが襲い來つた時である。

子供の老いて行くのを、母は、「妾が老いて子供が年を取らないように」とする譯には行かない。母の老いて行くのを、子供が「私が老いて、母が年を取らないように」とする譯には行かない。また、子供の病氣を見て、母が、「妾が代りに病氣になつて、子供の病氣がないように」とすることは出來ない。母の病氣を子供が、「私が病氣になつて、母の病氣が癒るように」とする譯には行かない。又、子供の死を母が、「妾が死んで子供が生きるように」と引戻すことは出來ない。母の死を子供が、「私が身代りになつて母の生命の助かるように」と助けるこ

とは出來ない。これが眞の親知らず、子知らずである。然し茲に、前の三つの場合と後の三つの場合と、この六つの恐を超え離れる道がある。それは即ち八正道である。

六。弟子等よ、いかなる恐も愚かさから起る。如何なる困難も愚かさから起る。如何なる不幸もすべて愚かさから起る。喩えば草屋根の家も、草屋根の家も、内外漆喰で塗固めて風を防ぎ、戸も窓も閉め切つた層樓も、家とゆう家はみな燒けるように、いかなる恐も困難も不幸も皆愚かさより起るのである。

弟子等よ、これ等は愚かな人の持つ所で賢き者の持つ所ではない。それであるから汝等は愚かな人と云われる三つの法を捨て離れ、賢き者と云われる三つの法を得るように勤めねばならぬ。弟子等よ、愚かな人と賢き人とは行の顯れに依つて知られるものである。智慧は行に依つて輝くものである。愚かな人の三つの法とは、身と口と意との三つの惡しき業のことである。賢き人の三つの法とは、身と口と意との善き業のことである。この身と口と意との三つの惡しき業は愚かな人のすがたであり、三つの善き業は賢き人のすがたである。

弟子等よ、又、愚かな人と賢き人との三つの法がある。愚かな人の三つの法とは、罪を罪と知らないこと、罪を罪と知つても罪を罪と知らないこと、他人から罪の如くに改めないこと、他人の如くに受けこまなることを指されても法の如くに受けこまないことである。賢き人の三つの法とは、罪を罪と知り、法の如くそれを改め、他人から罪のあることを指されては法の如く受けこむことである。弟子等よ、愚かな惡人はその三つの法を具えて自分の德を根こぎにし、識ある人には非難をうけ嘲笑われ、自ら多くの不德を積むのである。又智慧のある善人は、その三つの法を具えて自分の德を根こぎにせず、識ある人には非難をうけず、嘲笑われることなく、自ら多くの德を積むのである。

第三節　指鬘外道

一。舍衛の國、跋提耶と云う町のメンダカ長者の孫娘に生れた毗舍佉は、世尊が跋提耶に遊行の時、祖父に連られて世尊の法を聽き、佛の緣を結ぶ身となつた。故あつて父のダナンジヤナと共に憍薩羅國のサーケータに移り住み、舍衛城の鹿子長者の子プンナワツタナの妻として迎えられた。鹿子家はもと、尼乾陀の敎を奉けていたが、毗舍佉が嫁いでから、追追に導かれて世尊の敎を聞くようになり、鹿子は、自らその歡を表わして、鹿子の娘ではなく鹿子の母であると云い觸らしたので、鹿子の母毗舍佉と呼ばれるに至つた。

毗舍佉はこのようにして夫の一門を導いて悉く世尊の信者となし、自ら常に、祇園精舍に詣でて聽聞と供養とに日を送つていたが、その中に、自ら精舍を立てたいとゆう志願を起すに至つた。

土地の選定については末利夫人の力を借り、城外の東南、祇園精舍の東北に、王の所有の林を讓りうけて、各階に四百房を有つ二階建を建てた。造寺の監督には目連が當つた。大きな金をかけ、九箇月の日數を費して成り、世尊は直ちに入つて、茲に四箇月の安居をなし給うた。東園精舍鹿子母講堂と呼ばれるものがこれである。

二。或る日、世尊が給孤獨長者の家に行き給うと、何となく家の中が騷しく、大きな聲などが聞えて來た。世尊は座に卽いて、長者にその理由を聞き給うと、長者の申すには「善生とゆう長男の嫁が、その生家の富と權勢を誇つて、父母を敬わず、夫に仕えず、世尊をも信まず、それで時時こうゆう騷が持ち上るのであります」と云うことであつた。

世尊は善生女を呼ばしめて、仰せられるよう。

「善生よ、世には七種類の妻がある、第一には人殺しのような妻、第二には盜人のような妻、第三には主人のような妻、第四には母のような妻、第五には妹のような妻、第六には友達のような妻、第七には下婢のような妻である。善生よ、そなたはこの七種の妻の中、何れに屬くのか」。「世尊、妾は世尊のこの簡單に御說きなされた意味を了ることが出來ません、委しく說いて頂けるならば幸であります」。

善生よ、それでは善く聽くが善い。汚れた心を持ち、夫に對うて愛がなく、他の男に心奪われ、夫を輕んじ、人を雇うて夫を殺さしめようとするものは「人殺しの妻」である。又、夫の仕事を了解らず、夫の富をくすね盜もうとするものは「盜人に似た妻」である。又、仕事を好まず、なまけて口腹の欲にのみ走り、語荒く、夫を虐げようとするものは「主人のような妻」である。又、常に夫に對して愛があり、母の子に對うように夫を護り、主人の得た富を心にかけて守るものは「母のような妻」と云われる。次にまた、夫に仕えて誠を盡し、姉妹の心、骨肉の情があり、慚愧の心にて夫に仕えるものは「妹のような妻」と云われる。又、夫を見て喜び、丁度長く遇わない友達に遇うたようであり、淑しく行を正しくして夫を敬うものは、「友達のような妻」と云われる。終りに、夫に詈られ打たれても、汚のない心で忍び、怒を抱かずに夫に事えるものは「下婢のような妻」と云われる。この人殺しの如く、盜人の如く、主人のような妻は、行惡しく語荒く敬がなく、死して後善い報のある筈がない。母の如く、妹の如く、友達の如く、下婢のような妻は、行美しく身を制えて守るからして、死して後善い報を得るのである。善生よ、汝はこの七種の妻の中、孰れに屬くものであるか。

この御敎に依つて善生女は、その傲慢な情を挫かれ、悔い悟つて、以後命の終るまで、下婢のような妻となりましようと、佛の前に誓うに至つた。

三。その頃の事である。舍衛の城に一人の博識の婆羅門があつて、多くの人人に尊ばれ、五百人の弟子をもつていた。その上足の弟子は無害と呼ばれ、體力强く才智があり、性質すなおであつたが、顏容殊に人に勝れて、人人の愛するところとなつた。或る日師の妻は夫の外出をうかがい、かねて戀い慕う無害の許にゆき、日頃の思を打明けて義ならぬ樂を得ようとした。無害

は驚き恐れて跪いてゆう。「師は父に當るといえば、夫人は母でいらせられる、道ならぬことは心苦しい極みであります」。夫人は、「飢えたものに食を與え、渇いたものに水を與えるのが何故道ならぬことであろう」といったが、無害が烈しく、「師の愛しい夫人と狎れ合うのは、毒蛇を體に纏い毒を呑むのと異りません」と言ったので、夫人は詮すべもなく房に歸ったが、恥しめられた恨を霽そうために、自ら衣を引き裂き、色青ざめて床に打ち臥し、夫の歸るを待ち受けて、「君の讃め給うあの賢しい弟子のために、妾は恐しい辱を受けました」と詐り泣いて訴えた。師は之を聞いてねたみの思は火のように胸を燒いたが、しかし力をもつて懲そうとするには餘りに彼の力は強い、寧ろ倒さの敎を與えて人殺しの罪を造らせ、現世においては刑罰をうけ、未來には地獄に落してやろうと心を定め、無害を招いて、「卿の智慧はもう奥に入っているが、ただ最後になすべきものが一つ殘されている」と語り、厳かに一振の劒を與えて、これを取って四辻に立ち、一日に百人の命を斷つて一人に一指をとり、百指を繋いで首飾とせよ、さらば眞の道は備わるであろう」と命けた。

四。無害は劒を受け、一度は驚き懼れ、深い愁に鎖された。師の命に順えば理義を失い、師の命に違えば善き弟子と云われぬ、清い行を勵み父母に孝に他のために善をなし、邪を捨てて正しきに赴き、心柔かに情ぶかいのが婆羅門の法と聞いて居るのに、いかなれば師はかように酷い敎を與えられるのであろうか。師の前を退いた彼は、今や免れ難い矛盾に挾まれ、死なんばかりに惱みもがいた。そして來るとはなしに四辻に來た時、いつか心の平靜を失つて、惱は烈しい怒と變り、眼血走り髮逆ち、つく息激しく劒を振つて、思わず道ゆく人人を血烟とともに切り倒した樣は、惡鬼羅刹のまうであった。往來の烈しい四辻は、忽ち死骸の山を築き、恐は響のように全市に傳つた。罵りの聲、怨みの聲は、巷から巷へと流れ、早くも王宮に驅け入つて訴えるものも出た。彼はそれには頓着なく、切りすえた人人の指を集めて、首飾としたので誰ゆうとなく指鬘と呼んだ。

弟子達は晨朝の托鉢に出ててこの噂をきき、祇園精舍に還つてこの由を世尊に申せば、「弟子等よ、私は今より往いて彼を救うであろう」と、直ちに其處に向わせられた。道すがら牧草を車に載せて來る男達は世尊を見て申すよう。「世尊、この道を行つてはなりませぬ、恐しい人殺が道を塞いでおります」。世尊宣う。「世をあげて私に双向うたとて恐れることはない、まして一人の賊が何であろう」。

一方無害の母は我子の歸りを待ちわび、食をととのえて迎えに出たが、無害は既に九十九人を殺し九十九指を繋いで首飾とし、最後の一人もがなと、人氣のない街を見廻している處へ、我が母の來たのを見つけ、急ぎ飛びかかろうとする。この時世尊は、靜かに行手に立ち塞り給うた。彼は仕合よしと打ちうなずき、劒を振つて跳りかかれど、奇しや力竭きて一歩も進めぬ。思わず叫んだ。「出家よ止れ」。世尊宣う。「私は前から茲に居る、立廻っているのは汝ではないか」。「これは何としたことであろう」と無害は呻吟いた。世尊は更に、「汝は癡のために人の命を傷うているが、私は極みない智慧をもっているから、心は悲にいても寂かである、私はいま汝を惑んで此處へ來た」。御聲は水のように、無害の燃ゆる胸に濺がれた。彼は惡夢から醒めたように我に歸り、劒を投げすてて大地にひれ伏し、「世尊、どうぞ私の迷をお恕し下さい、私は指を集めて道を得ようといたしました、どうぞ私を濟うて御弟子の數にお加え下さい」。かくて伴われて祇園精舍に至り、改めて御敎を蒙り、直ちに證を得て長く生死の繋を斷つに至った。

五。此時波斯匿王は、兵を率いて兇賊の行衛を尋ね、進んで祇園精舍に到つて世尊に逢い奉ると、世尊宣うよう。「王の求むる指鬘はここに髮鬚を剃つて善い出家となっている、前の兇惡を改め、今は仁の心に滿ちている」。王は一時は驚き怖れたが、やがて指鬘の許にゆき、出家に對する禮をなし、「私は尊者の壽の終るまで、供養をなすであろう」といい、更に世尊に申すよう。「世尊は常に慈を垂れて、惡逆を伏せて法の會に入らしめ給います、尚この上も國民をお導き下さい」。かくして王は精舍を後にして歸った。

翌る日、指鬘は鉢を持つて巷に食を請うたが、指鬘來れりとゆう知らせは再び町の人人に恐慌を與え、或る家の姙婦は驚の餘り、急かに產氣ずいて惱み初めた。家の人人の罵る聲に指鬘は不愍を覺え、精舍に歸つて世尊にこの由を申し上げ、助くる方便を請うた。世尊宣うよう。「指鬘よ、汝は直ちに行つて女に語るがよい、私は生れて以來、まだ殺生をしたことはない、この事が眞ならば、汝は安らかに產むであろう」。指鬘は驚いて、「世尊、私は九十九人の命を斷ちました、さように申すことは二枚舌でありませんか」。世尊。「道に入る前は前生である、生れて以來とは證を得てからのことである、されば、之は決して妄語ではない」。彼は直ちに女の許へゆき、御敎の如くに語ると、彼女は安らかに生むことができた。然し道すがら、彼に怨のある人人は、石や瓦を飛ばし、杖や刀をもつて散散に彼を傷つけた。彼は滿身紅に染り、辛うじて精舍に歸り、世尊の御足を禮して悅の思をもつて申すよう。

世尊、私はもと無害の名を持ちながら、癡のために多くの人の命を害い、洗えども清まらぬ血の指を集め、指鬘の名を得ましたが、いまや、三寶に歸依して證の智慧を得ました。馬や牛を調えるには杖を用い、象を敎えるには鐵の鈎を用います。然るに世尊は、劒も杖も用いないで殘虐い私の心を調えて下さいました。ちようど、雲に覆われた月が、雲消えて光を現わすようなものであります。私は今、受くべき報を受けました。正しい法を聞いて清い法の眼を得、忍ぶ心を修めて居りますから、復と諍うことはありません。世尊、私はいま生きることを願いません。死もまた望みません。ただ時の至るを俟つて涅槃に入るで

ありましよう」。

世尊は之を聞いて、指鬘を讃め給い、「弟子等よ、我弟子の中、法を聞いて疾く解る智慧をもてるものは指鬘である」と仰せられた。

六。多くの弟子達は餘りに激しい變り方に驚いて、指鬘の本生の譚をお說き下さいと願うた。世尊は語り給うよう。

過ぎし久遠き昔、迦葉佛の滅度し給うた後、大果王とゆう王が此世を治めていた。老いて後一人の王子を擧げて大力太子と名けたが、三十歲に近いても、妃を立てることを肯わないため、人人は淸淨太子と呼んだ。王は太子が獨身で世繼を持ち得ぬことを憂え、遂に鐘をならし國中に令けて、「太子に欲の樂を味わしめる者には千金を與えよう」と申しわたした。この時、男を喜ばせる六十四の術に達している女があつて、この召に應じた。或る夜更けて、彼女は太子の宮門に立ち、ちようど春雨のように、さめざめと哀しい聲をたてて泣いた。太子は驚いて停置に尋ねさせると、「情ない夫に棄てられて、賴りない身であります」とゆう。太子は愍に思うてその女を象の厩に宿らしめたが、まだ泣き聲をやめない。更に尋ねさせると、「獨身の淋しさに」と答える。太子は遂にその牀に女を連れ來らしめた。さし俯いてもの言わず、風に得堪えぬ艶かな姿は、男心をそそらずにはおかない。太子は恍惚として女の手を取つた。

その後、太子は女色に耽り、遂に國中に令けて凡ての新妻をして、初の一夜を太子の閨に伽せしめた。或る日、長者の娘須蠻は、身に一糸も着けないで、態と群集の間を歩いた。人人は「恥知らぬ女」と罵れば、須蠻は「此國の人達は皆女である、女が女の中を裸で歩いたとて何であろう、ただ、太子のみ男であるから、私は太子の前には衣を着けるであろう」。この辛辣しい諷刺に恥を覺え、人人は手に手に武器をとつて王城に殺到り、太子の非法を述べて、王に「大王の命か、太子の命か、二つの何れかを戴きたい」と迫つた。王は之を聞き、家のためには一人を捨て、村のためには一家を捨て、國のためには一村を捨つ。眞の我のためには世界を捨つる。と唱え、太子を民衆に與えた。彼等は太子の兩手を縛つて城外に赴き、諸共に瓦や石をもつて太子を打ち殺した。太子は死に臨み、王を怨み民衆を咀い、「この恨はいつか霽すであろう」と叫び、また、「眞の人に逢うて證を得るであろう」といつた。

世尊はかく語り給うて、更に「弟子等よ、この時の大果王は指鬘の師、太子を惑わした女は師の妻、太子は指鬘、そしてその時太子を殺した民衆は今指鬘に殺された人人である、即ち太子の死に臨みての誓はここに現われて、怨を報い、又證を得たのである」と語り給うた。

第四節　社會の起原

一。そのころ舍衞城の東園鹿子母講堂において、**ワーセツタ**と**バーラドワージヤ**の二人が、佛弟子になりたいとて、四箇月の豫備の生活をしていた。或る日世尊が夕ぐれ禪定を立ち出でて講堂を下り、後ろの空地を歩いていられると、**ワーセツタ**は目ざとく之を見つけて**バーラドワージヤ**を促した。「友よ、早く世尊の御許に行こう、御口ずから法話を承わることが出來ようから」。二人は世尊の御許に赴き、禮拜して後、世尊の御後に隨うてそぞろ歩きをした。

世尊は顧みて宣うよう。「**ワーセツタ**よ、汝等は婆羅門の家より出て出家したものである、婆羅門の人人は汝等を譏るようなことはないか」。「世尊、彼等は口を極めて私共を譏つて居ります」。「どのような批難であるか」。「世尊、彼等は申します、婆羅門は勝れた階級であり、他は劣つたものである、婆羅門は神の口から生れた神の相續者である、汝等はこの勝れた階級に生れながら、神の足から生れた劣つた階級の禿頭の出家の處へ走つた、これは善いことではない、彼等はこのような批難をいたします」。

「**ワーセツタ**よ、婆羅門達は古のことを憶えていないでそのように云うのである。婆羅門の階級の女も他の階級の女のように月のものがあり、姙娠をし乳を飲ませるではないか、彼等はやはり母の胎から生れるものであつて、神の口から生れた子、神の相續者、勝れたものとゆうのは、徒らに他を蔑すむもので、その語は妄語であり、不德を生み出すものである。

二。**ワーセツタ**よ、刹帝利、婆羅門、毘舍、首陀羅の四つの階級の中、刹帝利が殺生をなし、偷盜をなし、邪しまの婬をなし、妄語、惡口、間を裂く語、綺語を云い、貪欲と瞋恚と邪しまの見を抱くことが、罪であり、罪の報をあらわすものであるならば、それは同じく、婆羅門に取つても毘舍に取つても首陀羅に取つても、罪であり罪の報をあらわすものでなければならぬ。

又、刹帝利がそれらの罪を作らぬことが善であり善き報の顯われるものであるならば、それは同じく婆羅門においても毘舍においても首陀羅においても同樣でなければならぬ。その上婆羅門は婆羅門の階級の殊勝を憍つたにしても、それには少しの根據もない。識者は認めぬ。どの階級のものでも出家して道を修め、煩惱を滅し、淨らかな行をなし終つて覺を得れば、人人は彼を第一の人と呼ぶ。法はこの現在でも未來でも、生より勝れて居るものである。

ワーセツタよ、憍薩羅の波斯匿王は、私がその領內の釋迦族から出家したものと知つて居る。釋迦族は實に波斯匿王に從屬い臣從の禮を取つているものである。而もその波斯匿王は佛に從い佛に仕え、恭敬の禮をなし、喬答摩は生正しく、私は生惡しく、喬答摩は力あつて端しく、私は力無くして醜いと云つている。彼は法を尊び、法に事えている。法は實に現在においても未來においても、生よりも勝れて居るものである。

ワーセツタよ、汝等弟子は、種種の階級から出家して居るものであるが、「汝は誰であるか」と尋ねられたら、「出家釋子の徒である」と答えるがよい。佛に信順い、心確かにて動顚のない者は、遊行者であれ、婆羅門であれ、神神であれ、惡魔であれ、如何なるものの間においても、「私は世尊自身の子である、世尊の口より生れ、法に

育くまるる法の相續者である」と語る資格のあるものである。何故なれば、佛の名は法の身であり神の身であり、法の中の存在神の道の存在であるからである。

三。ワーセツタよ、長い長い時の間にはこの世界は出來たり滅びたりする。この世界が滅びる時、多くの人人は光音天に生れ、意から成る身體を有ち、喜を食として自ら輝いて居る。この世界の出來る時に、その多くの人人は光音天からこの世界に降つて來る。やはり、意から成る身體を有ち、喜を食とし、自ら輝いて空中を飛んでいる。その時にはこの世界は只の水であつて闇である。月も日も星も輝かず、夜もなく晝もなく、日も月も年もなく、女と男の區別もない。然るに時を經て、その水の表面に甘露地が浮ぶ、煮え沸つた牛乳の表皮のようで香が高く、凝乳か牛酪の色をして蜂蜜の甘さの味を持つたものである。

その世の人人の中、貪欲强い性質のものが指につけてこの甘露地を味おうて執着を起し、他の人人も皆之に倣うて地味を味い果ては手を以てすくうて丸樂にして食べ初める。これからして人人の身體の光明が消えて、月と日と星とが顯われ、夜と晝とが分れ、日と月と年とが定つた。かくして、この世界が出來たのである。彼の人人は、かくして長い間住つていたのであるが、地味を食べるに從うて、身體が重くなり、容貌にも變化が顯われ、美と醜の別が出來て來た。美しい者は醜い者にむこうて憍慢になり、この世に憍慢が顯われると、甘露地が無くなつた。人人は集つて、おお、甘露よ、甘露よと泣き悲しんだ。

ワーセツタよ、甘露地が無くなつて、丁度蛇の皮のような地皮が顯われたが、地皮が無くなつて葦が顯われ、葦が消えて粳米が出き、次第に欲が人間の心を支配くようになつて來た。粳米は夕に實をつめば朝に再び實り、朝につめば夕に實るものであつたが、これを食べて追追に、人間の身體が重くなり、美醜が際だつようになり、男女の區別が顯われ、性の欲が生れるようになつた。初め男と女と接れあえば不淨として嫌われたが、先の不法は今の如法となり、夫婦の關係が顯われ、家とゆうものが出來るに至つた。

四。人人のうち懶惰の者は、朝に夕に粳米をつみ取る事を苦勞とするに至つた。彼等は夕の食を朝に共に摘み、二日分三日分の食を一度に摘みとるに至つた。そのために田は荒れて僅かの粳米を殘すようになつた。人人はこれを歎いて、境界を定めて、米を分割して所有を定めるに至つた。しかも懶惰にして欲深い人人は、今度は他人の所有をも犯して摘み取り始めた。茲に偷盜が顯れ、批難が顯れ、妄語が顯れ、杖を持つて打つことが始つた。人人は之を歎いて一人の能力のある正しい人を選んで、偷盜と妄語とに對い、正しく刑罰する權利を授けた。選ばれた一人は罰すべきを罰し、叱るべきを叱り、放逐つべきを放逐つた。人人は彼に米の分け前を收めた。人人に選び喜ばれたので大喜、田を保護したので刹帝利、法に依つて治めたので王と云う名を生んだ。これが刹帝利の姓の起原である。

ワーセツタよ、人人のうち、或る者は追追に惡法の顯れて來るのを歎いて、惡法を除こうと考えた。彼等は森の中に木の葉の小屋を營み、火を退け、食物を貯えず、靜かに冥想に耽つた。又、或る者は森の木の葉の小屋に入らないで町や村の近くに住んで書を作つた。惡法を除く者卽ち婆羅門、冥想者、朗吟者と云う名前が起つた。これが婆羅門の起源である。又、或る者は、男女して家を營み、色色の商賣をした。これが毘舍の起源である。又、或る者は人人の嫌う殘酷しい卑しい事を續けてして來た。これが首陀羅の起源である。四つの階級はこうして自然に出て來たものである。**ワーセツタ**よ、この刹帝利からも婆羅門からも毘舍からも首陀羅からも、自分の習慣を嫌うて出家するものがある。これが出家と云われるもので、この四つの階級から出家が顯れるのである。

五。ワーセツタよ、刹帝利でも婆羅門でも、毘舍でも首陀羅でも、身と口と意とに惡をなし邪しまの見を抱けば、死んで地獄に墮つることは同じである。どの階級のものでも、身と口と意とに善をなし正しい見を抱けば、死んで天界に生れることは同じである。刹帝利でも婆羅門でも毘舍でも首陀羅でも、身と口と意とに惡を鎭め、覺に至る法を修めて行けば、必らず覺に入る。それゆえ、**ワーセツタ**よ、四つの階級のうちから出家して佛の弟子となり、煩惱を滅し、清らかな行をなし終り、罪の重擔をおろし、覺を開いて聖者となれば、人人の中の第一と云われる。これは如法であつて不法ではない。何故ならば、法は現在においても未來においても、生よりは勝れたものであるからである。

ワーセツタと**バーラドワージヤ**は世尊の御敎を喜んだ。

第五節　二つの車

一。世尊は又、迦維羅城に歸つて城外の尼拘盧陀園にて說法し給うた。

弟子等よ、名の著れた佛弟子は、三つの法に依つて多くの人人を利益せず不幸にする。三つの法とは、他をして法に契わない身業と口業と意業とを行わしむる事である。弟子等よ、名の著れた佛弟子は、三つの法に依りて多くの人人を利益し幸福にする。そは、他をして法に契うた身業と口業と意業とを行わしむる事である。

弟子等よ、即位の灌頂を受けた刹帝利種の王は、生涯三つの場所を憶えて置かねばならぬ。それは、自分の生れた場所と、自分が灌頂を受けて王となつた場所と、戰の陣頭に立つて戰の勝利者となつた場所とである。それと同じように、佛も弟子も亦三つの處を憶えて置かねばならぬ。卽ち、鬚や髮を剃りおろして黃衣をつけ、家を出でて出家となつた場所と、四聖諦の敎を實の如くに知つた場所と、すべての煩惱を滅し、煩惱のない解脫の境をこの世において自ら覺つた場所とである。これが佛弟子として生涯覺えて置かねばならぬ處である。

弟子等よ、世間には三種の人がある。希望のない人と希望のある人と、希望を超えた人とである。希望のない人とは、奴隸や

獵師、籠職人、車師、道掃除人等の卑しい家に生れ、貧しくして食なく家なく悲慘な生活をなし、その上に容貌醜く、病氣勝ちで、片輪で歩行も契わぬような人があるとする。この人は、誰某が灌頂せられて王となつたと聞いても、何時、自分も灌頂せられて王となるであろうかとは思わない、これが希望のない人である。希望のある人とは、刹帝利の太子が十六歳となつて、灌頂せらるべき時期になつたとき、刹帝利種の誰それが灌頂せられて王となつたと聞いて、「私は何時、灌頂せられるであろうか」と思う。これが希望のある人である。又、希望を超えた人とは、既に灌頂せられた刹帝利の王は他の灌頂を聞いても、更に希望をおこすことはない。これが希望を超えた人である。

弟子等よ、丁度これと同じく、佛の弟子にも希望のない人と、希望のある人と、希望を超えた人との三種がある。希望のない佛弟子とは、戒を守らず性質惡く、淨らかでなく、行爲に信用を置けず、したことを包みかくし、心腐つて欲に滿ちて居るものがあるとする。彼はこれこれの佛弟子が煩惱を滅して覺を開いたと聞いても、「私はいつ煩惱を滅して覺を得られようか」と思わない。これが、希望なき佛弟子である。希望ある佛弟子とは、戒を持ち、善い性質をもつもので、これこれの佛弟子が煩惱を滅して覺を開いたと聞いて、「私は何時さようになるのであろうか」と思う。これが、希望のある佛弟子である。希望を超えた佛弟子とは、煩惱を滅して覺を開いたもので、かくかくのものが覺を得たと聞いても、「私はいつ覺を得よう」とは思わない。何故なれば、彼は既にその希望を達して居るからである。弟子等よ、これが三種の佛弟子である。

二。弟子等よ、法に依る正しい轉輪王も法に依らないでは政事をすることはない。法に依る正しい轉輪王は、法に賴り法を敬い、法を重んじ尊び、法を主として、その一族、住民、禽獸の類に至るまで、法の如く保護と防衛と支持とを與えるのである。法に依つてのみ政事を行うから、その政事の輪は何物に依つても覆えされることはない。

弟子等よ、丁度其ように、「法に依る正しい法の王である佛も、法に賴り法を敬い、法を重んじ尊び、法を主となして、このような身口意の三業はなしてはならない、このような身口意の三業はなさねばならぬ」と、法に依る保護と防衛と支持を與えるものである。法に依つてのみ、上なき法輪を轉ばすから、その法輪は何者に依つても覆えされることはない。

弟子等よ、遠い昔のことであるが、**パチエタナ**とゆう王があつた。或る日車師を呼んでゆうよう。「車師よ、これから六箇月の後に戰爭をせねばならないが、それまでに兩輪の車を作る事が出來るであろうか」。車師は命を承けて車輪の製作にとりかかつたが、六箇月の中六日を餘す月日をもつて、漸く一つの輪を作りあげた。王は車師を呼んでゆうよう。「もう六箇月も六日を餘すだけであるが、車は出來上つた

か」。「一輪だけ出來上りました」。「もう一つの輪はこの六日の間で出來るか」。「勿論出來上ります」。

車師は六日の中に他の輪も作上げて、王の處へ持つて來た。王は二つの輪を較べて見たが、長い月日をかけて出來上つたものと、後の六日で出來上つたものとを見分けることが出來なかつた。車師は王にその區別をお目にかけましようと、先ず、六日で仕上げた輪をまわした。輪は力のあるだけ、ぐるぐる廻つて、力が盡きると地に倒れた。二つめの輪は力のあるだけ廻つて力が盡きると、其處へ軸で貫いてでもあるかのように、眞直に立ち止まつた。

車師は申すよう。

「大王よ、六日で仕上げた輪は、外輪も輻も軸も曲があり、節や歪や瑕があります。それゆえ、まわす力が盡きると倒れます。いま一つの輪は、外輪も輻も軸も曲がなく、節や歪や瑕がありませんから、廻す力が盡きても、倒れずに立つているのであります」。

弟子等よ、車師が材木の曲、節、歪、瑕をなおすに巧みであるように、佛は身口意の三業の曲、歪、瑕を直すに巧みである。身口意の三業の曲、歪のあるものは、六日で仕上げた輪のように法と律とから倒れ、その曲、歪のないものは、他の輪のように、この法と律とにしつかり立つているであろう。それ故に汝等は、身口意の三業の曲、節、歪、瑕を取り去ろうとつとめねばならぬ。

三。弟子等よ、若し異教の者が汝等に汝等は喬答摩に從い、天界に生れるために淨らかな行を行うているかと問われたならば、汝等は此問を厭い嫌うであろうか。「世尊、その通りであります」。弟子等よ、若し汝等が神の壽命、神の容顏、神の幸福、神の繁榮をもつてしても、猶厭い嫌うと云うならば、汝等はその前に、汝等自らの身口意の三つの惡業を厭い嫌わねばならぬ。弟子等よ、三つの惡業のある商人は、得ない富を得ることは出來ず、得た富を增すことは出來ない。三つの素質とは、朝も仕事に熱心ならず、晝も仕事に熱心ならず、夜も仕事に熱心でない事である。これと同じく佛弟子も朝も專心とならず、晝も專心とならず、夜も專心とならないならば、未だ得ない功德を得ることは出來ず、已に得た功德を增すことは出來ない。

四。弟子等よ、商人が見る眼あり、仕事に熱心で保護者を得ることが出來れば、瞬く間に大きな富を得るようになる。その見る眼とは、商人が商品を知り、その商品の買い方賣り方を知ることである。仕事に熱心であることは、商品を品澤山の地方で買つて、品の薄い處で賣り捌くに巧みであることである。又、保護者を得るとは、富裕な人が、この商人は眼がある、仕事に熱心である、妻子を養う働きがある、利子を支拂う力があると知つて、金を貸すことである。

弟子等よ、これと同じように、佛弟子も見る眼があり、仕事に熱心で、保護者を得れば、法において大きな進歩を得るのである。眼があるとは、これは苦である、これ

は苦の因である、これは苦の滅である、これは苦の滅に至る道であると如實に知ることである。仕事に熱心であるとは、不善の法を捨て、善法を生れしむるために熱心に勵むことである。保護者を得るとは、多く學んで經典に精しく、律に明かな長老に質問して、蔽われたるを顯わし、昏きを明かにし、法に就ての疑難を除いて貰うことである。この三つの法を得れば、その佛弟子は間もなく、法において大きな進歩を得るのである。

第六節　人間性の藪林

一。世尊は又も王舍城に歸り、竹林精舍に於てこの年の安居をなし給うた。時に世尊の御年五十五、成道第二十年目である。この安居の時に、世尊は弟子達をば呼んで宣うよう。「弟子等よ、私も追追歳を重ねて老境に向つた、これより常隨の侍者を一人得たいと思う、汝等の中から、一人を推擧げて貰いたい」。

世尊のこの御語に依つて、舍利弗も目連も阿那律も迦旃延もみな自ら進んで、侍者としての奉仕を願うたが、世尊はこれを退け給うた。目連は世尊の御心持が阿難の上にあることを知つて弟子等に語り、阿難に進んで侍者となるようにと勸めたが、阿難は任に堪えぬとて辭退した。幾度か目連の勸を受け、阿難は最後に三つの願を出して若しこの願の御許を得るならば侍者として仕えようと申出でた。三つの願と云うは、(一)世尊の供養を受け給うた衣や食は、たとえ賜わるとも拜辭することが出來ること、(二)世尊が俗人の家に往き給う時には必ずしも隨侍する要のないこと、(三)何時にても世尊に拜謁が許されること、であつた。世尊はこの三つの願を許し給うたので爾後阿難は世尊の侍者として、影の形に添うように世尊に奉仕した。

二。世尊はこれより毗舍離に出で、更に東に進んで膽波に至り、大勢の弟子達と共にその郊外の伽伽羅湖畔に宿り給うた。

或る日ペツサとゆう調象師の子と、カンダラカとゆう遊行者とが、世尊をこの湖畔に御尋ね申しあげ、カンダラカは、寂りかえつて一語も出さずに世尊の周圍に侍つている弟子達を見て、驚いて云うよう。「世尊が、この多勢の弟子達をかくも正しく訓練られたことは驚くべきことである、古えの佛も、今の世尊のように、その弟子達を訓練られ、未來の佛も、今の世尊のように弟子達を、訓練られるでありましようか」。

「カンダラカよ、その通りである、この弟子達の中には、既に煩惱を滅し、なすべきことをなし果し、正しい智慧に依つて解脫れて聖者の覺を得た者も多い。又、この中には修行中であつて、戒行も美しく、智慧も敏く、四念住に常に心をとどめている者も多い。四念住とは熱心に心一つになして、一に身の不淨であることを觀察し、二に感受の苦であることを觀察し、三に心の無常であることを觀察し、四に法の無我であることを觀察して、世間の貪欲と失望とを征服げることである」。

調象師の子ペツサは、これを聞いて申しあぐるよう。「世尊、誠に勝れた御法であります。この四念住は人人の清淨のため、苦と悲と惱とを超え、智慧を開き涅槃の實現の爲になるものであります。世尊、私も、在家の身分でありますが、常にこの四念住を修めて、世間の貪欲と失望とを征服げるでありましよう。世尊がこの人間性の藪林の中において、人間の惡と詐との中にあつて、人人の利と不利とを知りたもうことは實に奇特であります。人間のことは藪林のように解り難く、そのことになると獸の性質は解り易い。こうゆうことを申しますのは、私が象を使うみちを思い起すからで、馬場から膽波の城門に連れてくる間に、總てそのひねくれた性質、曲つた性質、僞りの性質、ずるい性質をあらわして仕舞います。然るに私共の使う下僕、召使、手傳などは、その心と口と行がみな違つて居てまことに知り難い。この人間性の藪林の中において、人の惡と僞との中において、人人の利と不利とを知りたもうのは實に奇特であります」。

三。「ペツサよ、實にその通りである、人間の性質は藪林の如く、獸の性質は却つて解り易いものである、この世には四種類の人が存在えている、一は自ら苦しむ人、二は他を苦しめる人、三は自他兩方を苦しめる人、四は自他共に苦しめることなく、この世において、欲を離れ寂けく凉やかに安樂を受けている人である、ペツサよ、この四種の人の中、孰れが汝の心を喜ばしむるものであるか」。

「世尊、自ら苦しむ人、他を苦しめる人、自他兩方を苦しめる人は、私の心を喜ばしめません、自他を苦しめることなく、この世において、欲を離れ寂けく凉やかに安樂を受けている人が、私の心を喜ばしめます」。

ペツサは世尊の御教を喜んで、座を立つて禮拜し、右に繞つて歸つた。

四。ペツサが去つてから、世尊は弟子等を顧みて宣うよう。「弟子等よ、調象師の子ペツサは賢い者である。私がこの四種の人を今少し委細に説明するまで、暫ぐ此處に坐つていたならば、大きな利益を得たであろう。然し、今までだけでも大きな利益を得て歸つたことである。

弟子等よ、自ら苦しむ人とは、間違つた教を奉けて身を苦しめ、食を斷ち粗末な衣をつけ、苦行に從うものである。他を苦しめる人とは、屠羊者、屠豚者、漁夫、獵師、盜賊、獄守人等、總て酷らしい業務をなす人である。自他を苦しめる人とは、王者などが間違つた教に依つて、出家の眞似をなし、鹿の皮を纏い、酪や油を身に塗り、鹿の角で身を搔ぎ、王妃や輔師を連れて新宮に移り、何も敷かない地の上に寢ね、犢の乳を奪うて自ら呑み、王妃や輔師にも與え牛、山羊、羊を神の犧牲になさしめ、木を伐らしめ、草を刈らしめ、召使、下僕、用人など、皆刑を恐れて仕事をする。これが自他共に苦しめる人である。

弟子等よ、自他を苦しめないでこの世において、欲を離れ、寂けく凉やかに安樂を受ける人とは、佛の正しい教を聞き、家を捨てて佛の弟子となり、殺生をせず、慈を持ち、偷盜をせず、淨らかな行をなし、

妄語を云わず、草や木の生命を取らず、欲を少くして足るを知り、正しい戒を具えて自ら罪のないことを知る樂を受ける人のことである。この人は眼に物を見、耳に聲を聞き、鼻に香を嗅ぎ、舌に味を得、身に觸を得ても、心執われず、五官を抑え守つて心好き樂を受けるのである。この人は行くも住るも坐るも臥するも常に意識を以てこれをなし、欲を遠離れた座を好み、煩惱を離れ、禪定に入り、心清らかになつて自ら煩惱の盡きたことを知り、この生を超えて迷の生はないとゆう智慧を生む。かようにして寂けく凉やかに安樂を受け、最も勝れた生活をするのである」。

第四章　四諦

第一節　煩惱を離るること

一。世尊はそれより又、再び舍衞城に入り、暫く祇園精舍に滯まりたもうた。或る日の夕ぐれ、純陀は禪定より立ち出で、世尊の御許へ詣でて申し上ぐるよう。「世尊、世間には自我のことについて、さまざまの意見が行われて居りますが、佛の弟子は如何ように思うて、これらの意見を捨てることが出來るのでありましようか」。

「純陀よ、世間には自我又は世界に就て、さまざまの意見が立てられ、何人の上にも働きかけようとしているが、「これは私のものではない」、「これは私ではない」、「これは私の自我ではない」と、このようにあるが儘に正しく觀て居れば、これらの意見を捨てることができる。

純陀よ、或るものが諸の禪定に入つて私は今、煩惱を捨てた狀態に住んでいると思うことがあるかも知れない。然し、この教においては、これを煩惱を捨てた狀態とは云わぬ。それは現在の樂の住と呼ばれるものであり、或は寂靜の住と呼ばれるものである。

純陀よ、煩惱を離れるとはこのようにすべきである。「餘の人は他に害をなし、殺生をなし、盜をし、邪しまの婬を犯し、妄語を云い、二枚舌を使い、口汚なく、無駄口をなし、貪り、瞋の心を抱き、邪見で邪しまの思をなし、その他いろいろの惡をなし、惡い心を抱くであろうが、私は決して是等のことをなさぬであろう」。純陀よ、煩惱を離れるとはこのようになすべきものである。

純陀よ、善い心を起すだけでも、大きな利益のあるものである。まして之を身に口に行うにおいては猶さらである。喩えば高さ低さのある道の傍らに平らな道があり、凹凸した船着場の傍らに平らな船着場があるように、他を害ね殺める人の周圍に命を取らぬことを教える道があれば、その人はこのよい教の道に入る機會が與えられるのである。

又、總て惡い行は下へ下へと引きおろし、善い行は上へ上へと昇らしめるものであるが、他を害い殺生をするもののために、害わず殺めぬ人は上へ昇らしめる道となるものである。純陀よ、自分が泥の中へ埋もれていて、他人を泥の中から引き上げることはできぬ。自分が五官を馴し制え、煩惱を滅きないでいて、他人をしてその五官を馴し制え、煩惱を滅さしむることは出來るものでない。丁度このように、他を害い殺生をするもののために、害わず殺さぬものは、その煩惱のなくなつた境地に入らしむる因となるのである。

純陀よ、上のように私は煩惱を滅す仕方と、善い心を起す仕方と、善い道を以て惡い道を取り圍む仕方と、上へ昇る仕方と、煩惱のなくなつた境地に入らしむる仕方とを說いた。純陀よ、これで私は弟子を愛で憐む師として爲すべきことを爲し終つたのである」。

二。或る日、年老いて腰の曲つた婆羅門が世尊の御許に詣でて申しあげた。「世尊、私は年老いて死に臨んで居ります、しかも私はなすべきことをなさず、恐を去ることをなして居りません、どうぞ、私の永久の利益となる教を御示し下さい」。

「婆羅門よ、實に汝のゆう通りである、老と病と死とに運び去られる世界においては、身と口と意の三つを制えることが、死にゆく自分の庇護となり、依所となり、燈明となり、支持となるものである」。

命みじかし、時はながる、老に運ばる
る人に庇なし。死の恐を前に見て、功
德ある行なせば、その人のかくれが
となならむ。

三。また、或る日、一人の婆羅門が世尊に詣でて申しあぐるよう。「世尊、世尊の教は、この現在に果報があるものと云われていますが、どのように現在の果報があるでありましようか、直接の效があり、來り見よと示すことができ、心に持つ値ある法とは、如何なることでありますか」。

「婆羅門よ、貪欲に燃えている心は、自らを害い他を害い、自他兩方を害うことを思い、心の中に苦と惱とを覺えるものである、貪欲を去れば是等の惱はない、婆羅門よ、瞋恚に狂わされている心も同じことである。その迷わされている心も同じことである。その瞋恚を去り愚癡を離るれば、これ等の害の思はなくなる、これが現在の果報である、是が直接の效があり、來り見よと他に示すことができ、心に持つ値のある法である」。

四。或る日又、サンガーラワとゆう婆羅門が世尊を訪ねて申しあぐるよう。「尊者喬答摩よ、私は婆羅門でありますから、自ら犧牲を供え、又、他の人にも犧牲を供えさせます、この犧牲を供え、又供えさせれば、その犧牲を具えた因によつて、その犧牲になつた動物の身から出る功德の道に入ります、誠に自他共に受くる大きな功德であります、これと反つて家族を捨てて出家となるものは、ただ自分の身だけを制え、自分の身だけを靜め、自分の欲を滅すだけでありますから、ただ自分一身だけの功德の道に入るのであります」。

「それでは婆羅門よ、私の問うことを思のままに答えるがよい、汝は如何に考えるか、この世に佛が顯れてこのように說く、『來れよ、これが道である、私が自ら證つた上なき涅槃を示すであろう、汝等もそれを行えば、その上なき涅槃を證りうるであろう』と、この佛の教に多くの人人が從い、

數百人、數千人、數十萬人がこの道を行う、婆羅門よ、これに依つても、出家の功德は我身一つだけに限ると云うか」。「尊者喬答摩よ、若しそうゆうことならば、出家の功德は多くの人人に及ぶものであります」。

その時、その傍らにいた阿難は云う。「婆羅門よ、この二つの道のうち、孰れを善いと思うか、どちらが困難が少なく、大きな結果があり利益があると思うか」。

婆羅門は、この問には答えないで、「尊者喬答摩や、尊者阿難のごときは、私の供養に値し、私の賞讃に値する方であります」と逃げた。阿難は、「婆羅門よ、私は汝が誰を供養し賞讃するかを聞いて居るのではない、この二つの道の中、孰れを善いと思うかと問うて居るのである」と二度、三度尋ねたが、婆羅門は同じ答をして、その問を避けようとした。

五。世尊はこの樣子を御覽されて、婆羅門の窮境を助ける思召で尋ね給うた。「婆羅門よ、今日王宮において、人人が集まられた時に、どんな話が起つていたか」。「尊者喬答摩よ、今日王宮では、昔は出家の數が今より少かつたが、神變を持つ人は今よりも多かつたと云う話がありました」。

「婆羅門よ、汝のゆう神變に三種の別がある。神通神變、記心神變、敎誡神變である。神通神變とは茲に人あつていろいろの神通を示す、一であつて多となり、多であつて一となり、或は現れ、或は沒れ、牆を過ぎ、壁を過ぎ、山を貫いても、障碍のないこと空を行くようであり、或は地の中に出沒すること水に入るようであり、水の上を破らないで行くこと地の上を行くようであり、大威德大勢力のある日月をも手をもつてさわり、神神の世界までもこの肉體を以て行くとゆう、これが神通神變である。

記心神變とは、茲に人あつて或るしるしに依つて汝の心は斯く斯く、汝は斯く斯くのことを考えている、汝の考はこのようであると示す。又、しるしに依らず、人や神や獸などの音を聞いて、人の心を言い當てる。或は何物にも依らないで言い當てる。これが記心神變と云われるものである。

敎誡神變とは、人あつて他の人に、このように考えよ、このように考えるな、これを捨てよ、これに心を止めよと敎える。これが敎誡神變である。婆羅門よ、この三種の神變の中、孰れを勝れていると思うか」。

「尊者喬答摩よ、神通神變と記心神變とは、それをなす人だけ享けるので、その人にだけある譯で、幻に似たものであります、然しながら敎誡神變は自他共に享け、自他共にあり、從つて三種の神變のうちでは最も勝れたものであります、尊者喬答摩よ、誠に勝れた御敎を承りました、私は尊者がこの三種の神變を具え給う方であると思うて居ります、尊者の外にも、これを具えた方がありますか」。「婆羅門よ、それは固よりある、この三種の神變を具えた弟子は、百人や二百人や五百人許りではない、もつと餘計にあるのである」。

「尊者喬答摩よ、それらの御弟子は今、何處に居られますか」。「婆羅門よ、彼等はこの僧伽のうちに居る」。**サンガーラワ**婆羅門はこの御敎を喜んで、生涯信者となることを誓うた。

第二節　大迦旃延

一。その頃、大迦旃延は**ワラナ**の町の**カツダマ**湖畔に滯まつて居たが、或る日、婆羅門の**アーラーマダンダ**は大迦旃延の處へ行つて挨拶の後に尋ぬるよう。「尊者よ、刹帝利が刹帝利と諍論い、婆羅門が婆羅門と諍論い、毘舍が毘舍と諍論するのは、何の理由によりましよう」。「婆羅門よ、それは貪欲に縛られ、それに沈み、刺擊されているからである」。

「尊者よ、この世の中に、貪欲から脫がれている人がありますか」。「婆羅門よ、今、この東方の舍衞城にこの世の世尊に在す御佛が住んでいられるが、その方が、これから脫れて在す方である」。

これを聞くと婆羅門は、急かに座を立ちあがり、衣を一つの肩に掛け右膝を大地につけ、世尊の在す方向に掌を合せて、「彼の世尊に在す、御佛に歸依し奉る」と三度歸依して、「ああ、世尊はこの貪欲から免れ給う」と讃え、大迦旃延の敎を喜んで生涯信者となることの誓を立てた。

二。又、或る時、大迦旃延は**マドラーヤ**の**グンダ**の林に滯つて居た。或る日、**カンダラーヤナ**婆羅門は彼を訪ねて云うよう。「尊者よ、私は大迦旃延が耆宿の婆羅門を拜まず、座を立つて迎えず、座を與えもしないとゆうことを聞きました、若しこれが事實であるならば、これは正しいことでありましようか」。

「婆羅門よ、世の世尊に在します御佛の說き給うた老年と若年との解釋がある、それに依れば、假令、年老いた八十、九十の婆羅門であろうとも、愛欲に耽り、愛欲の炎に燒かれ、愛欲を求めて飽かなければ、彼は若年者である、又、假令若い婆羅門であつても、愛欲に耽らず、愛欲を求むることがなければ、彼は賢き老人と云わねばならぬ」。

これを聞くと、**カンダラーヤナ**婆羅門は座を立ち衣を一つの肩にかけ、傍らに並んでいた年若の佛弟子等の足に己が頭をつけて云つた。「あなた方は誠に長老に在す、私は若者に過ぎない」。彼は以後生涯信者となることを誓つた。

三。世尊は猶祇園精舍に引續いて滯らせられたが、或る日**サイツタ**と摩訶倶稀羅とは舍利弗の處へ行き法の話をした。舍利弗が云うよう。「世間には三種の人がある、即ち自身に體驗する身證の人と、智慧によつて達する見至の人と、信仰によつて解脫れる信解の人とである、この中何れを勝れて居ると思われるか」。

サイツタは云う。「私はこの三種の人の中、信解を勝れて居ると思います、何故なら、この人の信仰は最も勝れて居るから」

摩訶倶稀羅はゆう。「私は身證を最も勝れて居ると思います、何故なればこの人の禪定は最も勝れて居るから。しかし舍利弗よ、卿はこの三種の人の中、何れを勝れて居ると思われるか」。

舍利弗。「私は見至が最も勝れて居ると思います、何故なれば、この人の智慧は最も勝れて居るから。時に友よ、我我は皆そ

れぞれ意見を語り合うた、これから世尊の御許へ行ってこのことを申しあげ、世尊の仰せられる通りに憶持とうではないか」と、連立つて世尊に見え、以上のことを申しあげた。

「舍利弗よ、この三種の人の中、この人が勝れて居ると確かに云い切る事は難しい、何故なれば、次のような場合があるからである。信解の人が聖者に達し、身證と見至の人がそこまで至らぬこともある、これと反つて、身證の人が聖者になつて、見至と信解の人がそこまで至らぬこともある、又見至の人が聖者に入り、身證と信解の人がそこまで至らぬこともある、ゆえに三種の人を比べて、何れが勝れて居ると云い切ることは難しい」。

四。世尊はまた、或る日弟子等に語りたもうた。「弟子等よ、世間の病人を三種に分つことができる。一は、善い食物、利目のある藥、適當しい看護人などを、得ても得ないでも治られない病人である。二は、善い食物、利目のある藥、適當しい看護人等を得ても得ないでも治られる病人である。三は、善い食物、利目のある藥、適當しい看護人などを得れば助かり、得なければ助からぬと云う病人である。弟子等よ、この第三の病人がある爲に、第一の病人も第二の病人も、病人の食物、藥、看護が與えられるのである。

これと同じく、法の上においても三種の人がある。一は、佛に遇うても遇わないでも、佛の敎を受けなければ道に進み得ぬ人である。二は、佛に遇うても遇わないでも、佛の敎を受けても受けないでも、それに拘らず善法に進み得る人である。三は、佛に遇うて、佛の敎を受ければ道に進み、佛に遇わず、佛の敎を受けなければ道に進み得ぬ人である。弟子等よ、この第三の人があるから、他の第一と第二の人に就ても法が說かれるのである。

五。弟子等よ、三種の心を持つている人がある。一は傷口のような心を持てる人、二は電のような心を持てる人、三は金剛のような心を持てる人である。

傷口に似た心を持つている人とは、忿り易く、自暴自棄になり易く、いらいらした心を持つて、丁度傷口が棒や土器の破片に觸れると、膿を出すような有樣のことである。電に似た心を持つている人とは、これは苦である、これは苦の因である、これは苦の滅である、これは苦の滅に至る道であると如實に知る人のことであつて、丁度闇の中に電が閃めくと、その光ではつきり物の形を見得るような有樣のことである。金剛に似た心を持つている人とは、煩惱を滅して覺を開いた人のことであつて、丁度金剛が珠でも石でも何でも切るような有樣のことである。この世間にはこの三種の人がある。

六。或る時、阿難が世尊の御許に行くと、世尊は仰せられた。「阿難よ、私は身と口と意の三つに惡行をしてはならぬと嚴しく云うものである」。「世尊、若しその禁を犯して三つの惡行をいたしましたならば、いかような報がありましようか」。

「阿難よ、三つの惡い行をすれば、自ら身を責め心ある人に譏られ、惡い名を得、心亂れて命を終り、死して地獄に入るであろう、これがその報である、阿難よ、私は身と口と意の三つの善い行をせねばならぬと嚴しく云うものである」。「世尊、その三つの善い行をすればいかなる報がありますか」。「阿難よ、自ら自分を責めることなく、心ある人に讃えられ、ほまれを得、生命の終るときに心亂れず、死して天界に生れるであろう、これがその善き報である」。

七。更に世尊は弟子等に語り給うよう。

弟子等よ、茲に二つの勝れた法がある。それは止と觀とである。止を修めれば心が調うて欲の汚を離れることが出來、觀を修めれば、智慧を增して無明を離れることが出來る。欲に汚されれば心調わず、無明に汚されれば智慧は增さぬ。欲を離れるには心を調えることにより、無明を脫れるには智慧を增すことに依る。

八。弟子等よ、私は汝等に惡人と善人の依つて立つ地を說こう。惡人の地は何であるか、惡人には恩を知り感謝を持つとゆうことがない。この恩を知り感謝を持たないことが惡いことである。善人の地は何であるか、善人には恩を知り感謝がある。この恩を知り感謝を持つことが善い事である。

弟子等よ、いかにつとめても、二人の人にはその恩を報いつくすことが出來ぬ。二人とは父と母とである。たとえ、百年の壽ある人が、百年の間、右の肩には母を乘せ左の肩には父を乘せて歩いても、又、香水を以て父母の身體を揉み摩り、洗い清め、按摩しても、父母の不淨を始末しても、猶その恩を報いるには足らない。父母を王者の位に昇らせるまでにつとめても、その恩に報いるには足りない。何故なれば、父と母とはその子供に多くの資助を與え、これを養い育て、この世を子供に見せた人であるからである。若し父母の不信を諭して信仰に導き、惡しき戒を捨てさせて正しい戒に立たしめ、貪欲を離れさせて施に導き入れるならば、父母の恩義を報いるに足り猶それより上に出ることが出來る。

九。弟子等よ、この世に勝れた尊い二種の努力がある。一は在家の人が出家に衣、食、座具、藥石を供養する努力で、他は出家自身が煩惱を滅す努力である。汝等は煩惱を滅ぼすために努めねばならぬ。

一〇。弟子等よ、汝等は、「たとえ、血と肉が涸れ切つても、皮と筋と骨の殘る限りは、男らしい力、男らしい精進をつくして至るべき所に至らぬ間は、決して努力をゆるめぬ」とゆう決心をもたねばならぬ。この決心に依つて汝等は遠からずして家を捨てて出家となつた目的を果し、淨らかな行をこの世において成しとげるであろう。

一一。弟子等よ、茲に二つの法がある。一は縛の法に對うての愛着の見方、他は繫縛の法に對うての厭惡の見方である。愛着の見方によつては、貪欲も瞋恚も愚癡も廢たらず、從つて生と老と死と憂、悲、苦、惱、悶から脫れることが出來ず、常に苦に泣かねばならぬこととなる。厭惡の見方に依つては、貪欲と瞋恚と愚癡とがすたり、

從つて生と老と死と憂、悲、苦、惱、悶から脱れて、ああ樂しいと、歡びの聲をあげることが出來るようになる。

弟子等よ、二種の黑法と白法とがある。白法は世間を護り、黑法は世間を壞すものである。二種の黑法とは無慚と無愧、二種の白法とは慚と愧とである。

弟子等よ、茲に二種の力がある。思惟の力と修習の力とである。思惟の力とは、人が身と口と意の三つの惡業には、それぞれ現世及び未來に惡い結果があると考えて三つの惡業を離れることである。修習の力とは、實際に貪と瞋と癡を離れる行をなし覺の道と禪定とを修め、惡を離れて善に就くことである。

第三節　四諦の座

一。世尊は舍衞城を去つて南に進み、阿羅毘に入つてその進左波の林に草を床として住わせられ、屢ば弟子等を誨し給うた。

弟子等よ、粃や麥の芒を横に臥せ、その上に手や足を置いて、傷つけようとしても出來ない。それは、その芒がねているからである。丁度このように、心を正しうしないで無明を破り明を顯わそうとしても、出來ることではない。何故なれば、心が正しく置かれていないからである。弟子等よ、これと反つて粃や麥の芒を立てて置いて、その上に手や足を傷つけようとすれば出來るように、心を正しくすれば無明を破り、明を顯わすことが出來る。

二。弟子等よ、濁つた泥池の岸に立てば池の底の眞珠貝も、小石も、魚の群も、總て見ることが出來ない。丁度そのように、心が濁つて居れば、自分の利を知り、他人の利を知り、自他に通う利を知り、汚のない知見を實現することは出來ない。

三。弟子等よ、數ある樹樹の中にて、チークの樹ほど、しなやかで何を作るにも便利よい木材はない。丁度そのように、修められ習わされた柔かな心ほど、手はずのよいものはない。

弟子等よ、心ほど輕輕と轉び易いものはない。心はもと清らかなものである、それが外から來る汚の爲に汚されるのである。それであるから、心はその外から來る汚から脱れることの出來るものである。この心がもと清らかなものであつて、外から來る汚のために汚されるものであることを、智慧のない人は知らない。それであるから、智慧のない人人には心を馴すとゆうことがない。この敎の弟子は如實にこのことを知るから、心を馴し調えるのである。

四。弟子等よ、しばしの間も、慈の心を修め、增し、念をかけるならば、その人は空虛でない禪定に住い、師の敎を守り、萬ずの施を食べるに値するものと云われる。況して幾度も行うものは猶更である。

弟子等よ、いかなる善と不善の法でも、みな心を先導とするものである。心はこれらの法の先導となり、これらの法はそれに從うものである。

五。弟子等よ、怠慢、疎懶、欲多きと心滿たぬと、正しうない思惟、惡しき友、これらは皆未だ生れない善からぬ法を生れさせ、已に生れた善法を滅すものである。結

進、努力、欲少のうして足るを知ること、正しい思惟、善き友、これらはみな、未だ生れない善法を生れさせ、已に生れた善法を滅すものである。

弟子等よ、親族、財寶、名譽、これらのものが增したところで云うには足らぬ。ただ知識の衰えることが怨しい、それを增すことに努めねばならぬ。

弟子等よ、邪まの見は、人をして死して後地獄に墮ちしめ、正しい見は、人を天界に導くものである。邪見の人が、その見に從つて行うところの身と口と意の三業、希望も欲願も其他いかなる心の働も、總て皆悲しい苦の果を招くものである。喩えばニンバの種を地に蒔けば、いかなる地の味や水の味をとつても、總てみな苦い惡い味になるようなものである。それは種が惡いからである。又、正しい見の人が、その見に從つて行うところの身と口と意の三業、希望も欲願もその他いかなる心の働も、總て皆うるわしい樂しい果を招くのである。喩えば、砂糖の木の種を地に蒔けば、いかなる地の味や水の味を取つても、總てみな甘い香のよい味となるようなものである。それは種が善いからである。

六。弟子等よ、この世界には樂しい花園美しい林、澄んだ池は少なく、坂や峠や嶮しい處や、樹の株、荆棘の垣などが多いように、陸に生れる有情は少なく、水の中に生れる有情は多い。それと同じく人界に生れるものは多い。又、中國に生れる人は少なく、邊國や蠻野の地に生れる人は多い。

弟子等よ、それと同じく、賢くして智慧あり、義の善惡を知り分ける力のある人は少なく、暗く魯かに、聾や啞に生れ、義の善惡を見分ける力のない人は多く、聖らかな智慧の眼を有つ人は少なく、無明に覆われて迷妄に入る人人は多い。弟子等よ、それと同じく、佛を見る者は少なく、佛を見ぬ者は多い。佛を見ることが出來ても、佛の說く法を聞き得る者は少なく、得ない者は多い。又、法を聞いても受持つ者は少なく、受持たない者は多い。

弟子等よ、又、法を受持つても、その義を辨える者は少なく、辨えぬ者は多い。法を受持ち義を辨えても、その法に從うて行う者は少なく、然らざる者は多い。それと同じく、鶩を立つべき所に鶩を立てる者は少なく、鶩を立てぬものは多い。悲を靜めるために正しく努める者は少なく、然らざる者は多い。涅槃に入ろうとして心を一點に集め、寂靜の心を得るものは少なく、然らざる者は多い。また義の味、法の味、解脱の味を得る者は少なく、然らざる者は多い。弟子等よ、汝等は、これら諸の味を得ようと努めねばならぬ。

七。弟子等よ、佛法僧の三の寶に歸依することの德とゆうものがある。佛はあらゆる人人のうち最も勝れたものであつて、及ぶものがない。丁度牛の乳を精製した醍醐が、總ての牛の乳の種類の中で最も勝つていると同じである。この第一に勝れた佛に歸依するのであるから、第一の德を得て人界に生れ、その福を受ける。法は佛の開き顯わす所であらゆる法に超え勝れている。

醍醐が總ての牛の乳の種類に勝つて居ると同じである。この第一に勝れた法に歸依するのであるから、第一の德を得て人界に生れその福を受ける。僧伽は佛の弟子の和合の團體であつて、あらゆる團體に超え勝つている。これも醍醐が總ての牛の乳の種類に勝つて居るのと同じい。この第一に勝れた僧伽に歸依するのであるから、第一の德を得て人界に生れ、その福を受けるのである。

第四節　父母の恩

一。毗舍離の人、薩婆迦摩は浮世の生活を厭い、妻を捨てて世尊の御許に出家した世尊より止觀を凝すような公案を與えられ靜かな場所に退いて、行を正しうじ、心を練り智慧を研いた。遊行の生活、あちらこちらと旅を重ね、暫くの後に生國に歸り自分の家を音信れた。妻はありし日の面影を失い、痩せ衰え、惱に疲れた姿も痛痛しく、眼に涙を湛えて挨拶して、傍らに坐つた。その樣子に打たれて、哀憐の情おのずと湧き起り、危うく平靜の心を失うて還俗しようとしたが、駿馬が鞭影を見て馳け出すように、驚きを立てて更に道の奥深くに分け進み、これを機緣として行を勵み遂に覺を開いた。養の父母は、近くに薩婆迦摩の來たことを喜び、今一度家に引き戻して娘の晴晴しい顏を見たいと思い、娘に美しく裝おわせ、携えて精舍に至り、還俗をすすめた。薩婆迦摩は次の歌を示して、その請を退けた。

この二つの足ある身、人に抱かるるも
淨らかならず、いとわしき臭いあり。
もろもろの汚れ滿ち滿ち、此處彼處に
じみ出ず。
鹿は係蹄に、魚は鈎に、猿は黐に囚
わるるごと、世の人人は色に縛らる。
いとしき色と聲、味と香と觸の、五つ
の欲は、みな女のかたちにそなわる。
心、ものに縛られて、世の常人はこれ
に交わり、恐しの己が墓場擴げて、迷
の種をつむ。
足をもて、蛇の頭を蹴るがごと、これ
らを斥くる正しき人は、念正しく世の
毒を退く。
欲に禍を見、出離に安らさを見て、我
は欲棄て、心の垢を離れたり。

阿難は道にこの養の父母と娘とを見て薩婆迦摩の事を心遣い、薩婆迦摩に遇われたかと尋ねた。「遇いましたが、遇わないも同然でありました」。「御話しなされたか」。「話しましたが、話さないも同然でありました」。阿難は次の歌を歌うて、精舍に歸つた。

火に水を求め、水に火を探ね、空に有
をばさぐるごと、欲なきに欲あれと、
求むは愚かし。

薩婆迦摩は阿難を見て、自分の覺を打明けた。阿難は、

よく清き行守り、道を修めて迷を斷
つは、御佛のまことの弟子ぞ。

と歌うて薩婆迦摩の覺を讃め歎えた。

二。世尊はそれより恒河を渡つて、その南岸に出で、流に添うてベナレスに至り、鹿野苑に滯まり給うた。或る日世尊は又、

弟子等に敎え給うよう。

弟子等よ、世に三種の人がある。岩に彫りつけた文字のような人と、沙に書いた文字のような人と、水に書いた文字のような人とである。岩に彫りつけた文字のような人とは、屢ば腹を立ててその怒を長く續ける人のことである。丁度岩に彫りつけた文字が、雨風にさらされても消え去らず、長く殘つている樣なものである。沙に書いた文字のような人とは、屢ば腹を立てるが、その怒が沙に書いた文字のように、速かに消え去る人のことである。水に書いた文字のような人とは、水の上の文字が速かに流れて跡方もないように、惡口や快らぬ語を聞いても、少しもその心に跡を留めず、和氣充ちている人のことである。

三。弟子等よ、マカチの纖維で作つた布は、新らしくても、中古でも、古くても、醜く肌ざわりが惡く値も安い。この布の古片は、壺を拭くに用いるか、芥溜の中に棄てるより外に仕方がない。丁度之と同じく佛弟子にして、新參であつても、中位であつても、又上座であつても、戒を持たず性質が惡ければ、私は彼を醜いものとゆう。彼に交わりその見解に同じうすればその人の永劫の不利不幸となる。これはその肌觸の惡いことである。又彼は信者から衣、食座具湯藥を受けても、その信者の布施は大きな果報を得ることが出來ない。私はこれを値が安いとゆう。又、このような上座の弟子が、僧伽の中で他を譏つたり導いた場合、他の弟子は、「汝が譏つた處で何になろう、汝こそ譏られるべきものと思わないか」と云うてあろう。これを聞いて、彼は腹を立て荒荒しい語を放つて、遂に僧伽から追われるようなことになる。これが芥溜の中に棄てられるとゆうことである。

弟子等よ、カーシの絹布は、新しいものも、中古のものも、古いものも、美しく肌ざわりが善く、値も高い。古い絹の片は寶玉のつつみか、香箱の中に入れられるものである。丁度このように、新參でも、中位でも、上座でも、戒を持ち善い性質を具えて居れば、私は彼を美しいものとゆう。彼に交わりその見解に同じうすればその人の永劫の利益幸福となる。これを肌ざわりが善いとゆう。又、彼が信者から衣、食、座具湯藥を得れば、施主はそれに依つて大きな果報を得る。これを値が高いとゆうのである。弟子等よ、又、このような上座の弟子が、僧伽の中で何事かを語ろうとすれば、弟子等は皆云う。「あなた方、靜かにして下さい、上座の方が法と律とを語ろうとしています」と。弟子等よ、それ故に、「私はマカチの布の喩のようにならないでカーシの絹の喩のようになろう」と學ばねばならぬ。

四。弟子等よ、「この人は自分のなした業の通りに報を受けねばならぬ」とゆう者があつて、それが又、眞の事實であるならば、淨らかな行をすることもいらないし、苦惱を滅す機會もあり得ないことになる。

弟子等よ、小さな罪業を犯して地獄に墮ちるものもある。又、同じ罪業を犯してもその報はこの世において果して了い、未來には重い苦報は云うまでもなく少しも苦を受けぬ者もある。それで前の場合は如何

なる時に起るかとゆうに、茲に人あつて、身を修めず、戒を修めず、心を修めず、智慧を修めず、德少なく、心小さく、從つて小さな事にも苦しみもがいている。こうゆう人は小さな罪業をなしても、そのために地獄に墮ちるのである。これと反つて、身を修め、戒を修め、心を修め、智慧を修め、德豐かに、心廣く、量りない善を具えている人は、小さな罪業をなしても、その報を現世に果して、未來に重い苦報は云うまでもなく、少しも苦を受けないで濟むのである。

弟子等よ、喩えば鹽の一塊を小さな鉢の水に入れれば、その鉢の水は鹽辛く、恒河の水に入れれば、鹽辛くないようなものである。又、或る人は僅か半錢の金で牢獄に入らねばならず、或る者はそれだけでは牢獄に入らないで濟むようなものである。即ち貧しい人は僅かに半錢で牢獄に入れられ、財寶豐かな富人は僅か半錢のためには牢獄に入れられないのである。又、貧しさに苦しむ男は一頭の羊を盜んだとゆうことで、牢獄に繫がれ、自由を奪われ、富豪や貴族が盜んだ場合には、却つて持主の方から謝つて、その代償を下げて貰わねばならぬようなものである。

弟子等よ、それゆえ、小さな罪業を犯しても、或る者は地獄に入り、或る者はこの世でその報を果して、未來にはその苦果を受けないのである。それ故に、なした業の通りに報を受けるのではなくて、業を作つて、報を受けねばならぬように、その報を受けるのである。このようになつて初めて淨らかな行をなす必要があり、苦の終を得る機會も顯われるのである。

五。弟子等よ、黃金は美しいものでもその鑛石は土や沙や小石が交つていて汚ないものである。この汚ない鑛石を刳鉢の中へ入れて、幾度も洗う。猶汚のあるものを幾度も洗うて淸らかにする。こうしてだんだん汚を去つて金沙だけを殘す。この金沙を金工が坩堝の中へ入れて、鞴を吹いて熔す初めの間は熔け難く、汚が取れず柔かにならず、光がなく、もろくて仕事に用いられぬが、それを幾度も鞴にかけて熔してようよう汚を去り、輝きが出て仕事に用いられるように柔かにする。これを取つて金工は自分の思う儘に金の線に延べたり、耳環、腕環、金の鎖にするのである。

弟子等よ、丁度之と同じように、禪定を修めるものも、初めは身と口と意の三つの惡にひどく汚れているものである。心ある賢こいものは、次第にそれを取り除け、滅し無くする。而も猶欲と瞋と害の意識の汚があるので、これをも除き滅すが、それでも親戚とか國家とか、他人が自分を輕しめないなどの考がついている。この汚を除いて法の意識が殘り、猶このために禪定が淨くならず、心が正しく一點に集まらない。その禪定は猶、無理のあるものとなる。弟子等よ、心ある賢こいものは、次第にこれらの汚を滅して正しい禪定を得、神變を得、智慧を得て、煩惱を滅し覺を得、自分の願う儘に目的を果すことが出來るようになるのである。

弟子等よ、禪定を修めるものは、專心に

なること、努め勵むこと、差別の念を捨てることを思わねばならぬ。專心になることを思えば、その心は怠る恐があるから、努め勵むことを思わねばならぬ。努め勵むことを思えば心が擧る恐があるから、差別の念を捨てることを思わねばならぬ。又、差別の念を捨てることにかかりはてれば、煩惱を滅ずことに向わない恐がある。それゆえ始終この三つの相を思い合すれば、心が柔かくなり、仕事に役立つようになり、輝きを持ち、丈夫になるのである。丁度金工が金を爐に入れて、火にて熱き、水にて濕おし、時時試しているようなものである。一向に火にて熱める許りであれば、金は灰になるであろう。水にて濕おすだけであれば、冷え切つて仕舞うであろう。試してばかり居れば役に立たないものになるであろう。火にて熱き、水にて濕おし、時時試して見て、その金は柔かくなり、輝きが出、仕事に役に立つようになり、金工の思うが儘の細工を施すことが出來るのである。弟子等よ、それゆえ禪定を修めるものは、この三つの相を合せ思うて行かねばならぬ。このように三つの相を思うてすすめば、自分の思う儘に種種の神變や智慧を得ることが出來るのである。

第五節　心と世界

一。或る時、數多い菩薩達は十方より雲のように、此處に集り、佛の德を讃えまつるよう。

(一) かぎりなき時の間、御佛を見奉れど、正しき法の眞は得られず、疑の網增して、死生の獄に繫れつ、佛見まつるに盲いたり。

(二) 御佛の智慧深く、測りぞ難し、眞の法を知らざれば、世はみな惑う、智慧なきものは、虛りて諸法を見れば、佛を見たてまつらず。

闇に寶のある如く、燈なければ見るを得ず、敎また、說く人なかりせば、智慧あるものも了り得じ。

目明かならねば、微妙き色も見ゆるなし、穢れたる心には、佛の敎も見ゆるなし。

(三) 法みなは虛なれど、人人愚にて、芯あるものと思いて、死生の輪を、永えに廻らす。

善からぬものを勝れたる御法と思い、正しき道を知らざれば、いかで我が心を知るならん、顚倒の念より、いやまし惡かさぬなり。見なきこそまことの見、眞の法をよく見なん、法にまことを見るあらば、彼に見のあることはなし。

(四) 勝れたる敎を聞きて、淨き智慧の光生れぬ。此光世を照し、すべての佛を見まつらん。

若し、「人」ありと計わば、心險しき道にあらん、法に眞の主はなし、そは只假の言のみ。

人人迷うて自を知らず、自ら「實にあり」とせり。御佛は、有ると無しとを離れ給えば、かかる人には佛は見えず。

心のけがれ智慧の眼障えて、覺の人を見まつらず、量りなの時を重ねて、死

生の海を轉り廻りぬ。

「流轉」は生死、「流轉せざる」は涅槃、生死と涅槃と、この二つ得べからず。假の名を逐うものは、この二つを異に見て、聖の法に惑いつつ、上なき道を知るぞなき。

(五) かかる人、「佛」をゆうも、顚倒の想にて正しくあらず、されば佛を見たてまつらず、寂かなるその御相ぞ、實の法と知るならば、覺の人を見たてまつり、語の道を超ゆならん。

語もて法を說くとも、實の相顯れず、ただ平等の念のみ、「佛」と「法」を見たてまつらめ。

過ぎし世も、未來も、はた今も、永く寂かと了る故、御佛とこそ名くなれ。

(六) 量りなの苦受くるも、佛の御聲よく聞かれん、若し御名聞かねば、なべての樂受くるなし。

げに、量りなの時を重ねて、苦の海をめぐりめぐるは、ただ御名一つを聞かざればこそ。

法を顚倒に見ることのなく、實の如くいまし證りて、緣より生れし相を、離るる人を、覺の人と名けつる。

過去も現在も未來も、すべての法は相なし、相なきこそ佛の御體。

諸法の深き義理を、かくながむれば量りなき、御佛の眞の相を見まつらん。

覺りても、さとるところのものなくば是ぞ佛の眞の法、法に依所のあることのなし、みな因緣の和合より起る。

作るものなく、作らるるものなし、ただ業の想より生る、されば法みな得べからず、これぞ佛の依止にて、法に所依なく、覺れる人に取着はなし。

(七) 偉いなるかな佛の御ひかり、勇ましきかな上なき丈夫、迷える人を惠まんと、此世にこそは現われ給え。

慈悲の眼をもて此世を觀れば、人人惡道に苦しめり、御佛除きて救うものなし。

御佛この世に在まさずば、人にまことの樂しみなからん、御佛この世にいてまして、樂しみわれらに惠まれぬ。

御佛を見たてまつらば、大いなる功德を得ん、佛の御名を歡喜ぶ人は、この世の塔と聳えなん。

二。その時、一人の菩薩が座より起つて法を說かれた。

「諸の佛子よ、道を求むるものはまず遇い難い佛に遇い、法を聞き、又は苦しめる人人を見て、道を求むる心を起し、善き友に近いて勤めて多く聞くがよい。その聞く所の法を他に求めず、自らの上にて解り、欲を離れて禪定を修め、正法の深い義理に達き、凡ての法は、無常、苦、空、無我であつて、樂しむべきものは更にないと觀めるがよい。

更に佛を信い、法を觀、寂な禪定の意にて人人のこと、佛の國、世界、業報又は生死涅槃のことを念い、その修行をするには獲る所の善根は、皆人人を救い饒み、遂には導いて涅槃に入らしめたいためであると思わねばならぬ。

佛子よ、菩薩は正しい心をもつて決定の

思に住する。他人が佛を讚め又は毀るのを聞いても、佛法に心を定めて動くことがなく、又、道を求むる人とその行とを讚め、又は毀つても佛法に心を定めて動くことはない。又人人についても、量りのありなし垢のありなし、救い易いとか救いにくいとかゆうような事を聞いても、佛法に心を定めて動かぬ。又、法界についても、量りのありなし、出來上つたり壞れたりすることに就て、肯定又は否定の說方を聞いても佛法に心を定めて動くことはない。そして人人の生を受ける有樣、その樣樣の煩惱、樣樣の習氣を知り、量りない法を分別える方便の智慧を得、世俗諦と共に第一義諦を說くことも知るであろう。

佛子よ、菩薩はここに大きな智慧の力を得る。世界を震い動かし、世界を照し、世界を持ち、悉く之を莊り、人人の心と行とを知つて、樣樣の方便によつて、能く調伏え能く度うであろう。

三。佛子よ、菩薩が諸の法を觀るのに、少しも差別の相がない、ちようど虛空のように平等であると見る。これ、すべての法には自性がないと知るからである。又、菩薩は、佛の限りのない力をかんがえ、それによつて佛の大きな慈悲の心を具え、それを養い育てる。人人をおもうて人人を捨てず、善き業を行うて果報を求めることがない。

佛子よ、かように觀めるならば、少かの方便によつて、菩薩は佛の一切の功德を得るであろう。そしてすべての法の眞の性を知り、智慧を具えるが、みな、自らを燈として證るので、他によつて悟るのではない。

(一) 御佛の極みなの御力により、退くことなき位得て、慈の光世を照し、人人の歸依とはなる。佛護りたまえばその功德にはかりなし。

佛の境を、常にかんごうれば、御佛は甘露の智慧を灌ぎたまい、その信金剛のごとくにて、佛にむかいて恩知る。すべての方便そなえて、諸の世界には遊ぶ、是ぞまことの佛の子。

心涼しく愛の渴を除き、大いなる慈悲もて、礙りなくすべての人を念う、人人に無畏の德を施し、實の如く行えば御佛に等し。

(二) 信の力安らかに、智慧の力ととのいて、心正しく淸らかなれば、定めて眞を解るなり。

末の世盡して饒まんために、或は地獄の苦を重ね、慈悲のために世に隨い、量りなき法の敎說く。

(三) 身は法界にあまねくて、人の心に從いつ、「主」と「客」の分別離れて、淸きも染れしも取る所なく、縛われも解くるもみな忘れ、ただ人人と樂を、共にせんとは願うなり。すべて世の人力を想えり、智慧もて入れば畏なし。

虛空の尙量らるべきも、菩提の心は知り難し、そは大いなる慈悲量りなくして、十方の世に滿てばなり。

(四) よろずの國の御佛は、菩薩の心をおこすを讚め給う、量りなの功德を莊とし、淸けき岸に至りなば、その性、

諸の佛に異らず。

よろず世の御佛と、人人の、受くるあらゆる樂は、皆、菩提の心より生る。この心、佛の御國を嚴り、この心、人人にいみじき智慧與う。

四。佛子よ、菩薩は已に發心の功德を得た上は、癡かの心を離れ、勤めて放逸の心を滅さねばならぬ。即ち教に應うて修行し戲や放逸の行を捨て、法をもとめて厭かず、そしてその聞く所の法に對うては眞實の觀方をもち、勝れた智慧を生んで、佛の自在の境に入り、心を寂かにして散り亂さず、善いことを聞いても惡いことを聞いても、大地のように憂や喜の念を起さず、どのような人人に對うても、障礙をつけない。また、師や善知識や法師を敬い供養をする。

佛子よ、菩薩は又、次のような行を修めて、佛を歡ばせる。勤め勵んで修行を退かない。命を惜まず、また利養を求めない。一切の法を知るに虛空のように障礙がなく、そして巧みな方便で諸法を觀、普く法界に入る。その諸法をわきまえるには倚ることがなく、常に大きな願をもっており、ものに忍ぶ清らかな智慧を得、そして、諸法の得と失とを知っておる。

佛子よ、もし菩薩がかように道を修める。ならば、永く三寶を隆えしめるであろう。何故かと云えば、菩薩が人人を教えて道を求める心を起さしめるから、佛寶を絶すことはない。亦、樣樣の妙法を示すから、法寶を絶すことはない。威儀と教法を持って行くから、僧寶を絶すことはない。また、一切の大きな願を讃えるから、佛寶を絶さず、因緣の理を說くから法寶を絶さず、互に敬い愛して一樣の戒を持つから僧寶を絶さない。又佛の種を人人の心の田に下して正覺の芽を出さしめるから佛寶を絶さず、身命を惜まずに正法を護るから法寶を絶さない。そして大衆を統べて倦むことがないから僧寶を絶すことはない。このように菩薩は、三世の諸の佛の敎に違わないで道を修めるから、三寶を隆んならしめるのである。

五。その時、更に多くの菩薩達は、雲のように十方から集って來て、各偈を說くよう。

(一) 淨き御光、十方を照し給えば、人人は皆、佛を觀たてまつる、佛いま夜摩の宮にいませり。世にかかる奇特あらず。

人の世に、また夜摩の宮に、人人、御佛を見たてまつれる。

その功德深くして、測りなく、一つの身をば無量となし、無量の身をば一つにし、人人の願に隨いて、障礙なくして十方に遊ぶ。

(二) 量りなの時を經るとも、人天の師には遇い難し、智慧の光は世の冥を除きつ、妙なる法は人人を饒む。量りなき時を重ねて、行を修めて覺得つ、廣く人人を度いたまえば、人天の師をば見ざらん人人、惡道のくるしみ脫るなり。

(三) 雲翳なき空の夏の月、光は照して量りなし、眼ある人もその數知らず、

況して盲に於ておや。佛の光明また然り、來る處なく去る處なく、生れず滅びず空寂にて、所有あるなし。

光の如く、すべての法も亦然り、法にもともと自性はなし、その眞性をば解りなば、心は遂に惑なけん。

(四) 御佛の身は法界に滿ち、此座を離るることなくて、すべての處に至り給う、この御法を信まん者は、永く三途の苦を離れん。

佛の自在なる御力を聞き、一つ心に信まん人は、覺得て、法を說かん。

量りなの時の間も、この法まことに遇い難し、若しや聞くことあるならば、そは御佛の御願に依る。

(六) なべての法に差別なし、ただ御佛ぞ知ろしめす。

金と金のその色と、その性差別のなきがごと、法と非法も異いなし、有情非情も異いなし。

未來の中に、過去の相なきごと、すべてのものに差別なし。

譬えば數は、一より無量に至るとも、皆本數にして差別なく、ただ分別の智慧により、差別の數のある如し。

又は、十方の空に異なきも、人はここにも差別を起す、かくの如くに執着るれば、遂に佛を見まつらず。

(七) 衆生の三世は五蘊に攝まる、五蘊は業のためにて起り、その業心によりてぞ起る、その心、幻の如くなれば、衆生も幻に異らず。

世間は自ら作るにあらず、他に作られしものにもあらず、眞實の性を知らざれば、生死の轍つねに轉らん。

世間の轉るは苦の轉るなり、人人これを知らざれば、果なく生死の輪は轉る

世間と非世間と、二つながらに眞實にあらず、人は智慧なく愚癡にて、妄に諸法の相に囚わる。

三世の五蘊を、世間と名く、ただ虛妄に由りてあり、世間を滅くせば、世間を出でん。

壞れゆく五蘊を知らで、妄に常住と思えども、五蘊は虛假ぞ眞實にあらず、もののまことは、寂にて遷り變らず、ついに分別の相を離る。

世間ぞ、既に虛しき、佛も法も亦虛し、この三の性は所有なし。

倒の見方除きて、明かに眞實を見つむれば、御佛常に、その人の前に、現われ給う。

(八) すべての形と業の性、思うも難く見れども得るなし、識の性や、佛の御身も亦然り。

量りなの妙なる身、國とゆう國に現われ給うも、身は佛にあらず、佛は身ならず、但法をば身とし、總ての法に充ち給う、若し淨き佛身を見奉らば、此人佛法に疑なけん。

若し、ものみなの眞實の性を、涅槃に等しと觀るならば、此人、佛を見まいらせ、常に安けくあるならん。是を、法王の子と名く。

(九) 巧みなる畫師の、彩色をする如くかりに諸の形を取るも、その身には

別なし。

身は彩色と一ならず、彩色は身と一ならず、さわれ、身の體を離れて、彩色のあることなしと知る。

心は彩畫の色ならず、彩畫の色は心にあらねど、心離れて畫色なく、畫色離れて心なし。

彼の心は常住ならず、量りなければ議るも難し、あらゆる色を顯わせど、色各は相知らず。

それ、巧みなる畫師も猶、畫の心を知らざるごとく、すべての法性もまた然り。

心は巧みの畫師のごと、種種に五蘊を畫きてぞ、すべての世界の中にして、法とし造らぬものはなし。

心の如く佛も爾り、佛の如く衆生も然り、心と佛と衆生とは、此三つ差別のあることはなし。

ものみなは心より轉ぶと、諸の佛は、正しく知り給う、かように解る人こそは、眞の佛を見まつらめ。

心は身ならず、身も心ならねど、すべての佛事を行いて、その自在なることはためしなし。

三の世の、御佛を知りたくば、心諸の佛を造るとは見よ。

（十）取る所、見る所、聞く所、思う所、皆得べからず、量りの有ると量りの無きに、限定はつけ難し、此二つ、取るに所はさらになし、說くべからざるを說くものは、自らをこそ欺くものなれ己が事とならざるは、人人を悅ばすこと難し。

虛空は淸らかにして色なきも、すべての色を現わしつ、而もその性の見えぬごと、大智の人は、限りなき色を示せど、識の識るところとならず、すべて觀るところなし。

御佛の聲を聞くにも、音聲は佛ならねど、さわれ、聲を離れて知られ得ず、この理はいと深し、若し、よくわきまえ知るならば、道これ、わがものとなるならん。

第六編

第一章　法を見るもの

第一節　業

一。世尊はまた、憍薩羅國をへめぐつて舍衛城に歸り、或る日弟子等に語りたもうよう。「弟子等よ、人人は誰も、好まぬことがなくなり、望むことが多くなるようにと願うて居りながら、實際はいつもその反對になるのはどうゆう譯か」。「世尊、世尊は法の根本を悟つていられますから、どうぞその譯を御示しください、私達は御教のままに信います」。

「弟子等よ、それでは好く聽くがよい。ここに聖者を見ず、善き人を見ず、聖法を知らず、善き法を知らぬ人があるとする。彼は身に行うべき法と、行うてならぬ法とを知らぬから、行うべき法を行わないで、行うてならぬ法を行う。このために、好まぬ事柄が增し、望む事柄が起らぬのである。然るに、我が教の弟子は、聖者を見、よく行うべき法を知つて居るから、好まぬことが減り、望むことが增すのである。

二。弟子等よ、ここに四つの法がある。それは現在に苦を與えると共に未來にも苦を生む法、現在には苦を起すけれども未來には樂を生む法、現在には樂を生む未來にも樂を生む法である。無明に覆われている者は、この現在も未來も苦しい法と、現在は樂しく未來は苦しい法とを、あるが儘に知らないからして避けようとしない。その爲に好まぬことが增し望ましいことが減る。これは愚かな者の當然の狀態である。

弟子等よ、これと反つて智慧ある者は、この四つを、あるがままに見て居るから、行うてならぬことは行わず、行わねばならぬことを行う。そのために、望ましいことは增し、好まぬことは減る。これは智慧あるものの當然の狀態である。

弟子等よ、現在も未來も苦い法とは何であるか。茲に人あつて、殺生、偷盜、邪淫などの惡い行をなし、それが自分の苦惱になる。この行のために、現世に既に苦惱を得、後の世はまた惡道に生れる事となる、これが現在も未來も苦しい法である。現在も未來も苦しい法とは、殺生、偷盜、邪淫などの惡いことをなしながら、それは苦惱を起さないで、樂と喜とを起し得るものもある。しかし、たとえ現在に樂と喜とを得ても、未來には必ず惡道に生れる結果を招く、これが、現在は樂しく未來は苦しい法である。

現在は苦しく未來は樂しい法とは、前に揭げた惡い行を止め、貪欲、瞋恚を離れて正しい見を抱く、而もこの道に契うた生活が、この世においては苦惱を起し、未來においては善い結果を招くのである。

現在も未來も樂しい法とは、この道の生活が、この世において既に樂と喜とを與え、未來にも善い結果を生むことである。

三。弟子等よ、これを喩えて云うならばここに、人あつて毒の交つている胡盧を示して、生命の欲しい、苦を厭う男に云う、「ここに毒の入つて居る胡盧があるが、飲みたければ飲むがよい、然し味も香も惡しく、飲めば死なねばならぬ」と。現在も未來も苦しい法を行う人は、この胡盧を飲む男である。

又、ここに美しく味のよい料理に毒が交つているとする。そこへ生命の欲しい、苦を厭う男が來て、「味がよいが毒がある」と云われて居るにも拘らず食べるとする。是は現在は樂しく未來は苦しい法を行う人である。

又、ここに色色の藥を混えた汚水があつて、黃疸病の人が、勸めによつて飲むとする。味も香も堪えられぬ苦ではあるが、病はこれによつてまことに樂になる。これは現在は苦しく未來は樂しい法を行う人である。

最後に、ここに赤痢を煩う人があつて、勸めにより、牛酪と糖蜜と砂糖と熟蘇とを交ぜた藥を飲むとする。この藥は味も香も申しようなく、飲めば病氣が癒る。これが現在も未來も樂しい法を行う人である。

弟子等よ、澄みわたつて一つの雲もない秋の空に太陽が輝き、あらゆる闇を拂うて隈なく照すように、この現在も未來も樂しい法は、凡常の出家達の論議を打ち拂うて輝き渡るのである」。

四。また、或る日、世尊は弟子等を呼んで宣うよう。

「弟子等よ、染物師が汚れた布を、黃や赤や青の色に染めても、美しく染め上るものではない。なぜなれば、もとが汚れているからである。ゆえに汚れた心の結果は惡いに極つている。弟子等よ、淸らかに布を洗い淸めて黃や赤や青の色に染めれば、美しく染め上るものである。なぜなれば、もとが淸らかに洗つてあるからである。ゆえに淸い心の結果は善いに極つている。

弟子等よ、貪欲、瞋恚、忿恨、覆いかくす心、自負、嫉、諂、詐、剛愎、報復の心、慢、過慢、憍、放逸は、心の塵と垢である。この心の塵と垢とを知つて、これを洗いきよめ、佛と法と僧伽とに動かない信仰を得、利己の心を減し心開けて喜を生み、身體の暢かさを感えて、心が一點に集つて靜かになつて來る。かようなものはあまたの菜とカレーと還米の美食を食べても、何等の害を受けるものでない。ちようど、淸らかな水の中で汚れた布を灑げば淨まるように、黃金を竈に通せば益す淸まるように、このものにはあらゆる塵も垢も淸められるのである。このものが、慈、悲、喜、捨の四無量心を修め、想念を超えて出離があると知り、煩惱を滅して覺をひらく。これが內の浴法によつて沐浴するものと云われるのである」。

五。これを、傍らに承つていた婆羅門のスンダリカ・バーラドワージヤは、世尊に申し上ぐるよう。

「世尊、世尊もバーフカ河へ沐浴にお出でになりますか」。「婆羅門よ、バーフカ河にはどのようなことがある」。「世尊、バーフカ河は、多くの人人の粗らかな行を聖

め、功德を與え、惡業を洗い去ると云われています」。「婆羅門よ、バーフカ河とか、伽耶河とか、スンダリカーマ河とか、それらの河には皆そのような效ない傳說があるが、それが人人の惡と何の關係があろうか。婆羅門よ、この敎に沐浴して總ての人人の安穩となり、生物を殺さず、妄語を云わず、與えられないものを取らず、信仰を抱いて貪ることがなければ、これがまことの沐浴である。河には何の關係もない」。

婆羅門は世尊の御敎を喜び、許可を乞うて御弟子となり、間もなく覺を開いた。

六。また、或る日、弟子等に告げ給うよう。

「弟子等よ、五つの心の邪魔を除かず、五つの心の縛を解かなければ、彼はこの敎において道に進むとゆうことは出來ない。

五つの心の邪魔とゆうは、第一、師に對うて疑を抱き信仰を有たないこと。第二、法に惑うて信仰を有たないこと。第三、僧伽に對うて疑があり信賴のないこと。第四、修學に惑うて信念のないこと。第五、同學者に對うて心をいらだて陰鬱になること。この五つの心の邪魔を除かなければ、熱心が起らず、忍耐が出來ず、努力が起らぬ。

五つの心の縛とゆうは、第一、世の中の物欲に對うて貪欲を離れず、渴いたような欲を感えること。第二、自分の身體について貪る思を離れないこと。第三、物質について貪欲を離れないこと。第四、胃の腑一杯に食事を取って、身を橫たえ、快い轉寢を貪ること。第五、淨らかな行をして、天界に生れたいとゆう念に縛られて居ることである。この五つの心の縛を解かなければ、熱心が起らず、忍耐が出來ず、努力が起らぬ。

弟子等よ、それゆえこの五つの心の邪魔を切り捨て、五つの心の縛を解き、これに欲願と精進と思惟と檢察の如意足とを修めて最後に、努力を加えて道に進めば、覺を得てこの上ない安穩に到着くことが出來る。ちょうど、牝鷄が卵を溫めて注意深く育てているとき、「卵の中の雛が、嘴か足の爪先で、卵の殼にひびを入れて、安らかに出てくれればよい」と思う。その時分には、雛は嘴か足の爪先で、卵の殼を破って安らかに出ることの出來るようになっているものである。かように、努力を加えてこの十五の法を具えて居れば、煩惱を滅し覺を得て、この上ない安穩に到着くことができる」。

七。或る日、生聞婆羅門は祇園精舍に世尊をお尋ねして申しあげた。「世尊、私は死なねばならぬもので、死を恐れぬものはないと思います」。

「婆羅門よ、死なねばならぬもので、死を怖れるものもあれば、死を恐れぬものもある。死を怖れるものとは、五欲に就て、貪る心を去らず、取着の思を離れないものが、重い病にかかると、あの好きなものを捨てて行かねばならぬと思うて苦しみ悶え胸を叩いて泣き悲しむ。又、この肉身について貪ぼる心を去らず、取着の思を離れないものも、重い病に掛ると、この肉身を捨てて行かねばならぬと思うて苦しみ惱む。

また、この世において、善いことをなさず、避難所を作らず、惡いことばかりをした人も、死に面うて苦しみ惱む。それに正法について疑い惑うものも、同樣に死を怖れるものである。さりながら婆羅門よ、五欲に就て貪る心を去り、取着の思を離れ、この肉身についても貪る心なく、取着の思なく、惡事をなさず、善いことをして避難所を設け、この正法に對して疑い惑うことのない人人は、重い病にかかっても、死を怖れない」。

八。また或る時、一人の佛弟子が世尊に申しあぐるよう。「世尊、この世界は何によって導かれ引きずられ、如何なるものの支配を受けるのでありますか」。「汝の問はまことによい、この世界は心に導かれ心に引きずられ、心の支配を受けるのである」。

「世尊、多く聞いて敎法を持つもの、と云われて居りますが、それは如何なることでありますか」。「汝の問はまことに善い、經、祇夜、授記、偈、歡喜頌、本事、本生、未曾有、方廣など、私は多くの敎法を說いた。然し、僅かに四句の偈によって、義を知り、法を知り、法に契う行をなしても、多く聞いて敎法を持つものと云われるのである」。「世尊、敎を學び、貫き通す智慧を有てるものと云われて居りますが、これは如何ようなことでありますか」。「汝の問はまことに善い、茲に一人の弟子があり、これは苦である、これは苦の因である、これは苦の滅である、これは苦の滅に至る道であると聞き、自ら智慧によってその義を貫き知れば、敎を學び、貫き通す智慧を有つものと云われるのである」。

「世尊、賢くして大いなる智慧者とは如何ようなことでありますか」。「汝の問はまことに宜い、自ら害うと他を害うと、自他兩つ共に害うとの相を起さず、自ら利すると他を利すると自他の兩つ共に利すると、すべての世間の利益とを考えるものをゆうのである」。

九。祇園精舍に滯まり給う間に、世尊は屢ば舍衛城の東園、鹿子母講堂に行かれるのであるが、或る布薩の日に弟子達に取りまかれて座につき、靜かな僧伽を見わたして宣うよう。

「弟子等よ、この集會には聲を立てるものがない。淨らかな善に立っている。この僧伽は世間に見がたい集會である。供養に値いし、掌を合せて拜むべき世間のこの上ない福田である。幾里の道をも遠しとせないで、糧を負うても行いて見るべき集會である。この僧伽の中には神神の位に到つたものもあれば、梵天の位に到つたものもあれば、聖者の位に入つたものもある。

神神の位に到つたものとは、惡不善の法を離れて、初禪から二禪三禪四禪に入っているもののことである。梵天の位に到つたものとは、慈悲喜捨の四無量心を修めている者のことである。不動き地位に入つたものとは、空無邊處、識無邊處、無處有處、非想非非想處の四無色定に入っている者のことである。聖者の位に入つたものとは、これは苦である、これは苦の因である、これは苦の滅である、これは苦の滅に至る道で

あると、如實に知つた者のことである」。

一〇。或る時、阿難は世尊の御許をうけて、獨り拘利族を訪い、そのサーブーカとゆう町に滯つて、尋ね來る人人に次の教を說いた。

「拘利の人人よ、人の身を清め、悲を無くし、苦を離れ、覺を得るために、四種の清い勤が、佛によつて說かれておる。

戒の勤とゆうはよく戒を持つこと。心の勤とゆうは、欲を離れ不善を離れて諸の禪定に入ること。見の勤とゆうは、これは苦である、これは苦の因である、これは苦の滅である、これは苦の滅に至る道であると、如實に知ること。解脫の勤とゆうは、この戒と心と見との清い勤を具えて、汚から心を解脫れさせること。この四種の清い勤が、人人の身を清め、悲をなくし、苦を離れ、覺を得るために、佛によつて說かれたのである」。

一一。或る日、王妃末利は世尊を祇園精舍にお尋ねして、申しあぐるよう。「世尊、或る婦人は醜く貧しく、或る婦人は醜いが富み繁え、或る婦人は美しいけれども貧しく、或る婦人は美しい上に富み繁えて居ります。これはどうゆう原因に依るのでありましようか」。

「王妃よ、或る種類の婦人は怒り易く、氣落し易く、腹を立て、すねて惡みの色を表わし、出家に供養することを好まず、他人の利養を得たり名譽を得たりするのを見ては嫉む。この婦人は後の世に醜く貧しいものと生れるのである。また、或る種類の婦人は、やはりこれらの惡い德を備えているが、出家に供養することを好み、他人の利養を得たり名譽を得たりするのを見ても嫉むことがない。この婦人は後の世に生れて醜くはあるが富み繁え、自由のきくものとなるのである。又、或る種類の婦人は、心廣く大きく、何事にも腹を立てず、すねず、餘裕のある態を示しているが、出家に供養することを好まず、他人の名譽や利養に就ては嫉みそねむおもいがある。この婦人は後の世に容貌は美しいけれども、貧しい家に生れて苦しまねばならぬ。又、或る種類の婦人はやはりこれらの美しい德を備える上に、また、出家に供養することを好み、他人の利養や名譽を得るのを見ても、嫉みそねむとゆうことがない。この婦人は後の世に容貌美しく富み繁えて大いなる勢力のあるものと生れるのである。王妃よ、これが、この世にいろいろの種類の婦人のある原因である」。

「世尊、妾は前生に怒り易い、すねた小さな心の女でありました、それゆえ、今は醜いものと生れました、然し幸いに出家に御供養することを好み、他人の所得に對うて嫉みを起すことがなかつたために、富み繁えて自由の利く者となりました。妾は今、王宮の內に數多の侍女達を召使うて居りますが、今日より後は、優しく何事にも腹を立てず謹しみましよう、また、出家に御供養し、他人を嫉みそねまぬようにいたすでありましよう」。

かくて王妃は、世尊の御敎を喜んで宮に歸つた。

第二節　鹿頭梵士

一。世尊は、またも遍歷つて王舍城に歸り、竹林精舍に入り給うた。其頃、憍薩羅の國に鹿頭とゆう髑髏の呪術に妙を得た婆羅門があり、呪文を唱えて髑髏を叩き、この人はどこへ生れたとゆう事を言い當て、三年位經つたものでもその生所を云うことができた。家庭を作ることを厭うて遊行者の群に投り、その呪術によつて人人の歸仰を得、國國を遊歷つていたが、或る時、世尊が王舍城の靈鷲山にましました時、御尋ね申して世尊と術を較べようと願うた。

世尊はここにおいて、鹿頭をつれて山を下り、塚のある所に行つて一つの髑髏を取りあげ、仰せられるよう。「汝は髑髏の呪術に妙を得ているとゆうが、この髑髏の主は男か女か」。

鹿頭は呪文を唱え、髑髏を取りあげ指で叩いて云うよう。「世尊、これは男であります」。「何の病で死んだのであるか」。「いろいろの病が重つて死んだのでありますが、訶梨勒の果に蜜を交えて呑めば助かつたのであります」。「今、この男は何處に生れておるか」。「三惡道に沈んで居ります」。

世尊は別の髑髏を取つて尋ね給うた。「これは男か女か」。「女であります」。「何の病で死んだか」。「重い產で死にました」。「今は何處に生れておるか」。「畜生道に生れています」。

鹿頭は幾つかの髑髏を與えられて、みなその男女の別と死因と生所とを語つた。世尊は更に別の一つの髑髏をとつて示し給うた。それは涅槃に入つた佛の弟子のものであつた。鹿頭は心をこめて呪文を唱え、指を以て叩き、力を盡して髑髏の主を云い當てようとしたが、知ることが出來ないで遂に世尊の敎を乞うた。世尊、仰せられるよう。「これは涅槃に入つた佛の弟子のものである」。

鹿頭はそれが世尊の妙術であると思い、その術を學びたいと願うた。世尊は、佛の敎の下に弟子となるならば敎えようと仰せられ、茲に鹿頭はやがて黃衣の御弟子となつたが、よく敎のままに勤め勵んで、遂に覺を開くことができた。今や、鹿頭には髑髏の主を知ることはいらないようになり、自分の覺を次の歌に顯わし殘した。

御佛の敎に、道をおさめて、穢をのがれ、欲の世界を超え出でぬ。
御佛にまもられ、我が心のがれ、すべての繫縛、斷ちたれば、わが覺、えも動がじ。

二。これも世尊が、靈鷲山に滯らせられた頃のことである。名高い數多の遊行者達が、サツビヤの湖畔にある遊行者の園に集つていたが、世尊は一日其處へお出でなされた。その時遊行者達の間には、この世の眞實とは何であろうか、とゆうことが論議せられていたが、世尊にこのことを申しあげると、世尊は次のように仰せられた。

「遊行者達よ、私はこの世に於ける四つの眞實とゆう事を自ら證つて說いている。それは、第一に、總て生きとし生けるものは無明から生れるとゆうこと。又第二にすべて五欲の對象となるものは無常であり

苦惱であり、變化するものであるとゆうこと。又第三に、總ての存在は、無常であり、苦惱であり、變化するものであるとゆうこと。又第四に、我も我所もないとゆうこと。この四つは何れも眞實であつて虛妄ではない。私はこの四つの婆羅門の眞實を自ら證つて說き示している。

三。或る日また、世尊は弟子等に語り給うよう。

「弟子等よ、この世界に、多くの人人の利益と幸福との爲にあらわれる二人がある。卽ち佛と轉輪聖王とである。この二人はまた、人間の師として降誕り、この二人の死は多くの人人の痛苦とするところである、この二人は塔を建つるに相應しいものである。

四。弟子等よ、この佛を誹謗する二人がある。一は內心に惡意を持つ人、一は誤つた信仰を抱く人である。又二人がある。一は佛の說かぬ事を說いたとゆう人、一は佛の說いた事を說かぬとゆう人である。

五、弟子等よ、世に雷霆を恐れない二人がある。煩惱を滅くした佛の弟子と獸王の師子とである。また、この世間に得難い二人がある。先に惠を施す人と、恩を知り恩に報ゆる人とである。

六。弟子等よ、また、この世間に得難い二人がある。自ら歡ぶ人と、自ら歡ぶと共に他をも歡ばせる人とである。

七。弟子等よ、世間に滿足し難い二種の人がある。一は何を得ても、それを側に置く人であり、他は投げ捨てて仕舞う人である。側に置かずに自用に供える人と、投げ捨てずに用ゆる人とは、世間に滿足し易い二種の人である。

八。弟子等よ、貪欲の起る二種の因がある。一は意に適う對象、他は正しからぬ思惟である。瞋恚の起る二種の因がある。一は意に適わぬ對象、他は正しからぬ思惟である。邪見の起る二種の因がある。一は他の正しからぬ敎の師等より聞くこと、二は正しからぬ思惟である。正見の起る二種の因がある。一は他の正しき道の師等より聞くこと、二は正しい思惟である。

九。或る日、**チュンジー**とゆう王女が、五百の少女達をつれて竹林精舍の世尊に詣でて申しあぐるよう。「世尊、妾の兄の**チュンダ**が、男によらず女によらず、誰でも佛に歸依し、法に歸依し、僧伽に歸依し、殺生をなさず與えられぬものを取らず、邪淫を犯さず、妄語をいわず、酒を飲まなければ、死して後善い處に生れて、決して惡い處に行かないと申しますが、妾は茲に世尊にお尋ね申したいと思います。いかようにして佛と法と僧伽とを信み樂い、又いかようにして戒を守れば、死して後善い處に生れることが出來ましようか」。

「**チュンジー**よ、佛は、生きとし生けるものの中の第一である。それ故に、佛を信ずることは第一の信であり、その信の結果も亦第一である。また、あらゆる敎の中で、この憍を碎き、渴を醫し、煩惱を滅して輪廻をとどめ、愛の渴を滅すところの取着なき涅槃の法が第一である。それ故取着なき法を信ずることは第一の信であつて、その信の結果も亦第一である。また、佛の僧伽、

卽ち四雙八輩の聖者の團體は、さまざまの團體のなかで第一のものである。それ故に僧伽を信ずることは、第一の信であり、その信の結果も亦第一である。又いろいろの戒の中で、破れず碎けず交り氣がなく、そして聖者や識者の讚め樂うこの戒は第一のものである。それ故にこの戒を滿し守ることは第一のものを滿し守ることであり、その結果も亦第一である」。

一〇。世尊は又も遊行の旅に出で、跋陀耶の**ジャーチャー**の林に着かせられた。**メンダカ**の孫**ウツガハ**は、世尊を我が家に御招待申しあげ、御供養をした後で、「世尊、この私の娘達はみな嫁入をしようとしているのでありますが、何か御敎を賜りたいと思います」と願うた。

世尊宣うよう。「娘達よ、このように心得ねばならぬ。夫の父母は、自分達の利益になるよう、爲を思い、慈を持つてくださる方であると感謝をして、早く起き遲く寢ね、いつでも用の勤まるようにして居り、柔しい語で御慰め申そう。夫の尊び敬うて居られる父母や出家を、妾も尊び敬い供養いたそう。夫の仕事に理解を持ち、自分もそれに慣れて上手になり、勤勉によく御助けいたそう。家の召使や家の仕事をしてくれる人人の性質や力のありなしや、食物の好き嫌いまでもよく心得て、面倒を見てゆこう。夫の收入を貴く扱うて無駄使のないように致そうと。娘達よ、この五つのことを心掛けねばならぬ」。

一一。世尊は、それより毗舍離へ行き、その大林の重閣講堂に宿らせられた。毗舍離城の師子將軍は、世尊をお訪ねして申しあぐるよう。「世尊、布施は善いことと申しますが、布施の現在の果報を御示しください」。

「將軍よ、布施するものは多くの人人に愛しまれる、これがその現世の果報の一つである。又、布施する人には正しい善人が從い事える、これがその現世の果報の二つである。又、布施する人の譽は高く謳われる、これがその現世の果報の三つである。又、布施する人は王族の集合でも、學者の集合でも、又、富豪の集合や出家の集合でも、何れに行くにしても、臆えることなく、心確かに入り込むことができる、これが現在の果報の四つである。また、布施する人はその功德に依つて、死して後は天界に生れることが出來る。これはその未來の果報である」。

「世尊、世尊のお說き下された五つの果報のうち、前の四つは私も知つて居りますが、後の未來の果報については私の知る所ではありません、私はひとえに世尊の御語を信じます」。

一二。郁伽長者は毗舍離の人である。或る日、世尊は招待によつて、その家に入らせられたが、彼はこのように申しあげた。「世尊、私は世尊の御口ずから、善きものを施す者は善きものを得ると承りましたが、この園子は味の善いものであります、どうぞ世尊の御情によつて御受け下さるように御願い申します」。

世尊は打ち肯いて受け入れ給うた。かれは更に棗の味付をした豚肉と、黑粒を拾い

捨てて汁も菜も多い白飯とをお勸めし、世尊の受け入れ給うのを見て、「世尊、長い房のついた織物を敷いたり、羊の毛皮の敷物に上掛をして、兩端に赤色の枕を置いた椅子は善いものには違いありませんけれ共、世尊のような御方には相應しいものとは思われません、それゆえ、この栴檀木の腰掛を差上げたいと思います、どうぞ私を憐んで御受け下さい」。

世尊は打ち背いてこれを受け入れ、次いで感謝の偈を唱え給うた。

正しきを、行う人に愛ありて、善を施さば善を得ん。
衣、食、座具、藥など、覓の人を功德の田と知り、施し難きを施さば、善の報を彼ぞ得ん。

程なく郁伽長者は、病のためにこの世を去って天界に生れた。ある夜、祇園の林を照しながら世尊の御許に詣でて、その傍らに侍った。世尊宣うよう。「郁伽よ、望の通りになったか」。「世尊、有難うございます」。

善を與えて善をば得、勝れし施に勝れしを得、善と勝れしに施して、壽命は長く譽はたかし。

第三節　貪、瞋、癡を捨てよ

一。阿難は世尊の御伴をして憍賞彌に下り、その翌師多國に滯まった。或る日、裸形外道の弟子である一人の居士が、阿難を訪ねて云うよう。「尊者よ、誰が法を最もよく私共に敎えて吳れる人でありましようか、又、世間において最も善く生活をし、幸福である人は、誰でありましようか」。阿難の答えるよう。「居士よ、貪欲、瞋恚、愚癡を捨てよと說く人が、最も善く法を敎える人で、その貪欲と瞋恚と愚癡とのよく捨てられた人が、最もよく生活をし、幸福を得た人である。「尊者よ、誠に勝れたことであります、私は今日より命終るまで、世尊と法と僧伽とに歸依してその信者となることを御誓い申します」。

二。世尊は、弟子等に敎え給うよう。「弟子等よ、修行の中の弟子に五つの力がある。信と慚と愧と精進と智慧との力である。汝等は、この五つの力を具えるように心掛けねばならぬ。

三。弟子等よ、また五つの法を具えて、この世は苦しみ、後の世は惡道に入らねばならぬ。五つの法とは、不信と無慚と不愧と怠惰と無智とである。

四。弟子等よ、衣を捨てて還俗すれば、五つの謗を受ける。善法に對うて信仰がなかった、內に慚ずる心がなかった、外に愧ずる心がなかった、精進がなかった、智慧がなかったと云う謗である。

弟子等よ、たとえ苦しみ惱み涙に濕れていても、淨らかにして圓かな行をして居れば、五つの稱讚をうける。善法に對うて信仰があった、內に慚ずる心があった、外に愧ずる心があった、精進があった、智慧があったと云う稱讚である。

五。弟子等よ、私は未だ曾て證られなかった四聖諦の法をさとって、佛となったことを告げる。信と慚と愧と精進と智慧とはその佛の五つの力であって、之を具えて、

佛は人の中の牛王、となって師子吼をし、法を說くのである。

六。弟子等よ、この信と慚と愧と精進と智慧との五つの力の中、智慧の力はその主なものである、この力には、他の四つの力が集められ結びつけられて居る。ちようど尖塔が重閣の主な部分であって、その尖塔にすべてが集められ結びつけられているのと同じである。

七。弟子等よ、又、他の五つの力がある。信と精進と正念と禪定と智慧とである。この五つの力の中、智慧の力はその主なるものである。この力に他の四つの力が集められ結びつけられておる。

八。弟子等よ、自ら戒を持つて他にも戒を持たせ、自ら禪定に住して他をも禪定に住させ、自ら智慧を具えて他にも智慧を具えさせ、自ら解脫れて他を解脫れさせ、自ら解脫の知見を具えて他にも解脫の知見を具えさせるものは、自他の利を兼ね具えたものである」。

九。それより世尊は、迦維羅城に赴き、城外の尼拘盧陀の林に住したもうたが、輕き御病に罹らせられ、そして間もなく癒えさせられた。

或る日、釋迦族の摩訶那摩は、世尊の御許に詣でて禮拜して後、傍らに坐って申し上げるよう。「世尊、私は心の靜かなものには智慧があり、靜かでないものには智慧がないと、世尊がずつと以前に仰せられたことを憶えて居ります、さすれば世尊、禪定がさきで智慧が後か、智慧が先で禪定が後でありましようか」。

傍らにこれを聞いていた阿難は、思うよう。「世尊は御病漸くに癒らせられた許りである、然るに摩訶那摩は餘りに深いことを尋ねて世尊を煩わし奉っている、私は彼を引いて他に行って說き明して見よう」。阿難は摩訶那摩の手を引いて他に行き申すよう。

「摩訶那摩よ、世尊は戒と定と慧についてて未だ修行の中のものと、已に覺ったものとのことを說き給うた、その修行の中の者の戒と云うは、戒を持って一身を制え、善き行をなして五官を制え、小さな罪にも恐れを見、堅く持って學び勵むことである、又その定とは禪定に入って住すること、慧とは四聖諦の理を實に知ることである。次に已に覺ったものの戒定慧とゆうは、已に覺った人が修める場合のものをゆうのである。摩訶那摩よ、世尊はかように御說きなされたのである」。

一〇。世尊は御病癒えさせ給うて後、東に向って俱尸那羅を經、毗舍離の大林重閣講堂に滯在せられた。阿難がその御伴をしていたが、或る日世尊にお尋ね申すよう。

「世尊、有（存在）とゆう事は、いかなる範圍について云われることでありましようか」。「阿難よ、若し迷の世の果を招く業がないならば、迷の世とゆう存在は顯われるであろうか」。「顯われません」。「阿難よ、それ故に、業は因であり、識は種子であり、愛の渴は水である、無明に覆われ愛の渴に縛られて、人人の識は下界に停まる、かように未來の再生、轉生があるのである」。

一一。或る日また、世尊は阿難に宣うよ

う。「阿難よ、總ての行と信はみな善い報のあるものであろうか」。「世尊、それは一概にお答えすることは難しくあります。それを行うて惡が增し、善が滅びるようなものは善い報のあるものでありません、これを行うて惡が滅り、善が增すようなものならば善い報のあるものであります」。

世尊は、この阿難の說を嘉し給うた。阿難が去つて後、弟子等に宣うよう。「阿難は修學の中途にあるものであるが、智慧において彼に等しいものを得ることは容易くない」。

第四節　精進の動機

一。世尊はやがて王舍城に入り、城外の竹林精舍に滯在せられて、弟子等を敎化し給うた。

弟子等よ、森に住む弟子は、次の五つの恐を想い起すことがあるであろう。「私はいま一人で森に住んでいる、一人であるために、蛇や蠍に嚙まれて死ぬようなことがあるかも知れない。また、食傷をしたり、風邪や肺などを患つたりして倒れるかも知れない。或は、師子や虎や豹や熊などのために命を取られるかも知れない。また、こうして一人で森に居るところへ、若者共がやつて來て、私のした事しない事、何れによつてか腹を立てて、私を殺すかも知れない。或は、森に棲む夜叉や鬼神のために、生命を奪われるようなことがないとも限らぬ。これらの五つは何れも私の前に横わつて居る障である」と。弟子等よ、森に住む弟子が、もし、この五つの恐を想い起した時には、私はこれらの障の來ない間に、未だ到らないものに到り、未だ證らないものを證らねばならないと考えて、熱心に勤めはげまねばならぬ。

二。弟子等よ、前の場合と同じく、次の五つの恐を想い起した時にも、未だ到らないものに到り、未だ證らないものを證るために、熱心に勤めはげまねばならぬ。

「私は今、血氣盛りの時である、然もこの身體は、やがて老に襲われて、佛の敎を考えたり、淋しい森に修行をしたり、或は法の味を樂しむことも出來なくなるであろう。私はその老に襲われない間に、未だ到らないものに到り、未だ證らないものを證るよう、勵まねばならぬ。法をそなえて居れば、老いても心安らかに日送することが出來るであろうから。

又、私は今病らしいものもなく、至つて健かにしているが、やがて病に犯されて、佛の敎を考えたり淋しい森に修行をしたり或は法の味を樂しむことも出來ないようになるであろう。私は病にかからぬ前に、未だ到らないものに到り、未だ證らないものを證るよう、勵もう。法を具えて居れば、病の床に臥しても、心安らかに居ることが出來ようであろうから。

又、今は穀物もよく實り、托鉢しても食を得易く、落穗を拾うて身を養うことも容易いが、飢饉になつて、食を得難い時も來るであろう。そうなれば、人人は皆食物の得易い所へ移り住んで、我我も其處に群れ集つて日送せねばならないようになる。しかし雜沓のする處では、佛の敎を考えたり、靜かに獨居することも難しく、法の味を樂しむことも出來なくなつて來る。私は今それに先んじて、未だ到らないものに到り、未だ證らないものを證るために、飢饉になつても心安い日送をすることが出來るであろうから。

又今、人人と仲善く睦じく互に愛しみ合うて暮して居るが、森の盜賊に犯されるとか地震があるとかして人人が皆安全な處へ逃げ去ることがあるであろう。そうなれば我我もそこに群れ集うて日送せねばならぬことになり、雜沓のする所では、佛の敎を考えたり、靜かに獨居することも難しく、法の味を樂しむことも出來なくなつて來るであろう、私は今それに先んじて、未だ到らないものに到り、未だ證らないものを證るために努めよう。法を得て居れば、恐怖が起つた時でも、心安く日送することが出來るであろうから。

又、今私の屬いている敎團は、平和に睦じく和合ぎ一つの敎に安らかに暮しているが、この敎團が不和をして分れるような時もあろう。不和の敎團に居ては、佛の敎を考えたり、靜かに獨居することは難しく、また法の味を樂しむことも出來なくなつて來るであろう。私は今それに先んじて、未だ到らないものに到り、未だ證らないものをさとるために努めよう。法を得て居れば和合の破れた敎團にいても、心安く日送することが出來るであろうから」。

弟子等よ、この五つの場合を想い起した時に、このように心掛けて、未だ到らないものに到り、未だ證らないものを證るようにと、熱心に勤め勵まねばならぬ。

三。或る日、一人の佛弟子が、己の師のところへ行つて云うよう。「大德よ、私の身體は今日醉いしれたように衰え、心も曇つて、ものの辨別もつかぬようになりました、法も見えず、心も沈んで、淨らかな行を修めることが厭になり、法に對うて疑を生んで來ました」。

師の弟子は彼を伴うて、世尊の御許に行き、世尊にこのことを申しあげた。世尊は仰せられるよう。「尤もである、五官の戸口を守らず、食に量を知らず、眠を貪り、善き法を求めず、日に夜に佛の道に入る修行に勤めはげまねばならぬ。

その弟子は世尊の御敎を受けて獨り森に入り、熱心に勤めて間もなく覺りを開き、師の弟子の許に歸つて、云つた。「大德よ、今日、私の身體は、醉からすつかり醒めたようになりました、心もはつきりして、法も善く顯われ、懶惰に心を奪われるようなこともなく、淨らかな行を修めることも厭にならず、法に對うての疑もなくなりました」。

師の弟子は再び彼を伴うて、世尊の處へ行いてこのことを申しあげた。世尊は宣うた。「その通りである、先に說いた私の敎に能く從えば、必ず善い報があらわれるものである、それゆえ、絕えずそのように心掛けねばならぬ」。

四。世尊は、また弟子達を集めて教え給うた。

弟子等よ、男でも女でも、家に住むものでも、浮世を捨てたものでも、常に、省みねばならぬ五つのことがある。「私は老いゆく身で老を超ゆることが出來ない、私は病むべき身で病を超えることが出來ない、私は死にゆく身で死を超えることが出來ない、私の愛しむものも好くものも皆轉變る常ないものである、私は私の業の相續者で私の積んだ業の相續をせねばならぬ」。

弟子等よ、人は誰しも若い時には青春の憍があつて、この憍に狂わされて身口意に惡をなすものである。また、誰しも健やかな時には、健康の憍があつて、この憍に狂わされて身口意に惡をなすものである。然るに病を超ゆることの出來ないものであると省みるとき、初めてこの憍を滅すか、又は少くすることが出來るのである。また、誰しも生きている時には、いつまでも死なないものと思うて、生存の憍を持ち、この憍に狂わされて身口意に惡をなすものである。これに對うてもし死にゆく身であると省みるならば、始めてこの憍を滅すか、または少くすることが出來るのである。また、誰しも愛しむもの心好くものには、貪欲が起り、この貪欲に狂わされて身口意に惡をなすものである。然るにすべては常なくして轉變を免がれぬものであると省みる時、始めてこの貪欲を滅すか又は、少くすることが出來るのである。又、誰にしても身口意の三つの惡があるのであるが、しかし自分がその惡業の相續者であることを省みる時に、始めてその惡業を無くすか、又は少くすることが出來るのである。

弟子等よ、人人の死生のある限り、總ての人人は老と病と死を超ゆることが出來ず、總ての人の好むものの轉變を免がれることとは出來ない。また總ての人人はその業の相續者である。この理を屢ば省み考えるならば、それに依つて道が顯れ、道を修め習い、繰り返して行えば、縛を解いて煩惱を無くすることが出來るのである。

五。また、其頃、世尊が城外の靈鷲山にましました時のことである。御弟子の跋伽梨は、陶工の家に住つて重い病に苦しんでいた。ある日看病僧を呼んで云うよう。

「友よ、どうか世尊の御許に行つて、私の名で世尊の御足を禮んで申し上げて呉れ。世尊、跋伽梨はいま、重い病に苦しんで居りますが、世尊の御足を禮んでお願い申し上げます。世尊、どうぞ哀憐を垂れ給うて跋伽梨をお見舞い下さい」と。

看病の友は承知うて世尊の御許へ行き、世尊を禮んで側らに坐り、かの跋伽梨の願を申しあげた。世尊は打ち肯いて之を許し衣を着け鉢を手にして、跋伽梨の處へ行き給うた。彼は世尊の來り給うたのを見て、床から起き出でた。世尊は之を見て、「跋伽梨よ、床から起き上るには及ばない、茲に座が設けてあるから、私は此處へ坐る」と仰せられて座に卽き、宣うよう。「病はいかが、耐えることが出來るか、食事はよく

進んでいるか、給養はよく行き屆いて居るか、苦は減るように思われないか、病は追追に癒りかけているとは思わぬか」。

「否、世尊、食事も進みません、苦は增すばかり、病も進むばかりであります」。

「跋伽梨よ、汝には何か悔ゆること、思い殘すことがないか」。「世尊、私には確かに少からぬ悔と殘念とがあります」。「戒のことについてでも、自らを責めているのか」。「世尊、そうではありません」。「それでは何を悔い、何を殘念に思うているのか」。

「世尊、私は世尊を見奉るために、世尊の御許へ參ろうと、長いあいだ思うていました、然し私の身體にはそれだけの力がないので、世尊の御許に參ることが出來ないでいました」。

「跋伽梨よ、この腐つた身體を見て、何しよう。法を見るものこそ、私を見るものである。私を見るものは、即ち法を見るものである。何故なれば、法を見ることによつて私を見、又、私を見ることによつて法を見るからである。跋伽梨よ、汝は身は常住なものと思うか、無常のものと思うか」。

「世尊、身は無常のものであります」。「跋伽梨よ、心は常住のものと思うか、無常のものと思うか」。「世尊、無常のものであります」。「跋伽梨よ、無常のものは苦惱である、苦惱のものは無我である、無常のものは、これは私のもの、これは私であるとゆうことは出來ない、このように如實に知らねばならぬ。跋伽梨よ、このように見て來て、この敎の弟子は身と心を厭い、厭うて欲を離れて解脫れ、解脫れて解脫れたとゆう智慧、即ち生は盡きた、修行は成しとげた、成すべきことは成し終つた、これより他の生はないと知るのである」。

六。世尊は、斯く跋伽梨を敎誨して、座を立つて靈鷲山に歸り給うた。

跋伽梨は、世尊が去り給うて間もなく、看病のものに云つた。「友よ、私を床に乘せて伊師耆利山の山側の黑曜岩の所へ連れていつて呉れ、私のようなものがどうして家の中で死のうと考えられよう」。看病の友は承知うて、云うが儘に彼を伊師耆利山の山側、黑曜岩の側へ運んでやつた。

世尊はその日の午後とその夜とを、靈鷲山に御過しなされた。その夜世尊は、跋伽梨のことを考えさせられ、彼がよく解脫れるであろうことを思われたが、翌る朝、弟子等を呼んで宣うよう。「弟子等よ、跋伽梨の處へ行つて、跋伽梨よ、世尊は昨夜卿のことを案ぜられ、卿がよく解脫れるであろうと思われて、跋伽梨よ、恐れるな、汝の死は惡くはない、汝の死は不幸ではないと仰せられたと告げよ」。

弟子等は仰せを受けて、直ちに跋伽梨の處へ行き、「友よ、跋伽梨よ、世尊のお語を聞けよ」と申入れた。跋伽梨は之を聞いて、看病のものに云うよう。「友よ、私を床から下してくれ、どうして、私どときものが高い座に坐つて、世尊の敎誨を聞こうと思われよう」。看病のものは、彼の語の如くにすると、弟子等は世尊の仰せのように彼に傳えた。

跋伽梨は云うよう。「友よ、私の言とし

て、世尊の御足を頂禮して云つて呉れ。世尊、跋伽梨は重い病で惱んでいます、世尊の御足を頂禮してこのように申します、世尊、私は身も心も無常のものであると云うことを疑いません、無常のものは苦惱であると云う事に惑はありません、常無うして苦惱のものであり、變易る法に欲を起し貪を起し、愛を感えないとゆうことには惑はありません」と。

弟子等はこれを承知うて、世尊の御許へと立ち歸つた。彼は弟子等が去つて間もなく、刀を取りあげて自ら死んだ。

七。その時、世尊は仰せられるよう。「弟子等よ行こう、跋伽梨はいま刀を取りあげた」。かくて世尊は、弟子等を伴うて彼處へ行き、その途中、遠くより跋伽梨が床の上で身體や肩を動かして輾轉しているのを見させられ、弟子等を顧みて仰せられた。「弟子等よ、跋伽梨の識神が何處へ行くであろうなどと疑うてはならぬ、彼はいま確かに涅槃に入つたのである」。

第五節　法句

一。ものみなは意を先とし、意を長とし、意より成る。汚れたる意もて、物言いまたは行なわば、苦の彼に從うことは、牽く牛の足に、車輪の從う如し。(一)

ものみなは意を先とし、意を長とし、意より成る。善き意にて、物言いまたは行なわば、樂の彼に從うことは、影の形に添う如し。(二)

「かれ、我を罵れり、打てり、敗れり、我がものを奪えり」と、この念を抱ける人に、怨の鎮まることはなし。(三)

「かれ、我を罵れり、打てり、敗れり、我がものを奪えり」と、この念を抱かぬ人に、怨は遂に鎮まらん。(四)

實にやこの世は、いかなるときも、怨は怨もて鎮まらず、怨なきにこそ、鎮まらめ。これ古よりの法なり。(五)

彼等愚かの人人は、「我等もやがて終るべし」とは知らず、知りてこそ、爭は止むなれ。(六)

この身は清らかなりと觀、五官を守らず、食に量をば知らず、怠りて精進弱くば、惡魔この人を降すこと、風の弱き樹を倒すが如し。(七)

この身は不淨なりと觀、五官を守り、食に量を知り、信仰ありて、つとめはげまば、惡魔この人を降すなし、風の岩山におけるごと。(八)

汚を離れず、調御の法を具えずして、身に袈裟を纏わんも、その人袈裟にふさわしからず。(九)

汚を吐き出し、戒守りて心靜まり、調御の法を具うる人ぞ、袈裟(をつくるに)ふさわしからめ。(一〇)

眞ならぬを眞と思い、眞を非眞と見る人は眞にいたることはなく、邪つ思をのみはこぶ。(一一)

眞を眞、眞ならぬを眞ならぬと知る人は、眞にいたり、正しき思をはこぶなり。(一二)

拙く葺ける家にこそ、雨の洩れ入る如くに、修めぬ心に貪欲さし入る。(一三)

善く葺かれたる家にこそ、雨の洩れ入らぬ

如くにて、修めし心に、貪欲徹らず。(一四)

この世に悲しみ、かの世に悲しみ、惡を行う人は、二世に悲しむ。己が行の汚れしを見て、悲しみ憂う。(一五)

この世に樂しみ、かの世に樂しみ、功德を積みたる人は、二世に樂しむ。己が行の淨ければを見て、樂しみ喜ぶ。(一六)

この世に苦しみ、かの世に苦しみ、惡を行う人は、二世に苦しむ。「われ惡をなせり」と苦しみ、惡趣に入り益苦しむ。(一七)

この世に歡び、かの世に歡び、功德を積みたる人は、二世に歡ぶ。「われ功德をなせり」と歡び、善趣に入りて益歡ぶ。(一八)

多くの聖教を誦んずるとも、そを行わず放逸なれば、牧牛者の、他人の牛をば數うる如く、出家として資格なし。(一九)

僅かの聖教を誦んずるとも、法に契いて身に行い、貪、瞋、癡を離れ、正しき智慧得て心よく解脫れ、この世かの世に取着なければ、出家として資格そなわる。(二〇)

二。放逸ならぬは死なき道、放逸なるは死の道ぞ、不放逸の人は死するなく、放逸の人は死の如し。(二一)

このことを明かに知りて、賢き人は放逸ならず、放逸ならぬを樂しみつ、聖者の行を樂しまめ。(二二)

禪定を修むる勇者、堅く忍びて常に精進し安穩の涅槃に觸るべし。(二三)

奮い立ち、正しき念にすわり、行い淸く愼み深く、おのれを制えて法を生命とし、放逸ならぬ人のほまれは、いよいよあがる。(二四)

奮い立つこと、放逸ならぬこと、おのれを制え調うることとに依りて、賢き人は、煩惱の流の侵さざる、島を作らん。(二五)

智慧のなき、愚かの人は放逸にふけれど、賢き人は放逸ならぬを、最と勝れたる寶と護る。(二六)

放逸にふけることなかれ、欲の樂に親しむなかれ、放逸ならず、禪定をおさむる人は、大いなる安らぎを得ればなり。(二七)

智者は、不放逸もて放逸のぞき、智慧の樓臺に昇り、愁なく、さながら山に上れる人の、平地に立つ人を眺むる如く、愁うる愚かの人を觀る。(二八)

放逸の者の中にして、放逸ならず、睡れる者の中にして、めざめたる賢き人は、駿き馬の駑き馬におけるごと、愚かの人を捨てて行く。(二九)

帝釋天は放逸ならずして、神の上位に至りたり、されば放逸ならぬは讃えられ、放逸なるは常にそしらる。(三〇)

放逸ならぬを樂しみつ、放逸に恐を見るものは、小さくもあれ大きくもあれ、煩惱の纏縛を、火の如く燒き捨てて行く。(三一)

放逸ならぬを樂しみつ、放逸に恐を見るものは、退墮なくして涅槃に近し。(三二)

三。弓師の箭をば直くするごと、賢き人は、この戰慄き動きて守りがたなく、抑えがたなき心を直くす。(三三)

水の家より引きあげられて、陸に投げられし魚のごと、この心、惡魔の領を逃れんとおのののく。(三四)

抑え難く、輕く、思うがままに走るなる、この心を調うることは、善きにこそ。調えられし心こそ、安らぎもたらせ。(三五)

見きわめ難く微細にて、思うがままに走せ廻る、この心を賢者は守らん。護られたりし心こそ、安らぎ運べ。(三五)

遠く行き、一人歩みつ、形なくして窟(心臓)に秘む、この心を抑えん人は、魔の縛を解きほどかん。(三六)

心堅からず正法を知らず、信の動搖する人に、智慧の滿ちたることはなし。(三七)

心、貪欲に濕るるなく、思、瞋恚に煩わさるるなく、善と悪を離れつる、眼ざめし人には恐なし。(三八)

この身は瓶のようと知り、この心を城郭のごとく樹て、智慧の武器にて、悪魔と戰え。敗れし悪魔を看視らば、煩悩の住家を離れなん。(三九)

この身久しくあらずして、地には臥すべし、魂去りて、卑しく效なき丸太の如けん。(四〇)

敵が敵になすよりも、仇が仇になすよりも、邪に向いたる心こそ、其よりも重き悪をせん。(四一)

父や母、または親族にも勝り、正しき道に向いたる、心は善きこと他にせん。(四二)

四。 誰かこの、夜魔界と人天界と、すべての世界を征ゆものぞ。巧みなる華鬘師の花を集むる如く、微妙く說かれし、この法句を、集むるものは誰なるぞ。(四三)

修道の人こそ、夜魔界と人天界と、すべてこの世を征うるなれ。修道の人こそ、巧みなる華鬘師の華を集むる如く、微妙く說かれし、この法句を集むるひとなれ。(四四)

この身を泡沫のようと知り、幻とこそ悟りてぞ、悪魔の華ある箭を斷ちて、魔王の見えざる所に到らん。(四五)

愛欲の華を集めつつ、欲に耽れる人をこそ眠れる村を洪水の、運び去るが如くにも、死は補えてぞ行くならん。(四六)

愛欲の華を集めつつ、欲に耽れる人をこそ欲に飽くなきそのうちに、死王は虜に彼をせん。(四七)

蜜蜂の、花の色香を害わず、味取りて去る如く、聖者は村村を遊行せん。(四八)

他人の悪事や、なせしなさざりしを見つるなく、己がなせしと、なさざりしをば見てよかし。(四九)

美しき、色にしあれど香なき、華の如くに、身に行わざる人のゆう、善き語は果ぞ結ばじ。(五〇)

美しき、色と香を具えたる、花の如くに、身には行う人のゆう、善き語は果をば結ばん。(五一)

華の叢より、多くの華鬘を作るごと、人生まれては、多くの善き事なさざるべからず。(五二)

華や栴檀や**タガラ**の香は、風に逆いては行かず、善き人の善き香こそ、風に逆い流るるなれ。(五三)

栴檀、**タガラ**、青蓮華、雨時華などの香のうちに、戒の香はいとも勝れし。(五四)

これら栴檀、**タガラ**の香は弱く、戒行のある人の香は、喩うべきなく神神の、間にまでも流るるなり。(五五)

戒を具え、不放逸に住い、正しき智慧に依りてこそ、解脱れたる人の道を、悪魔の見出すことはなし。(五六)

大道に、棄てられたりし塵埃の山より、香

よく心よき蓮華の咲き出ずるごとく。(五七)

暗にさまよう人人のなかに、御佛の弟子は智慧をもて、光りかがやく。(五八)

五。 眠らざれば夜は長く、疲れし者には道遠し、正しき法を知りえせぬ、愚かの者には輪廻は長し。(五九)

道行くに、勝れたる者、等しきものと、伴ならざればただ一人行け。愚かの者に友たるの、德のなければ。(六〇)

「我に子のあり、我に財あり」と、愚かの者は惱まさる。我すら我のものならざるを、いかで、子と財のあらめやは。(六一)

愚かの者とて愚かを知るは、まだし賢し、賢しと思う愚かの者こそは、まこと愚かの者とは云わめ。(六二)

たとえ生涯、賢き人に事うるも、愚かの者は、匙の味知らぬごと、法を認むることはなし。(六三)

たとえ暫く、賢き人に事うるも、智慧ある者は、舌の味知るごとく、速かに法を解るべし。(六四)

智慧なき愚かの人は、おのれを敵に振舞えり。そは、苦しき報ある、悪しき業をばなせばなり。(六五)

行いて、後に苦しみ、眼に涙湛えて、その報を受くる、行爲は悪しし。(六六)

行いて、後に苦しまず、歡びてその、報を受くる、行爲は善し。(六七)

愚かの人は、悪の報の顯われぬ中は、蜜の如くに思いつ、悪の報の顯われて、苦を受く。(六八)

愚かの人の、月月に、草の葉先に着くほどの、食を取り、苦行をなすも、正しき法を學ぶものの、德に比べて、十六分の一にも如かず。(六九)

新しき乳の凝らぬ如く、悪業は速かに、果を招かぬも、灰に覆われし火の如く、見えざるも燃えつつ、愚かの人に從う。(七〇)

愚かの人、名利を求めて顯わるれば、そはその人の不利にして、善き德を亡し、頭も碎くに至るべし。(七一)

愚かの人は虛名を求め、出家の間にては上席、僧房にありては主權、他家に入りては供養を求む。(七二)

「我がなせしことを、出家も在家も知れかし、なすべきこと、なすべからざること、何事も我が思の儘なれ」と、愚かの人は思いて、欲と慢とを增せり。(七三)

「これは俗利のもととなるもの、これは涅槃に導くもの」と、佛の御弟子たるものは、明かに知りて名譽を喜ばず、閑居にいそしめよ。(七四)

六。 過を示し、悪を責め、叱らん人に遇わば、實の在所を示す人に向うごと、この賢者に仕えよ。かかる人に事うれば、幸ありて禍はなし。(七五)

他を誡めよ、他に教えよ、善からぬ事を避けよかし。かかる人、悪人に愛せられざるも、善人に愛せらるべし。(七六)

悪友に交わるなかれ。劣れる人をば友とするなかれ、善き友に交わり、勝れる人を友とせよ。(七七)

法を喜ぶ人は、澄み渡りたる心にて、快くこそ眠るなれ。賢き者はまた常に、聖者の說ける法を樂しむ。(七八)

溝を作る者は水を導き、矢を作る者は矢を

調え、大工は木をば矯め、賢き人は自らを調う。(八七)

堅き岩の、風に搖がぬその如く、賢者は、毀譽に動くことなし。(八八)

深くして、濁りなき池の澄みわたるごと、賢き者は、法を聞きて心澄み渡る。(八九)

善き人は、總てにおいて貪欲を捨て、欲のため饒舌するなし。樂に觸るるも苦に觸るるも、賢き人は、色變ゆることはなし。(九〇)

己がためにも、他人のためにも、強いて子孫を欲わず、財産と領土を願わず、自らの榮達を不法に願わぬ人は、戒を具え智慧のある、正しき人ぞ。(九一)

人人の中にて、彼岸に至れる人は少なし。多くは、迷のこの岸にして、さまよい歩く。(九二)

正しく說かれし法を、守り行う人人は、超え難き死魔の領を過ぎて、彼の悟の岸に至るらん。(九三)

賢き人は、惡法捨てて善法修めよ。家を離れて、家のなき人となり、樂しみ難き孤獨の住居に、樂を求め、欲を離れ、一物を持たず、心の穢よりおのれを清めかし。(九四～九六)

覺に至らしむる道に、心を清め、取着を捨てて、取着なきに樂しみ、煩惱を盡して、光を放つ人こそは、この世にて、涅槃を得たる人。(九七)

七。旅を終え、悲を離れ、すべてに解脫れ、一切の縛を解きたる人には、惱みなし。(九八)

正念のあるものは、勤め勵みて、家に住もうを樂しまず。白鳥の池を棄つるごと、おのおのその家を離るるなり。(九九)

蓄うことなく、量をば知りて食を取り、空無相を觀きわめて、解脫れし人の行跡は、空飛ぶ鳥の跡のごと、逐い難し。(九〇)

その煩惱の盡きて、食物に執着をせず、空と無相を觀きわめて、解脫れし人の行跡は、空飛ぶ鳥の跡のごと、逐い難し。(九一)

御者に依りて、善く馴されし馬のごと、五官を制え慢心を無くし、煩惱を離れし人をしも、諸神たちは羨まめ。(九二)

善く戒を守らん人は、大地のごと、門柱の如くにて、煩わさるなく、または泥なき湖の如くにて、かかる人には輪廻はなし。(九三)

正しき智慧もて解脫れ、安穩にこそ入りたる人の、心も語も行も、亦靜かにはあるなれや。(九四)

邪信を離れ、無爲を知り、生死の結業を打破り、善惡の餘地を滅して、欲吐出せしその人は、げにやこよなき人にこそ。(九五)

村にあれ、森にあれ、谷にあれ、岡にあれ、聖者の住む地はいずこもたのし。(九六)

樂しかるべき森にても、凡常の人は樂しまず、貪離れて欲を求めぬ、人は樂しむ。(九七)

八。意味なき十百の語より成る話より、まだをしも、聞いて心の靜まらん、意味ある一つの語はよけれ。(九八)

意味なき十百の句持つより、聞いて心の靜まらん、意味ある一句はよけれ。(九九)

意味なき百の偈唱うより、聞いて心の靜まらん、一つの法句は勝るなり。(一〇〇)

戰場に、十百の敵に勝たんより、一人の己れに勝つこそは、上なき勝利の者なれや。(一〇一)

己れに勝つは、他人に勝つにも勝る。己れを調え抑えてぞ、行う人の勝てるをば、神も乾闥婆も魔も・梵も、覆えすこと能わじ。(一〇四、一〇五)

月ごとに、千金投れて、百年の供犧なずよりも、一瞬なりと、己れを修めし人をこそ、供養をするは勝るなれ。(一〇六)

百年も、森に住まいて火の神に、仕うるよりも一瞬なりと、己れを修めし人をこそ、供養をするは勝るなれ。(一〇七)

功德のぞみて年中に、いかなる供犧、奠供をなすよりも、正しき行者を拜むは勝る。その四分の一にも及ばず。(一〇八)

常に禮節守り、長者を敬えば、壽命と、美と、樂と、力の四事增る。(一〇九)

行惡しく心靜まらで、百年の間生きんより、戒持ち、禪定を行いて、一日生きんはより勝る。(一一〇)

智慧もなく心靜まらで、百年の間生きんより、智慧をば研き、禪定を行いて、一日生きんはより勝る。(一一一)

怠り勵まず、百年の間生きんより、勤め勵みて、一日生きんはより勝る。(一一二)

ものの、興廢を知らずして、百年の間生きんより、生滅を知りて、一日生きんはより勝る。(一一三)

不死の道を知らずして、百年の間生きんより、不死の道知りて、一日生きんはより勝る。(一一四)

勝れし法を知らずして、百年の間生きんより、勝れし法見て、一日生きんはより勝る。(一一五)

九。善には急げ、心を惡よりまもれ。功德をなすに怠るは、心に惡を喜ぶものぞ。(一一六)

人もし惡をなすあるも、屢ばこれを返しなそ。又、惡をなさんと欲いなそ。惡を積まば苦はあり。(一一七)

人もし功德をなすあらば、屢ばこれを繰返せ。又、功德をなさんと望めかし。功德を積まば樂のあり。(一一八)

惡人は、惡の果報の熟らぬ中は、幸福見るも、惡の果報の熟る時に、禍を見る。(一一九)

善人も、善き果報の熟らぬ中は、禍見るも善き果報の熟る時に、福を見る。(一二〇)

惡、われに來るなからんと、惡を輕しむことなかれ。點滴す水も、落ちては瓶を滿すごと、愚かの者は少しずつ、積みては惡に滿つるなり。(一二一)

善、われに來るなからんと、善を輕しむことなかれ。點滴す水も、落ちては瓶を滿すごと、智慧ある人は少しずつ、積みては功德に滿つるなり。(一二二)

從者少かに、大金携う商人の、危險き道を避くるごと、生命を惜しむものの、毒を避くる如くにて、惡をば避けよ。(一二三)

手に傷のなければ、手をもて毒を取るを得ん。傷なき手には毒入らず、惡なさぬに惡はなし。(一二四)

汚なく、罪垢のなき、淨けき人を汚さんとするも、その惡却つて愚人に來る。風に逆いて投げし、塵のごと。(一二五)

或る者は、人とし生れ、惡なせし者、地獄に生れ、善人は天界に行き、煩惱なきひと涅槃には入る。(一二六)

虚空にも海にも、又は山の洞窟に入りても悪業より、免がれ得らるる所なし。(一二七)
虚空にも海にも、又は山の洞窟に入りても、死の領らぬ所なし。(一二八)

一〇。總てのものは、刀や杖を怖る。總てのものは、死を恐る。おのが身にひきかえ、殺むるなかれ、害うべからず。(一二九)
總てのものは、刀や杖を怖る。總てのものは、生を愛ずる。おのが身にひきかえ、殺むるなかれ、害うべからず。(一三〇)
生きものは、なべて樂求む。自が樂を求めて、刀や杖もて、他を害うは、死しての後に、樂を得べからず。(一三一)
生きものは、なべて樂求む。おのが樂を求めて、刀や杖もて、他を害わぬもの、死しての後に樂得べし。(一三二)
麁惡き語を言う勿れ。云われし人は、汝に言い返さん。怒の語ぞ苦し、報復汝に觸るならめ。(一三三)
破鐘の如くにて、汝もし、口喧しきことのなければ、汝は涅槃に至れるぞ。汝に怒なし。(一三四)
牧人の、杖もて牛を、牧場に逐う如く、老と死とは、人の生命を逐う。(一三五)
惡しき業作りつつ、愚かの人は覺るなし。火もて燒かるる如くにて、その業に依り身をば燒かるる。(一三六)
罪もなく、害し心のなき人を、もし人鞭もて害わば、左の十の中の何れかの、報を速くに受くならん。(一三七)
烈しき苦痛、身の損害とその破滅、重き病と心の狂亂、
或は、王難、烈しき讒誣、親族の滅亡や財寶の消耗、
又は雷火にその家を、燒かるることの十の果なり。この智慧のなき人は、死して地獄に生るべし。(一三八―一三九)
裸體の行につとむるも、螺髮をして火に事うるも、身に泥塗りて行するも、食斷ちまたは露地に臥し、或は塵垢に塗るるも、はた蹲りの行を修むるも、惑を離れぬ人なれば、清むに清まることはなし。(一四〇)
たとえその身を飾るとも、正しく行い寂靜に住まい、身を調え、心を抑え、清き行修めつつ、なべての生けるに對い、鞭を加えぬ人こそは、これぞ婆羅門、出家、また佛弟子とは云わるなれ。(一四一)
良馬に鞭の要らぬごと、非難を受くることなくて、慚愧の心に守る人、誰かこの世に見らるるや、鞭打たれたる良馬の如く、熱心に奮いて道を修めよ。(一四二)
信仰と戒と、精進と禪定と、法の判斷によりて、知と行具わり專念に、この大いなる苦惱離れよ。(一四三)
渠を作る者は水を導き、矢を作る者は矢を調え、大工は木をば矯め、賢き人は自を調う。(一四四)

一一。常に燃えつつあるものを、何の笑ぞまた喜ぞ、闇に覆われてありながら、など燈を求めざる。(一四五)
この彩り、飾せられし肉團を見よ。結び合されし腐朽の身、病ありまた思慮多く、確乎不拔に立つことの無し。(一四六)
この身は老いはて腐つるもの、げにや病の棲家なれ。こわれ行くもの、臭穢れる身は破れ、生はついに死に終る。(一四七)

秋に棄てられし瓢の如く、ほの灰白の骨を見て、いかで樂のあるなりや。(一四八)
骨もて作られ肉と血に、壁を塗られしこの城に、老と死と慢と、覆とは置かる。(一四九)
美しく飾りし王車も、ついには朽つるごとくにて、この身老ゆ。されど善法は老ゆなしと、善き人、善き人に語りたり。(一五〇)
學ぶことの少なき人は、牛の如くぞ老ゆるなる。肉は太れど、智慧ぞ增すなき。(一五一)
この、苦しみの家を、作るものを求めて、見つけ得ず。輪廻の轍廻りつつ、苦しき生を幾度重ねし。(一五二)
されどいま、汝、家を作るものよ、見出されたり。再び、家を作るなし。すべての棟折れ、棟こわれぬ。心、愛の渴離れて、涅槃に入れり。(一五三)
壯き時、淨き行を修めず、富を得ざれば、魚盡きし、池のなかにて、老いたる蒼鷺の滅ぶ如けん。(一五四)
壯き時、淨き行を修めず、寶を得ざれば、昔喞ちつ、弓を離れし矢の如く、朽ち臥せん。(一五五)

一二。人ぞもし、己を愛しと思いなば、よく己を守れ。三時(青、壯、老年)にありて一度は、賢者よ眼覺めかし。(一五六)
先ず自らに、正しく住えよ。かくて他人を誨えかし。さらば賢者よ、煩わさるなく疲るるなけん。(一五七)
他に誨ゆる如くにて、自ら即ち行えよ。自を調えて而るのち、他を調うこと得べし。調え難きは己なる。(一五八)
實にや己は己の主ぞ、他に己の主のあらめやは。己を調えてのちにこそ、得難き善き主得らるなれ。(一五九)
自ら作りし惡業は、己に生れ、われより起り、金剛の、珠玉をば碎く如くにて、愚かの者を碎くなり。(一六〇)
不德甚しき人は、蔓草に蔽われし沙羅樹の如く、敵の望むがようにして、己を振舞うものぞかし。(一六一)
善からぬことにて己をば、利せぬことはなし易く、己に利なる善きことは、まこと、し難きものぞかし。(一六二)
邪見によりて愚かしく、聖者の法もつ阿羅漢と、その敎えを嘗る人は、カツタカの樹果の熟れて、己を害う如くならん。(一六三)
自ら惡せば自ら汚れ、自ら惡なきは自ら淨し、淨も不淨も己にはよれ。他が他をば淨むなし。(一六四)
いかほどのことなりと、他人の利益のためにして、自分の利益を忘れざれ。己が利知り、己が利に專心なれ。(一六五)

一三。劣りし法を事とすなかれ。放逸に耽り、邪見を抱くことなかれ。世事を增長するなかれ。(一六六)
奮い立て、放逸なる勿れ。正しき法を行えよ。法の如くに行えば、この世後の世、樂しく眠らん。(一六七)
正しき法を行えよ、惡しき法を修めざれ。法の如くに行えば、この世後の世、樂しく眠らん。(一六八)
この世泡沫の如く、陽炎と見てよかし。かく見る人をば、死王見るなし。(一六九)
この美しくして王車のごと、飾られたりし世間を見よ。愚かの者は其處に惱めど、智慧ある者は執着るるなし。(一七〇)

前に放逸りさて後に、その放逸を離れし人は、雲を放れし月のごと、この世を照す。(一七二)

前になしたる惡業を、善をばなして遮く人は、雲を放れし月のごと、この世を照す。(一七三)

この世は暗し、見得る(悟れる人)は尠なし。網を脱れし鳥のごと、天界に入るは少なし。(一七四)

白鳥は日の道を行き、神通あるもの空を行く。賢者は魔とその軍勢を破り、この世より離れ去る。(一七五)

慳かなるは天界に行かず、愚者は布施をよろこばず。賢者は布施を喜びて、彼の世にこそは安らぐなめり。(一七六)

一つの法を犯し、妄を云い、後の世を心にかけざる人は、惡としてなさざるはなし。(一七七)

地上の王(轉輪聖王)となるよりも、また天界に行く(帝釋)よりも、全世界の統神(梵天)よりも、豫流果に入るこそ勝らめ。(一七八)

一四。彼の御佛の勝利に勝つものはなく彼の勝利に到り得るものこの世にはなし。御佛の知見は邊なし、この貪と瞋と癡との、何の跡もなき御佛を、何の道にて導かんとするや。(一七九)

係蹄と毒とに喩えらるる貪愛の、何處にもなき御佛の知見は、邊なし。この貪と瞋と癡との、何の跡もなき御佛を、何の道にて導かんとするや。(一八〇)

靜かなる思を凝し、出離の寂靜を樂しむ賢者、正念のある正覺者を、神神も羨め。(一八一)

人と生るること難く、人の壽を得ること難し。正法を聞くことまた難く、佛の出世また難し。(一八二)

諸の惡なす勿れ、衆くの善行えよ、自が心を清うするこそ、これぞ諸の佛の敎なる。(一八三)

忍ぶことは、なし難き苦行の最上ぞ、涅槃は最も勝れしものと、諸の佛は宣えり。出家は他を惱めず、他を害わぬものなれば。(一八四)

誹らず害わず、掟(波羅提木叉)によりて身を守り、食に量知り靜處に坐臥ね、禪定を修むるこそは、これぞ、諸の佛の敎なる。(一八五)

財寶、天より雨降るも、欲には飽き足ることのなし。欲には樂少なくて、苦のみよと知るこそは、賢き人とゆうべけれ。(一八六)

天界の欲にも樂を見ず、煩惱の盡きしを喜ぶは、まこと佛の弟子ぞ。(一八七)

多くの人人、恐のために脅かされ、山や、森や、園や、樹や、墓の神には歸依する。(一八八)

されどこれみな安穩ならず、上なきものにもまた非ず、この歸依もて、なべての苦脱れ得じ。(一八九)

佛と法と僧伽に、歸依するもののみ、正しき智慧にて四聖諦を見る。(一九〇)

四聖諦とは、苦諦と苦の集諦と、苦の滅諦と苦の滅に至る八正道の道諦となり。(一九一)

この歸依のところこそ、安穩上なきものなれや。この歸依もて、なべての苦脱れ得ん。(一九二)

人の中の、勝れし者は得難し。すべての處に生れず、かの賢しの人の生れし家門は、安らかにして繁ゆ。(一九三)

御佛の顯れ給うは樂しくも哉。正しき法を聞くは樂しくも哉。僧の和合むは樂しくも哉。和合の人人の修行は樂しくも哉。(一九四)

虛妄を離れ、憂と悲とを超え、供養に値する御佛と、佛弟子とを供養するもの、かくの如き安穩にして、怖を離れ給える人人を、供養するもののの功德を、計りうるものなし。(一九五、一九六)

一五。おお、われら、怨のなかにありて、怨なく安らかに住わん。怨の人人のなかに怨なく住わん。(一九七)

おお、われら、患のなかにありて、患なく安らかに住わん。患の人人のなかに、患なく住わん。(一九八)

おお、われら、貪のなかにありて、貪なく安らかに住わん。貪の人人のなかに、貪なく住わん。(一九九)

おお、われら、一物だに所有するなく、喜を食とする光音天のそれのごと、安らかに住わん。(二〇〇)

勝利は怨こそ生め。敗れしものは、苦しみて横われば。勝敗を捨てて、寂靜にて安らかに臥すべし。(二〇一)

貪に比ぶべき火はなく、瞋に等しき損はなく、この身體あるに比ぶべき苦はなく、靜けさに比ぶべき樂はなし。(二〇二)

飢は上なき病、身體あるは最上の苦。これをあるがままにぞ知りて、上なく樂しの涅槃を得るなり。(二〇三)

病のなきは第一の利、足るをば知るは第一の富ぞ、信賴は第一の親族、涅槃は第一の樂にこそ。(二〇四)

遠離の味と、寂靜の味を飲み、法の喜の味飲みて、怖なく惡のなし。(二〇五)

聖者を見るは善きにこそ。聖者と住むは樂しくもかな。愚かの者を見ざれば、常に樂しかるべし。(二〇六)

愚かの者と共に行かば、長き路を悲しむ。愚かの者と共に住むは、敵と住むにさも似たり。賢き人と共に住むは、親族と遇うがごと樂し。(二〇七)

この故に、賢者や智者、博學の人や忍辱の人、戒行美しの人、斯くの如きの智者と善人に、月の星の道を行くが如くに、伴ない事えよ。(二〇八)

一六。ふさわしからぬ事をなし、ふさわしの事に從わず、眞の利を捨てて、己の好みに執着るるものは、ふさわしきことをなす人を、羨むに至るべし。(二〇九)

好ましきもの、好ましからぬものと、心に執着するなかれ。好ましきものを見ざれば苦、好ましからぬものを見るも、また苦なればなり。(二一〇)

この故に、心に好愛を生むなかれ。好むものと分るるは禍。愛憎なければ、繫縛はなし。(二一一)

好むより悲起り、好むより恐生る、好むことを離れし人に、悲はなし、いかで怖のあるべき。(二一二)

快樂よりぞ悲起り、恐は生る、快樂を離れし人に、悲はなし、いかで怖のあるべきや。(二一三)

欲より悲起り、恐は生る、欲を離し人に悲はなし、いかで怖のあるべきや。(二一四、五)

愛より悲起り恐は生る。愛を離れし人に悲はなし。いかで怖のあるべきや。(三三六)

淨き戒行と正しき見を具え、法に立ち、眞を語り、己のなすべきをなす人は、多くの人人に愛しまる。(三三七)

名くべからざるもの、即ち涅槃をねがい、心滿足り、欲に心の離れし人は、覺に入る人とは云わる。(三三八)

長く家を後にして、遠くより健かに歸る人を、親戚と友とは喜び迎う。その如く功德を積みて、彼の世に去れる人をば、功德は喜び迎う。(三三九、三四〇)

一七。 忿を捨てよ、慢をすてよ、總ての縛を離れよ。この身體に執着せざる、無一物の人に苦は隨わず。(三四一)

起り來る忿を、轉び行く車を抑ゆる如く、抑えなば、われその人を、眞の御者とは呼ばん。他は只手綱を取れる、名のみの御者ぞ。(三四二)

怒なきもて怒には勝ち、善もて惡に勝ち、施をもて慳貪には勝ち、眞によりて妄に勝て。(三四三)

眞を語れ、怒ることなかれ。乞わるる時は持つもの少きも與えよ。この三つなして、天界に生まれん。(三四四)

ものの生命を害うことなく、常に身體を制ゆる聖者は、不死の處には行き、悲のあることはなし。(三四五)

日に夜に、常に目覺めて學び、涅槃に專念なる人は、煩惱を滅すに至るなり。(三四六)

アトラよ。これ古より云われしことにて、今、初めてのことにはあらず。默りても難められ、辯多くても難められ、適度に語りても譏らるる。世に、非難のなきことはなし。(三四七)

一向に非難せらるる人も、一向に稱讃せらるる人も、ともになし、古も今も、未來にも、かかる人なし。(三四八)

されど識者の、日に日に驗べて、「行いに缺くるところなく、賢くて智慧あり、戒行を具え、心靜かなる人」と推賞むる人あらば、そは閻浮檀金の如くにて、誰か非難し得るものあらめや。神神も梵天も、その人を讃う。(三四九、三五〇)

身の怒を護れ、身を抑えよ。身の惡離れて、身の善を行えよ。(三五一)

語の怒を護れ、語を抑えよ。語の惡離れて、語の善を行えよ。(三五二)

心の怒を護れ、心を抑えよ。心の惡離れて、心の善を行えよ。(三五三)

身を制え、語を慎み、心を調うる賢者は、げによく護れる人にこそ。(三五四)

一八。 汝、今や黃ばめる葉の如く、死の使は汝に侍れり、死の旅の門出に立ちて、旅の糧なきに非ずや。(三五五)

おのれの島を作れ、急ぎつとめて賢者となれ、垢を除き、穢を離るれば、天界に生るる人とならん。(三五六)

汝、いま、命盡き、死の近くに行けり。途中に宿るところなく、旅の糧もなきに非ずや。(三五七)

おのれの島を作れ、急ぎつとめて賢者となれ、垢を除き、穢を離るれば、再び、生と老とを受けざらん。(三五八)

賢者は、鍛冶屋の銀におけるごと、次第に少しずつ、刹那刹那に、おのが心の垢除

らん。(三五九)

鐵の錆の、鐵より出でて鐵を喰う如く、戒を破れる人の行は、その人を惡趣に導く。(三六〇)

讀誦せざるは經の垢、繕わざるは家の垢、怠は身の垢、放逸なるは守人の垢なり。(三六一)

不品行は婦女の垢、慳かなるは施者の垢、惡法はまことに、この世後の世の垢なり。(三六二)

されど、これらの垢よりも、烈しき垢は無明なり。弟子等よ、この垢捨てて、垢なきものとなれよかし。(三六三)

愧ずることなく、烏の如くあつかましく、他をば中傷り、强暴不敵に、汚れしものの生活は容易し。(三六四)

愧ずる心あり、常に淸きを求めて執着のなく、おだやかにして淸く生活せる、智慧あるものの生活は難し。(三六五)

生きものを殺し、妄を言い、盜をなし、他人の妻をば犯し。(三六六)

飲酒にふける人は、この世にても、おのが根を掘るものぞ。(三六七)

人よ、かく知れ、節制のなきは惡法、貪欲と不法をなして、長く汝を、苦に陷らしむることなかれ。(三六八)

人ば實に、信仰と歡喜とによりて、施をなす。されば、他人の與うる飲食に、心怒る者は、日夜、靜かなる三昧に入ることはなし。(三六九)

かかる心の斷たれ、根こそぎ捨てられし人こそ、げに日に夜に、靜けき三昧に入るなれ。(三七〇)

貪欲に等しき火なく、瞋恚に等しき鰐魚なく、愚痴に等しき網なく、愛の渴に等しき河なし。(三七一)

他人の罪は見易く、おのが罪は見難し。他人の罪をば、粃穀の如く吹き散らせど、詐多き賭博者の、骰子を隱すが如くにて、おのが罪を隱す。(三七二)

他人の罪を見て、常に心のいらだつ人には煩惱の減ることなく、增すことのみなり。(三七三)

空に跡なし、異教に出家なし、人人は惡を樂しみ、御佛に、惡はなし。(三七四)

空に跡なし、異教に出家なし、あらゆるものに常なく、御佛に動搖なし。(三七五)

一九。 事を躁急しく運ぶが故に、「法に立つ人」といわれ得ず、利と不利を分ち知り、賢こく。(三七六)

躁急しからず、法に依り、平等に人を導き、法を護持りて智慧ある人こそ、「法に立つ人」と呼ばるなれ。(三七七)

多くを語るがゆえに、賢き人にはあらず、心安けく怨なく、畏れなきものをこそ、賢者とは呼ぶなれ。(三七八)

多くを語るがゆえに、「法を持つ人」にはあらず、聽くところ少したりとも、身をもて法を見、法に放逸ならぬ人こそ、「法を持つ人」と呼ばるれ。(三七九)

髮白しとて長老ならず、年のみ老いしは愚老と呼ばる。(三八〇)

眞實あり正義あり、ものの生命を害わず、節制と調御とあり、心の垢を吐き出せる人こそ、長老と呼ばるなれ。(三八一)

嫉あり慳かにして、憍る人は、その巧言の

ゆえに、令色のゆえに、正しき人にはあらず。(二六六)

これを切り斷ち、根拔とし、心の中の、瞋を吐き出せる人こそ、端正の人と云われる。(二六七)

髮剃りしとて出家ならず、戒行なくして、妄語り、貪欲のあるものいかで、出家たり得ん。(二六八)

小くもあれ大きくもあれ、總ての惡靜むる人は、出家とは呼ばる、出家とは、惡を靜むる義の故に。(二六九)

他より食を受くるとて、出家ならず。不淨の法を持つ間は、出家にはあらず。(二七〇)

惡も功德もすべて排除し、清き行を守り、智慧もて世をば行けばこそ、出家と呼ばるなれ。(二七一)

愚かしくして智慧なければ、沈默を守れば、とて牟尼(聖者)ならず、秤を手にして勝れたるを取り、(二七二)

惡を去ればこそ彼は牟尼。牟尼とはこの世の善惡を、計り取る義をもてばなり。(二七三)

生きものを、惱ます者は聖者にあらず。すべて生きとし生けるものを、害わねばこそ聖者と云わるなれ。(二七四)

戒持ち、多くを學び、禪定を得、人と離れて住むことのみにて、(二七五)

常人の味い得ざる、浮世の外の樂に、われは到りし。弟子よ、煩惱盡きせぬうちは、宜しとの信を懷くなかれ。(二七六)

二〇。 道の中にては八正道、眞理の中にては四聖諦、法の中にては欲を離るることの人の中にては佛こそ、上なきものなれ。(二七七)

知見を淨むるためには、この一道のみにて、他にあることなければ、汝等この道を行えよ。これは惡魔を迷わす道ぞ。(二七八)

汝等この道を行えば、苦の終をなさん、こはわれ、智慧によりて毒の箭を、除ける時に說きし道なり。(二七九)

汝等、自ら勵むべし、佛はこれただ說手のみ、道に入りて、禪定を修むる人は、惡魔の縛をのがるべし。(二八〇)

なべてのものは無常のものと、智慧もて見るとき、苦を厭う心は起る。これ淸淨に到る道なり。(二八一)

すべてみな苦なりと、智慧もて見るとき、苦を厭う心は起る。これ淸淨に到る道なり。(二八二)

すべての法に「我」のあるなしと、智慧もて見るとき、苦を厭う心は起る。これ淸淨に到る道なり。(二八三)

奮い立つべきときに立たず、若くして力あるときに怠り、意志よわく、怠慢なるものは、智慧もて、道を知るなし。(二八四)

語を愼しみ、心を制え、身に惡をなす勿れ。これら三つの業道を淨めて、仙人の說ける道にぞ入らん。(二八五)

瑜伽は智慧を生み、瑜伽なきは智慧の滅びぞ。この得失の二道を知りて、智慧を增すべく身をばそなえよ。(二八六)

煩惱の森を伐れ、樹にはあらず。森より怖は生る。森と森の下草とを切りて、弟子等よ、煩惱より脫れ得ん。(二八七)

いかほどに微細なりとも、女に對える、男の欲の切られずば、乳呑の犢の母の牛に、おけるがごとく、その人の心は、縛のがれじ。(二八八)

手を以て、秋の蓮を折る如く、おのれが愛の心斷ち、寂靜の道のみ育てよや。涅槃は佛の說きませしもの。(二八九)

茲にて雨期をも、秋をも夏をも過さんと、かくは思いて愚かのものは、死の難の來るを知らず。(二九〇)

子等や家畜に溺らされ、欲に心を奪らるる人を、眠れる村を洪水の、運び去るがごとくにて、死の神は奪い行く。(二九一)

死に捕われし人には、子も女も賴むに足らず。父も母も賴りとならず、親族とてまた避難所ならず。(二九二)

この理知りて、賢しく戒行ただしき人は、速くぞ涅槃の道淸めん。(二九三)

二一。 小さき樂を捨てなば、大いなる樂を見るべし。智慧ある人は、大いなる樂を見て、小さき樂を捨つべし。(二九四)

他に樂を與えて、自ら樂を得んと、願う人は、怨のなかに入りて、怨よりのがることなし。(二九五)

なすべきことをなおざりになし、なすべからざるはこれをなし、憍慢にして放逸の人には、煩惱こそ增し盛れ。(二九六)

常に身の汚穢を觀、なすべからざるを行わず、なすべきことを常になし、正念にして自覺ある人には、煩惱は滅ぶ。(二九七)

貪欲の父と、憍慢の母とを殺し、有無の二見の二王を殺し、欲の民と國とを滅して、眞の婆羅門に惱なし。(二九八)

貪欲の父と、憍慢の母とを殺し、有無の二見の二王を殺し、疑の賊を殺して、眞の婆羅門に惱なし。(二九九)

御佛の弟子は常にめざめて、夜となく晝となく、御佛を念ほゆ。(二九六)

御佛の弟子は常にめざめて、夜となく晝となく、御法を念ほゆ。(二九七)

御佛の弟子は常にめざめて、夜となく晝となく、僧伽を念ほゆ。(二九八)

御佛の弟子は常にめざめて、夜となく晝となく、身を念ほゆ。(二九九)

御佛の弟子は常にめざめて、夜となく晝となく、害なきもて心樂しむ。(三〇〇)

御佛の弟子は常にめざめて、夜となく晝となく、修行もて心樂しむ。(三〇一)

出家は難く、出家の行を樂しむも難く、僧房に住もうも難く、家居も苦し。貴きと賤しきと、共に住もうも難く、遠く旅す(輪廻)も苦は從う、されば遠くに旅するなかれ。苦の從うことなからん。(三〇二)

信仰と戒とを具え、ほまれと寶とある人は、何處に住むも敬わる。(三〇三)

善き人は、ヒマラヤの山の如くにて、遠くより顯われ、惡しき人は、暗に放たれし矢の如く、見ゆることなし。(三〇四)

ひとつ處に坐り、ひとつ處に寢ね、撓まずひとり行き、ひとりおのれを、調え抑えば、森の奥にも、樂しみてあらん。(三〇五)

二二。 妄を言うものは、地獄に行く。惡事なして、なさじと云うもの、この二人は、等しく後の世、卑しき人となるべし。(三〇六)

袈裟を肩に纏うも、惡しきおもい多く、身を抑え、制むることなき惡人は、その惡の故に、地獄に入らん。(三〇七)

戒を守るなく、身を抑ゆることなくて、人人の施す食を得るよりは、炎吹く熱鐵の丸を呑むはよからん。(三〇八)

放逸にして、他妻を犯すものは、四つの事を受く。不徳を得ると、寝ねては快らぬと、世の非難と、墮獄なり。(三二九)

身は罪を受けて、地獄には入る。畏れある者(姦夫)と、畏れある者(姦婦)との、樂は短かし。王は嚴しく刑を加う。されば、他人の妻に、行くことなかれ。(三三〇)

草の葉も、拙くつめば手を切るごとく、出家の行も誤らば、地獄に引き入る。(三三一)

懶け怠り、汚ある行をなし、狐疑い躊躇いて、清淨の行をなすとても、大いなる利益はなし。(三三二)

なすべきことは堅く努めて、これをなせ。怠る出家は、却つて塵を蒔くものぞ。(三三三)

悪しき事は、なさぬぞ善き、なしては、後に悔ゆ。善き事は、なすこそ善けれ、なしての後に、悔ゆることなし。(三三四)

内も外も、よく護られし城のごと、わが身を護れ、刹那も空しく過ごさざれ。刹那も等閑になすあれば、地獄に墮ちて苦しむゆえに。(三三五)

恥ずべからざるを恥じ、恥ずべきを恥じず。邪見を抱きて、人、地獄に入る。(三三六)

恐るべからざるを恐れ、恐るべきを恐れず、邪見を抱きて、人、地獄に入る。(三三七)

罪なきを罪ありと思い、罪あるを罪なしと思い、邪見を抱きて、人、地獄に入る。(三三八)

罪あるを罪ありと知り、罪なきを罪なしと知り、正見を抱きて、人、善き所に生る。(三三九)

二三。戰場において、射られし矢を、象の忍ぶが如く、我も誹謗を忍ばん。多くの人人は、不徳のゆえに。(三四〇)

人人は、馴らされし象を戰場に引き、王また馴れし象に乘る。自らを調え、誹謗を忍ぶ人こそは、人人のなかの勝れたるもの。(三四一)

騾馬も馴されしは善く、信度の馬も善く、大いなる牙ある象も善し。されど自らを調えし人は、それにも増して勝れたり。(三四二)

そは、これらの乘物によりて、未だ足踏まぬ地に至り難きも、自ら調うるものこそ、自制によりて、その地に至り得べければなれ。(三四三)

護寶と名くる象は、さかりの時には制え難く、繫がれて食取らず。象はその住む林を思う。(三四四)

眠を好み、大食をなし、常にうとうとして床に葬し、食に飽きたる豚の如き、愚かの人は、幾度も迷の生を重ぬ。(三四五)

この我が心、以前には、欲のままに、樂のままに、好む所へさまよいたりしが、今ぞわれ、正しくこの心を制ゆべし。鉤を執る調象師の、狂える象を制ゆる如く。(三四六)

放逸ならぬを樂しめよ。おのが心を守れかし。泥に陷りし象のごと、悪趣よりおのれを上げよ。(三四七)

人もし、賢く正しく住い、遠き慮のある人を、友とすること、得るならば、すべての危險に勝ちてよろこび、正念にして彼と共に行け。(三四八)

若し賢くて正しく住い、遠き慮のある人を、友とすること得ぬなれば、平げし國棄つる王のごと、また、林のなかの象王のごと、獨り行け。(三四九)

悪人には、友となすべき資格なければ、獨り行くこそ善けれ。森のなかの象王の如く獨り行きて悪なさざれ。(三五〇)

事の起る時、友は樂し。如何なるものにも足るを知るは樂し。生命の終る時、功德は樂し。すべての苦惱を捨つるは樂し。(三五一)

世に、母と云うものは樂しく、父と云うものも樂し。世に出家とゆうものは樂しく、婆羅門と云うものも樂し。(三五二)

老ゆるまで、戒を持つは樂しく、信仰の確立も樂し。智慧を得るも樂しく、悪をなさざるも樂し。(三五三)

二四。放逸の人には、愛欲、蔓草の如く繁り、果實を求むる猿のごと、生より生にぞさ迷わん。(三五四)

世にもし、この卑しき毒のある、愛欲、人を降しなば、その人の愁の繁り行くこと**ビーラナ**草の如くなり。(三五五)

世にもし、この卑しくて斷ち難き、愛欲を敗る人あらば、愁、その人を去ること、水滴の若葉におけるが如けん。(三五六)

されば、われ汝等に、この善き語を語る。汝等、茲に集まれる者すべて、**ウシラ**を求むる人の、**ビーラナ**草を掘る如く、愛欲の根をば掘れ。かくて流の、葦を折りて流し去る如く、幾度も幾度も、悪魔に勝たしむ勿れ。(三五七)

たとえば、樹は切らるるも、その根害われずに堅固ならば、再び生長つが如く、愛欲の煩惱除かれなくば、苦は再び生るべし。(三五八)

それ、人に、可愛の境に流るる三十六流繁ければ、貪欲に纏わる思念の流、その悪見の人を流し去らん。(三五九)

欲の流は、至るところに流れ、欲の蔓草は、常に芽生ゆ。その蔓草の生えしを見れば、直ちに智慧もてその根絶て。(三六〇)

人の悦は常に流れて、物に着く、喜に着きて、樂を求むる人人は、生と死を受く。(三六一)

貪愛に心を奪らるる人は、係蹄に掛りし兎の如く、馳けまわる。煩惱の縛に捕われて、永く幾度も、苦を受く。(三六二)

貪愛に心を奪らるる人は、係蹄に掛りし兎の如く、馳けまわる。この故に己の、貪欲を離るること求め、愛の渇を除けかし。(三六三)

煩惱の林を出でて、又も煩惱の林に執着き、煩惱の林免れて、又も煩惱の林を走る。免れて又も縛に、行くこの人を見てよかし。(三六四)

賢者は、鐵や木や草の、縛を強しとは云わず。珠玉の指環に執着すると、妻子に愛着するをこそ、強しとは云え。(三六五)

そは疎く、緩けれど、脱るる難し。賢者はこの縛を強しとは云う。彼等はこの戒を斷ち、眷戀うなきものとなり、欲と樂を捨てて、出家をばなす。(三六六)

貪欲に耽るものは、蜘蛛が己の網をつとうごと、己の作りし流に隨いて去る。賢者は、この貪欲を斷ち、眷戀うなきものとなり、總ての苦を捨て、出家する。(三六七)

過去を離れよ、未來を離れよ、現在を離れよ。これぞ、生死の彼岸に到りたるもの、意、一切の處に解脱るれば、又、生と老とに行かず。(三六八)

分別に迷亂され、貪欲劇しく、善きことをのみ見る人の、貪欲は益増して、戒を強し

くす。(三四九)

分別の靜むを喜び、常に正念に、不淨觀を修むる人は、惡魔の縛を、斷ち切り滅すものぞ。(三五〇)

さとりの畢竟の地に至り、怖なくして貪愛を離れ、罪の垢なく、有(存在)の箭を拔き去りし人は、最後の身の人ぞ。(三五一)

貪愛を離れ、取着のなく、聖語の句義をよく知りて、文字の結合の、前後の關係を知る人は、最後の身の大智者といわる。(三五二)

我はすべてに勝ち、すべてを知れり、すべての法に汚されず、すべてを捨てて愛の渴盡き、自らの智慧もて解脫せり、誰をか師と呼ばん。(三五三)

法施はすべての施に勝ち、法味はすべての味に勝ち、法樂はすべての樂に勝ち、愛の盡くるはすべての苦に勝つ。(三五四)

もし彼岸を求むるなくば、富は愚かの人をぞ殺む、富を渴望みて、愚かの人は、われから殺む。(三五五)

雜草は田を害い、貪欲は人を害う。この故に、貪欲を離れし人に施さば、大いなる報あり。(三五六)

雜草は田を害い、瞋恚は人を害う。この故に、瞋恚を離れし人に施さば、大いなる報あり。(三五七)

雜草は田を害い、愚癡は人を害う。この故に、愚癡を離れし人に施さば、大いなる報あり。(三五八)

雜草は田を害い、欲は人を害う。この故に、欲を離れし人に施さば、大いなる報あり。(三五九)

二五。

眼を制め抑ゆるは善き哉、耳を制め抑ゆるは善き哉、鼻を制め抑ゆるは善き哉、舌を制め抑ゆるは善き哉。

身を制め、語を制め、意を制め、總ての處に、制め抑ゆるは善き哉、總ての處に、制め抑えて、御佛の弟子は、あらゆる苦より脫る。(三六〇—三六一)

手を制え、足を制え、口を制え、最とよく制え、內に喜ぶ。心靜かに、獨り居て、滿ち足らば、この人を佛弟子とはゆう。(三六二)

口を制え、程善く語り、心浮かねば、その弟子は、義と法とを示す、その語や甘し。(三六三)

法に住い、法を樂しみ、法を考え、法を念う弟子は、正法より退轉がず。(三六四)

自ら得しを蔑まず、他人の得たるを嫉むなかれ、他を羨む弟子の、心ぞ靜まらじ。(三六五)

少かりとも、おのれの得しを蔑まず、生活の淸くて、倦むなき弟子を、神神稱う。(三六六)

すべてのものに、我がものとゆう思を起さず、無くなればとて悲しむなくば、その人こそは弟子といわるなれ。(三六七)

慈悲の心に住い、佛の敎を悅ぶ弟子は、ものみな靜まりて、靜けき安樂の處に到らん。(三六八)

弟子よ、舟の水くめよ、水汲み出さば、輕く行くべし。貪欲と瞋恚を斷ちて、涅槃に行くべし。(三六九)

五つの煩惱をば斷ち、五つの惑を離れ、五つの德を修めよ。五つの煩惱を離れし弟子は、「流わたりし人」とは呼ばる。(三七〇)

弟子よ、靜かに思え。放逸にすることなかれ。心を五欲に向くなかれ。放逸にして燃けたる鐵の丸を呑むなかれ。地獄の火に燒かれて、苦しと泣くなかれ。(三七一)

眞の智慧のなければ、心靜まらず、心靜まるなくば、眞の智慧は起らず、心靜まりて、智慧ある人は、覺に近き人。(三七二)

人なき處に入り、心靜まれる弟子には、正しく法を觀て、この世にあらぬ樂のあり。(三七三)

身と心の、生滅を正しく知るもて、そを知るものの甘露とはする、喜と樂とを得ん。(三七四)

こは、世の出家の、先ずなすべきものぞ。五官を制え足るを知り、戒をもて調え、生活淨く、倦むことのなき善き友に交わり、友情を厚くし、善き所作に慣れてあらば、歡び多く、苦の滅に至らん。(三七五—三七六)

雨時の華の、萎める花を落すが如く、弟子等よ、貪と瞋を離れよ。(三七七)

身を鎭め、語を鎭め、心靜めて、世の樂を離れし弟子は、寂靜の人とは呼ばる。(三七八)

われからに、われを責め、われからに、われを驗せよ。かくてこの弟子は、正念を護り、安樂に住まわん。(三七九)

自らは、自らの主し、自らは、自らの據所。されば、旅の商人の、己の馬を制ゆるごとく、己を制えよ。(三八〇)

よろこび多く、佛の御敎を信ずる弟子は、世の憂きこと止みて、寂けしの、安樂に至らん。(三八一)

げにや佛の弟子は、年若くとも、佛の御敎に努むるものは、雲をば出でし月のごと、この世をこそは輝かせ。(三八二)

いさましく、煩惱の流斷て、諸の欲をば除け。婆羅門よ、ものみなの、寂かなるを知らば、汝、涅槃を知るなり。(三八三)

婆羅門よ、自制と默思の二つを知らば、汝の縛は、悉く斷ち切られたるなり。(三八四)

彼の岸も、此の岸もなく、怖なく、縛を、離れし人を、われは、婆羅門と云う。(三八五)

靜思なし、汚なく、確かに坐り、なすべきを、なし終り、煩惱を離れ、この上のなき、望をなし果せる人を、われは、婆羅門と云う。(三八六)

日は晝に照り、月は夜に輝く、武士は、武裝して輝き、婆羅門は、靜思して輝く。佛は威光もて、すべての日と夜に輝く。(三八七)

惡しき業を離れ、行正しき故に、婆羅門と名けらる。自らの垢を棄つるが故に、出家とはいわる。(三八八)

婆羅門を打つ勿れ、打たれて婆羅門は怒るなかれ。婆羅門を打つものは咀わる、打たれて怒るものはなお咀わる。(三八九)

好むところに阿らざるは、婆羅門にとりて善きこと。害うこころをとどむる時は、苦も亦止む。(三九〇)

身と語と意に惡なく、この三つを制御うる人を、われは婆羅門と云う。(三九一)

誰にしもあれ、その人より御佛の、敎を聞かば、婆羅門の火に事うる如く、その人を拜め。(三九二)

髮結いしとて婆羅門ならず、氏と生に婆羅門あらず。眞實と法とあらば、彼は樂ある眞の婆羅門ぞ。(三九三)

愚かのものよ、髮を結い、獸の皮を着るとても、何かあらん。內に煩惱の垢ありて、外に淸淨を裝うのみぞ。(三九四)

糞掃衣をばつけ、痩せて、血の管顯わるるとも、獨り林に、靜坐する人を、われは婆羅門と云う。（三九五）

生の故に、母の故に、われはその人を、婆羅門と云わず。憍慢にして、所有つところあるならば、婆羅門にあらず。有つものもなく、執着のなきものを、われは婆羅門と云う。（三九六）

すべての縛を斷ち、畏るる所なく、執着を超え、束縛離れし人を、われは婆羅門と云う。（三九七）

婆羅門の持物なる紐と緒と繩と、それに附屬うものとを斷ち切り、繫縛の閂をぬき、眼ざめし人を、われは婆羅門とは云う。（三九八）

罪なくて、受くる罵詈と、鞭打と枷とを忍び、忍辱の力、強く大いなる人を、われは婆羅門と云う。（三九九）

忿なく、行正しく、戒を持ち、欲なく、自らを制え、迷の生を離れし人を、われは婆羅門と云う。（四〇〇）

蓮の葉の上の水のごと、針の先の瞿粟のごと、欲に染まざる人を、われは婆羅門と云う。（四〇一）

この世にて、おのが苦の、無くなることを知り、重荷をおろし、繫縛を離れし人を、われは婆羅門と云う。（四〇二）

智慧深く、賢くて、道と非道をよく見わけこの上のなき目的をば果せる人を、われは婆羅門と云う。（四〇三）

在家の人にも、出家の人にも、交らず、家なくて遊行し、欲なき人を、われは婆羅門と云う。（四〇四）

いきとし生けるものを、害うことなく、害わしめざる人を、われは婆羅門と云う。（四〇五）

敵意のある人人の、中にありても爭わず、打ちかかる人に對いても、心靜まり、取着あるものの中にありて、取着のなき人を、われは婆羅門と云う。（四〇六）

瞿粟の實の、針の先より落つるごと、その人より、貪と瞋と、我慢と僞善との、落ち離れし人を、われは婆羅門と云う。（四〇七）

荒き語なく、敎を含める、眞實の語を語り、何人をも、怒らしめぬ人を、われは婆羅門と云う。（四〇八）

この世にて、多き少きにかかわらず、淨きも淨からぬも、いかなるものにても、與えられぬを取らざる人を、われは婆羅門と云う。（四〇九）

この世彼の世に、欲を抱くなく、繫縛を離れし人を、われは婆羅門と云う。（四一〇）

愛着なく、智慧により疑離れ、不死の奥底に至りし人を、われは婆羅門と云う。（四一一）

この世にて、功德と惡との、二つの執着を離れ、愁なく汚なく、清淨なる人を、われは婆羅門と云う。（四一二）

曇なく月の澄みて、淨けくある如く、生きんと願う欲より、離れし人を、われは婆羅門と云う。（四一三）

この泥道と、惡道と輪廻と愚癡をば越え、彼の岸に度り了りて、心靜かに思い、欲なく疑なく取着なくて、安穩にある人を、われは婆羅門と云う。（四一四）

この世にて、欲を離れ、家を捨てて遊行をなし、愛欲を捨てたる人を、われは婆羅門と云う。（四一五）

この世にて、愛の渦を離れ、家を捨てて遊行をなし、愛の渦を捨てたる人を、われは婆羅門と云う。（四一六）

人界と天界の縛を超え、すべての繫を斷ち切りし人を、われは婆羅門と云う。（四一七）

快よきと、快よからぬとを捨て、清涼かになりて、依る所なく、すべての世界に、勝る勇者を、われは婆羅門と云う。（四一八）

衆生の生と死を知り、執着のなき幸福者、覺者を、われは婆羅門と云う。（四一九）

その人の行く道を、神神も知ること能わず、煩惱の盡きて、さとり得し人を、われは婆羅門と云う。（四二〇）

過去にも現在にも未來にも、我に有つところなく、一物無くして、取着のなき人を、われは婆羅門と云う。（四二一）

雄雄しき人、崇高き人、英雄、大聖、勝てる人、欲のなき人、學び了りし人を、われは婆羅門と云う。（四二二）

前の世のことを知り、天界と地獄を知り、生盡き、智慧完き聖者、總ての完全に至りし人を、われは婆羅門と云う。（四二三）

第二章　如來の本願と教濟

第一節　法藏菩薩

一。世尊は、猶續いて靈鷲山に滯在せられた。或る日多くの弟子達は世尊をめぐって坐り、阿難は座より起ち、上衣を一つの肩につけ、右膝を地につけ、合掌して世尊に申しあげた。

「世尊、今日世尊の御姿は淸らかに、御顏はさながら透き徹る明鏡のように、澄亘っていらせられます、私はかような光り輝く威容を仰いだことはありません、世尊、思いますに今日、世尊の御心は佛の住み給う所に住み、導師の行に住み、三世の佛達と念い合い給うことでありましょう」。

世尊、阿難に宣う。「善い哉、阿難よ、神神が汝に敎えたのか、又は、汝自らの考えでこの問を起したのか」。阿難。「世尊、神神が敎えたのではありません、私自らの考えで、此義を尋ねまいらせたのであります」。

世尊。「善い哉、阿難よ、その問は甚だ宜い、汝は人人を憐み、彼等の利益と幸福のために、この義を尋ねた。阿難よ、佛が限りない大いなる慈悲をもつて、すべての人人を憐み、この世に現われた理由は、敎を弘めて、すべての人人にまことの利益を與えんがためである。まことに量りない時の間も、佛の世に遇うことは優曇華に逢うように難い。汝が今尋ねた所は、すべての人人を惠むこと多いであろう。阿難よ、佛の覺の智慧は量りがたい。礙ない智慧であるから、一食を以て百千億劫の壽命を支えることもできる。そして、その姿も光り輝いて變ることがない。何故かと云えば、佛は極みない智慧を持ち、あらゆる法について自在の力を持つからである。阿難よ、佛がこの世界に現われた理由を尋ねたことはその實、佛の力である。意を用いて諦かに聞け、今より汝のために說くであろう。

二。久遠の昔、錠光佛がこの世に出でられ、量りない人人を敎え導いて、證に至らしめ給うた。次で五十三の佛が出で給い、

最後に世自在王佛が出で給うた。時の國王が佛の說法を聞いて深く喜び、眞に道を求むる意を起し、國を捨てて出家となり、法藏比丘と名乘つた。才高く智慧勝れ、勤め勵む力は世に及ぶものもない。彼は世自在王佛の御許に詣でて、頌をもつて佛の德を讃え奉つた。

(一) 御顏いと妙に、みいず極みなし、
かかる大御光は、なべて世に比なし。
日や月や、摩尼の珠の光も、みな蔽われて墨のごと、その大いなる御聲は、
響きて十方に流る。

戒と、聞くことと、禪定と、智慧と精進との御德は、超え勝れて並びなし
深き御智慧は、佛の法の海を念い、その奧を盡し、その底を究め給う。

(二) 無明と貪と瞋は、永く世尊に在
まさず、人の世の雄雄しき御佛、尊き
御德や極みなし。
いさおしは、廣く大きく、御智慧は、
深く妙なり、光の威德、世を擧げて震
われ佛とならんとき、聖けき法王と齊しくて、老と死との惱より、なべての人を脫れしめん。

施と、意を調うると、戒と忍と、精進と禪定と、智慧の行を修めて、恐を懷く人のために、救の主とならまほし。

(三) 百千の御佛、その數恒河の沙にも等し。すべてこれ等の御佛を、供養しまつらんそれよりは、げに勇ましく道を求めて、退かざるぞよかるべき。
又は恒河の沙に等しき、數し得知れぬ佛の國を、我が光もて照さなん。かかる精進と、威神とに、限りなからん。
われ佛とならんには、その國第一に、住む人人妙に、敎の場は世に超えん。
國は涅槃の樂しさをもて、世にもならびなからん。われは常に哀みをもて、すべての人を救わなん。

(四) 十方より來らん人人、もし我が國に到りなば、心淸けく悅みちて、快樂ついに極みなからん。

願くば御佛、われに眞實を敎えませ、われは願のその如く、必ずつとめ勵むべし。十方に在す御佛達は、礙なき智慧持ち給う。常に是等の御佛をして、我が心を知らしめん。

たとえ身は、いかなる苦しみのうちにあるとも、つとめ勵みて、我が願をかえざらん。

三。法藏比丘は、かように世自在王佛の德を讃え了つて申しあぐるよう。「世尊、私は眞の證を得たいと願うております、どうぞ、私のために其法をお說き下さい、私は御敎のままに道を修めて、淸らかな佛の國を建て、生死の巷に苦しんでいる人人を救いたいと欲います」。

世自在王佛宣う。「その佛の國を建てることは、汝自ら知ることが出來るであろう」。法藏菩薩。「世尊、この事は弘く深く私の知る境界ではありません、どうぞ、私のために、廣く佛の國國の行を御說き下さい」。

かくて世自在王佛は、その願の深く廣く高く明かなるを知り給い、「法藏よ、譬えば人あつて、大海を汲み干そうとするに、量りない年に亙つて倦むことがなければ、遂には底を究めて寶を取り出すことが出來るであろう、人もし、かように心を專らにして道を求めて止まないならば、必ずその願を果すであろう」。

と仰せられ、彼のために二百十億の佛の國國の相を顯わし、悉くにその區別を說きたもうた。法藏菩薩は是等の淸らかな國國を見て、世に超えた大いなる願を建て、五劫に亙つて、是等諸の佛の國國と、その國國を建てる行について思を凝らし、悉くそれ等の凡ての功德と莊嚴を攝めとり、再び世自在王佛の御許に詣でて申しあげた。

四。「世尊、今私の申し上るところは、私の特別な願であります、私が證を得た時、私の國はかような思い議り難い功德と莊嚴とをもつのでありましよう」。

一。若し、私が佛となる時、その國に地獄、餓鬼、畜生の三惡道があるならば、覺を得ぬであろう。

二。若し、私が佛となるとき、その國の人人が、これ等の三惡道に再び墮ちるならば、覺を得ぬであろう。

三。若し、私が佛となる時、我國に生れる人人が、「我」と「我所」の想を起すならば、覺を得ぬであろう。

四。若し、私が佛となる時、その國の人人が定聚の位に入り、必ず滅度に至らなければ、覺を得ぬであろう。

五。若し、私が佛となる時、その光に限りがあつて、百千億那由他の國國を照さぬならば、覺を得ぬであろう。

六。若し、私が佛となる時、その壽命に限りがあつて、少くとも百千億那由他の劫の數をもつて數えらるるならば、覺を得ないであろう。

七。若し、私が佛となる時、十方世界の量りない御佛達が、悉く私の名を讃め稱えぬならば、覺を得ぬであろう。

八。若し、私が佛となる時、十方の人人が至心に疑なく信して、私の國へ生れようと欲い、少なくとも十たび念がけて而も、生れることが出來ぬならば、私は覺を得ぬであろう。但し、五逆罪を造るものと、正法を謗るものとは除く。

九。若し、私が佛となる時、十方の人人が、道を求むる心を起し、諸の功德を修め、心を專にして願を發し、私の國へ生れたいと欲うならば、その人の壽の終る時に、大衆に圍まれて、その前に現われたい。それが出來ぬならば、覺を得ぬであろう。

一〇。若し、私が佛となる時、十方の人人が、私の名を聞いて、私の國に念を係け、諸の德の本を植え、心を專にしてそれを捧げて、私の國に生れたいと欲うに、もし、果し遂げないならば、私は覺を得ぬであろう。

一一。若し、私が佛となる時、他の佛の國の菩薩達が、私の國に生れるならば、必ず佛となるべき位に至るであろう。猶自在に人人を敎え導こうとするものは誓の鎧を被て諸の國に遊び、恒河の沙の數に等しいほどの人人を導いて、證の

道に至らしめ、大悲の德を修めるであろう。若し出來ないならば、私は覺を得ぬであろう。

一二。若し、私が佛となる時、その國は清らかに澄み渡つて、明かな鏡のように十方の數知れぬ御佛の國國を映し出さないならば、私は覺を得ぬであろう。

一三。若し、私が佛となる時、その國は大地から虛空に至るまで、宮殿、樓閣、池、流水、華園等のあらゆる物が、量りない寶、量りない香をもつて飾られないならば、私は覺を得ぬであろう。

一四。若し、私が佛となる時、十方の數知れぬ國國の人人が我が光を蒙つて、身も心も柔かになり、人間、天上の樂よりも勝れた樂を得ないならば、私は覺を得ぬであろう。

一五。若し、私が佛となる時、その國の人人の受ける樂が、煩惱の盡きた聖者のようでなければ、私は覺を得ぬであろう。

五。かように願を建て了つて、法藏菩薩は更に偈を說いた。

(一) 我、世に超えし願を建て、必らず證に至らん。この願滿たざれば、誓いて證は得ざらまじ。

量りなき時に亙りて、我、施の主となり、貧しく苦しむ人人を、なべて救うにあらざれば、誓いて覺は得ざらまじ。

我、佛の道を得ん時は、我名は十方に聞えなん。聞えぬ處もしあらば、誓いて證は得ざらまじ。

(二) 欲を離れて、深く正しき念に入り淨き智慧もて行を修め、證の道を求めてぞ、なべての人の師とならん。

かぎりなの、光の主と我はなり、あらゆる國を照しつつ、貪、瞋、癡の闇を除きてぞ、よみじの難を救わなん。

智慧の眼を輝かし、昏盲の冥を滅してあらゆる難の道を塞ぎ、天界の人を導かん。

功まどかに、威神十方にはれわたり、月日も光おさめつつ、神の榮光も現われず。

(三) 人のため、法の藏をや開きてぞ、廣く功德を施しつ、常に會の中にして御法を說きて師子吼せん。

すべての佛を供養なし、あらゆる德の本を植え、願の智慧を滿たしてぞ、世にも勝れしものたらん。

佛の御智慧障なく、すべてのものに達ります。我功德も智慧も力も、願くは此と等しからん。

この願若し果さるべくば、大千世界よ震い立て、空なる神も嘉してぞ、妙なる華を雨らしませ。

六。阿難よ、法藏菩薩が、此の偈を唱つた時、大地は六種に震い動き、空からは妙なる華が降り、天樂は自然と奏でられて、讃えてゆう。「必らず證を得るに相違ない」と。よつて法藏菩薩はあらゆる集會とゆう集會にあつてその誓願を宣べ、常に長久にして衰えることのない佛の國を建つることにいそしんだ。彼は量り知れぬ時を重ねて量りない德を積み、貪る想、瞋る想、他を害う想を起さず、すべての境界に執着せず

欲少なく、足ることを知り、常に禪定にあつて智慧に碍りなく、忍ぶ力をととのえ虛心、諂いの心なく、顏を和げ優しく語り、勤め勵んで倦むことなく、かくして、清らかな法を求め、あらゆる人人に功德を滿さしめたのである。そして、諸法の「空」と「無相」と「無願」に住い、麁き言、自らを害い他を害う言を遠け、善き語を習うた。或る時は國王に生れて、その國の王の位をすて、財と色とを斷つて六度の行を修め、又は人に教えて行わしめた。

阿難よ、法藏菩薩はかように功を積み、德を累ねて、數知れぬ人人を證に至らしめた。その功德は說き盡すことは出來ぬ。

第二節　無量壽佛

一。阿難、世尊に申すよう。「法藏菩薩は已に佛となつて、おかくれになつたのでありましようか、まだ佛とならないで、現にましますのでありましようか」。

世尊告げ給うよう。「かの法藏菩薩は、已に十劫の昔に無量壽佛となり、今現り西の方此處を去ること十萬億の世界を過ぎた安樂世界に在して法を說いて居られる。その地は自ら金、銀、瑠璃などの寶に飾られ、廣やかにして涯なく、光に輝いている。そこには山や海や谷、渠などはないが、見たいと思えば、いつでも佛の力によつて現われる。又三惡道もなく、春秋等の四時もなくいつも和かなほどよい溫かさである。

又阿難よ、かの佛の光明は最も尊く、他の御佛の及ぶ所ではない。夫故に無量壽佛をまた、無量光佛、無邊光佛、無礙光佛、無對光佛、焰王光佛、淸淨光佛、歡喜光佛、智慧光佛、不斷光佛、難思光佛、無稱光佛、超日月光佛とも名ける。人もしこの光に遇いまつれば、貪、瞋、癡の垢が消え失せ、身も意も柔かく、歡に躍つて善き心が生れるであろう。若し地獄、餓鬼、畜生等の惡道に苦しむものも、此光に遇えば、みなその、苦を免れて休ろうことが出來、その處の壽つきれば、みな解脫の境に至るのである。無量壽佛の御光はかようにあきらかに、十方の國國を照したもうから、何處にても聞えぬ所とてない。されば今私がかの御光を稱え奉るばかりでなく、すべての御佛も菩薩達も亦、みな共共に稱え奉るのである。

二。又、かの極樂世界には、種種の芳滿ち、種種の香樹あり、種種の妙なる鳥がうとうて居る。微風吹き來れば、樹樹の枝葉は互に觸れ合うて、妙なる法の聲を演べ、普く國とゆう國に流れ亙つて、聞くものは信心を起して惡道に退かぬ位に入るとゆう。まことや、寶樹に響く一つの音聲も、神の世の音樂に勝ること千億倍である。

阿難よ、そこにはまた、講堂、精舍、宮殿、樓閣が樣樣の寶玉に飾られて立ち並びここかしこには淸かな水を湛えた大きな池がある。金の沙、玉の岸、珊瑚の沙、瑠璃の岸、各の池は、皆それぞれの寶玉寶沙で造られ、そして青、赤、白の樣樣の蓮華が美しく匂うている。人もしその池に入るならば、水は意のままの深さとなり、意のままに身を洗う。また冷たさ暖かさも自ずと調うて身を悅ばせ、心を開き、その垢を除

き去ることであろう。そして清らかに澄みきつて、形を止めず、寶沙に照り映え、微かな瀾を捲いて流れ、自ずと妙なる音を立てて、それが佛の聲、法の聲、僧伽の聲と響き、又は、「空」「無我」の聲、「大いなる慈愛」の聲と聞ゆる。

このように彼の國は清く安らかで、その樂は、惱を離れた諡の樂である。國の人人は智慧高く神通あり、その容色は妙で、實に虛無の身、極みない體を受けている。そして衣服も、飲食、華、香、瓔珞も、亦住む宮殿も樓閣も、彼等の意のままに現われる。又、眞珠を鏤め、寶鈴を吊した羅網は、高樓の四方に飾られ、快よい風は徐ろに吹き起つてその羅網を吹き、或は、寶の林を渡ると、限りない微妙の法音が、自らに樣樣の香と共に四方に流れる。そして、聞くものは、煩惱の垢が除かれ、觸れるものは、ちようど煩惱をなくした聖者のような樂を得る。

三。又、その風は華を吹き散らして徧く大地に布き、色の次第によつて雜ることはない。その花は光澤かに柔かく匂うている足をその上に下せば、凹むこと四寸、足をあぐればまた元へ還る。そして用なくなれば、自ずと名殘のう消え失せる。かように夜晝六度風吹いて華を散らすのである。又、種種の蓮華がその國のどこにも咲き匂い、一つの華に百千億の瓣があり、その華の量りない光はその色と輝き、青い色には青い光、白い色には白い光が流れる。玄、黃、朱、紫の色と光もその通りで、その光は日や月にも劣らない。そして一一の華からは三十六百千億の光を出し、一一の光からは更に三十六百千億の佛を出す。その紫金と照りはゆる尊い相好の一一の御佛は又、百千億の光を放つて、普く十方に亙つて妙なる法を說き給い、量りない人人を佛の道に安らわせ給うのである。

第三節　信を獲る人

一。世尊は更に阿難に告げ給う。

彼の國に生れる人は、みな正定の聚に入る。何故かと云えば、邪定と不定の人は、佛が彼の極樂を建てられた因を知ることが出來ないからである。十方のあらゆる御佛は、皆ともに無量壽佛の奇しげの威神と功德とを讚え給う。あらゆる人人は、その佛の御名を聞いて、信み歡ぶ一念の所に、至心こめた廻向にあずかる。彼の國に生れたいと願えば、直に往生することができる。そして、決んで惡道へ退くことのない位に入る。唯、五逆罪を造るものと、正法を謗る者とが除かれる。

阿難よ、世界のあらゆる人人の中に、心から、かの國に生れたいと願う者に三種ある。

その第一は、家を捨て欲を棄てて出家し、覺を求むる心を發し、專ら無量壽佛に念かけて諸の功德を修め、かの御國へ生れたいと願う人である。此等の人人は壽終る時に無量壽佛が諸の大衆と共に、その前に現われ給うであろう。即ちかの御佛に隨うて彼の國の七寶の華の中から自ずと生れいで智慧勇ましく、神通自在のものとなる。この故に阿難よ、もし人あつて、此世に無量壽佛を見奉ろうと思うならば、まず道を求める心を起し、功德を修めて、彼の國へ生れたいと願うがよい。

第二には、たとえ出家となつて大いに功德を修めることが出來ないにしても、覺を求める心を起し、專ら無量壽佛に念かけ多少の善を修め、戒を持ち、寺塔を建て、出家に供養し、繒をかけ燈をともし、華を散らし香を燒いて供養することによつて彼の國に生れようとする人である。その人は壽終る時に、無量壽佛の化身に迎えられて往生し、功德も智慧も第一の人人に次ぐことになるであろう。

第三には、功德を修め覺を求める心を起すことは出來ないが、一向に意を專らにして少くとも十度無量壽佛に念かけ奉り、かの御國に生れたいと願い、深い法を聞いて信み歡び、疑うことなく、少くとも一たび彼の御佛を念い奉り、至誠をもつてその御國に生れたいと願う人である。此人は壽終る時、夢にかの御佛を見奉つて彼の國に生れ、功德も智慧も第二の人人に次ぐ人となるであろう。

二。世尊は、更に阿難に告げ給う。

無量壽佛の威神は極みない。彼の東方の恒河の沙の數に等しい國國から量りない菩薩達が、彼の佛の御許に詣で、敎を聽いて之を宣べ傳える。南、西、北及び四維、上下からも之と同じである。この時、世尊は偈を說かれた。

(一) 佛の子等、すべて妙なる華や香、尊き衣を捧げてぞ、無量壽佛を供養し奉る。

もろともに樂奏でて、みやびやかなる音をのべ、御德たたえまつりてぞ、無量壽佛を供養し奉る。

「神通と智慧をば究め、深き法門に入りまして、功德の藏をととのえつ、妙なる御智慧儔なし。

智慧の日、世を照し、迷の雲を除きます」。

(二) 恭いて三たびめぐり、御佛禮みて讚うらく、「おお、嚴かに妙なる御國よ、いかで思いはかるべき、吾等も道の心をおこし、かかる尊き國を得ん」。

時に御佛、笑みませば、御口に光限りなく、流れて十方の國照し、ふたたび還りておん身を三度、めぐりめぐりて御頂におさまる、見奉る人人よろこび躍る。

(三) 觀世音菩薩、ころもをととのえ、ぬかずきて、問い奉る。「御佛よ、など笑みますや、願くば、御心をときたまえ」。

清きおん聲、雷のごと、八種の御聲、妙に響きて暢べ給う。

「われ、今集れる人人に、その證るべき日を告げ與えん、汝等聽けよ、諦かに。

十方より來りし菩薩、その願は盡く我知れり、清き御國をみな求む、やがては佛の身とならん。

もの皆は、夢か、幻、又は響のごとと覺り、諸の願みたしなば、必ずかかる國を得ん。

法みなは、電のごと影にも似たりと、

知りて菩薩の道をばはたし、あらゆる功德の本を立つれば、必ず佛の身となられん。

ものの性みな空にぞ、無我のものとさとりてきわめ、專らに清き、佛の國を求めなば、必ずかかる御國を得ん」。

（四）また、もろもろの御佛は、菩薩達に告げ、無量壽佛を見奉らしめ、宣うよう。

「法聞きて、行うことを樂しみつ、速かに清き處得よ。かの御國に至りなば、直ちに自在の力を得、佛となる日を示されて、佛とひとしき覺を得ん。

御佛の、誓によりて御名を聞き、生れんとこそ、おもいなば、みな彼の國に生れ得て、退くことなき身に至らん。

菩薩等よ、願を起してその國を、彼の國にこそ等しくし、普く救わんと念い又、名はあらわれて十方に、至らんとこそ願えかし。

限りなき、佛に仕え且つ廣く、國とゆう國へめぐりて、敬いよろこびかえれかし。

（五）まことや善の本のなき、人はこの經聞き難し、清き戒まもる人、いま、この法を聞くならめ。

曾つて佛を見し人は、この御教を信むなれ。身をへりくだして聞くなれば、心歡び踊るならん。

憍る心と、かくす心と、怠りのある人人は、この法信み難からん。我が弟子も菩薩等も、佛の御心究め得じ。

佛の智慧の大海は、深く廣くて底もなし。すべての因位にある人の、知る所には非ずして、ただ佛のみ獨り知る。

（六）いのちは得難く、御佛の世は値い難し、又信の心のあることは、難ければ、つとめ勵みて法を聞け。

法聞いて忘れず、又は信の心得て、よろこぶものは我が友ぞ。されば意をおこせかし。

たとえ世界にみてらん火をも、ひるまずわけゆき法聞けよかし、さらば皆、佛の道にさとり得て、迷える人を救い得ん。

三。世尊は、更に阿難に告げ給う。

彼の國の人人は、皆、佛となるべき位に至り、人人を救いたいとゆう願を起し、尊い本願の鎧をつけて普くすべての人を救うことにいそしむであろう。

又、彼等はいつも正法を宣べ、智慧に隨うて違うことはない。その國のすべてのものに執着をせず、「私のもの」とゆう心を起さぬ。ゆくもかえるも、進むも止まるも、情にこだわることはない。意のままにして自在である。落ちつく處も落ちつかぬ所もなく、「彼」「我」の隔りなく、競うことも、訴えることもない。あらゆる人人に向うて大いなる慈悲と饒む心を起す。その心はやわらかに調い、忿り恨む思、蓋す心、怠る心を離れて清らかである。即ち平等な心、勝れた心、深い心、寂定な心で、法を愛し法を樂しみ、法を喜び、諸の煩惱を滅ぼしすべての菩薩の行を修め、かぎりない功德を具え、深い禪定と樣樣の智慧を得、肉の眼は清らかに澄んでわからぬ所なく、

天眼は見徹すことかぎりなく、法眼は普く見て諸の道をきわめ、慧眼は眞を見て證の岸に度り、佛眼は圓かにととのうて法の性を覺る。そして、凝のない智慧をもつて人人のために、世界は、「空」にして「所有」がないと說き、彼等の煩惱のなやみを滅す。眞如から生れ來て、法の眞如を覺り、世俗の語を欣ばず、正しい論議をねがい、深い法を聞いても疑い懼れる心なく、いつも大悲の行を修めて、深く遠く妙に、空のように覆い、地のように載せぬ所はない。一乘の法を究めて證の岸に至り、疑いの網を斷切る智慧は心から出てくる。

四。又、彼等は佛の教を殘らず知りつくして、智慧は大海のよう禪定は高山のようである。又樣樣の功德を照して等しく淨らかであるから雪山のよう、淨きも穢れたるも、好いも惡いも、隔てる心がないから大地のよう、あらゆる塵や垢染を洗い去るから清水のよう、すべての煩惱を燒き盡すから大火のよう、あらゆる世界に行いて障がないから大風のよう、すべての有に執着がないから虛空のよう、世の汚に染まないから蓮華のよう、人人を運んで迷を出でしめるから大いなる乘のよう、法を雷と震うて覺めないものを覺めさせるから重雲のよう、甘露の法を灑いで人人を潤おすから大雨のよう、あらゆる外道に動かされることはないから金剛山のよう、彼等を威伏えるから金翅鳥のよう、よく調うているから大象のよう、畏るる所がないから師子王のよう、大慈悲の等しく普ねきこと虛空のようである。

又、彼等は嫉む心を滅し、勝れたものを忌まず、專ら法を求めて厭くことなく、いつも廣く法を說いて倦むことはない。法の鼓をうち、法の幢をたて、智慧の日を輝かして癡の闇を除き、法の施をするに勤めはげみて勇ましく、世の燈となり、最も勝れた福田となる。そして導師となつて、憎もなく偏つた愛もなく、ただ正しい道を樂しんで、人人を安らかならしめる。彼等はかようにあらゆる神通とあらゆる力を具え、量りない御佛から讃めたたえられる。

阿難よ、彼の國の人人のもつている功德について、今略めて說いたのであるが、もし廣く說くならば、百千萬劫に亙つても盡すことはできない。

第四節　現實の人生と教誡

一。世尊は、更に彌勒菩薩に告げ給う。

彼の無量壽國に住む人人の功德と智慧とは稱えることはできぬ。また、その國の妙に樂しく清らかなことも上に說いた通りである。何故にこの世界の人達はつとめて善を行い、自然の大道を念うて、上下にわたつて極まる所のない境地に至らぬのであろう。各つとめ勵んで、身みずから求めるがよい。さすれば必ず安養の國に生れ、佛の御力によつて、諸の惡道を超え、證の道に昇ることに極りないであろう。その國の門はいつも開かれ、入るに妨げなく、自然に人を引きよせるのであるが、良に行き易うして、行く人はない。もし世のことを捨てつとめ勵んで道を求めるならば、永えの生命を獲、極みない樂を受けるであろう。

二。然るに世の人人は薄俗で、眼の前のつまらぬことを諍い、この劇しい惡と苦しみの中にありながら營務にいそしみ、僅かにその日を過して行く、尊い人も卑しい人も、貧しい人も富める人も、老人も若者も、男も女も、一樣に金錢のことを憂えている。有るものも、無いものも、その憂き思いにかわりはない。愁にしずみ、苦しみにひたり、念いを累ね、慮りをつみ、心の爲にはせ使われて、安らかな時がない。田あれば田を憂え、家あれば家を憂え、牛馬、さまざまの家畜、召使、錢財、衣、食、什物についても憂を重ねている。また、時ならぬ水火、盜賊、怨家、債主のために、漂わされ、焚かれ、奪われて、夫等の所有物をなくされて仕舞えば、憂は毒を呑んだように心にまつわつて解けるときがない。憤は胸に結んで惱となり、心はこわばつて縱にならない。或は、禍に逢うて命終れば、獨りゆいて誰も隨うものはない。尊い人も富める人も、この患に變りはない。憂と柵は、はてしなく重り、苦しみの絕え間はない。時には惡寒を覺え、熱を感えて痛の中にひたる。

三。貧しく賤しいものは、又、いつも足りないことを困しんでいる。田がなければ田を、家がなければ家を、牛馬乃至衣、食什物等についても、なければ同じように欲しい欲しいと思うている。適ま一を得れば他の一がかけ、それがあれば是がかける。どうかして皆具えたいと思う間にやがては散りうせる。憂え、苦しんで再び求めてもほどよく得ることができず、思い煩えども效なく、身も心も勞れ、立居も安からず、憂は影のように隨い、惡寒を覺え、熱を感え、痛にひたる。或る時には、このことから天死するようなことさえもある。かように、善をなしたこともなく、道を行い德をすすめたこともないので、壽終ればただ獨り遠いところにゆかねばならぬ。しかも善惡の報を受ける道を知るものはない。

四。世の人人よ、父も子も、兄弟も、夫婦も、親族も、互に敬い愛しみ、憎み嫉んではならぬ。有るものは無いものに頒ち與え、貧しり惜しんではならぬ。常に言語や顏色を和げて逆うてはならぬ。もし諍う心起つて怒りを含めば、此世では微かな憎嫉でも、後の世には次第に劇しくなつて、大きな怨となる。なぜかと云えば、世の中の事は、互に害い合うても、その時直ぐには破れないけれども、毒を含み怒りを蓄え、憤をこころに結び、自ずと識に刻んで離れず、生をかえて迭いに讐を報い合う。人は愛欲のみてる世に、獨り生れて獨り死し、獨り去つて獨り來り、苦しみの處または樂しみの處に赴き、身みずから夫に當つて代るものはない。善と惡とは各その報を異にし、善は福を、惡は殃をもち來すこと、嚴かな因果の道理によつて、あらかじめ待たれている。そして、獨りずつ遠いところへ運ばれてゆくに、誰も見ることはできない。各のなした善惡の業によつて、暗く遙かなところへ離れ離れになつて生れゆき、そのゆく道が違うているから、相逢うときとてはない。

四。されば人人よ、世のことを拋て、皆が健かなときに善を修め、つとめ勵んで迷いの世を離れ、永えの生を得ようと願うがよい。道を求めることを外にしては、何を恃みとし何を樂としようぞ。然るに、世の人人は、善をなせば善を得、道を求むれば道を得ることを信ぜず、また、死は生れることとて、與えることは福を得るとゆうことも信じない。卽ち彼等は善惡因果のことをすべて信ずることはない。そして、その見を本として先の人も同じように謬れる教を承け傳える。卽ち先の人はもとより善をなさず、道をしらず、愚かにして闇く、心は塞り閉じて、死生のゆくえも善惡の道も見ることは出來ない。それ故に、禍と福が競い起つても、一人もそれらが何から起つたかとゆうことを怪しむものはない。かようにして生まれかわり死にかわる道は、いつまでも絕えぬ。或る時は親は子のために泣き、子は親のために泣き、兄弟、夫婦も互に泣き悲しむ。いつも逆事が起るが、常ないことがその本である。ものみなは過ぎゆきて止まるものはない。教え導いても信ずるものは少ないから、生死の流は止むときがない。かような人達は、愚かで氣が暴れていているから、教を信ずることがなく、遠い慮りがないので、ただ眼前の樂に耽り、愛欲に心くらんで道にいたらず、怒にしずんで狼のように財や色を貪る。之がために惡道の苦しみに陷り、迷いの道は止むことがない。まことに哀れなことである。

五。或る時は、家族、親子、兄弟、夫婦のなかで、一人は死に一人は生まれ、たがいに恩愛につながれて憂に縛られ、痛しい思に結ぼれて、日を送り歲を閱しても解けることはない。道を敎えても心は開けず、よしみにかかわつて情欲におぼれ、暗い思に閉ざされて深くものごとを考えることも出來ず、ただしく道にいそしんで世の事を決めることも出來ず、はらはらしているうちに身の終りに近ずき、年を極めても道を得ることはできない。世をあげてみな愛欲を貪つているから、道に惑うものは多く、道を悟るものは少い、世間の事はあわただしく過ぎゆきて、賴りとすべきものは一つもない。尊いものも卑しいものも、貧しいものも富めるものも、皆がそれぞれのつとめに苦しんで、他人を害う思をいだく。惡氣は烟のように立ちこめて妄りに事をおこし、自然の道に逆い自然の人情に背くから罪惡の行は自ら起つてそれを煽り立て、そのゆく所までゆかしめる。ためにその壽も盡きない中に死に奪われて惡道に沈み、世をかさねて苦しみより苦しみに移り、千萬の劫を過ぎても浮み出ることはできぬ。愍むべく痛むべき極みである。

六。世尊は更に彌勒菩薩に告げ給う。

私はいま汝達に世間のことを語つた。人人はこのために煩わされて道を得ることが出來ない。よくよく思を重ねて衆の惡を遠け、善を擇び勤めて行うがよい。愛欲も榮華も久しく保つことはできない。やがては別れ別れとなるであろう。樂しむべきものとて一つもない。もし、佛の世に逢いたてまつれば、つとめ勵んで無量壽佛の御國に生れることを願え。明かな智慧と、勝れた功德を得るであろう。欲いのままに任せ

て教にそむき、人に後れてはならぬ。汝等もし疑があるならば、私に問うがよい。

七。彌勒菩薩は跪いて申すよう。「世尊の威德は尊く、說き給うところは、快い極みであります。ふかく心に御教を思いまつれば、世の有樣はまことに世尊の宣う通りであります。いまや世尊の御慈によつて、大いなる道をお示しくだされ、私達の心の耳も目もひらけ、長えに迷から脫れることが出來ました。世尊の御教を歡びまいらすことは、私達のみではありません。上は天つ空の神神から下は蟲けらの類に至るまで、みな厚い慈恩を蒙つて苦を離れます。まことに、世尊の御教はふかきを極め、御智慧は十方を見わし、三世を明かにしたまい、究め盡したまわぬ所はありません。今、私達が迷から離れることの出來ますのはその昔世尊が道を求めたもうた時に、身を下して苦行ましましたためであります。まことに佛恩は廣くして普く世を覆い、御德は高くして山のように聳えたもう。御光はものの奧を照して空を示し、そして證の門戸をひらきたもう。時には懇ろに教を垂れたまい、時には威德を振うて枉れるものを制め、十方に亙つて極みなく感動せしめたもう。世尊はまことに法王にていらせられ、すべての聖者に超えすぐれ、普くすべての人人の師とならせたもう。人もし心に願えば、みな盡く道を得しめたもう。いま私達は世尊に逢いたてまつつて無量壽佛の御名を聞き、胸は歡におどり、心は開けてまいりました」。

八。世尊、彌勒菩薩に告げたもうよう。「汝の云う所は正しい、世に佛を敬うにまして善いことはない。そして佛の世に現われることは甚だ罕である。私はいま此世界に佛となつて法を演べ、あらゆる疑の網を斷ち、愛欲の本をぬき、惡とゆう惡の源をふさぎ、三界を步みゆくに礙えられる所はない。その智慧はあらゆる道の要である。從つて、火を視るよりも明かに迷の世界の有樣を示し、その中にある人人の、まだ救われないものを救うて、證の道に至らしめる。

彌勒よ、汝は限りない遠い昔から菩薩の行を修めて人人を救うた。また、汝に隨うて證の岸へ至つた人は、あげて數えることができぬ。けれども汝を初めとしてあらゆる人人は、遠い古より迷の世界をへめぐり、憂苦に沈んだことはとても言葉でいいつくせるところでない。そして、今日に至つても迷の絕ゆることがない。然るにいまや佛にあい、無量壽佛の御名を聞いて、信ずることが出來たのは甚だ快いことである。私は汝をたすけて喜ばしめたことであるが、汝もまた迷の生をうけて老と病とに苦しんでいることを厭うがよい。世はすべて惡と汚にみちて樂しむべきものは一つもない。宜しく意をきわめ身を端しうし善を行うて心の垢をのぞき言と行に信あり、表は裏と相應い、まず自らを救い延いて他を濟うように、明らかな願をもつて、善の基礎をつくるがよい。世の勤に苦しむのも暫くの間である。後には無量壽國に生れて極みない樂をうけ、長えに道に一つになり、まよいの根を拔き、ふたたび貪

瞋、愚の惱はないであろう。壽も長さ短さは思いのままで、すべて自然の理に叶い、證の道と相應う。されば汝達は、つとめはげんで心の願を求め、疑の過をなしてはならぬ」。

彌勒菩薩申すよう。「世尊の懇なる教誨を受けまいらせ、つとめ勵んで教の如く行うでありましよう、決して疑うことはありません」。

世尊。「汝等、この世にあつて、心を端しうして惡をなさないならば、十方の世界にくらべて匹びない德といわねばならぬ。なぜかといえば、夫等の國の人人は自ら善を行い、甚しい惡をなさぬ爲に、教え導き易いからである。今私はこの世に佛となり、五つの惡、五つの痛み、五つの燒の劇しい苦の中にいて、人人に教えてこれらの惱を捨てしめ、その意を降して、迷の世を離れた福、かぎりない永えの壽にみつる證を獲しめる。

九。その第一の惡とゆうは、あらゆる人から蟲けらの類にいたるまで、みな互に惡をなそうとしている。强い者は弱い者を仆し、互に賊い殺め、嚙み合をことして善をなすことを知らず、心惡しざまに道に逆うために、自然の理によつて、犯す者は決して赦されず、後には必ず殃いの報を受ける。されればこそ世に貧しい者、孤、聾、盲、啞、愚者、弊惡、狂者、低能者があり、又尊い者、富める者、才高く智慧明かな者があるのである。後者の人達はみな過ぎし世に、慈ふかく善を修め德を積んだからである。世間にも常の道として、國の掟によつた牢獄があるが、敢て畏れることもなく罪を犯してその中に禁められ、脫れようと思うても出ずることは出來ない。目の前にもこの樣なことがある。況んや壽終つた後には其報は最も深く劇しく、幽冥に沈み、生をかえて身を受け、ちようど國の法によつた苦しい刑罰を受けるように、或は地獄に生れ、餓鬼となり、畜生の生を受け、限りない苦に沈む。その壽命は或は長く、又は短く、魂は自然に獨りその定めの處に赴くが、かねて憎み合うたものが互に集つて怨を報いあい、いつ迄もその殃を盡し得ず、互にその苦の中にひたつて離れることなく脫れる時とてはない。その痛ましさは語り盡すことは出來ぬ。かように因果の理とゆうものは、自然に天地の間にあるもので、俄かにその報は來なくとも、いつかは必ず來るものである。之を第一の惡、第一の痛、第一の燒とゆう。その苦は大火の中に燒かれるようである。もし人この中にあつて、ひたすら意をとどめ、身を端しうし、行を正しうして善をなし惡をさけるならば、身は迷から脫れ、その福はかぎりない證の道を獲るであろう。これが第一の大善である。

九。その第二の惡とゆうは、世の人人は父子、兄弟、夫婦、親族等、すべて義理なく、法度に順わず、こころ憍り、姪らにして奢を縱にし、みなが心のままに快樂を得ようと願い、互に欺き合う。心は口とちがい共に實なく、言葉巧みに侯り媚び諂うて、不忠の心から賢者を嫉み、善人を謗つて枉の罪に陷れる。主上は愚かにして

臣下を用い、臣下は擅に僞の機略をめぐらす。偶ま良い臣が、よく天下の形勢を知り、度によつて事を行うても、君が正しくないために、不忠の臣に欺かれ、妄りに忠ある臣をきろうて道に背く、かようにして臣はその君を欺き、兄弟も夫婦も、内外の知人も互に欺し合い、皆が欲と瞋と愚の欲を懷いて、ただ己を厚うしようとおもい、その上、その上と欲を重ねている。尊い者も卑しい者も、上も下もその心はかわることはない。はては家を破り身を亡い、前のことも後のことも顧みる遑なく、緣につながる人人もその連累となつて滅んでゆく。

或る時は又、いろいろの境遇にある人達が、交に事をともにし、利害のために諍うて怨を結ぶ。富めるものは慳しんで施すことを知らず、寶を貪り愛んで心勞れ身は苦しみ、かくて身の終りに至るも恃みとするものはない。獨り來り獨り去つて一人も隨うものはない。善と惡は命を追うてそれぞれ福と禍に導き、或は樂に或は苦に入る。而も、苦の報を受けて悔ゆるとも、及ぶことはない。まことや世の人人は愚かにして智慧少く、善を見ては慕い至るかわりに却つて憎み謗り、ただ、惡をなすことのみにかかはてている。そして妄りに法に背いたことをなし、いつも盜心を抱き他人の利益を羨む。適ま得ることがあつても、やがては費いはたして仕舞い、またこれを求める心に邪まの思を懷いているから知らぬことを懼れて人の顏色を窺い、豫め用意しておらぬために、事いたつて初めて悔ゆる。こうしてこの世にあつては國の掟に從つて罪の報を牢獄に受ける。そしてその前世には道を信ぜず、善を修めなかつたために、今また惡を造つて後の世惡道に入り、自らなる限りない苦に沈み、世を重ね、劫を重ねても脫れる事はできぬ。痛ましい極みである。これを第二の惡、第二の痛、第二の燒とする。その苦は火に燒かれるようである。人もしその中において、意をとどめ善をなすならば、迷を離れて證の道を獲るであろう。これが第二の大善である。

一一。その第三の惡とゆうは、世の人人は互にもたれ合うて天地の間に生きているが、その壽命はいくばくもない。上に賢者、長者、貴族、富豪あり、下に貧しい者、賤しい者、低能者、愚者がある。その中によからぬ人があつて、いつも邪まの思を抱き、姪らな思に胸をこがし、愛欲に心亂れて、起居も安らかならず、あるものは惜んで與えずもつともつと得たいとのぞむ。美しい女にながしめをつかい、あやしい氣配を外にあらわし、おのが妻を厭うて私かに他の女の家に入りびたつて財を費し、なすことはみな法に違う。

或る者は徒黨を結んで、師を興し互にあい伐ち、攻めあい殺しあい、强奪するような不道を働き、惡心を外に擅にして自分の業務につとめず、わずかなものを盜んだことから、次第に欲にからまつて大きな盜を働くようになる。初めは物を盜るに恐氣を起し熱を覺えるものであるが、後には他を脅かして妻子を養うに至り、心のままに身の樂に耽り、或は親族の者に向うても

上下を憚ばないようになる。家族も知人もこれを憂え苦しむ。かような者はまた國の法律も畏れることはない。こうしてその惡はあらゆる人人に認められ、日や月に照らされ、自然の理に順うて惡道に沈み、かぎりない苦を受け、劫を重ねても出る時はない。これを第三の惡、第三の痛、第三の燒とゆう。その苦は火に燒かれるようである。人もし此中にあつて意を制え、善を行うならば、福きわみない證の道を獲るであろう。是が第三の大善である。

一二。第四の惡とゆうは、世の人人は善をなすことを考えず、共共に教え合うて樣樣の惡事をする。二枚舌、惡口、妄言、綺語をもつて互にたたかい賊いおう。善人を憎み、賢者を毀つて私かに快しとする。兩親に孝行をつくさず、師を輕んじ、友に信なく、誠とゆうものは少しもない。自分は尊いもの、偉いもので、自分のすることはみな道に叶うていると心得、無闇に威勢をもつて他人を犯して省みることはない。惡を行いながら恥を知らず、自分の强さを恃んで、人の敬を待ちもうけ、天地自然の道理や、日や月の照覽を畏れることはないから、善を行わぬ。まことに感化し難いものである。自ら德を行うについては蹇のようであるにも係らず、それをあたりまえと思い、少しも憂え懼れることはない。そしていつも憍り慢つている。

かかる罪惡は神神も識に刻みつける。その前世に積んだ德のために、暫く十善に扶けられても、此世になせる惡事のために、福は盡き善を離れて身ひとり空しく立ち、天地の間に依る所もない。壽終ればもろもろの惡は來り迫つて、自然の理に率かれて赴くべき所にゆき、罪の報は自らつき纏うて離れることはない。燃る鑊は前に待つて、身も心も千千に碎かるる苦をうける。この時にいたつて悔いても及ばぬ。自然の理は違うことなく、限りない惡道の苦に沈み劫を重ねても出る時はない。これを第四の惡、第四の痛、第四の燒とゆう。その苦は火に燒かるるようである。人もし此中にあつて意をとどめ、善をなすならば、福かぎりない證の道を得るであろう。これが第四の大善である。

一三。第五の惡とゆうは、世の人人懈りなまけて善をなさず、又自らを修め業務につとめようともせず、眷屬を擧げて飢に泣き寒さに苦しむ。父母が教えさとせば目をいからせ、言葉を荒立たせて逆いそむくこと、丁度怨家のようである。こうなればいつそ子のない方がましである。出納に取締りなく、人人の厭う所となる。恩にそむき、義に違い、報いる心はない。かくて貧しさに苦しむようになり、求めても得ることは出來ぬ。遂には縱に他人のものを奪い取るようになり、氣儘な遊に費いはたし酒に耽り美味を貪り、飲食に度なく、我儘のかぎりを盡す。その心であるから人と衝突し、人情を知らないから、强いて人を抑えつけようとする。他人の善を嫉み、義も禮もわきまえず、自ら顧みることがないから、諫めることもできぬ。家族を養う資のありなしも心にかけず、父母の恩も師や友の恩も思うことはない。心はいつも惡を思

い、口は惡を語り、身は惡を行い、いまだ一つの善をすらしたことはない。聖賢の教も佛の御教も信ぜず、道を行えば迷いを離れることも信じない。即ち善をなせば善を得、惡をなせば惡を得ることを信じないから、證の人を殺し、道を修める人人の和合を亂し、父母、兄弟等の家族さえも害おうとする。故に、親族の人達にさえも憎まれて、死んでくれればよいと願われるようになる。

かような人は心おろかに昧く、何處から生れて來、何處へ死んでゆくかとゆうことも知らず、仁の心もなく、天地の理に逆い、ただ僥倖を望んで長生がしたいとのみねどうている。而もやがては遂に死なねばならぬ。慈ある人が哀んで教誨し、善を念わしめ、生死、善惡の因果、法の自然にあることをいかに懇ろに語つても益する所はない。その人の心は閉じ塞つて開けず命の終る時に、悔と懼とは交も來つて苛む。然しもうこうなつては、悔いても及ぶことでない。天地の間には五つの趣に赴く道は明かに備わり、廣く遙にかぎりなく深い。善と惡が、禍と禍の報をもち來し、ただ身みずからそれを受けて、誰も代ることはできぬ。これが自然の理である。その行う所によつて、殃は命を追いゆき、離れることはない。善人は善を行い、樂から樂に入り、明るきから明るきに入り、惡人は惡を行い、苦から苦に入り、冥から冥に入る、誰も知るものはない。ただ佛のみ獨り知り給うて教え導かれるが、信ずるものが少ないために、迷は休むことなく惡道は絶ゆることがない。かくて限りない惡道の苦は自ら具わつて其中を輪廻りあるき劫を重ねても出る時とてはない。これを第五の惡、第五の痛、第五の燒と名ける。人も し心を一つにし、意をとどめ、身を端しうし、念を正しうして、言うことと行うことに誠があり、諸の善を行うならば、其身は獨り迷を離れて、福きわみない證の道を獲るであろう。これが第五の大善である」。

一四。世尊は更に言葉を續け給う。「私はいま汝等にこの世の相を說いた。人人は實にこの苦のなかに生れて、ただ惡をのみ作り、善の本を修めない。それ故に自然の理によつて、種種の惡道に沈む。或る時は此世に病に罹り、死のうと思うても死ねず、生きようと願うても生きることが出來ず、罪の招くところで衆の見せしめとなる。又、命終れば、その行に隨うて惡道に入り、かぎりない苦に身を燒き、久しい苦の後人間世界に生れても、互に怨敵となり、小さな事の起りから大きな罪をするようになる。それはみな財や色を貪つて、人に惠むとゆうことを知らぬからである。欲に迫られ、思に縛られ、あらゆる煩惱に結ぼれて、解けることはない。己のみに厚うして利益を諍い、少しも省みることを知らぬ。貴い身となつて世の榮華にときめき一時は意を樂しませても、その上その上と求める欲念を忍び怯えることが出來ないので、それによつて善をなすことが出來ないからして、威勢はいくばくもなく消えうせ、苦は身にまつわり、久しくなるほど劇しくなつてゆく。

まことに天地の理は、網の如く網のように張られていて、上下のわかちなく、あらゆる罪を糾すのである。身獨りおどおどした胸をいだいてその中に入りゆくことは、古も今もかわることはない。痛ましくも痛ましい極みである。

一五。彌勒よ、世の有樣は斯樣である。佛はこれを哀み、威神力をもつてあらゆる惡を滅ぼして、善につかしめるのである。もし教を持ち道を行うならば、終には迷の世を脫れて必ず證を得るであろう。されば汝等も後の世の人人も、佛の教に逢うならば、よくよく思をめぐらして心を端しうし行を正しうするがよい。上が先ず、善をなして下を率い、互に語りつたえ、各自が自らを端しく守り、聖者を尊び、善人を敬い、仁深く博く愛し、佛の語に負かず、迷の世を離れ惡の本を拔き、かぎりない惡道の苦と畏とを離れよ。そして、あらゆる德の本である佛の御名を稱え、恩をしき、惠を施し捉を犯さず、よく忍び、勤め勵み、一つ心と智慧とによつて、互に教え導き、心を正しうし思を愼しんで、淸らかに身をたもつこと一晝夜であるならば、無量壽の國において百歲の間、善をなすに勝るであろう。何故かと云えば、彼の國には善は自らに行われて毛筋ほどの惡さえもないからである。又、この世界において十晝夜に亙つて善を修めるならば、他の佛の國にあつて千歲の間善をなすにも勝るであろう。何故かと云えば、夫等の國國には善をなすものは多く、惡をなすもの少く、德は自らに行われて惡をつくる餘地がないからである。ただ此世は惡に滿ちて自然ならず、欲のために苦を求めて迷に欺き合い、心勞れ身苦しみ、苦を飲み毒を食い、そわそわして落ち着くことを知らぬ。

一六。私は汝等を初めあらゆる人人を哀れみ、懇ろに誨えさとして善を修めさせ、器に隨うて教えみちびくに承け用いぬものはない。その願の如く道を得しめることである。佛のゆくところ、都も鄙も、おしなべて教をうけぬものはない。天下和ぎ順い、日も月も淸く明かに、風雨時にしたがい、災起らず、國豐かに民安らけく、兵も武器も用いる必要なく、德を崇び仁をおこし、禮儀を正しうするように務めるであろう。

私は、汝等及びすべての人人を憐むことは、父母の子を念うよりも勝つている。私は今この世において佛となり、五つの惡五つの痛、五つの燒を滅ぼし、善をもて惡を攻め、迷の苦を拔き、さとりの都にのぼらしめる。私がこの世を去つた後は、教の光も次第に衰え、人人はまたもとのように惡を行い、次第にその劇しさを增すであろう。汝等はよくこれを思うて、互に教え誡しめ、佛の教を破つてはならぬ」。

彌勒菩薩、掌を合せて申すよう。「世尊の說き給うように、世の有樣は實に苦を極めて居ります、ただ、佛のみ普く之を慈しみ憐みたもうて、悉くお救い下される、御教をうけて違うことはありません」。

第五節　見佛

一。世尊、阿難に告げ給う。「阿難よ、汝

は衣を整え、掌を合せて、恭しく無量壽佛を禮み奉れ、あらゆる御佛は常に彼の佛を稱え給うのである」。

阿難は仰せを受けて西に向い、掌を合せ身を大地に投げて無量壽佛を禮み奉り、「世尊よ、願わくは彼の佛の御國と、聖者達とを見せしめ給え」と願うた。

言葉の終ると共に、無量壽佛は大きな光を放ってすべての國國を照したもうた。物みなは、一つの色に輝き、さながら大洪水が世界にみなぎってあらゆる物を沈め、滿滿たる水の底しれず湛えているようなもので、すべての聖者達の光はみな隱れ、ただかの御佛の光のみ明かにかがやいておる。

その時、阿難は無量壽佛を見たてまつるに、威德の盛んなることは、あらゆる山山の上に高く聳ゆる須彌山のようにあらせられる。すべてこの會座に集まった人人はみな、一時に彼の國を見奉り、かの國からもこの靈鷲山の會座を同じように見られた。

二。其時、彌勒菩薩は世尊に申すよう。「かの極樂に於て胎生の人人は宮殿の中に樂を受けて居りますが、他の化生の人人とは違うているようであります、どうゆう理由でありましょう」。

世尊告げ給う。「彌勒よ、もし人あって、奇しき佛の智慧を了らないで、疑の心をもちながら、ただ罪を厭い、福を求めて功德を修め、彼の國へ生れたいと願えば、あの宮殿に生れて五百歲の間、佛を見たてまつらず、敎をきかず、聖者達に逢うことはない。是を胎生とゆう。ちょうど轉輪王の王子が、大王に罪を得て、その宮の中において金の鎖にて繫がれるようなものである。其樂に缺くる所はないが、彼は常にそこを逃れたいと願うている。佛の智慧を疑う人は之と同じような罰を受けるのである。然るに若し人あって明かに奇しき佛の智慧を信じ奉れば、自ら七寶の華のなかに生れ、相好も光も智慧も功德も具うて、諸の菩薩達と等しい、之を化生とゆう。

されど彌勒よ、かの胎生の人人も罪の本を知り、深く自ら悔いてそこを離れたいと欲うならば、意のままに無量壽佛の御許に詣でて敬い供養し奉ることができる。彌勒よ、世に疑ほど利を失うものはない。されば明かに上なき佛の智慧を信ぜねばならぬ。彌勒よ、もし人あって、阿彌陀佛の御名を聞き、せめて一念でも歡びいさむならば、この人は大きな利を得たのである。卽ち彼はこの上ない功德を身に具えるであろう。されば彌勒よ、たとえ大千世界に滿つる火焰の中をもわけゆきて此敎を聞き、信じ歡ばねばならぬ。さすれば證の道から退くことはないであろう。

三。彌勒よ、後の世に敎の滅びる日が來ても、私は特にこの經を百歲の間とどめ、この經に値う人をして皆願のように證の身とならしめるであろう。彌勒よ、御佛に逢い奉ること難く、又よき友におうて法を聞き之を行うことも難い。卽ちこの經を信ずることは、難きがなかにも及ぶものない難いものである。されば私はこのようになし、このように說き、このように敎える。まさに法の如く信じ行うがよい」。

世尊が此法を說き給うた時、限りない人

人は道を求むる心を起し、又は、煩惱をつくして道を退かぬ位に至った。大千世界は感動ぎ、光は普く照し、天樂自らに鳴りわたり、妙なる華は雨ふった。並みいる大衆は喜に心を躍らせた。

第三章　如來の意義

第一節　敬いある生活

一。世尊は又も恒河を渡って毗舍離に入り、大林に留って弟子等に敎え給うた。

弟子等よ、私が覺を得て、間のない時のことであるが、私は優留毘羅の林の尼連禪河の川岸に住んでいた。その時、靜かな私の心にこうゆう思が湧いた。「敬なく、事える處のない生活は惱ましい、私はいかなる人を尊び敬うたらよいであろうか」。次に思うよう。「もし私に滿たされない戒があるならば、それを滿たすために他の人を敬うて日送をしよう、又、もし滿たされない禪定や智慧や解脫があるならば、それを滿すために他の人を敬うて日送をしよう。

然しこの世界に、戒において、禪定において、智慧において、解脫において、私よりも勝れた人はない、それ故私は、一そう、私の自ら證った法を尊び敬うて日を送るであろう」と。

弟子等よ、私がこう考えている所へ、梵天が顯われて來た。一つの肩に衣をかけて合掌をなし、私に申すよう。

「世尊、誠に美わしいことであります、過去の諸佛も法を敬われ、未來の諸佛も亦、その樣になされるでありましょう、今の御佛に在ます世尊も、どうぞ法を敬うて御日送を願います」。

梵天はこう云って、更に歌うよう。

過ぎし世の御佛、後の世の覺のひと、
いまの世の御佛、諸人の、憂を拂う人
人は、すべて正しき御法に事え、敬い
てこそ住み給え。
これ、佛の法のかなめなれ、されば、
わがためおもいて、大いならんと望み
なば、佛の敎おもいてぞ、正しき法を
おがめかし。

弟子等よ、如來は云うが如く行い、行うが如く言う。それゆえ如來と云われる。弟子等よ、如來はこの全世界において勝利者であって、何物にも敗ることなく、正し

く物を見るものであり、統治者である。それゆえ如來と云われるのである。

三。世尊は旅を續けて、又も、舍衞城の外の祇園精舍に入り給うた。或る日阿難は婆耆奢を隨えて、托鉢のために城内に入つた。ある街で、不圖一人の美しい婦人を見付け、婆耆奢の心は亂れて抑えることが出來ない、彼は阿難に助を乞うた。

欲の思に憺かれて、我がこころ燃ゆ。
あわれみ垂れて、火を消し止むる法を
教えよ。

阿難も歌をもつて、之に答えた。

顚倒のおもい、汝が心燒き貪起す、
なべての淨き相を、取るを止めよや。
ものみなを無常と見、苦と見、無我の
ものと眺めよ。いくたびも燒かれざる
よう、大いなる貪を消し滅ぼせ。心一
つに集めて、寂かに不淨の想修めよ、
念ただしく、身體を念い、厭の情に滿
ちよ、無相を修めて、慢の煩惱滅ぼせ
よ。慢の心を制え得て、心しずかに行
い得ん。

四。婆耆奢は今や淸涼の水を心の火に投げ掛けることが出來た。婦人は心ありげに微笑を見せたが、婆耆奢の心を動かすに至らず、不淨を觀べて危機を脱れた。彼は遂に欲の源を來めて、思を本とすることを知つた。

欲よ、汝のみなもとは、思なり、思あらざれば、汝はあらじ。

婆耆奢は、世尊の御許に歸つて、今日の經驗を語り、次の歌を歌うた。

色は聚沫のごと、受は浮べる泡のごと、
想はかげろうの如くにて、行は芭蕉の
葉の如く、識はまぼろしの如くなり。
この御佛の教にて、ものみな見れば、
なべては空寂ぞ、まことのものなし。
美くしと見るも汚れ、堅しと見るも弱
く、我が身も碎けて、まことのものな
し。

世尊は婆耆奢の云うところを嘉し、益この身の固からず、碎け易いものであることを觀うようにと教え給うた。

第二節　帝釋天

一。或る日、世尊は東園の鹿子母講堂にお住いなされて居た。帝釋天は世尊を尋ねて、申しあぐるよう。

「世尊、御弟子は如何樣にして、愛の渴を滅して解脱れ、安穩に至り、淨らかな行を修め、この世に最も勝れたものとなるのでありますか、簡單に御聞かせ下さい」。

「帝釋よ、弟子は、總ての諸法を執着するに足らないものと云うことを聞いている、それによつて完全に諸法を知る、從つてどの感覺をうけても、すべてを無常と見、いかなる世界にも執着しない、それであるから、苦しみ惱むとゆうことがなく、自ら涅槃の寂けさに入つて、『生は盡きた、淨らかな行はなし遂げた、成すべきことを成し終つた、この外に他の生はない』と知るのである。帝釋よ、簡單に云えば、弟子はこのようにして、愛の渴を滅して解脱れ、完全なものとなり、この世に最も勝れたものとなるのである」。

帝釋天は世尊の御教をよろこび、世尊を拜み、右に繞つて天界に歸つた。

二。その時、目連は、世尊の御傍近くに坐つて居り、このお話を聞いて思うよう。「帝釋は、果して世尊の御教を解ることが出來て歡んだのであろうか、一つ試して見よう」と、直ちに精舍の庭に影をかくして、天界に顯われた。帝釋はその時、五百人の樂人に侍ずかれて、蓮華の咲いて居る園に坐っていたが、目連の遠くから來るのを見て、座を立つて迎えた。「尊者よ、よく御出でなされた、どうぞ設けの座に御卽き下さい」。

目連が高い座に卽くと、帝釋天も低い座に坐つた。目連云うよう。

「帝釋よ、汝が世尊から聞かれた、あの愛の渴を滅して解脱する教を、私も聞くことが出來れば有り難い」。「尊者よ、私共は仕事が多く忙しい身で、自分のためにも天界のためにも、なさねばならぬことが多い。しかし世尊が簡單に御說き下された教を善く聞き、善く解り、よく憶えて居るので、そう早くは忘れません。

尊者よ、ずつと以前に、神神と阿修羅との間に戰爭がありました。その時には、神神が勝つて阿修羅が敗れました、私はその戰爭から凱旋すると、記念のために勝利殿とゆう宮殿を造りました。この宮殿には一萬の棟數があつて、一一の棟には各百宛の七層の樓閣があり、一一の樓閣に四十九人ずつの天女が居り、その一人一人の天女に又、各四十九人ずつの侍女がついて居ります。尊者は、この勝利殿を御覽になる思召はありませんか」。

目連は、打肯頭いて帝釋の意に隨つた。茲において帝釋は毘沙門天を從え、目連を導いて、その宮殿に向うた。宮殿の天女や侍女達は、捨家棄欲の尊い目連の姿を見ると、花嫁の樣に恥しがり、各自の室へ逃げかくれた。

三。帝釋は毘沙門天と共に、目連に、宮殿の方方を指し示して云うよう。「尊者よ、御覽なさい、この莊嚴、之は皆私の昔の世に積んだ功德に依つて輝いて居るのであります、それゆえ人界には美事なものを見ると、いつも、『おお、何とゆう美事さだろう、まるで忉利天のようだ』と申します、之はみな私の前世の德に依るものであります」。

目連思うよう。「察つた通り、この神は自分の榮光に狂うて放逸に流れている、一つ驚かしてやろう」と、足の指を宮殿の一端に置くと、宮殿は屋鳴り震動して今にも崩れ落つるようになつた。帝釋初め神神は、皆驚き怖れて、「何とゆう恐ろしい、神力であろう、僅かに足の指を觸れたばかりで、この大震動を起させるとゆうは恐ろしい」と、呆れ返つた。

目連は、毛並を逆立てておのいて居る帝釋を顧みて、靜かに先の問を繰返えした。「帝釋よ、汝が世尊から聞かれた、あの愛の渴を滅し解脱する教を、私も聞くことが出來れば有難い」。

茲において帝釋は止むを得ず、自分の間と世尊の御答とを話し出した。目連はその語を聞いて喜び、座を立つて人界に歸つた。

天女達は帝釋の周圍を取卷いて、鷲の聲を擧げた。「主よ、あなたと共に茲にいられた方が世尊でありますか」。「否、師ではない、彼は嘗つて私の同學者であつた目連と呼ばれる方である」。「主よ、あなたはあのような大神力を具えた方を同學者に御持ちなされて御仕合せであります、弟子であの樣な御力があるとすれば、師の君の世尊はいか許りの御力が在ますことでありましようか」。

目連は、鹿子母講堂に歸つてこの話をなし、世尊の御教をよろこんだ。

第三節　獵師の餌

一。世尊は、弟子等に教え給うよう。

弟子等よ、獵師が餌を撒くのは、鹿に長生させたり繁えさせるためではない。撒いた餌に迷わされて放逸になり、自分の思う壺にはまるようにとゆうのである。この餌に對うて四種の鹿がある。

第一の鹿は、直ちにその餌に迷わされて放逸になり、獵師の思う壺にはまる。第二の鹿は、第一の鹿を見て恐ろしい餌を離れ、森の奥深く隱れるが、やがて暑い夏が來て食物が無くなり、氣力が弱ると、またその餌につられて歸り、放逸になつて、獵師に捕られる。第三の鹿は、前の鹿の有樣を見て氣を付け、餌に歸つても放逸にならず、その傍に隱場を設けて置いて、餌を食べつつ放逸にならず、獵師の術中に陷らない。然し獵師が餌のめぐりに係蹄を設けて置くと、遂その係蹄にかかつて獵師の手の中に入る。第四の鹿は、前の鹿の有樣を見て、獵師の手の屆かぬ處に隱家を作り、何事に依らず少しも放逸にならず、係蹄に係らずに餌を食べて隱家に歸る。獵師も手の下しようがなくて、この鹿をばその自由に任す。

即ち獵師の力の及ばぬ鹿である。

弟子等よ、餌とは五欲、獵師とは惡魔、鹿とは修道者のことである。五欲に耽る修道者は、惡魔の囚となるものである。森の奥深く隱れるとは、人里離れた處に幽居して粗末い食に身を支えていることであるが、夏には食物が少くなり、氣力が弱ると、道を捨てて五欲に歸つて惡魔の手の中に入るものである。餌の周圍に隱場をつくるとゆうは、五欲に歸らず、注意ぶかく放逸に陷らぬことであるが、然しそれでも世間は常住であるとか無いとか邊際があるとか無いとかゆう戯論の係蹄にかかつて、惡魔の手に入るものである。獵師の手の屆かぬところに隱場を作るとゆうは、欲を離れ不善を離れて諸の禪定に入り、心を修め、練り固めて行くことである。これが惡魔を盲になし、その瞳をこわして惡魔の支配を超えると云われるのである。

二。弟子等よ、戒を具え、身を謹しんで住せよ。善き行を守り、小さな罪にも恐れを見、怠らず修學せよ。若し汝等、同學のものより敬い愛せられようと思うならば、圓かに戒を守り禪定を修めて、靜かな所に住むがよい。もし汝等、自ら衣と食と住と藥とを得、その供養に大きな利益があるように思うならば、圓かに戒を守り禪定を修めて、靜かな所に住むが善い。若し汝等、汝等の親戚の中、既に死んだ人人を愛する

ならば、圓かに戒を具え、禪定を修めて、靜かな場所に住むが善い。又、もし汝等自ら滿たぬ思を平げ、恐怖を平げ、滿たぬ思や恐怖のために從えられない事を望むならば、圓かに戒を具え、禪定を修めて、靜かな場所に住むが善い。又もし、汝等禪定を修めて、諸の禪定の修養を進めたいと思うならば、圓かに戒を具え、禪定を修めて、靜かな場所に住むが善い。又、もし汝等、汝等の心の中の煩惱、貪欲、瞋恚、愚癡を追追に少くし、果はすべてを滅して、煩惱は滅びた、成すべきことは成し終つたとゆう覺の人となろうと思うならば、圓かに戒を具え、禪定を修めて、靜かな場所に住むが善い。

第四節　勝鬘夫人

一。波斯匿王と末利夫人とは追追に世尊の御教を喜ぶにつれて、娘勝鬘夫人のことを思い出して、語り合うよう。

「娘は智慧すぐれて會得の早い性であるから、もし佛を見まいらすれば、必ず法を解るに違いない、直ぐに使をやつて、道を求める心を起させようではないか」。

かようにして、手短に佛の功德を賞め讃えた書が、宮人の使によつて、阿踰闍國の勝鬘夫人に與えられた。夫人は書を得て歡びおしいただき、讀み了つて喜びの心をおこし、使のものに申すよう。「妾も前に、佛のお語は世に匹びないと聞いておりましたが、若し此お書にかいてある通りでありますならば、妾はお仕え申したい」。

更に遙かに舍衛城の空を仰いで請うた。

「おもうに世尊は、凡ての人人のために此世に御出まし下されたことであります、どうぞ哀愍を垂れて御姿を拜せて下さい」。

世尊はやがて、弟子達を率い、阿踰闍の國に御出でになつた。夫人は世尊をお迎え申上げ、歌を奉つて讃えるよう。

御佛の妙なる御姿と、御智慧は世にも比なし、あらゆる法をきわめまし、つねに盡くなきに住み給う。この故我は歸依し奉る。

あらゆる心の過惡と、身の生、老、病、死を降しまし、佛の位に入り給う。この故法王を拜み奉る。

一切智をぞ知しめし、智慧のはたらき自在なり、かくて一切を攝め給う。この故我ははかりなく、比もほとりもましまさず、思いがたなき御德を、敬い禮み奉る。

あわれみまして我をば護り、信の心をいや增させ、この世、後の世、願くば、攝め給えよ御佛。

世尊宣わく。

我は久しきその昔、汝を安らかならしめき、さきの世すでに眼覺めさせ、いままた汝を攝め取り、後の世も亦しかあらん。

夫人は、更に申すよう。

さらば前の世我すでに、功德なせしかこの世にも、亦後の世も、善つまん、願わくは我を攝めませ。

世尊告げ給う。「汝はいま、佛の眞實の功德をたたえたその功德によつて、後の世には自在の身となり、いずこいかなる處にあ